涙色ティアラ　～王子さまを待っている～

Lavia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
涙色ティアラ　～王子さまを待っている～

【Ｎコード】
Ｎ２２４５Ｔ

【作者名】
Ｌａｖｉａ

【あらすじ】
幼い日　通りすがりの女性に「おまえの幸せをすべて奪ってやる。」そう言われた幸は　その記憶を忘れないようにと傷を負わされた。幸せを感じれば傷が激しく痛みその呪いの言葉を思い出してしまう。呪い通りある日突然に　幸の人生は大きく変わった。絶望と孤独の世界で一人の男性と出会い　幼心に恋を覚えた。「いつかまた会えるよ。」彼のその言葉だけを生き甲斐に…幸は生きていくことを決意した。

呪い〜一話

幼い頃　母と散歩をしていた時のことだった。

すれ違おうとして一瞬　私と目があった
女性が　母に声をかけた。
「可愛いですね。」

「ありがとうございます。」

なぜだろう。私はとても小さいのに…女性の冷たい表情に
胸騒ぎを覚えた。
その時　いきなり風が吹いて　母の白い帽子が飛んだ。

「キャー…すみません　主人がプレゼントしてくれた帽子なんです。
拾ってくるので娘をお願いします。」

「あら…それは大変だわ。大丈夫ですよ。」
女性の言葉に　母は私を置いて帽子をひろいに走って行った。

「おまえの人生から全ての幸せを奪ってやる。」

さっきまで微笑んでいた女性がそう言った。
幼い私はただその女性の目の奥にある光を見つめている。

ママ怖い　早く戻ってきて…

金縛りにかかったように私は目しか動かせない。

「この呪い忘れないように……」
長い真っ赤な爪を私の太ももに突き刺した。

痛い！！

なのに私は泣くこともできないで　その女の人の目の光から
目をそらすことができなかった。

「いい子ね…。幸せじゃないのに幸ちゃん。
名前負け……うふふ……。」

母が帽子を拾って戻ってくるのを確認して
女性は私から離れた。

「ありがとうございます～」
母はいつものような美しい笑顔でそう言った。

痛いよ…おかあさん……

母は私の傷には気がつかない。
女性はいつの間にか姿を消していた。

その瞬間　私は恐ろしさと痛さで泣き叫んだ。
オロオロする母が　ベビー服ににじんだ血を見て悲鳴をあげた。

呪いをかけられた

普通なら記憶なんかあるわけないのに
私はこのことを忘れられなかった。

少しでも忘れると　傷が一瞬激しく痛んで記憶が蘇る。

でも…その呪いは今のところ私の人生には
なんの影響もなかった。

そう4歳の誕生日までは……。

呪いがかけられるまでのわずかな時間
私は幸せだった。

逞しい父と美しい母
たくさんの愛情と色とりどりの花が咲く庭

笑い声の絶えない白い家

全てを失ったのは　４歳の誕生日の日……。
不幸は突然訪れる……。

呪い〜ニ話

私の名前は　さち
角谷　幸

両親が「幸にたくさんの幸せが舞い降りるように」
そう祈りを込めてつけてくれた名前
それを知ったのは…もう少し後のことだけど……

昔ラグビーをしていた父を
ずっと片想いしていた母

実は二人は両思いだったのに　お互い素直になれなくて
地方の大学に進んで就職した父と
地元の大学に進んだ母は　お互いの想いを伝えることもできずに
別れてしまったんだって……。

時が過ぎて　運命はまた二人を再会させると
一気に愛の炎が燃え上がり　いろんな障害を乗り越えて
二人は一緒になったから　お互いの両親にも一切歓迎されずに
縁を切られたようになって
二人だけでここで生きていくことを決意したとか……。

私はまだ幼くてあたり前のように仲のいい両親を見て

育ってきたから何も知らなかったけど……
いろんな状況を二人で乗り切ってきて私が生まれたらしい……。

記憶が定かなのは
あの日の呪いの記憶とただただ今思い出せば
両親の愛情を一身に受けて育ってきた私が　どんなに幸せだったのか・・・

今……わかるんだ。
あたりまえに愛されて過ごした記憶は私の中に少ししかないけど……
それでも全くないよりはマシ……。
自分が望まれて生れてきた子だって…前を向けるから。

呪いの傷が　４歳の誕生日の朝　めちゃくちゃに痛んだ。
痛い痛いと泣く私に　母が困った顔をしながら薬を塗って
呪文をかけた「痛いの　痛いの　飛んで行け～～」と柔らかい手のひらで
すりこんでくれた。
それだけでも不思議に傷の痛みは少しだけ引いた。

「ママ…あのおばちゃん…怖かったよ……」

両親は私が話せるようになって呪いの話を
聞いた時　青ざめた。

「どうしてそんなこと知ってるんだ?」父の顔が険しくなった。

「あのね…おばちゃん真っ赤な爪でね…
幸のここギューーーってしたんだよ……。
してね幸なんて幸せになれないって言ったんだ。」

「…だってまだあの時…幸は6カ月くらいだったわ。
きっと何かとごっちゃになってるのよ。
赤ちゃんの時の記憶があるなんて聞いたことないわ。」

母がそう言って笑った。

「この傷はね…庭のバラのとげにひっかけたのよ。」
と嘘をついた。

母は知ってるはずなのに……
どうして嘘をついたんだろう。
私にはよくわからなかった。

だからそれ以上は言わなかった。

思い出すと怖かったし

傷が痛むのはもっと怖かったし……。

幼稚園に行く時間にはよくなった。
私は幼稚園が大好きだったからその日は誕生日だったけど
母に大好物の料理を頼んで　幼稚園バスが迎えに来るバス停へ歩いた。

「今年はどんなケーキかな。」

ゲンちゃんのケーキは　父の大学時代の友達がやっているお店で
郊外にあるお店だったけど毎年誕生日とクリスマスは
ゲンちゃんのお店にお願いしてあった。

写真に残るケーキの写真はいつも私のために作ってくれる
オリジナルのデコレーションケーキ
一緒にうつってる私はめっちゃうれしそうだった。

「今日はパパが休みだから　起きたら一緒に買いに行ってくるね。
それから幸の好きな鳥の足とウインナーとオレンジジュース……
忙しいわ～～。」

母は大きなつばの帽子をあの日みたいに　かぶっていた。

さっちゃんのママ　キレイね

友達に言われるとうれしかった。

四歳の誕生日もその後の五歳の誕生日もずっとずっと
幸せな誕生日が続くと思っていたのに……

その日　幼稚園バスに乗ろうとした時
園長先生がやってきて

「幸ちゃんは…バスに今日は乗れないから……。」と暗い表情で呼びに来た。

その代わりに迎えに来た父親の仕事先の人と病院に行った。
そこにいたのは…白い布をかけられて横たわる両親の姿だった。

「パパ？ママ？」

両親は私のケーキーを取りに行った帰り道…大型車と正面衝突して即死した。
呪い決行日は私の四歳の誕生日だった。

幸せだった毎日が　いきなり絶望の日々と変わってしまった。

呪い〜三話

そこらへんからの記憶は　私の中で混乱していた。
きっと幼い頭の中で必死で両親の死と環境の変化を
受け入れようと必死だったのかもしれない。

身よりのない私は　なぜかこの札幌という街の
『ライラック園』という施設にうつってきた。

寒いこの街は私を一層　絶望感に追いやる。
両親と一緒に見たのなら感動的な白い雪も私は好きになれなかった。

真っ白に覆われた厳しい世界が
全ての愛を失くした私にとっての色みたいで嫌いだった。
園の子たちが園庭で雪合戦をしてるけど
私は寒いを盾にして外に出かけることもなかった。

あまりのショックに心を閉ざした４歳の私

それから園でまた白い世界を見た。
それでも私は冬を少しも好きだとか雪がキレイだとか思わなかった。
どんどんと嫌いになる冬

園の子たちは私より年上か

年下か…
口数少ない私をかまう人は誰もいなかった。

「さっちゃん…春から小学生なのよ。
お友達を作るには　笑顔と元気が必要よ。」

先生が心配してそう言ったけど

笑えるか……
元気でいられるか……

持つのは反発ばかり　自分がどうしてこんなことになってるのか
まだまだ受け入れられない……。
楽しかった幼稚園
いつもみんなの中心にいて友達がたくさんいて
園バスから降りたらうちで遊ぶ。

キレイな花が咲く庭の一角にあるイスとテーブルで
友達と絵を描いたり　母お手製のおやつを振るまったり
毎日笑っていたのに……

ここにはあの暖かい家も　庭も　あの花も……
そして両親もいないんだ。

白い雪を見るたびに自分の運命を呪った。

呪いの言葉を思い出す。
傷は痛まないのに……太ももについた赤みのとれないみみずばれの
五本の線

私からすべての幸せを奪うって……
こういうこと？
私が何を悪いことしたの？
なんであの人はそんなこと言ったんだろう……。

園長先生に呼ばれた。

「さっちゃんにプレゼントが届いてますよ。」

何…また使い古しの善意の品物？

上の子たちが小学校に上がる時も善意の品物が届いた。
じゃんけんをして買った人から
一番手のいいランドセルをゲットする。

私にプレゼントなんかしてくれる人なんていないじゃん

乱暴に包装紙を破って

その箱からピンク色のランドセルをとりだした。

「ピンクのランドセル……。」
私が驚いていると園長先生が言った。

「これで学校が楽しみになりますよ。」

うれしかった。
新品のランドセル　それも赤じゃなくてピンク色

誰がくれたんだろう

一瞬そう思ったけど　プレゼントの興奮で
ひさしぶりに私は素直に笑えた。

ピンク色のランドセルは私の宝物で友達になった。

呪い～四話～

小学校に上がって　私は得意になって
ピンクのランドセルを背負った。

入学式には園長先生と先生が保護者として来ていた。
周りを見渡してもみんなあたりまえに
我が子の成長を頼もしく見つめる愛に溢れる目をした親がいる。

私の両親だって生きていたら
きっとあの場所で微笑んでくれていただろう…。

逞しい父と美しい母を自慢して
私は何度もふり向いて手を振っただろう。

「あんたライラック園の子でしょ？」

入学式で廊下に出て並んでいたら前の子がふり向いて言った。
私が黙っていると

「なんで親もいないのにキレイなランドセル持ってるの？」

周りの子が興味深げに私を注目した。
私が答えないとその子は

「園の子の持ってるものはみんなが使っていらなくなったものなのにランドセルだけピカピカで変～～うふふ～」

その子は私の着せられた何人も着たことのある
今どきのセンスのない少し毛羽立ったスーツを指さして笑った。

その子を始めとしてみんな素敵なスーツを着ているけど
その子のスーツは群を抜いていた。

長い髪の毛は二つに縛ってピンク色のリボンで結んでいる。
私はここに来て長かった髪を切っておかっぱにされた。
もう母がこの髪の毛を束ねてくれることはないから……

『幸の髪の毛は薄い栗毛色…光にあたると色が変化して……本当にキレイ　……。』

髪の毛を優しくブラシして母はいつもそうやってほめてくれた。

今はまっすぐに切りそろえられたおかっぱ
もし両親が生きてたら
そう思うと自分の姿を上から下まで確認した。

……。

「ピンクのランドセルは似合わないよね～」

バカにした顔が憎らしかった。
親がいたらあんたにだって負けてないわ。
そう言ってやりたい気持ちをこらえた。

どうしてこの子がランドセルにこだわるのかは
教室に入ってわかった。

この子の席の脇にかかっているのも
ピンク色のランドセルだった。

同じだからムカついたのかな……

板垣　凛

これから私の人生に大きくかかわってくる彼女と初めて出会った
入学式の日……。

嫌な奴……

凛はふり向いて私を見た。

「あんたと同じランドセルなんて……
華子だって嫌がるわ。」

華子？

「もう最悪～～こんな子と一緒なんて……」
凛はそう言うと私の前の席に座った。

私だって同じだよ。

同じ色のランドセル……。

呪い～五話～

嫌がらせはちょくちょくあった。
いつの間にか凛がクラスの中で一番力のある子になっていた。

ランドセルがピンク色だと
目をつけられて　私は凛のイジメの対象になっていた。

「園の子」

私を呼ぶ時　凛はそう呼んだ。

負けるもんか……

私は口を開かずただ凛を睨みつける。

大嫌い……

凛が力を持ったと言う事は私は浮いた存在になっていた。
クラスの人から話かけられることはなくなって　孤独だった。
幼稚園の時はたくさんいた友達
ここにこなかったら私は　友達に囲まれていつも元気に笑っていた。

自分の声を忘れそうになる。
一日何回声を発するだろう……。

凛の嫌がらせには絶対屈するもんか。
勉強だけは絶対に負けない。
授業に集中するしかない学校生活だったから……
凛は勉強が苦手のようだったから　静かに優越感に浸る。

正面玄関に黒い車が止まった。
凛はいつも車で登校していた。
いつものように凛が出てきた。
それからもう一人　車から出てくる。
ピンクのランドセルを背負ってお人形さんみたいな
可愛い女の子だった。

「華子　早くいこうよ。」
凛がいらいらした様子で言った。

あの子が華子

隣のクラスの　板垣　華子　は凛の従妹だった。

凛と華子
そして…私……
これから先　複雑な運命に翻弄されていく三人が出会う。

「あ……」私に気がついて凛が立ち止った。

「ほら華子……あの子よ。例の園の子のくせに
ピンクのランドセル持ってる子……。」

華子が私を振りかえる。

キレイな顔立ちをしている。
だけど冷たい目をしていた。

「ふう～～ん……。」
そういうと華子は興味なさげにまた向こうを向いた。

何か言われるとドキドキしたから
私は少しホッとしていた。

「ね？なんであの子・・・・・」凛が華子の耳元で
コソコソ言っている。

また始まった……。

なんでそんなにピンクのランドセルにこだわるんだろう……。
確かにそんな色のランドセルを持っている人はいなかったけど
私は知らない人からのプレゼントだったから別に
これが欲しかったわけでもない……。

園の子になりたかったわけでも
この土地に住みたいわけでもなかった。
全てはあの呪いをかけられたことから始まっている気がした。

帰りたい……

両親が眠るあの土地へ……。
あの家は……あの庭は……駆け回った園庭は……
笑いあった友達は……

ここでは一人……学校でも園でも孤独だった。
自分の殻を私はどんどん厚くしていった。
誰にも踏み入れられたくない……。

あの呪いは　本当に効力があるのだろうか……。
だとしたらこれからの人生は……幸せから見放された毎日になるんだろう

パパとママのところに行きたい

そう思っても　まだ幼い私にはどうすることもできなかった。
ただ…ただ…凛という存在と
必死で戦う毎日を送っていた。

呪い～六話～

初めての運動会も私にとってはつまらなかった。
もちろん園の先生たちが総出でお弁当を作って
他学年にいる園の子たちのために応援にきてくれていた。

でもその場は　好奇の目にさらされているようで
いたたまれなかった。

同情する目がウザイ……
同情しながら私たち一人一人が背負っている
過去を想像したりしている。

華子は体が弱いらしくて　短距離走には出ていなかった。
青白い顔の華子は日傘をさして見学している。

私はやっぱり凛と同じ列で短距離だった。
凛は足が速かった。
いつも練習では一位をとって　私の顔を見て優越感に浸っている。

　でもね…それは今までのことでね……

私は力を温存してあった。
リレー決めの時も凛に花をもたせてやっていた。
とりあえず出ても出なくてもそう思ってとりあえずギリギリでリレー

完璧に凛は私に勝っていると思いこんでいた。
子供が少なくてクラスが半分紅白に分かれる。
幸いなことに私は赤　凛は白

スタートラインに立って凛が視界に入った。

見てなよ…あんたなんて……

ピストルが空を撃って
私たちは飛びだした。

いつものように凛が余裕の走りを見せ出した時
私はスピードをＭＡＸまで上げた。

追い越した時の　凛の顔がおかしかった。
ウサギとカメの話を小さい頃母から聞いた。

実は私はウサギなんだよね～～

凛を遥か後にしてテープを切って　６年生のおねえさんが一位の
プラカードをもって私をつかまえた。

「めっちゃ早いね～～」

うれしかった。
思わずニッコリと笑ってしまった。
その横にニ位で入った凛が座って私を睨みつけた。

「卑怯なのね。」

私はおかしくて吹き出した。

凛の顔がみるみるうちに崩れてきた。

は？

膝に顔を埋めて背中が揺れている。

泣いてんの？

明らかに凛は泣いていた。
私に負けたことがそんなに悔しかったの？
あんたが悲しむと私……すっごくうれしいんだけど

日ごろ嫌がらせをされていた私の心は晴れていた。

「許さないから……せっかく圭くんが見に来ていたのに……

絶対に許さない……」

凛の声は低くまるで　あの日の呪いの女のようで
私はビクついた。
その瞬間

「痛……」傷が一瞬痛んだ。

優越感から一気にまた恐怖感に襲われていた。

傷はいつも私が幸せを感じると痛んでいた。思わず短パンの下の
傷を撫ぜた。

凛をやり過ごして最高にうれしかったのに
水をさされた気分に変わっていた。

この傷…いったいいつまで痛むんだろう……

女の言葉を思い出す。
少しだけ忘れていたのに……

少しくらい幸せな気分になってもいけないの？

凛の肩が震えるのを見ながら
私は恐怖感に襲われていた。

呪い～七話～

板垣家というのは　かなりのお金持ちで
大きな会社を経営しているらしく
凛や華子の身なりのすごさや　送り迎えにくる黒塗りの車も

　金持ちなんだ

そう思えば納得が言った。

凛の攻撃はあれからまた増した。
担任も凛に関してはあまり言えないのか　タジタジな様子で
助けてくれるという期待感も持たない方がいいと思った。

その強さはいつしかクラスの子たちからも
少しづつ浮き出して来るのは時間の問題で
女子の間でも凛の悪口が聞こえてきて
私としては　それはとてもウキウキすることだった。

華子とはクラスが違うからあまり
接する時間はないけど
たまに見かける華子はいつでも可愛らしい人形のようだった。

凛も華子も髪の毛はいつも可愛らしく束ねてあって
二人にも両親が揃っているんだと思えば

憎らしくもなった。

嫌いな雪の季節になって
毎日毎日その白い雪を踏みしめて　寒い道のりを歩く。

「それでね～～今日ね～～」
他の人が見たらきっと私は痛い子だろうけど
やっぱり一年生　本当は一人でいるのは寂しかった。

「今日ね　柴田くんが給食の時間にね・・・」
誰もいないのに会話して帰るのが私の日課だった。

ピンクのランドセルに話しかける私

少しでも話さないと私自身　声を忘れてしまうから……。
雪のない…両親と暮らしたあの
幸せなところに戻りたい……。

私はどんどん卑屈な子になっていく。
幸せの似合わない　幸　という名前負けな人生で
呪いの効力にたっぷりはまった女の子

こんなはずじゃなかったのに……

キレイな雪が憎らしかった。

雪なんて大嫌い……

涙と鼻水が凍りそうな道を歩いている。

早く春になれ……

深い雪を長靴で踏みしめて歩く。
ピンクのランドセルが唯一の友達

「誰があなたをプレゼントしてくれたのかな。」

その疑問だけが残る。
凛や華子のようなお金持ちがこだわるみんなと違うランドセル。

「会ってみたいな～どうして幸にくれたんだろ。」

雪が私を隠してしまいそうに降っている。

呪い〜八話〜

クラスで人気の　生き物係
私はまだやったことがなかった。
いつもそこにいるのは　凛だったし……
競争率も激しいし……

でも動物は大好きだった。
学校帰りには必ず立ち寄って　うさぎのピョンちゃんに
「また　明日ね〜」と声をかける。

猫を欲しがる私に
私が小学生になったらねと母が言った。

それももう夢になっちゃったけどね……。

今回は学期ごとに決める最後の係だった。
いつものように数人手をあげた中に　凛はいなかった。

私は恐る恐る手をあげてみた。

「さっちゃん　やってみたいの?」
担任が言うと　一斉にみんながふり向いた。

「はい。」小さい声で言った。

私が声を発するなんてめずらしいことだから
クラスメートはものめずらしそうにしていた。

「はい！！」

まっすぐ手が伸びた凛が立ちあがった。

「私もやりたいです。」

え・・・しないっていったじゃん・・・・・

「そう……一人多いわね。」

担任に
「それじゃいいです」そう言えずに私は困った。
凛と一緒にやりたくないし
一人多いなら自分があきらめた方がいいと思っていたけど
流れてきに投票することになって
みんながざわついた。

顔を伏せて手をあげる。
自分には投票できない。
もちろん私は凛には手をあげない。

どうせダメなんだろうけど
ほとんどあきらめかけていて
顔をあげると

え・・・・？

なんと凛の投票を遥かに超えて
黒板にはほとんどのクラスメートの票数が私に入っていて
顔をあげた子たちはどよめいた。

担任もこの場は逃げるべきと思ったのか

「それじゃあ　みゆちゃん　けんたくん　こうくん　それから
さっちゃんで決まりね。責任持ってやってくださいね～。」

みんなが一斉に拍手をした。

凛は顔を真っ赤にして下を向いていた。

怒ってるよ……
ざまーみやがれ……

卑屈な私は優越感に浸る。
担任が教室を出て言ったらすぐに

凛が机をバンと叩いた。

「なんで？みんな私に入れないの？」
凛にはいった票はたった三人だった。
それはショックだったと思うけれど……。

「ね？ひよりちゃんは？私に入れたの？」
この間まで一緒に係をしていたひよりちゃんの顔がひきつった。

「なおちゃんは？ともちゃんは？」

キンキラ声を張り上げて　仲間内に聞きだした。

「なんで私が三票なのよ！！」
凛は私に大差で負けたことに納得がいかない。
私が手をあげたから　意地悪しようと思って自分もあげて
このざまだし・・・それは凛があまりに気の毒だなって思う。

「おまえさ～わかんねーの？」

こうくんが立ち上がった。

「何が？」

「おまえなんか　係になったって仕事全然しないじゃん。
小屋の掃除だって　フンがやだとか手が汚れるとか言ってさ
おまえと組んだやつみんな困ったんだ。
だいたい動物も好きじゃないのになんでおまえ係やりたいの？」

こうくんの発言にみんなも口ぐちに
凛の事を言いだした。
思いがけない展開　私はワクワクしてる。

「とにかくおまえとは一緒に仕事したくない。
教室の掃除だって　給食当番だって
おまえいっつも幸に　やらせてるだろ？
先生がいる時だけいい子ぶって。
幸はおまえに押し付けられたって　きちんとやってくれるし
あたり前の結果だろ。」

こうくんは男子の中でも元気で活発で頭もいい子だった。

こうくんの言葉にさすがの凛も何も言えなくなった。

呪い～九話～

その日から　私は少しづつクラスにうち解け始めた。
生き物係は大好きな動物たちと
触れ合える最高の時間だったから
一生懸命やった。

ピョンと名前をつけていた白いうさぎは
私の手からえさを食べた。

「さっちゃん」

「幸」

自分の名前を呼んでもらえるたびに
嬉しくて仕方がなかった。

「今日も楽しかったよ。」ピンクのランドセルに話しかける。

「痛い……」
チクンと傷が痛んで　私は立ち止る。

まただ……。

あれから凛の視線はより一層意地悪になった。
仲間を引き入れて　コソコソと私の方を見て笑う。

しばらくしてから

「変な服だよね。」

「あの髪の毛はないよね～」

「なんかくさい！！
お風呂入ってないんじゃない？」

私も女の子だから数人でそう言われるといい気持ちはしない。
おさがりの洋服はやっぱりボロだし
髪の毛だって出入りしてる床屋のおじさんが一カ月に一回
ボランティアでおかっぱにしてくれるだけで
私も出来上がりの髪を見て

これはないよね～

そうつぶやくけど・・・・

くさいだけはイヤだった。
あいつらの視線のないところで　体の匂いをかぐ。

くさくないし…

自分で安心しても　自分にわからない匂いがあるかもしれないと
不安になる、
誰かに聞けることでもないし
そばにいる子の行動を見ながら　自分で判断したりして
すごいストレスになっていた。

「幸　臭くないよね？」

ランドセルに話しかける。

園では二日に一回のシャワーと一週間に一度のお風呂

毎日入ってないから臭いのかな……。
その言葉が不安で　せっかく仲良くなった友達からも少し
距離をおいてしまうようになった。

甘い香りのする凛が憎らしかった。

言葉のイジメと視線は　毎日エスカレートしてきた。

そして私はまた　自分の殻にとじこもってしまった。

呪い〜十話〜

三学期も終わりに近づいた春のことだった。
私はまた自分の殻に閉じこもった。

　　くさい

そう思われたらイヤだから　あまり人の近くに
寄らないようにしていた。

私にママがいたら
「幸　くさい？」そう聞けて安心できたけど
他人には口が裂けても聞けなかった。

凛はくさいとは言わなくなったけど
相変わらず数人で私の悪口を言って笑っていた。

その横を顔をあげずに通り過ぎた。

「キャハハハ〜〜」凛の声が追い掛けてくるようで
私は早足でその場を離れた。

その日　生き物係の打ち合わせがあって
私が教室に戻ってきて　帰ろうと席に行くと

ランドセルがなかった。

「あれ……」
小さな声で私は言った。

「ない……ない……！！」

机の脇にかけていたはずのピンクのランドセルがない。

「あれ？」
なんでないの？

泣きそうになった。
落ち着いて考えてみよう……。
でもどんなに落ち着いても　ランドセルはここにしかかけない。

教室の前のドアが開いて
こうくんが入ってきた。

「幸・・・おまえの教科書さ……」

こうくんが私のペンケースと教科書を差し出した。

「どこにあったの？」興奮して高くんの前に駆け寄る。

「玄関のさ・・・ゴミ箱に捨ててあった。」

「ゴミ箱？」

「うん……。先生に言ってくる。
多分あいつらじゃないか？」

「ゴミ箱に…ランドセルなかった？」

「ランドセル？なかったけど……ないのか？」

涙が溢れだした。
絶対に泣かないって…人の前で泣かないって誓ったのに・・・・

「先生に言ってくるから。」

こうくんは教室を飛び出していった。

「う・・・・う・・・・」

誰か知らないけれど　私に送ってくれたピンクのランドセル……
両親がいない私にとって
新しいものを使えることがどんなに嬉しかったか・・・。

いつか大きくなったら
「ありがとう」って言いたい……。
忘れられていたら困るから　目印にランドセルを持って行こうって
……

担任も出て探してくれたけど　結局見つからなかった。

「また先生も教頭先生や一年生の先生たちと時間かけて
探してみるから…さっちゃんは一度園に帰って待っててくれる?」

誰かが盗んだとしたら
それは大変なことで公にはできない
それも担任は　その犯人が凛じゃないかと疑っている。

私は目をゴシゴシ拭いてうなずいた。

哀しかった・・・・・。
完全に孤独になった気がした。
一人で帰れない・・・・・・・。

私は　泣きながら　園への道をランドセルを背負わずに歩いた。

意地悪な雪が降ってきた。
もうすぐ春なのに・・・・・意地悪な雪・・・・・。

「ヒック……ヒック……」

「キライ……みんなキライ……」
小さい幸せだった……。

あの呪いの言葉を思い出す。

こんな小さい幸せさえ……感じちゃいけないの？

春の雪はどんどん降りだしてきた。
そして私は　哀しくて孤独で

声をあげて　ワンワン　泣きながら歩いた。

出会い〜十一話〜

雪の公園を大声をあげて泣いて歩いた。
すれ違う人はいるけれど　驚いて見てるだけで
忙しそうな振りをして足早に通り過ぎる。

別にいいよ……
誰かに言いたいわけじゃない……

ただ私にとって大事なものを失くしてしまったという
虚しさと運命を呪っているだけ……。

今日の雪は大きい結晶ですぐ溶けてしまうから私の髪の毛は
べちゃべちゃに濡れている。

「どうしたの？」
後から声をかけられて　私は飛びあがった。

ふり向くとブレザーに赤いネクタイをした男の人が
傘を持って立っていた。

そして膝を折って目線を私と同じにした。

「どうしてそんな大きな声で泣いてるの？」

優しい声だった。

「う……あのね……ヒック…ヒック…」
別に誰かに話したいと思ったわけじゃなかったのに
おにいさんの優しい声に思わず言葉になってしまった。

私は大事なランドセルがなくなったことを
嗚咽混じりにおにいさんに伝えた。
おにいさんは　言葉につまる私を静かに待ってくれて
また話しだすのを優しい顔で待ってくれた。

「そうか……。先生見つけてくれるといいな。」

「うん…でもね…きっと見つからないの……。」

「どうして?」
おにいさんが私の言葉に首をかしげた。

「幸は呪われてるから……」

「え?呪われてる?」

「うん…幸せになれないんだって……ヒック…
だから…パパもママも死んじゃって……幸は園で暮らしてるの……。
新しいランドセルだったのピンク色で……
幸の友達だったの……。」

そう言い終わると私はまた大声で泣いた。

おにいさんは私に傘をかけてくれて

「白雪姫の話知ってる?」と聞いた。

「知ってるよ……ヒック……
王子さまのキスで元気になって……結婚するの……。」

「白雪姫も呪いかけられたよね。
でも…王子さまが助けてくれるのを信じて
眠ってる間もずっと待ち続けてた…」

「幸はお姫さまじゃないもん……。」

「ほら……見てごらん〜」おにいさんが優しく言ったら
携帯で写真を撮った。

「何?」私はいきなり写真を撮られたので警戒した。

「ごめんごめん~~ほら見て……。」

私の顔の前に携帯を見せて言った。

「ほら…ティアラだよ……。」

「え?」

確かに頭の上の雪が解けて耳上のところに溶けかかった雪がたまっている。

「お姫さま…みたいだろ?」

「うわ~~本当だ~~」

溶けかかった雪がキラキラ輝いて見えた。

「泣かないでお姫さま……きっと王子さまが現れてきみの呪いをといでくれる日が来るよ。」

「王子さま…はおにいさん？」
私は恐る恐る尋ねた。

「それはどうかな～～本物の王子さまを君が探しだすんだよ。
きっとその王子さまが呪いをといてくれる……」

「幸は絶対幸せになれないって言われたもの……。
知らないおばさんに……。」

「そんなことないよ……幸ちゃんが信じてたらきっと
幸せがやってくるよ。」

「ほんと？ほんとに幸せになれる？」

「うん…それにはいい子で頑張ってないと
王子さまが好きになってくれないからな。」

おにいさんが私の顔についた淡雪を優しくほろってくれた。
雪は肌に触るとすぐに溶けてべちゃべちゃになって
私の顔を濡らす。

「ティアラが証拠だよ。
幸ちゃんは……お姫さまなんだよ。」

おにいさんの優しい声が心に沁みとおる。

「王子さま…幸がいい子にしてないと
好きになってくれない？」

私は心配になっておにいさんの腕をとった。

出会い～十二話～

おにいさんは優しく笑った。

「そうだよ。魅力的な女の子にならないと王子さまが
気づいてくれないかもね。」

「だって幸……いつもこんな格好だし
髪の毛はおかっぱだし……それにね……なんか臭いって言われたの。
」

恥ずかしかったけど
おにいさんがあまりにも優しい笑顔だから
思い切って聞いてみた。

「臭くないよ。なんの匂いもしないよ。
洋服から柔軟剤のいい匂いがするけど……
きっとさいつもきれいに洗ってくれてるんだね。
幸ちゃんからはいい匂いするから安心していいよ。
そんな意地悪に振りまわされちゃダメだよ。
幸ちゃんは幸ちゃん
幸ちゃんが自分を好きになったらそんな言葉聞こえてこないって。」

「幸を好きに・・・・？」

「うん。自分を好きになってあげないと……
おとうさんやおかあさんが悲しむよ。」

「悲しんでるかな・・・？」

「心配してるよ。きっと……。
そんな大きな声で泣いてるからさ……。」

おにいさんの携帯が鳴っておにいさんは体を起こした。

「あ…行かなきゃ……」

「あ！！おにいさん！！また会える？
ここで会える！？」
私は必死でおにいさんにすがった。

「いつかまた…きっとね……。」

「いつかって……？」私は不安になっておにいさんにすがりついた。

「幸ちゃんがすてきな女の子になったらまたきっと……
会いに来るよ……。」

「ホント？幸頑張ってたら　また会いに来てくれる？
おにいさんは　幸のこと忘れない！？」

「ここに写真があるから……
美しいティアラをかぶったお姫さまを忘れないよ。」

おにいさんが私の頭を撫ぜて言った。

「お姫さま……またいつか…お会いしましょう…。」

そう言うと私の真っ赤な手をとって
キスをしてくれた。

おにいさんはまたより一層激しくなった雪の中に消えていった。

おにいさん……

私は夢を見てるようだった。
おにいさんは高校生くらいで制服を着ていた。
優しい笑顔で笑ってくれて……
いつかまた会えるって言ってくれた……。

嬉しくてなかなか眠れなかった。

その時　また激しく傷が痛みだした。

「いた・・・・いたた……。」

足がもげそうなくらい痛くて私は転げ回った。
先生たちにも何度か訴えたけど
病院にも言ったけど気持ちの問題と済まされてしまって
もう誰にも言えなくなった。

しばらく痛みと戦って　そして痛みは消えた。

「よかった……。」

私は太ももを撫ぜた。
そしておにいさんのことを考えようと思った。

だけど……さっきまで頭の中を閉めていたおにいさんの顔が思い出せなくなった。

「あれ…どんな顔だったんだろ…」

必死に思い出しても顔が浮かばなくなった。

ただ…おにいさんとかわした言葉と幼心に芽生えた恋心を残して……。

「いつかきっと会えるよ……。」

そういつかきっと……それまで私……おにいさんがガッカリしないように頑張ろうと心に誓った。

出会い～十三話～

痛みのせいでおにいさんの顔を忘れてしまった。
どんなに思い出そうとしても思い出せない。

きっと呪いのせいだ

私が幸せだって思ったからおにいさんの顔を
忘れさせてしまったんだ。

悲しくなった。
でもおにいさんの優しい言葉はちゃんと頭に残っている。

またおにいさんが見つけてくれるまで…
絶対絶対見つけてくれるように

初恋は二年生に上がる前の春
おにいさんを王子さまにして…私は夢に酔った。

顔のわからない王子さま……
いつかきっと　幸を見つけてね……。

ランドセルが見つかった。

「幸ちゃんのランドセル……外の物置にあったの……。
それで少し汚れてしまってて先生　一生懸命拭いたんだけど……」

ランドセルには靴のあとがうっすらとついていた。

私はショックで泣きそうになったけど
先生がだいぶキレイに拭いてくれた様子がわかったから

「先生…ありがとう……。」
震える声でお礼を言った。

先生は私の頭を優しく撫ぜて
「ごめんね…どうしても消せなくて……
幸ちゃん大事にしてたのに……。」

「見つかっただけうれしい。
幸の友達なの……。」

私はランドセルを抱きしめて頬ずりをした。

「犯人探しした方がいいよね?」

先生は少し困った顔をしていた。

多分間違いなく　凛なのはわかっていたから

「いいです。誰かはわかってます。
どうせやってないって言うだけだから……」

「みんなの前で先生言うね。」

「はい…もうしないように…お願いしてください。」

「幸ちゃんは…本当にいい子ね。
先生大好きよ。」

先生が抱きしめてくれて
私は一瞬ママが抱いてくれた錯覚に陥った。

「ママ……」

「えらいよ…さっちゃん……
悲しい時先生でよかったら…甘えに来て。」

「ありがとう…先生…」

私はしばらく先生のふくよかな胸の中で幸せな気持ちになっていた。

王子さまに会ってから……
自分が少しだけ変わった気がした。
たぶん王子さまに　あってなかったらランドセルを見て
泣きわめいて　もう学校には来ないって言ってたんだと思った。

だけど…
今日からは違う……。

負けないから……

王子さまと出会って　勇気をもらった私は
これからは自分を好きになろうと　誓った。

そしていつか王子さまが現れる日まで……
絶対に…愛される女の子でいたいそう思った。

私の王子さまはきっとあのおにいさんなんだって
思ったら……毎日が華やいだ。
だけど……私は顔を覚えてないけれど……きっときっと……
おにいさんが見つけてくれる……そう信じて前を向く……。

その年から……私は大嫌いだったここでの冬が好きになった。
雪がきっといつか王子さまに会わせてくれる気がしたから……。

出会い〜十四話〜

「さっちゃんの大切なものでした。
いったい誰がこんなむごいことをしたんでしょう。
さっちゃんが犯人探しはしなくていいといいました。
先生も正直ホッとしました。
多分やった人もホッとするでしょう。」

私のランドセルを持ち上げて先生が言った。

「だけど…今度またこういうことが起きた時は
先生は黙ってません。
お家の人を呼んでしっかり指導させます。
他のクラスでもみんな先生たちがこの話をするので
やった人も必ず聞いていると思います。
今回はさっちゃんの優しい気持ちに感謝して
もう二度とこういう事のないようにしてください。」

先生が教室を出た後
数人の女子が私の机を囲んだ。

「大丈夫？大変だったね。」

「うん……でも見つかったからよかった。
それだけでいいもん…。」

「幸ちゃんえらいね～」

同情で集まってきた友達に言われて
悪い気はしなかった。

「絶対　凛ちゃんたちだよね～」
みんなが口ぐちに噂していて　クラスの中で完全に浮いた。

その様子に悪い気はしなかった。

ひどいことするからよ。

凛の私を見る目はどんどん憎しみに満ちてくる。

どうして凛は私が嫌いなのかな

凛がイライラしてる様子で毎日を過ごしていた。
そして修了式の朝

車から降りてきた凛が華子と喧嘩をしているのを目撃した。

「圭くんを一人占めするのはやめてよ。」

「どうして?だって家に住んでるのよ。
凛ちゃんが来たらいいじゃない。」

「行ったら迷惑そうな顔をするじゃない。」

「凛が圭くんにべったりするからよ。」

「いいじゃない。華子は毎日会えても私はたまにしか
会えないんだし　それにもう京都に行っちゃうんだよ。
週末は絶対うちにきてもらうから。」

「ダメよ。月曜日に出発するんだから
凛がうちにきたらいいじゃない!!」

「華子と喧嘩するから圭くん怒るんだもん。
家に来たら圭くんいっつも優しいから

パパだって怒ってたわ。
一人占めしすぎだって！！」

「いいじゃない。ママの弟なんだから。」
華子は凛を無視して歩き出した。

「いくら華子が圭くん好きになったって
最後は私のものなんだからね。
血が繋がってる人は結婚できないんだからね。」

華子はその言葉に凛のところに戻ってきて
思いっきり凛をひっぱたいた。

「いた～～い！！何すんのよ！！」

「圭くんは私のものだから。今度またそれ言ったら
許さないからね。」

スカートをひらりと揺らして玄関に入って行った。

「ちょっと～～！！」
凛がその後を追いかけて玄関に入って行く。

凛と華子は　圭くんという人を奪い合っているんだ。
凛をひっぱたいた華子の目は座っていて
見ていた私も怖かった。

いつも何にも興味のない顔をしている華子の表情が
一瞬にして変わった。

圭くんって人が好きなんだ

私はあの王子さまを思い出していた。

早く会いに来てね……。

そして季節は駆け足で過ぎていく……。

出会い～十五話～

王子さまとの出会いで好きになった冬がきて
そして私は春には三年生になる。
学校では　相変わらず凛からの嫌がらせはあったけど
自分を好きになるという
王子さまの言葉で自信を取り戻した私は
そんなに凛が気にならなくなったし
クラスの全部が凛の味方ではなくなったから
それなりの毎日を送っていた。

そんなある日のことだった。

凛と華子が転校することを知った。
心の底から私は嬉しくて嬉しくて　心が晴れやかになった。

なんでも大きな家を建てたとか……

凛が自慢していた。

「華子とは地下鉄で一つだけ離れたところなの。
家の方が都会だけどね。」

転校を知ってから私の毎日はさらに楽しくなった。
もう少し・・・もう少しで

凛から解放されるんだ。

凛はもう新しい豪邸で頭が一杯の様子だったから
私のことも目には入らない様子だった。

「今度の家には　圭くんの部屋があるの～
ちゃんと勉強できるようになってるんだ。
だからもう華子だけに一人占めさせないもん。」

それが凛には一番嬉しいこと何だと思う。

圭くんてどんな人なのかな

さすがにあの凛の話しっぷりで私も興味がわいた。
華子があんなに怒ったのも驚いたし

だけどそんなことはもうどうでもいい
凛がいなくなる　それだけで私は幸せだと思った。

チクン……

今回は軽い痛みだった。

「あ……まただ……。」

この不吉な痛みを感じるだけでぞっとする。
いつまでこの痛みに支配されるんだろう。

王子さまがきっと呪いを解いてくれる……
あのおにいさんを思い出して
ホッとした気持ちになった。

負けないから!!

太ももの傷を叩いたら　自分が痛かった。

「おまえ　何してんだ?」こうくんが不思議そうに聞いた。

「なんでもな〜〜い」私は慌てて笑った。

この痛みは私の人生をまた大きく変える前触れだった。

呪いの力は少しづつ増して
私を支配して行く……。
どうして私だけがこんな目にあうの？

両親が生きていたら聞いてみたかった。
そして私自身　人生を呪いたくなる日々が始まる。

出会い～十六話～

園長先生に呼ばれたのは春休みに入る寸前だった。

園長先生は少し暗い顔をしていた。

いつも世話をしてくれている先生が
私にイスを出してくれた。

「急な話で私たちも困惑してるのだけど……
さっちゃんはここを出ることになったの。」

「え？」私も唐突な言葉に現状が理解できないでいる。

「まずは…今まで言わないでほしいということだったから
あなたには話せずにいたのだけど……
あなたのおとうさんは双子の弟だったらしいのね……。
それで双子のおにいさんが　弟の事故死を知ってさっちゃんを
こっちに呼びよせてうちの園に入園させたの。」

パパが双子……

その衝撃の真実に驚いた。

「それでね…用意が整い次第あなたを引き取るって言われたんだけど
なかなか…連絡が来なくて……。
そして昨日いきなり電話をもらって……準備が整ったので
春休みにあなたを引き取りたいって……。
きっと幸ちゃんも幸せになれるわ。」

「ピンクのランドセルもその人がくれたの？」

「それは違うらしいわ。
私も確認したんだけど…きっぱり違うって言われたから…」

違うんだ…じゃあ誰なんだろ……

「今の学校　転校することになるけど……」
先生が私の顔を見た。

「転校するの？」驚いた。

「そうなの。おうちがもっと向こう側だからそこに近い
学校にもう決まったらしいわ。」

「新しい家族ができるのよ。」
園長先生が言った。

「新しい家族・・・・・・」
その言葉が胸に響いた。
じゃあもう孤独じゃないんだ。
ご飯はみんなで食べるんだ。
パパにそっくりな顔の人と一緒に……。

最後の日
得意になって立った凛の横に私が立った。

「凛ちゃんと幸ちゃんが転校します。」

凛も驚いた顔だったけど　クラス中も驚いていた。

「うっそ～～～さっちゃん～～」

口ぐちに私の転校に驚いていて　嬉しかった。
その時凛の睨みつける視線を感じたけど　もう凛にも
会うことはないしと

私は初めて堂々と凛を見返した。

凛は私の様子に一瞬ひるんだけど私は今までの恨みとばかりに凛を睨みつけた。

あんたなんか大嫌い

私はその気持ちを一杯にして凛を見据えた。

「さっちゃん～せっかく仲良くなったのに～行かないで～～」

女子が口ぐちに言ってくれて　私との突然の別れを惜しんだから凛の立場がなくなっていた。

いい気味……

振り返って凛を笑う。

今までの一杯の恨みをこめて……

凛は悔しそうにしていた。

もうあんたに二度と会うことはないわ……

そう思っていた。

出会い～十七話～

玄関で凛と華子に出くわした。

さっきのこともあったから正直会いずらかったけど
もうどうせ今日でおさらばだし
堂々としてよう　自分を好きになりたいと思った。

「どこに引越しするの？」凛が言った。

「知らない～」

「どこか親戚にでももらわれたの？」

「知らない。別にあんたに言わなくていいし…」

「調子乗ってんじゃない？ずい分。」

「乗ってないもん。」

私は靴を出して履き換えた。

「車きたよ　凛ちゃん。」

華子が言った。

この際だからもう一言言わずにはいられない。

「このランドセルあんたが隠して
汚くしたんでしょ？みんな犯人はあんただって知ってるよ。」

凛が驚いた顔をした。

「あんたしか……いないじゃん……。」

「バカじゃないの！？」

あきらかに動揺してると思った。

「どんなにキレイにしたって　性格が悪いから
可愛くも見えない。」

言ってやった～～！！！

「な…何よ！！！」

凛の手が頬に入って
乾いた音が鳴った。

「痛い……」私は手で頬を覆った。
叩いてやりたいのは私の方だ。

私はすかさず凛の頬に同じように平手打ちを喰らわせる。

「頑張れ～～さっちゃん～～」

数人のクラスメートが声をあげた。

「何よあんたたち！！」
凛と仲良くしていた人たちだった。

「やっとあんたと離れられてせいせいしたよ。
あやたち大キライだったの。
やなこといっぱいされたもん。」

「ね～～。」

三人が顔を見合わせて声を合わせた。

「その性格なおさないと向こうで友達もできないよ。」

凛は紙袋を地面にたたきつけた。

「おじょうさまなのほんと?」

私も思わず吹き出した。

「車来てるけど　凛ちゃん。」

いつものように華子が動じない顔で言った。

「あんたたち…覚えておいてね!!!」

華子を押しつけて凛は車に飛び乗った。

そして二人を乗せた車が学校を去って行った。

悪魔が去った……

言いたいこと言えて私もうれしかった。

もうきっとあんな意地悪の人とは会わないよね。
新しい学校に行ったら　生まれ変わろう。

明るくて元気で
いっぱい友達に囲まれて
王子さまが　見つけてくれる女の子になるんだ。

やっと憑き物がとれた私は希望に満ちていた。

出会い～十八話～

「王子さま…私はもうここにはいないけど
きっと園に行って　どこで暮らしているか調べてくれるよね。」

あの日のような雪は降っていないけど
あの日のことは今でも鮮明に覚えていた。
だけど……こんなに鮮明なのに
おにいさんの顔だけが思いだせなかった。

でもきっとおにいさんは　私を覚えてくれている

そう信じるしかない。

家族ができるんだよ……
パパと双子なんだって……。

もう一人ぼっちじゃない
それが何より嬉しかった。

「幸ちゃんはもっと素直になって気持ちをもっと
人に伝えた方がいいと思うわ。

誤解されやすいところがあるから……
家族には素直に笑顔でお話できたらきっと
可愛がってもらえるわよ。」

園長先生は目を潤ませた。

「可愛がってもらってね。名前通りに幸せにね…さっちゃん…」

先生が私の手をとった。

「あなたは幸せよ。ここには誰にも引き取ってもらえず
社会に出て行く子たちも多いの。
孤独でも前を向いて歩いて行くって……。
その子たちの分まで家族を持てる子には幸せになってほしい。」

「お世話になりました。
優しくしてくれてありがとうございました。」

ここに来て初めてだった。
こんな感情を持ったのは……涙が流れて
ここに来た時の不安な気持ちを思い出して……
それから園長先生や先生たちに優しくしてもらったのを
思いだして私は涙がとまらなかった。

「ありがとうございました。」

ここも私の家族だった……そう思ったら暖かい涙が流れた。

午後に車が迎に来た。

見送る先生や仲間たちに手を振って　私は園を後にした。
王子さまに出会った公園

毎日一番遠くまで歩いた通学路

悶々とした日
凛にいじめられて悔しかった帰り道
友達ができてうれしかった日

私は薄汚れたピンクのランドセルを抱きしめて
これから私を迎えてくれる新しい家族を想像した。

父と双子の叔父

父と同じ顔をしてる人

会うのが楽しみで仕方がない。
父のことをいろいろ聞いてみよう。
どんな男の子だったのかとか……母とはどんな恋をしたのかとか

車は私を新しい家族の元へと運んでいる

きっと幸せになれるって……信じよう……。
そして私を好きになってもらえるように努力しよう……。
だって……もう孤独はイヤだもん。

私は幼い胸に期待を膨らませた。
いきつく先はきっと……幸せの家・・・・・・・。

「こちらですよ。」

車が停まった先は　ものすごい大きな家だった。

「うわ……」

目の前に広がる立派な豪邸に目を白黒させていた。

私の家……

「よろしくね。」と小さい声でつぶやいた。

その時傷が　チクンと痛んで　一瞬にして不安がよぎったけど
私は必死にその不安さを吹き飛ばす。

負けないもん…
自分を好きになるんだもん……

折れる心～十九話～

新しい素晴らしい家だった。

「すごい……。」

今日からここが私の家
そう思うと期待感でいっぱいになった。

運転手が家の中からおばさんを連れてきた。

この人がここの……

太ってエプロンがはちきれそうなおばさんが立っていた。

緊張でドキドキしてきた。
おばさんは私を上から下までジロジロと見た。

イヤな感じだった。

「この人はここのお手伝いのシノさんです。
わからないことは何でも聞くといいよ。」

「小林　篠といいます、よろしくお願いします。」
大きな体のおばさんが体を丸くして頭をさげたから
私は頭をさげた。

「まずは自分の名前を言ってから　よろしくおねがいします
それが初対面の挨拶よ。」

すかさずシノにそう言われて私はタジタジになった。

「角谷　幸　です。
よろしくおねがいします、」

なんとか声を出して挨拶をした。

「旦那さまや奥さまがおかえりになったら
そうやってきちんと挨拶をしなさいね。」

なんなのこのおばさん……

「今日から私が幸ちゃんの教育係ですからね。

荷物を持って入りなさい。」

そう言うと玄関のドアを開けて
私を中に入れた。

想像していた展開ではなくて私は拍子抜けしていた。

なんでこのおばさんにこんないい方されんのか
わからなかった。
お手伝いさんって　ここの家の人じゃないし
えらそうですぐに嫌いになった。

大きな玄関ホールだった。

すごい・・・・

「ついてきて。」シノの後をついて歩いた。

ホールを抜けるとエレベーターがついていた。

家の中にエレベーターだって……

「ここのお宅は先月完成したばかりなのよ。
私は昔からずっとここのお宅に通いできているの。
本当に素晴らしいお家でしょう……。
旦那様は立派な方ですから……さ……まずはあなたのお部屋に案内するわ。」

エレベーターを上がって三階が開いた。

また少し広いホールがあって

「こっちがバルコニー　おもに洗濯物を干したり
休日はご家族が焼き肉をしたり
お子様たちが遊んだりする予定。今はまだ雪があるけど。」

シノがバルコニーの入り口のドアを開くと私は思わず声をあげた。
まだ白い雪をかぶった山々が見えて
バルコニーはとても広かった。

「すごいでしょ。ホントこんな贅沢ができるのも
旦那様がご立派な方だから…お若いのに本当に……。」

シノは絶賛していた。

パパと双子のおじさん

バルコニーの入り口の向かいには部屋のドアがなんこかあった。

「ここが私たちの休憩室。私の他にもう一人お手伝いがいるの。
こんなひろいお家だから…今回旦那様がもう一人雇ってくれて…。
どっちかがお休みの日は一人だから　幸ちゃんにもお手伝いしてもらうわよ。」

え？お手伝い？

洗面所にトイレもあって
そこにはソファーとテレビがあった。
小上がりの畳もあった。

「ここで幸ちゃんは顔を洗ったりトイレを使ってね。
くれぐれも下を使わないようにしてね。」

シノの言葉が少しづつおかしいなって思い始めた。

その隣のドアを開けると

「ここがあなたの部屋よ。」

机とベットとクローゼットがあった。

「ここ？」一人部屋が嬉しかった。

私がウロウロしていると

「ここにインターフォンがあるから
私たちが帰った後　ご家族の方からの連絡がここに来るから
お手伝いをしてね。私たちはシフト制で七時と八時には帰るから
その後の雑用は幸ちゃんの仕事だから。」

「仕事？」

「そうよ。あなたはここに住まわせてもらうのよ。
それなら何かを返すべきでしょ。
だからご家族のためにお手伝いを一生懸命しなくちゃね。
ここで学校も勉強も衣食住全部　していただくんだから
感謝しないといけません。」

まだ小学生の頭には難しかった。

お手伝いをしないさい

それが言いたいのかと思った。
それはしかたがないことだし……ママにもよく言われていた。

「お手伝いして」

私は一緒にキッチンに立つのがうれしかった。

その時は　お手伝いの意味をそう深く考えてはいなかった。
ただ素晴らしい家に自分の部屋がある……

そして家族ができる

まだその希望を持っていたから……
ここでの生活を楽しみにしていたんだ。

本当の地獄は……今日から始まった。

「それから…あなたの隣のお部屋には
いかなることがあっても入ってはいけません。」

私の横の扉を指さしてそう言った。

「もしあなたがこの部屋に入ることがあれば
また園に戻ってもらうことになりますから
ここのお掃除は私以外は入れません。」

「はい……。」
よくはわからないけどとりあえずそう答えた。

とりあえず荷物を置いてまた一階に下りて
素晴らしい家の中を見て回る。

ここには子供が二人いるようで
私と同じ小学生なのかなと思った。

一階の奥には　叔父の書斎と会議室のようなものがあって
また私はおどろいた。

「旦那さまは　本当に仕事熱心で素晴らしい才能の持ち主で
だからと言って仕事ばかりじゃなくて
家庭も大切にされるから本当に理想の男性だと思うわ。」

シノは少し頬を赤らめた。

「奥さまは体が弱い方で　お休みになっていることが多いから
そんな時は気をつかってあげてほしいの。」

私は小学生なのに　シノの説明はけっこう難しい

気をつかってほしい　ってどういうこと……

「ここには　小学生のおじょうさまと
幼稚園のおぼっちゃまがいるんだけど　おぼっちゃまの方も
体が弱くて……そんなこともあって奥さまも気が滅入っているの。」

素晴らしい部屋の説明を受けた。
私にとっては夢のような世界だった。

「今日はご家族は地方にいらっしゃる奥さまの弟で

今　高校生の圭さんのところに遊びにいっているの。
明日の朝戻っていらっしゃるから　今日はゆっくりお休みして
明日から頑張ってちょうだいね。」

シノのいっていることはやっぱりわかりずらい。

「今まで　お手伝いとかしたことあるの?」

「ないです。」

「これからはお手伝いたくさんしてもらうから
それがここでお世話になる幸ちゃんの仕事だから。」

「仕事?」

「そうよ。さっきも言ったけど
ここで全てお世話になるんだから　幸ちゃんは
それなりにお返ししていかなければいけないでしょう?
旦那さまからは学業は優先にしてくれと言われてるけど
幸ちゃんにはこれからこのようにして動いてもらうわね。」

そう言うと一枚の紙をくれた。

そこに書かれていることに目を疑った。

朝食の準備の手伝い
起床時間は６時

朝食　７時

それから学校に行く用意をして　学校に行って
帰ってからすぐに宿題と明日の時間割を揃える時間は一時間

それから夕食の手伝い

夕食　６時

夕食後の片づけ

シノやもう一人のお手伝いが帰ってからの雑用
最後にお風呂に入るから　風呂掃除

９時　部屋に戻って
１０時には寝る

休日も同じだけど
学校行かない時間は　お掃除や昼食を手伝うことになっていた。

「これ・・・・・」

思わず声に出てしまった。

私は家族じゃなくてお手伝い？

「何？」シノが言った。

「あ……いえ……。」

「いろいろ苦労しているのにこんなことは言いたくないけど
これからわかることだから　ハッキリ言っておくわね。
自分の存在をちゃんと理解しないと　この先悲しいこともあるかも
しれないから…あくまでもお世話になる
だからお返しする……そう思ってこれからやっていって。
幸ちゃんはまだこんなに小さくて子供だけど
ここでは甘えはないから……ちゃんと区別つけて
私たちも接するようにと旦那さまにも言われているの。
悪く思わないでね。」

シノが私の言いたいことを察したのか　そう言って私の荷物の片づけを手伝ってくれた。

私はここの子供になったんじゃないの？

そう聞きたかったけど口を閉じた。

その回答を聞くにはあまりに不安感が大きかったから……。

「テレビが見たかったら見てもいいけど
とにかく幸ちゃんが自由にいられるのはここだけだから。
あとお風呂はいつも最後に入るようにしてね。
下の方は　仕事以外一切手を触れないこと。
それから隣の部屋もね。
今は誰もいないけれど……あそこは圭さんのために作ったお部屋なの。
圭さんが帰っている時はなおのこと気をつけて
おじょうさまたちが目を光らせていて
私なんかでも　圭さんと仲良く話なんかしてたらすごい目で睨まれるから。」

圭さん……どこかで聞いたような……

大きなキッチンだった。
シノがあるものを説明してくれるけど
さっぱり覚えられない。

「もう少し大きくなったら幸ちゃんにここ
任せるからね。」

シノは大きな体を丸めて私に夕飯を作ってくれた。

「食べましょう。」

キッチンの隅に小さなダイニングがあってそこで
シノと一緒に食べた。

「好き嫌いはない？」

「はい。」

「よかった。家の人と同じものって言うわけにも

行かない時があるから……。
私たちは夕飯をここでいただくのよ。」

私も・・・・？

シノたちがここで食べるんだと私は思うようにした。
だってここの叔父さんは
パパの双子の兄弟なんだもん……

早く会ってみたいな…パパと同じ顔

ドキドキするけど期待の方が大きかった。

今日は家には誰もいないから　シノが泊まってくれた。
シノは布団に入るとすぐにイビキをかきだしたけど　私は
興奮してなかなか眠りにつけなかった。

これから　どうなるんだろう私……

折れる心～二十一話～

シノに起こされたのは七時半のことだった。
眠い目をこすって私が起きると

「今日から一日の流れを覚えますよ。
春休みだから休日からね。」

朝からテンション高い

私はあなたの高イビキで大変だったのに……

「私たちは交代で平日は　朝は六時から来て七時には朝食
休日は八時に来て　八時半から九時の間から朝食になるの。
幸ちゃんの仕事は　朝の時点で前の晩といでおいた
炊飯器にスイッチを入れておいてちょうだいね。
それから下に行く時は　パジャマとかでうろつかないこと
朝起きたら休憩室の　洗面所でちゃんと顔や歯をみがいて
それから着替えて下に行くのよ。」

「はい……。」

さすがに私も話しが見えてきた。

「食事の支度は私たちがするから　その間幸ちゃんは
自分の部屋を片付けたりしていて。
インターフォンで呼ばれるまで自分のことしていていいから
それから用意が整ったら　食事を運んだり・・・・・」

シノは私の部屋に大きな紙をはった。
私の一日の流れが書いてあった。
私は完全にここで仕事をするために来ていることを理解した。

「まだ幸ちゃんは小さいけど
今からしっかりやっていればいいお嫁さんになれるわよ。」

シノはそう言って笑った。

何かが…違う

想像していた新しい生活とは全く違う現実がここにはあった。

「今日はお休みだけど　明日は直塚さんという人が
出番で私は休み　ナオさんでいいわ。」

シノさんナオさん……私はつぶやいた。

何が何だかわからないままにシノさんに言われるままに過ごしていた時だった。

白いピカピカなワンボックスが停まった。

「おかえりだわ。
幸ちゃんしっかり挨拶するのよ。
旦那様はそういうところとても厳しい方だから……。」

心臓がドキドキしてきた。

シノと一緒に玄関に向かった。

「おかえりなさいませ～」さっきまでとは違うシノの声

「ただいま。」

私はその声に反応した。

パパ・・・・・

たくさんの袋をかかえて　その人が荷物をホールに置いた時だった

「パパ！！！」思わず私は叫んでいた。

そしてその人の胸に飛び込んだ。

「パパ！！パパ！！」涙が出てきた。
そこにいるのは　四歳の時突然別れた父と同じ顔をした人だった。

「幸ちゃん！！」シノが慌てて私をその人から離した。

「ちゃんとごあいさつしなさい。」ピシャリと言われて空気を読んだ。

「か…角谷…幸です…。」泣き声で名前を言った。

「そうか。ここでの自分の立場を早く理解して
しっかりやってくれ。おまえが成長するために必要な最低限のことは
私が手を貸すから　おまえは勉学と日々の生活を真面目にやるよう

に。
あとはシノさんとナオさんに任せてあるから
困ったことがあったら二人に言いなさい。」

つめたい顔をしている。
父とこんなによく似てるのに
幼い記憶の父は　笑うと目の横にたくさんのしわがあった。
私がそのしわを撫ぜると母が

「パパはいつも笑ってるから～これは笑いじわだよ。」

そう言って一緒に撫ぜた。

涙が乾いてしまった時　私は驚くべき人と再会した。

「おとうさま～～」そう言って玄関からはいってきたのは　華子だった。

「あ・・・・・」
私が驚いて声をあげると
その声に気づいた華子が

「あ・・・来たのね。

おとうさまから聞いていたわ。いとこなのね私たち　よろしくね。」

それだけいうと　「おとうさま～～聞いてよ～～～」そう言って
玄関の外に出ていった　叔父の後を追い掛けていった。

「あ・・・どうして・・・・・」

私を引き取ったのは　華子の父親で……
華子は私のいとこなんだと知った。

とんでもないところへきてしまった気がした。
華子のところに来てしまったということは……

外が騒がしくなった。

シノが
「来た　来た……台風が……」
そう言うと顔をしかめた。

台風・・・・・

「ずるい！！私だってつれていってくれればいいじゃない！！」

そう叫んだ甲高い声

「圭くんは　凛には会いたくないって～」

「うそつき！！！」

甲高い声は泣き声になって外は大騒ぎになった。

「家の中に台風が来るわよ。覚悟しておいて。」シノが荷物を持ち上げた瞬間

華子の頭を叩きながら　凛が入ってきた。

やっぱり……

私　凛　華子

再会の日……私はこの先が真っ暗なような気がした。

「え・・・・・。」
凛が私を見て固まった。

「なんでここにいるの?」
確かにそう思うだろう。

「同じ学校だったから知っているだろう。
幸は今日からうちで暮らすことになった。」
叔父が言うと

「なんで?叔父様?」凛が私を見たままそう聞いた。

「幸は私の弟の娘なんだ。」

「え?叔父様の弟?
パパからも聞いてないよ。
叔父様　一人っ子じゃなかったの?」

「おとうさまは　双子なんですって。

私も初めて知ったの。幸と私はいとこってことになるわ。
凛がうるさいから内緒にしていたの。」華子が言うと

「なんでも内緒にして!!圭くんに会いに行くなら教えてくれればいいじゃない。」

凛が華子の背中を叩いた。

「凛　やめなさい。」
叔父が厳しい声で言った。

「だって…私だって圭くんにあいたかったんだもん。」
凛は泣き顔になった。

「悪かったな。洋介から凛は塾の試験があると聞いていたからあえて誘わなかったんだ。」

「パパ　余計なこと言って……
圭くん全然帰って来ないから　会いたかったのに……。」
泣き声に変わる。

「元気だったよ。また背が伸びてめちゃめちゃカッコいいの～。
たくさん甘えちゃったよ。」

華子が挑発するようにいったからまた凛が怒りだした。

「凛ちゃん　今度は必ず一緒に連れて行くから…
ごめんなさいね。圭には電話するようにいっとくから。」

後から現れたキレイなおばさんが優しい声で言った。

「おかあさま～そんなこと言わないでよ。」
華子がつかみかかった。

おかあさま……

この人は　華子のおかあさんなんだ。

「おばさま　絶対に約束だよ。
今日でも電話してって言ってね。」凛はすっかり機嫌を直していた。

「わかったわ。」

叔母は美しい笑顔でそう言った。

「あなた・・・睦月が起きたわ。
手を貸して……。シノさん　睦月のベットお願いね。」

「わかりました。」
シノが慌てて　階段を駆け上がった。

私はどうしたらいいのか困っていると
叔母が近づいてきて

「幸・・・？」と聞いた。

「はい……。角谷　幸　です。
よろしくお願いします。」私は慌てて頭を下げた。

「一生懸命　勉強して　働いてね。」優しい笑顔にホッとした。

叔父は苦手だけど　叔母は好きに慣れそうだと思った。

叔父が男の子を抱いて入ってきた。
男の子はとても冷たい目をしていた。
にこりとも笑わない。
そして私をジッと見つめた。

「さっき話したね。いとこの幸だよ。」
叔父が言うと　また男の子は私をジッと見た。

「幸です。よろしく。」
冷たい目にドキドキした。

叔父は私の横を通り過ぎて　叔母と一緒にエレベーターに乗り込んだ。

凛と華子はまだもめている。

「圭くんから電話もらえるなんて楽しみだ〜
いっぱい大好きって言うんだ。」凛が言った。

今度は華子が怒りだした。

「電話なんかさせないもん。」

「華子は血が繋がってるから結婚できないんだから。
私はパパに頼んで　絶対圭くんのお嫁さんになるんだもん。」

凛の言葉に　華子がとうとう発狂して
凛の髪の毛を引っ張った。

「そんなことしたら…殺すから凛……」

華子の目も冷たい目で　私はぞっとした。
圭くんって…どんな人なんだろう

興味が湧いた。

折れる心〜二十三話〜

「幸ちゃん　手伝って。」

シノに呼ばれて私は奥の部屋に入った。

「そこのクローゼットからパジャマ出しておいて。」

私はクローゼットをあけて怪獣のたくさんついた
小さいパジャマを出した。

「おぼっちゃまも気むずかしいから
気をつけて接してちょうだいね。
多分このパジャマも……」

少ししたら　叔父が睦月を抱きかかえて部屋にやってきた。

シノさんがパジャマを持って行くと
睦月が首を振った。

「それでしたらこれは？
じゃあこれは？」

次々と見せては　睦月は首を振る。

叔父はため息をついてその様子を見ていたが
私の方を見て

「シノさん　これからは睦月のことは幸にやってもらうか。」
と言った。

私は驚いて叔父を見た。

「そうですね　その方がいいですね。
おぼっちゃまもお友達が必要ですから。」

めんどうなものを押し付けたい必死さが感じられた。

「それじゃあ幸　頼むよ。
細々としたことは　シノさんに聞いてくれ。」

本当に冷たい目をしている。

パパと似てるけど……パパはもっと優しい顔をしていた。

目尻のしわも叔父にはなかった。

叔父はそう言うと部屋を出ていった。

「とりあえずぼっちゃまにパジャマを着せたら
少し休んでいただいて　幸ちゃんはキッチンに来てちょうだい。」

そう言うとシノも出ていってしまった。

私は一人取り残されて睦月と目が合った。

「あ……パジャマ何がいいの?
自分で選べばいいじゃない?」

睦月はあっちを向いている。

「じゃあ　これなんて可愛いじゃん?」
さっきの怪獣パジャマを差し出すと手で払った。

「どうするの？じゃあこれ？」

シノが出さなかったパジャマを出して私は言った。

結局どのパジャマにも首を縦に振らない。

私は頭に来たから睦月の洋服を乱暴に
脱がして　シャツとパンツだけにした。

園では小さい子の世話をしていたからこんなことは
朝飯前だったけど
ここまで可愛くない子はいなかった。

睦月は

「やめろや　バーカ！！」と抵抗した

「どれ着るの？」

睦月はまたあっちを見ていたから

私はパジャマをすべてクローゼットにしまった。
時折何をする気だと睦月が見ていたけど
構わずに全てたたんでしまって　ベットには何もなくなった。

「あんたみたいな子　可愛いパジャマもいらないから
その白いシャツパンでいたらいいんだわ。
とてもお似合いよ～おぼっちゃま～
その　白い　シャツパン姿～」

わざとにシャツパンを強調してやった。

「バカ　バカ　バカ」睦月が叫んだ。

知らないもん……

「これからパジャマなんか着ないでそのダサイ格好でいいんじゃない？」

睦月はやっぱり子供だから

私が言えば言うだけ言葉に反応した。

そして少しフラフラしながら一人でクローゼットに入ってパジャマを無造作にとりだした。

「ダメだよ　あんたにはその姿が一番いいって～
なんでパジャマなんて着るの？」
少しイライラしていたからついつい睦月にぶつけていた。

「うるせーブス！！」

「そのパジャマ最初にやだっていったよね？」

睦月はベットに入るとそのパジャマを時間をかけて着出した。

「自分で着たことないの？」

睦月は恐ろしくうまくボタンが閉められなかった。

「自分でした方がいいよ。すぐにうまくなるから。」

私が言うと睦月はまたボタンつけを始めた。

「これはね……こうやると…ほら・・・・
ここの穴からボタンがこんにちわって…出てくるよ。」

ぼたんを一つつけてやって

「こんにちわ」と大きな声で言うと
睦月が笑った。

「ね?ここのボタン穴から　こんにちわってだしてあげたら
ほら…うまくできるでしょ?」

園の子たちのお世話の時　ここのこんにちわを
大げさに言うと小さい子たちは喜んだ。
さっきまで生意気だった睦月が　笑ったのがうれしかった。

折れる心～二十四話～

食事の手伝いをしている私の向こう側で
同じ年の　華子や凛が
楽しそうに遊んでいる。

私は慣れない台所仕事で　シノに注意されっぱなしだった。

その様子を楽しそうに見ている凛

「じゃあ…幸はここのお手伝いってことなんだ。」

「そうみたいね。」
関心なさそうな華子に比べて
嬉しそうな凛にイヤな予感がした。

「ちょっと幸　ジュース持ってきてよ。」
早速　言いだした。

自分で……

言いかけたけどシノが　持って行けと合図したから
私は仕方なくシノが教えてくれたグレープジュースを持って行った。

「今日は　オレンジがいいの。
最初に聞いてくれる？どっちがいいのか。」

ムカつく……

シノは知らない顔して違う仕事をしていた。

私はしかたがないからオレンジジュースをまた持って行って
代わりに持ってきたグレープジュースを台所で
飲もうとしたら

「ここで飲んではダメ！！」とシノの声に驚いた。

私が茫然としてるとシノが

「ここは職場だから　幸ちゃんもここでつまみ食いをしたりしちゃ
ダメよ。」

と叱られた。

何で……？ジュースくらい……

凛がケラケラ笑った。

「貧乏人だから人が余したものとか平気で食べるんだよね。
もったいないとか～きっと落ちてるものまで
食べちゃうんだ～～あははは～～」

華子もつられて笑いだした。

泣きそうになったけど必死にこらえる。
拳を握りしめた。

「そんなに飲みたいならほら　こっちも飲む？」

わざとにお菓子のクズを入れた
オレンジジュースを私の目の前につきつけた。

「ほら　飲みたいんでしょ？」

私は怒りが頂点に達した。
今まで散々標的にされてきたけど　絶対に負けなかった。
私は凛と同じ位置にいるお互い同じ人間だ。

そのオレンジジュースを払いのけて
凛の顔めがけてぶっかけた。

「キャ～～～！！」

凛の真っ白なワンピースがオレンジ色に染まった。

「何すんのよ！！」

「あんたが悪いんでしょ！？」

凛の手が私の頬を打ったから
私はその数倍で凛の頬を殴った。

「うわ～～～～ん！！」

凛がその場に倒れて大声で泣き出して
私は慌てて飛んできたシノに手を掴まれた。

「幸ちゃん！！」シノは私を叱りつけた。

「私　悪いことしてないから！！
凛が先に嫌がらせしたのシノさん見てたでしょ？
どうして私が凛の言う事聞かないといけないの？」

私だって声が震える。

その時だった。

「おまえは自分の立場がわかっているのか?」

後から地を這うような低い声がして
私は後を振り向いた。

「うちでおまえを預かり住むところ寝るところ
食べること全てをやってやるんだ。
ならおまえは　その恩をどうやってうちに返す?」

父にソックリな顔なのに……
その顔から出る冷たい言葉に傷ついた。

「働くんだろう? みんなそうしてるだろう?
ここで働いて　おまえはこれから生きていく場を提供してもらうんだ。
華子や凛は同じ年であっても
ここではおまえは二人と同等であってはいけない。
ここで生きていくのならばおまえはここで
私たちのために働いて恩を返すそうやって
一人立ちするまで生きていくんだ。
おまえが生きるためにする学業に関してはどんなことも
してやろう
そのお返しがおまえがここで

私たちのために働くということだ。
わかるか？」

お返し？

「今後一切　わがままに振る舞うな。
凛　おまえも幸に必要以上にかまうなら　もうここには来るな。」

「え～～だって～～幸が先に暴力したんだもん～～」
凛が叫んだ。

叔父はそのまま部屋を出て行った。

華子が濡れた凛を見て　爆笑してる。

「何よ！？」

「それ…圭くんが選んでくれたワンピースだよね～～」

「あ～～～！！うわ～～～ん！！
シノさ～～ん～～なんとかしてよ～～～！！」

凛の白々しい泣き声よりも
私は叔父に言われた　冷たい声がこだましている。

お返し……

なんで？どうして私が自分を我慢してまで
お返ししなきゃいけないの？

心が折れそうになっていた。

折れる心～二十五話～

涙をこらえながらテーブルのセッティングを終わらせた。
四枚の色違いのランチマットに
バカ凛のマットと

そこに私の分はなかった。

家族として受け入れてもらえると思いこんでいた。
最初はぎこちなくても
こうして一緒に食事をとったりしてるうちに
溶け込めると信じていた。

このダイニングに私の場所はない。

みなが揃いだして　食事が始まった。

華子が圭くんと言う人の話題に触れる。

「おかあさま　圭くんはまた素敵になっていたね。
どんどん背が伸びて……華子も早く大人になりたいな。」

「私もおどろいたわ。

圭はすっかり変わってしまってて
この間までまだ男の子？って感じだったのに…
なんだか衝撃受けちゃって……。」

優しい顔の叔母

「圭は成長期が遅かったからな。男らしくなったな。
私も驚いたよ。
毎回どんどん変わって行く。
楽しみだな。早く圭をこっちに呼びよせて
一緒に働きたいな…私の肩腕として楽しみだ。」

優しい顔で笑った。
叔父もあんな顔をするんだ。

「彼女とか…そんな感じはしなかった？」凛が言うと

「しない！！絶対ダメだからって約束してきた。
圭くんに彼女ができたら死ぬからって！！」
華子は圭くんのことになると
めちゃめちゃ感情的になるんだ。

「死ぬって～～だって圭くんは華子の叔父さまなのよ。
どんなに頑張ったって結婚できないのにバカみたい。」

凛が言った言葉に華子が立ち上がって

凛の頭を思いっきり拳で叩いた。

「いた～～い！！」凛が叫んだ。

「今度そのバカな言葉言ったら　もう絶対家に入れないから。」

華子の目がすわっていて怖くなった。

圭くんは華子の叔父なんだってことは
叔母の弟になるんだ。

「も～～最悪なんだけど～～
今日はそこの拾い食いしそうな奴にも叩かれたし～」

拾い食い・・・？

またムカムカしてきた。

「とにかくくだらないこと言ったら
圭くん帰ってきても絶対にいれてやんない。」

「おばさま～うちにだって圭くんの部屋作ったんだから
うちに来るように言って～
パパも圭くんだったら喜んでって言ってたし。」

叔母は睦月の口にミニトマトを運んで

「ありがとうね。
まったく圭のどこがそんなにいいのかな～
ね？あなた？」

叔母の存在はここでは天使に見える。

「あはは～私にとっても弟みたいなもんだからな。
顔付きは成長してもまだまだ子供にしか思えない。
圭にはうちの会社を将来背負って貰いたい。
そのためには今はしばらく勉強してもらおう。
まだまだこっちには帰って来ないぞ。」

叔父が高笑いをしている。

「え～～～」

華子と凛はバタバタと足を動かした。

「大学卒業まであと何年待つの？

まだ圭くん高校生なんだから～～
だから札幌の高校に行かせたらよかったんだよ。」

華子が口を尖らせた。

「圭がやりたいことをやらせたい
私は圭を愛してるからな。
華子や睦月と同じくらいな～」

そう言うと信じられないくらい優しい顔で
叔母を見つめる。

この人こんな顔するんだ

冷たい顔の叔父は叔母を見る時の目が
とても優しいことに気がついた。

「ありがと　感謝してるわ。」
叔母は笑顔でそう答えた。

楽しい家族団欒を私は　ただ横目で見ている。

お茶を入れたり　お水を入れたり

なんでこんなことしてるんだろ

お腹すいた・・・・・・。

ご馳走を見ていたらお腹がグーッと鳴った。

その音に気付いた凛がまたバカにしたように笑う。

バカ　お腹!!

恥ずかしくて情けなくて……この場から早く立ち去りたい気持ちだった。

折れる心〜二十六話〜

キッチンからシノが指示したものを皿に入れていた。

「やっとご飯なのね。
お腹もグーグー鳴ってたしよかったね。」

凛のバカにした言葉にムッときた。

「それも余ったものばっかりで〜」

そうだった。
さっき作った唐揚げはめちゃめちゃ美味しそうだったのに
私の皿には　唐揚げがなかった。

凛がたくさん食べちゃったから……

ここにのってるのは余りものだけ……

そう思うと一生懸命作っても　あっという間に食べて終わる
わりのあわない仕事を
世の奥さんたちはしてる。

「幸ちゃん　早くいきなさい。」
凛の攻撃をさけようと　シノさんがエレベーターを指さした。

「ちょっと待って
幸って部屋どこなの？」凛が聞いてきた。
シノが答えた。
「三階の休憩室の隣の部屋です。」

「三階？圭くんと同じとこ？」

「圭さんの隣の部屋ですよ。」

「おじさま圭くんの隣の部屋ってずるいわ。
華子は知ってるの？」

「圭くんは幸を相手になんかしないわよ。
だって幸は別にお手伝いさんみたいなものだもん。」

「それはそうだけど……。」
凛は不服そうだった。

「どっちにしても圭くんの部屋には絶対入れないし
おとうさま意地悪だから私たちは絶対ダメだっていうの。」

「くれぐれも言われたんだ。
おまえたちに部屋ん中かってに入れないでって約束させられた。
もし守ってくれないならここには戻らないって。」

「え〜〜そうなの？」

「凛ちゃんが勝手にいろいろ見たから
あの時だってめっちゃ怒ったでしょ。
あんな圭くん初めてだったから怖かった。」

「だから絶対入らないでね凛ちゃん。」

華子の目はもう座っている。

「うちにだって圭くんの部屋あるんだし〜
別にここにこだわらなくてもいいんだけどね。」

凛がそう言うと

「そういうことやったら絶対許さないから
圭くんはうちの家族だからね、」

普段あまり何事にも無関心っぽい華子は
圭のことになると人が変わってしまう。

「ほら冷めちゃうわよ。」

シノにいわれて慌ててエレベーターに乗り込む。

一人で休憩室でご飯を食べた。
誰と話すこともなくて

これならまだ園にいた時の方がよかった。
期待してきたからこんなにガッカリしてしまうんだ。

「唐揚げ食べたかったな。」

私は野菜ばかりの皿の上にため息をついた。

あまり好きじゃないけど食べるしかない……。

華子たちの楽しい食卓とは差がありすぎて
孤独をかみしめた。

一人ぼっちなんだ……
もう期待するのはやめよう……

板垣家に憎しみが芽生えた。

いつかきっとお礼してやるから……
口一杯に生野菜をつめこんだ。

負けるもんか……

いつかきっと頑張ってたら王子さまが
迎えに来てくれる。

「頑張ったね。」そう言ってくれるから……。

折れる心～二十七話～

帰り支度を終わらせたシノが

「おじょうさまたちと知り合いなの？」と聞いてきた。

「前の学校の時　凛と同じクラスだったから……
園の子ってすごくいじめられた。」

「そうだったの……。」シノが気の毒そうに言った。

「凛さんは意地悪だから……
あそこの家はみんな意地悪で有名なのよね。
家政婦事務所でもあそこにいかされたらみんな
リタイアしちゃうんだって。」

「凛が意地悪なのは遺伝なんだ……。」
思わず口から出てしまった。

シノは大爆笑

「あはは…あ～～ほんと遺伝なのよね～
おかしい～～あはは…
私たちも凛さんが来たらほんと気を使うのよ。
凛さんのおとうさんは旦那さまのいとこなんだけど…
これまた曲者で…おまけに奥さんもかなりの神経質で……
私はよかったわ。
ここはいいもの。旦那さまも奥さまも
本当にいいかたで。」

いいかたかな…？

私にしてる仕打ちはいい人だとは思えない。

「でも知らなかったわ～旦那さまが双子だったなんて。
私も結構長いのよ。
先代がいらっしゃる時から働かせてもらってるから。
でも一度もあったことなかったけど
幸ちゃんのおとうさんに似ている？」

「顔だけです。
パパはもっと顔をくしゃくしゃにして笑ってた。
幸には笑ってるパパしか思い出せないから。」

「そう。

旦那さまはそうね笑わないわね。
ご家族といらっしゃる時…特に圭さんが来た時は
とてもご機嫌なんだけど……。」

「圭さんって・・・？」

「奥さまの弟さんですよ。今　地方の高校にいって寮に
入っているのよ。家にいる時は大変
華子さんと凛さんと毎日奪い合いで大ゲンカして……
だから圭さんも嫌気がさして　向こうに行かれたんだわ。」

そうだろうな……
そこに圭って人がいなくてもこの様子だもん…
それはイヤになるわ……。

「それに勝手に部屋に入って凛さんと華子さんが
何かしたらしくて…いつもそんなに怒らない圭さんが
人が変わったように怒って……それから少しして
地方の高校に志望校変えたって言いだして
もう大変だったの。
ほんと圭さんのことになると普段クールな華子さんも
性格変わっちゃうし……
旦那さまも奥さまも頭痛いんじゃないかしら。」

シノの情報は結構おもしろい。

「睦月さんも圭さんにはなついていたし……
圭さんって人はほんと私たちにも優しい挨拶をしてくれて
小さい頃から本当にできた方だったわ。」

「小さい頃から・・・？」

「奥さまとはずいぶん年が離れているのよ。
いろいろあって奥さまは家庭的に不幸な方で……
圭さんの面倒をずっと見て来たの。
お優しい天使のような方だから……圭さんも穏やかに
育ったんでしょうね。」

確かに叔母の笑顔は本当に美しいと思った。

「旦那さまも奥さまにはメロメロなのよ～～
うふふ～～
あら…もうこんな時間
じゃあお風呂は九時半に…お掃除してあがってね。
今日教えた通り。ここに書いてあるから。
幸ちゃんの仕事は八時までで終わり。お風呂まで
あとは勉強してお風呂に入って　お掃除したら終わりだからね。」

役割表を確認してシノは帰っていった。

八時まであと一時間か……
インターフォンが鳴って

「おとうさまが下りてきなさいだって～」華子の声

また何か言いつけるのかな

テレビみたいな……

やっとつけたテレビを消してリビングに向かった。

プライド～二十八話～

下に降りて行くと華子と凛がテレビの前で爆笑していてもう一人男の人が座っていた。

「私のいとこで　板垣　洋一
凛の父親だ。
壮介の娘の　幸だ。
挨拶しなさい。」

叔父が私を指差して言った。

「角谷　幸　です。
よろしくお願いします。」

凛の父親　洋一が立ち上がった。

「壮介の……。」じろじろと見る目が凛に似ていて不快だった。

「壮介に…っていい方もおかしいが
って言えば大介にも……よく似てるな。」

ニヤニヤして叔父と私を見比べた。

「ね？静さん。似てるよな？」

今度は叔母を振り返った。

「おかあさまも幸のおとうさんを知ってるの？

同じ顔してるんでしょ？

華子はおかあさま似だけど…幸はおとうさまに

似てるってこと……？」

華子は叔母に抱きついた。

叔母は優しい笑顔で華子の頭を撫ぜていた。

うらやましかった。

強烈に母親が恋しくなった。

「静さんだって　壮介知ってるだろ？

どうさ？」

聞き直す顔がとても下品に見えた。

「そうかしら……。私にはよくわからないけど……

それは親なんだし面影はあるでしょうよ。」

洋一がその言葉にやらしく笑っている気がした。

「おお…その強い目力は…壮介にそっくりだな。
なんだかアイツに睨まれてる気がするよ。あはは・・・」

その言葉に思わず反応した。

「おとうさんは優しい目をしていました。
いつも笑っていてここにたくさんしわがあって……
だから今の私には全然似ていません。」

思わずそうきっぱりと言った。

洋一は目を丸くして私を見ていたが
まだ爆笑しだした。

「家庭を持って優しくなったのか？
俺の知ってる壮介は　狼みたいなやつだったからな。」

凛が
「狼？どういう意味？」と口を出した。

「一匹狼で周りとは一切協調性がなくて
大介が明るい太陽だとしたら　壮介は稲光を発してる雷みたいなものか？」

「よくわかんないけど
同じ双子でも叔父さまはいい子で　幸のおとうさんは悪い子だったそういうことなんでしょ？」

「ま　そんなとこかな。
アイツがそんなに笑ってる生活送っていたんだからめちゃめちゃ幸せだったってことか・・・？静さんそう言う事か？」

いちいち叔母にいやらしく質問を返す
洋一はやっぱり凛の遺伝だと思った。

なんで叔母さんにいちいち聞くのかな

「お幸せで何よりだわ。」叔母は動じず笑顔で対応している。

「いいよ　幸
お風呂まで自由にしてなさい。
華子　凛　風呂に入ってしまいなさい。」

叔父が言ったので

私は頭を下げて　背中に感じるたくさんの視線から
逃げるように階段を登った。

「やな感じ……。パパを悪って言ったし
悪な感じなら叔父さんの方が　絶対悪でしょ？
パパはいつも優しくて　ママとラブラブしてて……
うちはいっつもみんな笑ってたもん！！」

悔しくて部屋に入るとそう叫んだ。

「どうして死んじゃったの？
幸だけおいて……
これから幸はどうなるの？」

不安で胸が押しつぶされそうになる。

「王子さま……早く幸を見つけてね。
そしてこんなところから早く連れ出して……。
ああ…早く大きくなりたい。
中学校出たら　学校行かなくていいから仕事しよう。
そしてここから出て自由になる。
恩返しなんてひとつもない自由なところ……。」

休憩室に戻って　テレビをつけたけど
おもしろそうなのはもう終わっていた。

インターフォンが鳴って風呂に呼ばれたのは十時を過ぎていて
私はウトウトとうたた寝をしてしまっていた。

大きな浴室だった。
一番最後の風呂には長い髪の毛が何本も浮いていて
湯船に入る気にはならなかった。

シノに言われたように浴室の掃除を終えて　リビングに出ると
叔母がワインをのんでいた。

「おやすみなさい。」私が言うと
叔母はふり向いて

「疲れたでしょ？悪く思わないでね。
ここで辛い思いすることが多いかもしれないけれど
我慢して将来何になりたいか考えて
準備しなさい。学業に関してはしっかりあなたを支えていくつもり
らしいから。
ここでつけられる区別に負けないでね。
あなたには関係ないことなんだけど……いろいろあってね…
夫が冷たいことは……先に謝っておくね。」

叔母の優しい言葉に救われた気がした。

「はい……。」私はそう言って頭を下げてリビングを出た時

「壮介……」叔母がそう言った気がした。

プライド～二十九話～

この家で暮らすのに何度も心が折れた。
自分の置かれたこの存在を　何度も恨み涙を流して
そしてそんな夜を何度も何度もやりすごし朝がきて

そのうち私は少しづつ変わって行った。

あきらめ

孤独と絶望感と恨み

板垣家に対しての複雑な思いはやがて心を支配した。
いつか……いつか
必ず……復讐してやると……

幸いなことに小学校は　二人とは違った。
凛と華子は車で私立の小学校へ通い
私は歩いて近所の小学校に通った。

学校は天国だった。
私が唯一プライドを持てる場所だった。

勉強は嫌いじゃないし　家でもやることといえば
手伝い以外は　読書か勉強しかなかったから
華子と凛の成績がパッとしないのを尻目に
私は常に学年トップ成績だった。

だけどどんなに頑張っても
誰もほめてはくれなかった。

少し成績のあがった華子が
叔父と叔母に褒められている姿を見て悲しかった。
私の通信簿はさっと目を通して
叔父は何も言わずにシャチハタを簡単に押した。

家庭からの通信欄にはいつも白紙

どんなに成績がよくても褒めてくれる人は
一人もいないけど

私の成績が華子よりいいということは
板垣家にとっての復讐に組み入れられている。

それが私の生きる糧になった。

お菓子やジュースをのべつなく食べて過ごす
凛と華子にニキビが出初めた中学生の頃

私の肌には一つもニキビはなかった。
石鹸でしかあらわない私の顔は
石鹸のように白くて澄んでいる。

二人がニキビで悩んでいる姿を見ながら優越感に浸る。

それも復讐

二人に勝っているところを探しては
自己満足に浸った。

相変わらず二人は圭くんのことで言い争っている。
意中の圭くんは一度も帰って来ない
おまけに高校を卒業したら本州の大学に進んでしまって
知らされていなかった華子は
しばらくご飯も食べられないほど憔悴しきっていた。

「おとうさまもおかあさまも大嫌い！！」
華子の悲鳴と泣き声が家中に響き渡る。
華子の扱いに悩む二人を見ながらこう言った。

「ざまみろ」

愉快だった。
板垣家に対しての恨みで一杯の私は　叔父が悩む姿は
どんなお笑い番組より楽しくてたまらない。

そんなある日　電話が鳴った。

「板垣でございます。」いつものように電話に出る。

「あ…シノさん……じゃないよね……？」
優しい男の人の声

「シノさんは今　買いものです。」

「そっか……。ナオさんはいる？」

屋上に洗濯物を干しに行ったナオさんが
ちょうど戻ってきたから

「電話です。」と差し出した。

「はい…お電話かわりました。
……あら…圭さん!?おひさしぶりです～。
……そうなんです。幸ちゃんです……はい…はい…
そうなんですか?……華子さん喜びますよ……
ええ……明日ですね。わかりました……
それにしても何年ぶりですか?……また素敵になられたんでしょう?
楽しみにしています。」

そう言うと電話をきった。

「大変大変」
ナオさんはそう言うとバタバタと動き始めた。

「明日　おじょうさまのお誕生日だったわ。
すっかり忘れるとこだった。」

誕生日……

早生まれの華子は三月生まれで
すっかり忘れ去られている私の誕生日は四月だった。

誕生日は命日……
私の……喜ぶことのできない日になっている。

プライド～三十話～（前書き）

読者様

タイトルがずっとしっくりこなくて
やっといいタイトルが思いつきました。
急に変更して驚かれたでしょうが　これからもよろしく
おつきあいお願いたします。

「誕生日なんてしなくていいから。」

華子が言った。

私がいるのに気づかずに言い合いが始まった。

おもしろい！！もっともめたらいいのに！！
そんな気持ちで私は向こうから見えないように
体を隠して耳を大きくしていた。

「もう誰にもお祝いなんかしてもらわなくていいわ。
おとうさまもおかあさまも　卑怯だから。」

「華子　いい加減にしなさい。」
叔父が言った。

「圭くんをどうして遠くにやったの？
高校だけ我慢しなさいって言ったでしょ？
H大に来るってずっと思ってたのに　嘘つき！！」

華子はすっかり憔悴しきっていた。

「中学校も行かない。」

「圭が頑張って勉強するのにか？
おまえは恥ずかしくないのか？
圭は専門的な勉強をして　そして次は私の肩腕になるために
経営の勉強をしに大学に行くんだよ。
そんな圭に恥ずかしくないのか？」

「だって…もう五年も帰って来ないのよ。
一回もだよ。会いに行ったって何回行けた？」

夏休みや冬休みには圭に家族で会いに出かけていたけど…

「今度はもっと遠くなのよ。
またもっと会えなくなるじゃない……。」

「なるべく今度は帰って来るように話しておくよ。
高校の時はアルバイトもできないし　圭のことだから
私に負担をかけたくなかったんだろ。
今度はアルバイトもできるし
今までよりはもっと会いにきてくれるさ。」

「おかあさま　約束させて！！
圭くんに絶対遊びに来るようにって！！」

「はい…はいわかったから…
もういいでしょう？
圭のことになると華子おかしいわよ。」

「おかしい？
私は真剣なのよ！！
絶対圭くんのお嫁さんになるから。
世間は認めなくても　おとうさまとおかあさまは許してね。
子供つくらないで戸籍を入れないといいんでしょ？
私は真剣だから……。
それから圭くんが帰ってくるまで
お祝いとかしなくていい。願掛けするから。」

そう言うと部屋のドアをバタンと閉めた。

「困ったものだな。
最初は愛らしかったけど…さすがに心配になってきたよ。」

叔父がため息をついた。

「あなた…圭は…こっちに戻さない方がいいわ。
このまま戻って来なかったら華子もあきらめるから。
心配なの。華子は圭のことになると
気違いみたいになるから。」

叔母も叔父の隣に座りこんだ。

「何を言うんだ。俺は圭を頼りにしてるんだ。
睦月の肩腕になってもらって
この会社を二人で盛り上げてもらいたい。
人嫌いする睦月だって　圭にだけはなついているし……
うちには圭が必要なんだよ。」

「それはありがたいけど……。」

「今にきっと卒業するよ。
圭があまりに素敵な子だから　華子も魔法にかかっているけど
そのうち早めに圭にはよい伴侶を見つけて結婚させるから
安心しなさい。」

本当だ

叔父は叔母にはとても優しい顔をするんだ。

「私はおまえを愛してるよ。
おまえの愛してるもの全部……俺は受け入れてるつもりだよ。」

「ありがとう……。」

叔母が叔父の肩に頭を乗せた。

その様子を見ながら
少しうらやましいと思った。

プライド～三十一話～

三階に上がると
シノさんとナオさんの話声が聞こえた。

「旦那さまと奥さまにはお話した方がいいかしら。」

「圭さんが誰にも言うなっていったんでしょ？
それじゃあ　知らない振りしておいた方が…」

「そうよね。
とりあえず圭さんが言ったように寝るとこだけ
用意しておいたし……
明日は大変な騒ぎになるわね。
華子さんもあんな感じだし
私は　凛さんが来ないことを祈りたいわ。」

私も…そう願いたい……

「それにしても圭さんはすごいわよ。
高専で勉強して　今度は大学でまたやるんだから
たいしたものよね。

睦月さんがあの調子だから　旦那さまも安心できないし
甥の圭さんがしっかりしてくれていたら
後継者のことは全然心配もないでしょう。」

圭って人はすごい人何だと思った。
勉強が好きなのかしら……私はそんなに勉強はしたくないと思った。

「ここに帰ってきてもうるさいのがいるから
帰ってきたくないんじゃないのかしらね。」

「それは言えるわ。
ほら　あの時は私も驚いたけど
凛さんと華子さんを引っぱたいた時
あんなに怒った圭さんを見たのは初めてだったわ。」

「ああ…なんか勝手に入って行って見つけたものに
言い寄った時でしょ?あれって小学校に上がる前だったわよね。
どっちにランドセル買ったんだって……
大変だったわよね。
ところであのランドセルはどうしたんだっけ?」

「捨てたんじゃなかった?かなり発狂していたから
怖くてどうしたのかわかんないわ。
でもあれってどっちに買ってあげたんだと思う?」

「華子さんでしょ？
それを凛さんに見つけられて言えなかったんじゃないの？」

「圭さんをめぐってバトルすごいから～」

「でも華子さんは…どう頑張ったって…ムリでしょうけどね。」

「いろいろありそうね。
圭さんの結婚相手が思いやられるわね～」

そう言いながら二人はお茶をすすった。

うんうん

いろいろあったんだ……。

ランドセルか……

私は部屋に飾ってあったランドセルを抱きしめた。
誰がくれたのかわからない

私の宝物……。

華子と凛は
「もうかっこわるいから」と言って四年生でもうリュックに変えたけど
私は6年間使い続けた。

「いつまで使ってるんだろうね～」

大きくなってきた体に乗っているバランスの悪くなったランドセルを二人にバカにされたけど
私にはどうしても放せなかったから……。

卒業した時は　誰も来てはくれなかったけど
ランドセルが祝ってくれているような気がした。

「圭って人　明日来るんだって。
ちょっと興味あるよ。明日どうなるんだろ。」

少し胸がドキドキしていた。

プライド～三十二話～

その日は
叔父と叔母は睦月を連れて病院に出かけていた。
睦月はよくわからないけど
病気がちでいつも熱を出していた。
華子たちと同じ小学校には通ってはいるけど　休みがちでその代わり
家庭教師が毎日来ていた。

人づきあいは全くできないみたいで
表情のない顔は　少しづつ大人っぽく変わってきたけど
冷たい顔は叔父に似てきた。

華子は映画を見に行くと出かけて行った。

シノさんとナオさんは家族が出かけて
大急ぎで片づけを始めた。

「よかったわね。みんな出かけて
やりやすいわ。
圭さんは何時頃帰ってくるのかしら。」

「夕方になるって言ってたけど。
ここが片付いたら　先に買いものに行きましょうよ。

圭さんの好きなご馳走を作らないと。」

私は二人から仕事を言いつけられて
手伝いをしていた。

「幸ちゃん　これ圭さんのお部屋に置いてきて。」

ナオさんに大きなフカフカの枕を
圭の部屋に持っていくように言われて
私は初めて隣の部屋に足を踏み入れた。

「うわ……すごい……。」

広い部屋には大きな机とパソコン
クローゼット

それから天窓の下にベットがおかれていた。

「私の部屋と全然違うわ。」

多分私の部屋は物置というかそんな感じの
部屋だったんだろう。

大きなベットに枕を置いて天窓を見上げた。

きっときれいな星が広がるんだろう、
圭と言う人が
ここの家族にとって大切な存在なのがわかる。

シノさんとナオさんが出かけて行って
家の中はシーンとしていた。
私は言われたとおりに
キッチンでレタスを洗っていると物音がして
顔を向けた。

「あれ?君は?幸ちゃんかな。」

そこに立っている人は
黒ぶちの眼鏡をかけて髪の毛をツンツンと立てて
そして背のとても高い男の人だった。

「あ・・・はい・・・」

もしかしてこの人が圭さん……

「はじめまして　日高　圭　です。
よろしく。」

優しい笑顔だった。

私はドキドキして

「か…かど…角谷　幸です……。
よろしくお願いします……。」

ドキドキした。
この家に来て誰かに笑顔で話されたのは
始めてのことだった。

「華子と同じ年なんだよね？」

「はい…中学二年に…なります。」

「ご飯　食べてる？
小さいね。」と笑う。

余りものだから……

「はい……。」

「俺も中学校くらいまでは前から二番目くらい
高校に行ってから大きくなったよ。
小さくて心配してたけど……
好き嫌いしないで食べてればそのうち大きくなるよ。」

優しい声だった。

この人が……

華子や凛が騒ぐのもわかる気がする。

「みんなは？」

「今出かけてます。」

「俺の部屋ってどこ？
ここに来るのは初めてなんだよね。」

「案内します。」

エレベーターの中では近くてドキドキして

音が聞こえるんじゃないかって恥ずかしくなった。

こら…心臓落ち着いて……

「すごい家だな…さすが義兄さんだ……。」

圭さんは歓声を上げた。

たいした男じゃないわ
冷酷で弟の娘を働かせてんだから

そう言ってやりたい気持ちをおさえていた。

「うわ・・・なんだこの贅沢な部屋は……。」

部屋に入って圭さんはそういうとウロウロしている。

「天窓か～俺ね
星見るの好きなんだよね。」

ベットに大きな体で転がった。

「うわ…めっちゃ贅沢だな。」

「あ…私は下に行ってますので……。」

思わず見とれていた自分を修正してそう言った。

「ありがとね。」

圭さんはそう言うと手を振ってくれた。

素敵な人だ……

胸がときめいてしまった。

いけない!!浮気者!!

「幸にはいるでしょう。
きっと迎えにきてくれるって王子さまと約束したのに…」

浮気心にカツを入れた。

でもひさしぶりだったあんなに優しい顔の人と
話をしたのは……
ここで笑顔をくれる人なんていなかったから……。

圭さんか

華子と凛のバトルがすごいのが納得できた。

私と圭さんの出会い……。
浮気心が育ち始めたのを私は必死におさえた。

孤独な心に圭さんの笑顔が
スーッと入りこんで……
胸がときめいたのを強烈に感じていた。

プライド～三十三話～

「あの圭さんが帰ってきて　お部屋にいるけど…」
買いものから帰ってきた二人に伝えた。

「え～～夕方って言ってたのに～」
そうパニくると
圭さんの部屋のドアをノックした。

「圭さん　早かったんですね。
夕方って聞いてたから。」

出てきた圭さんにシノがそう言った。

「あらら?ちょっと…やだわ……。
圭さんったらすっかり変わってしまって……
五年って……やっぱり長いんですね。」

「高校行って背伸びたからね。
シノさんもナオさんも相変わらずお若くて～」
圭さんの声は笑っている。

「いやですね～そんな社交辞令言えるようになって～」
そう言いながらうれしそうな二人

「いつまで？」

「明日の夜の便で行こうと思って
忙しい思いさせるけどよろしく頼むね。」

声だけでも充分に癒される。

戻ってきた二人が張り切りだした。
私はそんな二人のそばで
忙しく手伝いをしていた。

ここに来てこう言う毎日を送って
動くコツも覚えた。

シノさんやナオさんの性格や仕事の流れも
体で覚えていた。

「幸ちゃんはもうお嫁にいってもだいじょうぶね。」

ナオさんに言われてうれしかった。

そうだお嫁さんになれば
ここから解放されるんだ……。

「幸ちゃん　よく働くね。
華子や凛とは全然違うや。」

圭さんが突然あらわれて驚いた。

「いつもこうやって手伝っているのかい?」

「ここにおいてもらっている恩返しをするように
叔父さまに言われました。」

思わず口にしたのは圭さんが
叔父を尊敬している様子だったから

「そうか……
でもそうやって頑張ってる姿はとってもいいよ。
損のことは何にもないからね。
家事のプロにいろいろ教わって
幸ちゃんはいいお嫁さんになれるよ。」

思わず口にしたことを恥じた。

そういう考え方もある

いや…今は
ここで生きていくしか手がないんだから
前向きに受け入れて暮らすしかない

そう圭さんに言われた気がした。

夕飯のスタンバイが終わって
後はみんなが戻ってくるのを待つだけになった。

三人で休憩室に上がってテレビを見たり
ジュースをのんでいると

「戻られたわ。」ナオさんが立ち上がった。

「これから大変よ・・・・・。」

シノさんがエプロンを締め直した。

プライド～三十四話～

「華子のおかげでこんなに帰るの遅くなった。」

睦月が怒りながら入ってきた。

「おかえりなさい。」

私たちは口を揃えて言った。

「ごめんなさいね……。
すっかり遅くなってしまって……。
華子と待ち合わせしてたら　もう全然来なくて……
あら？もう夕飯の用意なの？」

叔母がセッティングされているテーブルを見て
不思議そうに言った。

「よぅ！！睦月！！」

元気な声にみんながふり向くと
圭さんがにこやかに微笑んで立っていた。

「圭くん！！！」

普段は顔付きを変えない睦月がビックリしている。

「大きくなったな～」
睦月を高く抱き上げて

「もう…抱くのは限界だな～」と言った。

「圭!!どうしたの突然!!」叔母も驚いている。

「圭くん!?」華子が圭さんに気づいて大きな声をあげた。

「よ…わがままおじょうさまの登場だな。」

「あ…嘘…圭くん…」華子は感動しているのか声が震えていた。

「両親を心配させてたんだってな。」

華子は圭さんの胸の中に飛び込んだ。

「だって…圭くんがまた遠いとこに行くって言うから……
また会えないから…どうしたの?突然でビックリした。」

「華子と睦月に会いに来た。
またしばらく会えないから　いい子にしてるように言いに来たよ。」

圭さんは華子の頭を優しく撫ぜた。

私は思わず嫉妬のような気持ちに
なっている自分に驚いた。

「もう子供扱いしないでよ。」

「俺にとってはおまえらはいつもかわいい妹と弟だからな。」

「妹なんかじゃないもん……」華子が圭をにらみつけた。

「圭!!どうしたんだ!?」
叔父の嬉しそうな声にまた驚いた。
圭さんは華子から離れて叔父の方に向かった。

「ご無沙汰してます義兄さん。」

「また男前になったんじゃないのか?」
眩しそうに目を細める。

この人でもこんな顔するんだ……。

「明日発つから　そのまえにみんなの顔見に急きょ寄りました。」

「おう!!そうかそうか~~
シノさん　お酒持ってきてくれ~成人したし堂々と飲めるな。」

「する前でも飲めましたけどね。」

叔父は圭さんの肩を抱いてダイニングに座らせた。

「お食事も運びますね。」シノさんの合図に私も料理を運んだ。

華子はすかさず圭の隣にひっついて座った。

叔父と圭さんは学校の話や勉強の話に盛り上がり
叔父はとても上機嫌だった。

圭さんを囲んでこの家の住人がみな優しい表情になっている。

「急なことで忙しい思いさせたわね。
どうもありがとう。」

叔母がキッチンに来て頭を下げた。

「いえいえ私たちも圭さんに会えてうれしいですよ。
本当に四年会わないだけであんなに大人になられて
奥さまも少し安心されたんじゃないですか？」

「見た目は変わってもね…あの子はいつまでも子供にしか見えないわ。
こうやって急に来たりするとこも…あの子にはビックリさせられっぱなしで…全く何を考えてるのか……」

そう言いながらも叔母は嬉しそうだった。

圭さんっていう人の存在が
ここの家の太陽だって知った。

華子は圭さんにしがみついて離れない。
うらやましいなって思った。
私ももっと圭さんと話したい…そう思った。

プライド～三十五話～

インターフォンが乱暴になって私は慌ててモニターに近づいた。

そこにはイライラした様子の凛がいて

「早く開けてよ!!」と言った。

私はシノさんに凛が来たことを言うとシノさんが

「これは大変な騒ぎになるわね。」とつぶやいた。

「凛おじょうさまがお見えですけど……。」

シノさんがそう言うとみんなの顔が止まった。

その間もインターフォンは鳴り続けてる。

「開けなさい。」叔父が言ったので私は慌てて玄関に向かった。

「遅いじゃないの。」
そう言うと私をバックで殴って
ずかずかと入っていった。

「痛……」飾りの金具がひっかかって
自分の頬から血が出たのがわかった。

「ちょ…ちょっと待ってよ!!!」

手のひらについた血に私は頭に血がのぼった。

凛がリビングに入ろうとした瞬間
凛の肩を捕まえた。

「何よ!!」

振り返った凛がギョッとした顔をした。

「あら!!幸ちゃん!?」ナオさんが私の様子に気づいて声をあげた。

「謝ってよ!」

「何がよ！！」凛が怒りをぶつけたいところへ行けずにいていらついている。
でも私だっていきなりこんなことされてたまったもんじゃない。

「あんたにこんな暴力される筋合いないから！！」

「あんたが早く開けないからでしょ。
お手伝いのくせにとろくさいのよ。」

「くせに…って……。
どんだけ自分がエライと思ってんの？
たまたま親が金持ちだからってあんたまで調子こかないでよ。」

普段から凛にやられてきた
不条理さが私を爆発させた。

「凛　幸に何をしたんだ？」叔父が冷たい声で言った。

凛がふてくされて違う方を向いたから

「開けるのが遅いってバックで顔を殴られました。」

私はそう言った。

「え～～信じらんない
凛ってすぐそういうことするから…ね？圭くん～」

華子が圭の肩に頭を乗せた瞬間
凛は私のところから　華子に向かって走り出した。

「始まった・・・・」ナオさんがつぶやいた瞬間だった。

圭さんが立ち上がって凛の前に立ちはだかった。

「圭・・・・」凛の声は少し穏やかになった。

「明日朝一で顔を出して　驚かせるつもりだった。」と言った。

「嘘……今日だって前田さんが…駅で圭くんを見たって
教えてくれなかったら……私は何にも知らなかったもん……。
私に内緒でここの家の人は…圭くんを隠してしまうから……
ずっとずっと…会いたくて…
華子だけじゃないよ……圭くんが向こうに行っちゃうの
ショックなの……。だから…だから会いたかったの……。」

凛はまるで違う生き物のように
圭さんの胸の中にいた。

ナオさんがタオルで私の血を拭いてくれて
消毒してくれた。

「…まったく気違いなんだから…」耳元でそう言った。

「幸ちゃん…ごめんな。
よく言って聞かせて　謝らせるから。」圭が言った。

　甘やかせるな!!
私はそんな気持ちと半分嫉妬の目で圭さんを睨みつけた。

「もう　いいでしょ!!」いつまでも離れない凛を華子が押しのけた。

「痛〜〜い!!」凛がひっくり返った。

華子はそのすきに圭の胸に飛び込んだ。
「圭くんについた乱暴な女の消毒するから。」

「何……この～～～！！」

凛が飛びかかってきて　圭さんの前は大騒ぎになった。

すごい・・・・

いつも冷静でクールな華子の豹変はある意味
凛より怖いものがあった。

「いい加減にしろ！！！喧嘩ばっかりするなら
帰るからな！！！」

圭さんのドスの利いた声にも驚いた。

二人は喧嘩をぱたっとやめて離れた。

「まったく・・・いっつもいっつも……だから帰ってくんのイヤになるんだ。
一人一人会ってるといい子たちなのに
顔を突き合わせるとホントにおまえたちはダメだ。
それ以上やるなら　俺は帰るぞいいのか？」

「ダメ…ダメ……帰っちゃやだ……」

二人は一斉に圭さんにしがみつく。

「凛　明日の朝十時までにはそっちに行くから
今日は帰れ　いいな?」ピシッとした声に凛の背中が伸びた。

「はい…。」

「シノさん　タクシー呼んで。」
シノさんは　電話をかけた。

「それから　いい迷惑を受けた幸ちゃんに謝りなさい。
それからさっき言ったお手伝いのくせにという　感謝しないと
いけない人たちをバカにしたような言葉を謝りなさい。」

「やだ…謝んない。」凛は私を睨みつけた。

「幸ちゃんが言った通りだろ?
たまたま親がそういう力もをってるだけで　普通の子はこんな生活
送っちゃいない。同じ人間だ。
身の回りのことをしてくれるって感謝を持って接するって
おじさんに教わってないのか?」

「シノさんとナオさんには謝る。ごめんなさい。」

「凛は幸にケガをさせたんだよ。謝りなさい。
この傷が一生残ったらおまえ　刑務所だぞ。」

すごくドスの利いた声だった。
圭さんは優しい時と怖い時の　ギャップが激しい……。

「ごめん…幸……」すごく悔しげに私に頭をさげた。

うれしかった。
凛が一番頭を下げたくない私に頭を下げたから……
私は思いっきりバカにした顔で

「うん。」とうなづいた。

凛の悔しそうな顔が　めっちゃ快感だった。

「タクシーきました～」
窓を見ていたナオさんが叫んだ。

「じゃあ　行こうか～

タクシーに乗せてきます。」

叔父を振り返ってそう言った。
慌てて華子が走り寄ってきたけど　圭が

「待ってろ。」と言ったからあきらめて二人の背中を見送った。

凛がふり向いて私なのか華子なのか
あかんべーをして圭さんの腕にしがみついた。
閉まるドアに　華子が

新聞を投げつけて
「死ね!!凛!!」と声を荒げた。

プライド～三十六話～

「優しくなんかすることないのよ。」
華子が圭さんに言い寄った。

「してないよ。ちゃんと悪いことは悪いって教えただろ。」

「華子が見てないところでどうせ
優しくしたんでしょ？」華子は口を尖らせた。

「ねえちゃん…異常だよ……。」
普段口を開かない睦月がつぶやいた。

「何が？」

「だってさ…嫉妬深過ぎ。凛なんて相手にしなきゃいいよ。
圭くんは絶対あんなの恋人にしないよ。
ねえちゃんもだけどね～」睦月は普段　あまり話さないけど
家族のやりとりをすごく冷静に見てる。

この冷たさは　絶対叔父譲りだなって思うところたくさんある。

「最後が気にいらない。」

そう言うと　華子は思いっきり睦月を殴った。

「華子！！何するの！？」叔母が悲鳴をあげた。

まだかかって行こうとする華子を叔父が止めて
圭さんが睦月を抱き上げた。

「今日は凛を見てガッカリした。
華子まで俺をガッカリさせるのか？」
圭さんが言うと　華子はハッとしたように首を振った。

「ごめんなさい　ごめんなさい……
睦月　ごめんなさい……。」
華子は慌てて睦月に駆け寄ったけど　睦月は圭さんの肩から顔を
はなさなかった。

「圭・・・華子も凛もあなたのことになると
おかしくなってしまうのよ。悪くなる一方よ。」

叔母は頭を抱えた。

そんな叔母を叔父が肩を抱いて
「大丈夫だよ。ひさしぶりに会ってそれが突然だったから

華子も混乱してるだけだよ。」

叔母に話す言葉の優しさはいつ聞いても感心する。

子供たち以上に叔母には優しい顔をする。

「悪いな圭・・・・せっかく喜ばせに来てくれたのに…。」

叔父は圭にも優しい顔をする。

「すみません軽率でした。」

「そんなことはない。
おまえは俺の大切な家族だ。いつでも
どんな形でもここに帰ってきてほしい。
そのうち華子や凛も年頃になって　他のことに興味を持てば
喧嘩もしなくなるさ。」

「はい。」圭さんの顔が暗くなったから
華子が大慌てしていた。

「うれしかったの、うれしくてうれしくて
圭くん一人占めにしたくてわがまま言っただけなの。
ごめんなさい……そんな顔しないで…

圭くん傷つけたら華子生きていけない……。」

そう言うと叔母に抱きついて子供のように泣き出した。

「圭・・・・」困ったように叔母が圭さんを見上げた。

「わかったよ華子・・・。
だけど俺のことでそんなに怒ったりしたらダメだぞ。
睦月には関係ないんだからな。
他の家族やお手伝いさんたちにもだ……。
約束できるか？」

「はい…わかりました。」

「忙しくてあんまり返事はできないってことを承知してくれたら
パソコンのアドレスを教えるからメールしよう。」

華子の顔が華やいだ。

「ほんと？」

「その代わり返事が遅れたりしても絶対に怒らないって約束するか

？」

「うん　うん　約束する。
そしたら寂しくないもん……。」

「学校にもちゃんと行けよ。
両親困らせるな。わかったか？」

「はい　ちゃんと頑張ります。」

「睦月と凛にも教えるからな。
二人とも同じ条件だから。」

「凛にも？」少し表情が暗くなったけど

「問題あるのか？」と優しい表情に変わった圭さんが言うと

「全然ない～～」そう言ってまた叔母に
今度ははしゃぎまくって抱きついた。

睦月と目が合った。

睦月は呆れた顔をしてまた圭の肩に　顔を埋めた。

この家の人はみんな　圭さんを愛してるんだなってうらやましくなった。

どうしたらそんなに愛されるの？

そう聞いてみたいと思った。

プライド～三十七話～

休憩室で帰り支度を始めたシノさんとナオさんも
今日のことでは凛に憤慨していた。

「まったくあのガキは何さまだと思ってんだか。
あんなんだからみんなあそこやめるのよね。」

「今日はいい気味だったわね。
幸ちゃんが気の毒だったけど。大丈夫？」

「はい・・・。」

私は正直また傷が残らないか心配だった。

「顔だからね。でも大丈夫よ。
そんなに深くないからよかったわね。」

「それにしても凛さんも華子さんもちょっとね。
あれなら圭さんも帰りたくなるわよね。

圭さんが結婚するなんて言ったら…相手の人殺されるかもよ。
なんだかほんと奥さまじゃないけど
ひどくなる一方だもんね。」

「じゃあ後はよろしくね。
明日は　私たちも休みいただいたし
幸ちゃん大変だろうけど頼むわね。」

二人ともとても嬉しそうだった。

いいよね・・・
ここから一歩出たらお手伝いなんてしなくていいんだから
私はここに住んでいる限り
やっぱり……そうはいかないから……。

お風呂掃除を終わらせて　部屋に戻ってきたのは
いつもより少し遅い時間になった。
圭さんが睦月と一緒にお風呂に入るとか言って
けっこう長い時間かかったから……。

部屋のドアを開けるまえに
屋上に出てみた。

「う〜〜寒い〜〜〜」
今年は冬が早く終わった気がするけど　刺すような
冷たさはまだまだ春には遠い。

ベンチに腰かけていつものようにあおむけに
寝転んだ。

星が降ってくるようで……
この時期まだ虫がいないからオススメなんだよね。

「今日もめっちゃムカついた……。
バカにして…どうして私だって同じ中学生なのに…どうして
蔑まれて生きていかなくちゃダメなの。
みんな…あの呪いのせいだ……。」

太ももの傷をジーンズのうえからなぞった。

「早くここから出て行きたい。
そしてこんな生活もう…絶対にイヤ……。
凛だって華子だって対等に生きてやりたい……。」

情けなくて涙が出てきた。

物音が聞こえて
「今日はごめんね。」圭が現れて私は驚いて
ベンチから飛び起きた。

「いいよいいよ…星見てたんだろ?
俺も向こう側で見てたけど寒くてえそうだったら
幸ちゃんの声が聞こえた。」

心の中を見られたようで慌ててる私。

「傷痛むかい?」

圭さんが近づいてきて　傷の絆創膏に顔を近づけた。

ドキドキドキ……

心臓が口から飛び出てしまいそうで私は息を殺した。

圭さんの指が　絆創膏に触れた時思わず体がまっすぐになった。

「ごめんな……」

「は…はい……。」

「今日君のこと見てたけど　働くね。
感心したよ。華子や凛とは大違いで…そして何より
丁寧な仕事をするから…幸ちゃんは賢い子だね。
それに自分っていうプライドを大切にしている…それが伝わってくるよ。」

「そ…そんなことないです。」声が震えた。
ここで人と話すことはほとんどないから……
それもこんな素敵な人と話しをしている。

澄んだ夜空が輝いて見える。

「辛いけど…自分の人生は恨まない。無駄なことなんか一つもないから……

だってさ幸ちゃんは　包丁をうまく使って人参を花の形にしたり
お風呂を
ピカピカに磨いてくれたり…そして傷ついても立ち直って
また強く慣なって前を向く……悲しくて泣いても…そのプライドが
幸ちゃんっていう子を輝かせてくれるはずだよ。」

「そうでしょうか……。ここにいると嫌いな自分にも会います。
嫉妬したり憎んだり　そして自分がどうしてこんな毎日を送っている
のか
そうしたら過去に戻って一人私を置いて言った両親や……あ…そう
いろんなことが憎くて仕方なくなります……。」

さすがに呪いの事は言えなかった。

「幸せになるようにって…きっとさ
ご両親はそう願って名前をつけたんだよね。」

目がねをかけてない圭はまた　別人に見えた。

「名前まけです……。」

どんなに頑張ったって幸せにはなれないって呪われたから……

「きっと幸せになるよ。
今　そのためにちょっと人より苦労してるけど……

幸ちゃんはきっと　誰より輝くから…今度会う時が楽しみだな。」

恥ずかしくて私は下を向いた。

「今度はいつ…会えますか?」思わず大胆な事を言ってしまった。

「うん…四年後…いやもしかしたらまたこうやって
戻ってくるかもしれないし…わかんないな……。」

凛や華子が悲しむのもわかる気がする。

「そうですか……。」

「幸ちゃんに会う楽しみも増えたよ。
どれだけ輝いているんだろう…って。
俺はさ…両親に捨てられて姉貴に育てられてきたんだ……。
愛された記憶一つもない……。
年の離れた姉貴の困惑した顔が忘れられない……。
それでも自分の青春をなげうって俺を育ててくれた。
だから俺は　姉貴のために勉強してきた必死でね。
姉貴が喜んでくれるのを確認するのは　勉強だったり運動だったり…
その時は自分はどうしてこんなにムリして生きて行くんだろって
恨んだ時もあったけど　いまこうしていると
全部俺にとっての栄養になってたんだって……

感謝してるんだよ。」

圭さんにそんな過去があるなんて正直驚いた。

「俺と幸ちゃんは…同じだよ。
お互い頑張ろう。これからは俺は幸ちゃんに頑張ってもらうためにも
勉強してくるよ。あはは…もう勉強もしたくないんだけどね。」

そう言うと圭さんは笑った。

「これからはいままで努力してきたことを実らせるために
頑張って生きていく第二段階っていうとこかな。」

クシュン…

思わずくしゃみ

「お～まだ髪の毛ちゃんと乾かしてないだろ？
凍ってるよ。」

圭さんが頭を撫ぜてくれた。
夢を見ているようで　人生で一番の幸せを感じた。

「俺とこうやって話たことは誰にも言っちゃダメだよ。」

「はい…」声が震えた。

圭さんはそう言うと家に戻っていった。

まだ夢の中にいるようだった。

私の心の中に……輝くためのプライドと…王子さまとの約束に…

圭さんとの秘密が加わって……

王子さまと圭さんに会う日のために頑張ろうと力が湧いてきた。

動き出す運命〜三十八話〜

圭さんがつくってくれた秘密の夜

久々に傷が疼いた。だけど幸いなことに記憶が飛んだりすることもなく
ある意味　警告　を感じた。
でもこんな生活に少しでも　楽しみを持たせるなら
またここに帰ってくるはずの圭さんとの再会を
楽しみにしているそれだけで　違う気がした。

時は流れて　私は高校生になった。
就職ということも考えたけど　将来を考えて
絶対に高校だけは行きなさいと担任が親身になって相談にのってくれて

進学校へと志望校をしぼって　難関を突破した。

叔父が冬休みには手伝いをいっさいせずに
勉強にだけ力を入れるようにと言われた。

少しだけ感謝した。

凛や華子には呼びつけられてはいたけど
「叔父さんにしなくていいって言われてる」
堂々と言いのけてやった。

二人はエスカレーター式の高校へ決まっているから
ダラダラ過ごしているのがうらやましかったけど
それを横目に私は意地でも学校に受かってやると必死だった。

圭さんがしている勉強と私の受験勉強はどこか同じような気がして
勉強すればするほど圭さんとの距離が縮まって行くような……
それがうれしかった。

自分の勝手な思い込みだけど……

合格発表は一人で見て　一人で喜びに興じた。
叔父が帰ってきて

「合格しましたので　また三年間よろしくおねがいします」

叔父の前で堂々と頭をさげて

「そうか、わかった。」言葉すくなげに叔父はそう言った。

これが両親だったら　たくさんほめてくれたんだろうなと思った。

「幸　頑張ったね。」

その分自分をたくさんほめてやった。

シノさんが制服を買うのをつきあってくれた。
セーラーに袖を通す。

鏡の中にいる私は輝いている。
きっと圭さんが　ほめてくれるそう想像してうれしくなった。

そんな中で睦月も中学生になった。
叔母は睦月の制服姿に目を細める。

病気がちの睦月も少しづつ男らしくなっていた。

「睦月もなんか男なんだって思うと不思議だよね。」

華子が言った。

「ほんと…素敵よ睦月。」
叔母の笑顔は美しい……優しくて暖かい……。
私にはその微笑みは封印されているけど……
叔父を見てパパを想像して
叔母を見てママを想像した。

新しい世界に踏み出そうとしている。
私だって

背は相変わらず小さいけど
それなりに大人っぽくなった。

これから・・・何かが動き出す……そんな期待感で満ち溢れている。

動き出す運命～三十九話～

睦月は叔父と叔母が望んだ学校には行かなかった。
小学校を休みがちだった睦月は
それなりに家庭教師なんかをつけて勉強していたから
頭はよく　そのままエスカレター式に
私立中学に入学させる予定だったらしいが
本人の猛攻により
近所の中学　つまり私の後輩として入学をした。

「担任がさ　おまえの担任だった山瀬って言うんだけど…
なんかうざげだったよ。」

睦月はたまにだけど
私に声をかけてくれることがあった。

「そう?とってもいい先生だよ。」

「そうなんだ。それはおまえが優等生だったからだな。」

「睦月だって優等生じゃん。」

「優等生ったってさ…学校行ってないし～」

「なんでこっちの学校にしたの？」不思議だった。

「おまえにだけは言うかな～
変わりたかったから……自分を好きになるため…かな…」

まだまだ幼い顔の睦月がそんなことを言うから
おかしくて笑った。

「なんだよ・・・。」ムッとした様子……。

「難しいこと考えてんだね。」

「それはそうだよ。俺だって人生楽しみたいし。」

「うらやましいわ。
その気になれば楽しめるじゃん。」

睦月はハッとした顔をして

「ごめん」と謝った。

私には選択の余裕さえなかった。

「俺さ　生まれ変わりたい……。
もっと自由に自分のためだけに…。」

「恵まれてるって思ったけど睦月にもいろいろあるのね。」

「まあね。」

笑った顔が可愛かった。

睦月が何を考えてるのかはわからなかったけど
それなりに何かを手にいれようとしてるのだけはわかった。

私はどうする？

「K高受かったからって調子乗るんじゃないわよ。」

夕飯の支度をしている私に遊びに来ていた凛が言った。
相手にしない・・・心を無にしよう
私は自分にそう言い聞かせる。

「頭がいいのだけが取り柄なんだから。」

そうそう華子と一緒にいつも叱られてるよね。

「勉強もっと頑張らないとダメだ」なんて……。
だって二人を見てたら忙しそうだもん
録画したドラマを見てないとか…おしゃれがどうだとか
凛は携帯も忙しそうだった。

私もきっと両親とそんな毎日を送っていたら
きっとここまで頑張れなかったと思う。
今ここにあるのは

見返してやる
そんな気持ちが私を支えている。

圭さんだって頑張ってるんだから
私も褒めてもらえるように頑張ろう

いつかきっとまた会える圭さんに
胸を張って会えるように

それが今の私の生きる道だった。

動き出す運命～四十話～

K高は進学校だったから
入学してすぐに進路を決定するように言われた。

私は高校を卒業したら就職したいと言った。
担任は驚いた顔をして
「こんな時代に高校卒業して就職するほうが大学行くより難しいぞ。」
と言った。

「いろいろ事情があって……。」

「うん…角谷が叔父さんに遠慮する気持ちもわかるから
ただ奨学金という制度もあるし　いろいろ考えて進めて行こう。
就職するなら商業や工業でも言って専門的な勉強でもしないと…
高卒は難しいぞ。」

担任はいい人だった。

学校にいる私は　家での私とは違う。
明るくて活発で　友達に囲まれて　積極的に過ごしている。
本来の私は・・・このスタイルだと思うし……
ただどうしても難しいことはあった。

ドラマの話　携帯で交わされるメールの内容　学校帰りの寄り道や
土日の約束……。

新聞は叔父が読んだ新聞が新聞入れに入ると
それを持って部屋で隅から隅まで読んだ。
テレビ欄を見ながら

「これが美穂が言ってたドラマか……。」

と一応確認したりして
テレビは見れないこともないけれど
いつまでも休憩室で見てる気にもならないし

「ごめん～テレビとかあんまり見てないんだよね。」
会話が始まるとそう言って聞き役に回る。

華子や凛がティーン雑誌を読むようになって
読み終わった雑誌が新聞入れに何度か入っていた。

雑誌と古新聞は分別してあるのだけど
華子や凛は構わずのべつなく新聞入れに入れるから
シノさんやナオさんはブツブツ言いながら雑誌をよけていた。

もう見ないのかな

私はそう思って何冊か部屋に持ち込んで読んでいた。
いろんなことを知った。

ファッションや髪の毛　持ち物　携帯電話や　それから恋の話

私にはその中の一つも今の時点では
叶えられてなかったから情報だけは吸収して　少しでも
みんなの話について行きたいと思って
雑誌を読みあさっていた。

その中で今　華子が使っている乳液がとても素晴らしい事を知った。
私は洗顔のあとには　毎月千円のおこづかいで買った　安い化粧水で
肌を整えていた。

華子の使ってる乳液の効能が書いてある雑誌を見て
どうしても使ってみたくなったけど
でもおこづかいではそんな高いもの買えるわけがないとあきらめて
いたら

ある日ゴミ箱の中にまだ四分の一残った瓶が捨てられていた。

まだ…残ってる…

私は嬉しくなって　ゴミ箱から拾ってその乳液を部屋に持ち込んだ。

使ってみたらすぐにわかった。

「うわ〜全然違うよ〜〜〜」

吸いつく肌はすぐに　モチモチになった。
私は少しづつ　本当に少しづつ大切に乳液を使っていた。

鏡の中だけでは　私はとても輝いている。

「幸・・・可愛い～～」自画自賛・・・・・・。

そんな秘密の楽しみに私は喜びを感じながら　過ごしている。

動き出す運命～四十一話～

いつものように学校から戻ると　家の中から笑い声がした。

シノさんが
「本当にいい加減にしてくださいよ。」と言った。

「ただいま帰りました。」
リビングに顔を出すと

「おかえり～」圭さんが微笑んでいた。
私の心臓もビックリしてドキドキしてる。

「K高受かったんだってね。さっきシノさんから聞いたよ。
頑張ってるね。えらいぞ。」と言って微笑んだ。

その言葉を待ってた～～

私は嬉しくて嬉しくてだけど恥ずかして何も言えない。

「少し大きくなったかな?」
意地悪な圭さん
まだまだ大きくならないのに・・・
とうとう睦月にも越されてしまったわ…

なんて気のきいた返事も　胸の高鳴りが言わせてくれなくて
私は恥ずかしくて下を向いた。

「もうすぐ奥さまも戻られますよ。
きっと驚くわ。圭さんはまた突然なんだから～」

「約束って嫌いなんだよな。
守らなきゃならないだろ～俺ってかなりチャラ男だから。」

「恋人は・・・・？できました？」

シノさん　その質問やめてよ・・・・
背中に冷たい汗を感じた。

「その発表はここではタブーだよ。
彼女がボコボコにされるでしょう？
大切にしまってあるよ。」圭さんの言葉にアンテナが立った。

しまってある？

彼女・・・・いるんですか～～～

すごいショックだった。

バカ　シノさんが余計なこと聞くから

「あら～～彼女がうらやましいわ～～
でも本当に見つからないようにしないと……ファンクラブは怖いですよ。」

「大丈夫。大切に大切に……」
そう言うと優しい笑顔で階段を登って行った。

「幸ちゃん～今日は忙しいわよ～～
圭さんの大好きなとんかつに献立変更よ～～」
シノさんも少女のようにはしゃいでる。

圭さんって人は魔法使いみたいな人だなって思う。
みんなを笑顔にさせるから……

制服を脱いでいつものように着替えをした。

こんな格好ばっかり……

雑誌で読んだようなお洒落をして圭さんの前に現れてみたい
私はそう思ったけど
Ｔシャツとジーンズ……そしてエプロン

私はため息をついた。

あ・・・そうだ・・・・

この間　雑誌で読んだ髪の毛
髪の毛ならお洒落できる

私はそう思ったら嬉しくなった。
いつもは下でひっつめている髪の毛を
今日は高く右側で束ねてみた。

髪の毛を高くまとめただけなのに　私の顔は全然違う顔になった。

モデルにも負けてない～
幸　可愛い～～

いつものように自分を絶賛してあげる。
だって圭さんと何年ぶりだろう・・・

華子や凛は長い休みがあれば　観光してくるといいながら
圭さんに会いに行っていた。
ただ圭さんが　自分のマンションを教えてくれないし
バイトで忙しいと断られて　一日だけ平等に二人と遊んでくれるようだった。

二人が圭さんの話をしているのを
私は耳をダンボにして聞いている。

レンタカーを運転して　観光したとか
助手席を一時間交代にしたとか

プリクラをやっと一枚だけ撮ってくれたとか

私も会いたい

ずっとずっと思っていたから……。

圭さんが褒めてくれたのがうれしかった。
もっともっとたくさんお話がしたい……。
そして少しでいいから
幸が可愛くなったなって思ってほしかったから……。

「あら　なんか感じが違うわね。」
とんかつの衣をつけながら　シノさんが言った。

「そうですか？ちょっと違うとこで縛ってみたんだけど……。」

「幸ちゃんも年頃なんだから少しお洒落しないとね。」

「あれ？圭さんは？」

「さっきお部屋に行ったら　眠っていたわ。」

「あ・・・そうなんですか……」ちょっと残念。

「またね…内緒にしておいてっていうから…
夕飯食べる時まで内緒にしておきましょ。
また大騒ぎだろうけどね……。」

睦月が帰ってきて　叔母が帰ってきて
華子が帰ってきた。

そして少ししてから叔父が帰ってきていつもの時間が始まった。

動き出す運命〜四十二話〜

「おかえりなさい〜〜」

叔父は夕飯だけは家族ととる人だった。
よっぽどのことがない限り　夕飯を食べて　そしてまた仕事に戻った。

叔父は必ず一番最初に　叔母を軽く抱きしめて
それから華子と睦月の頭を優しく撫ぜる。

私には冷たい叔父だけど家族に見せる顔は　優しくて
なぜそんなに区別されるのかが悲しかった。
話しかけてくれなくても
少しでも微笑んでくれたら……父に似た叔父は微笑みすらくれない。

「幸ちゃん…圭さん起こしてきて。」
小さい声でシノさんがささやいた。

「わかりました。」

その言いつけがとってもうれしくて私は天にも
登りそうな気持ちになった。

階段を駆け上がって圭さんの部屋の前に立った時

チクン

小さく傷が痛んだ。
不安が私の中を覆って行った。

大丈夫だよ…うん…うん……

気持ちを切り替えて　私は大きく深呼吸をして
トントン　とドアをノックして
静かに部屋に入った。

スースー・・・・

静かな寝息が聞こえる。
ベットに近づくと圭さんが眠っていた。

白雪姫や眠れる森の美女のベットに近づいてキスをした王子さまは
こんな気持ちだったのかな

私の胸が高鳴った。

私にはあの日　またいつか会おうと約束していた王子さまがいたけど
浮気者なのか……

今はあの約束がおとぎ話のように感じて
今　現実にここにいる圭さんに心を奪われている。

ごめんなさい…王子さま……

もっともっと寝顔を見ていたかったけど

「圭さん…圭さん……」

圭さんの体を揺すぶった。

「ん……」圭さんは体をよじる。

「食事です。みなさん集まったから……
今日は圭さんの好物のとんかつですよ。」

「とんかつ!?」圭さんが　ガバッと起き上がったから
私はバランスを崩して尻もちをついた。

「あ～～ごめんごめん～～」圭さんがベットから飛び降りた。

「あ…いえ…って…いたた…」
かっこわるいけど　本当にお尻が痛かった。

その時圭さんが私を抱き上げた。

「きゃ……」

「軽いな～～ちゃんと食ってるのか？
今日はとんかつ食べられるのか？」

「う～～ん…多分大丈夫です。
あと一枚残ってたから　シノさんが私に食べなさいって言ってくれたから。」

「そっか～よかった。
ちゃんと…ここで食べれてないのか心配になる軽さだな。」

「お腹一杯とか　おやつとかジュースとか
そこらへんはあんまり…でも…余った野菜を炒めたりしてキッチンを使わせてもらえるから……。」

「華子や凛がニキビで苦労してるけど
幸ちゃんの肌がきれいなのは…肉食じゃないからだなきっと…」

肌がきれい・・・？

あの乳液のおかげかな…私は恥ずかしくて圭さんの胸に顔を隠した。

「なんだ？」圭さんが顔を隠した私を笑った。

「あ…恥ずかしいから……」私はそう答えるのが精一杯だった。

時間よ止まれ
恋しい男性とのわずかな共有できる時間
もっともっと…恋しい人を近くで感じたい……

圭さんが静かに私をおいた。

「大丈夫か？」

「はい…ちょっとだけ痛いけど…」

圭さんの大きな手が私の頭をくしゃっとしてくれた。
華子や凛がよくしてもらう仕草だった。

うれしい……

心臓が早く打って息苦しさを覚える。

私……圭さんが……好きなんだ……
心の中が全部　圭さんで潤って行った。

動き出す運命～四十三話～

バタバタとシノさんがあがってきた。

「あ…圭さん起きたの？」

「ごめん…今やっと起き上がったよ。」

圭さんがすかさずそう言った。
私はさっきまで抱きあげられていた幸せに頬がまだ熱かった。

圭さんは
「先に降りて行って。」
そう言うと部屋のドアを閉めた。

「ごめんね幸ちゃん…今日はとんかつあげられないわ。
凛ちゃんが来ちゃったのよ。
華子さんに雑誌を返してもらいにきたみたい。」

「あ・・・いいです。
また昨日の肉じゃがでも食べるから……」

「圭さんが来るの凛さんにはわかるのね。

感心するわ……。」

シノさんはやれやれといいたげだった。
私も　やれやれ　って言いたくなった。

とんかつ……食べたかった。

私はため息をついた。

「また　騒がしくなるわよ。覚悟しておいて。」

ほんと…凛が来るとろくなことがない

私が下りて行くと　凛と目が合った
すかさず凛は華子の耳元で何かを囁いた。

まただ……。

凛という人間は本当にイヤな女だ……。

「幸ちゃん　食事運んでちょうだいね。」
シノさんの声に私は慌ててダイニングテーブルに料理を運んだ。

「うわ～～とんかつだ～～
圭くん　食べたがるね～～シノさんのとんかつ美味しいから～」
睦月が言うと
「ほんと～どうしてるのかな～」華子が遠い目をしていった。
私はさっきあなたたちの圭くんに
抱きあげられてたの
そうは言ってやれないから　心の中で大声で叫んでいた。
「とんかつ～～」凛も小躍りした。
あんたのおかげで食べ損ねたし……
ほんとに凛は大嫌い……。
「ね…幸　髪型どうしたの?」凛が口火を切った。
「え…あ…別に　たまにはこうやってみようかなって……」

私はしどろもどろになって答えた。

「その髪型って何で見たの？」
凛が意地悪な顔をして言うと

「シノさん　この間ここに入っていた雑誌知らない？」華子が指をさした。

「この間って…いつですか？
先週のならいつものように分別してもう回収に出しましたよ。」

「先週じゃなくて今週入ってからの雑誌。
ここに入れておいたの　凛の雑誌。」

「ここに入れたっていうことは捨てていいんですよね？」
シノが困ったように言った。

私には身に覚えがあった。
月曜日　いつものように華子が新聞入れに無造作に入れた雑誌を
私は部屋に持ち込んでいた。

「そうとは限らないから。
確認してもらわないと。」

「でも以前　華子さんは捨てていいって言いましたけど?」
シノさんも黙ってはいない。

「ま…いいわ…
ってことは月曜日にここに入れたはずの雑誌はシノさんは知らないと。
ナオさんは今週は風邪で休みだし……
幸は知ってる?」　凛は待ってましたと私の顔を睨みつけた。

ドアから叔父と叔母も入ってきて
怪訝な顔をして私を見た。

「あ…いや…しらない……。」私は咄嗟に嘘をついた。

「幸って嘘つきよね。その髪型ってあの雑誌の特集に載ってたわ。
じゃないとそんな突然髪型かえるわけがないもの。
いっつも　イモ縛りだったんだから!!」凛の攻撃は更に強くなってきた。

「見て来よう。」華子が立ち上がってその後を凛が追い掛けて行った。

うわ…やばい…どうしよう…

部屋には二人が捨ててあったはずの雑誌がきれいに並べてある。

だって・・・今まで何にも言わなかった……し

私が万事休すで立ちつくしていると
階段を大声出して二人が下りてきた。

「おとうさま!!幸って泥棒なのよ!!」

華子もめずらしく興奮している。

二人で部屋にあった雑誌を抱えて私の足元に落とした。

「それから　これ　どうしてあんたが持ってるの？」
華子が捨てた乳液の瓶を私につきつけた。
その背後に　圭さんが立っているのを華子越しに見ていた。

穴があったら　入りたい……

圭さんの前で辱められるのが辛くて仕方がない。

「幸　どういうことなんだ。」叔父の冷たい声

私が答えを探していると
「幸！！！」厳しい声で私を叱責した。

「雑誌は……古新聞のところに捨ててあったから……
もういらないんだって思って…
それから…乳液も洗面室のゴミ箱に捨ててあって…
その乳液を使ってみたいなっておもったら少し残ってて…
捨てたものだと思ったから……。」
私は顔をあげれずにそう言った。

「捨てたものなんじゃないのか？」

叔父が凛と華子に言った。

「いや～だからって人が買ったものを勝手にもっていくってどういうことなの?捨てたものを使うなんて考えらんない。じゃあ安心して捨てられないじゃない
幸はゴミ箱からなんでも拾うんだよ。気持ち悪いよ。」

華子がさけんで　ゴミ箱に乳液の瓶を　叩きつけた。

「勉強できたって　人としての常識がないんだから最悪でしょう?」華子の鼻の穴が広がってるのをぼっとして見てた。

「幸・・・もうそういうことするのはやめなさい。欲しいものは　シノさんに言いなさい。必要ならば　買い与えるから。」叔父の言葉は私をバカにしてるような気がした。

買い与える……

プライドがまた崩れる・・・・・。
圭さんにいいとこ見せたくて　こんな髪の毛にした自分が情けなくて仕方なかった。
そして一番見られたくない姿を　圭さんに見せている。

悔しくて肩が震えた。

その時だった。

「あら?圭!!!」叔母が叫んだ。

みんなが一斉に圭さんを振り返る。

「キャ〜〜〜!!!」突然の出現に家族はパニックになって
今まで散々私を攻撃していたことが嘘のように笑顔に変わった。

「どうしたの?」

「うん　ちょっと時間できたから〜」

「今日は圭くんの好きな　とんかつだよ〜」睦月がからまった。

「お〜睦月　またでかくなったな〜〜」

私はすっかり蚊帳の外

華子と凛も圭さんの周りをピョンピョン飛びまわっている。

嗚咽を殺してる私を見かねてシノさんが
「部屋に戻っていなさい。」と言ってくれたから
私は　みんなが圭さんを見ている隙に階段を駆け上がった。

楽しそうな笑い声

「悔しい・・・・悔しい・・・・・・」私はベットに顔を押しつけて
声を殺して泣き叫んでいた。

動き出す運命〜四十四話〜

情けなかった
何より好きな人の前でかいた恥は私を激しくうちのめした。

少しでも可愛いって思ってほしかっただけ

本当に些細な主張だったのに
こんな大きな事になってしまった。
雑誌を読む楽しみも奪われた。

買い与えるから

上から目線はもうたくさん

どうして私だけがこんな暮らしをしないといけないの。
血のつながった親族なはずのこの家で
うける仕打ちにあと何年耐えればいいんだろう……。

インターフォンが鳴ったけど受話器をとる気にはならなかった。
自分たちでやればいいじゃん……

布団をかぶってそのうち眠ってしまった。

どれくらいたったんだろう。
私は目を覚ました。

ン……今何時だろう…

お腹がグーーーッと鳴った。

「うわ・・・・12時だって……。」

おもむろに起き上がって鏡を見ると

「ヤバい顔……」むくんだ目は最悪で　落ち武者のような
髪の毛はひどいことになっていた。

私は起き上がって休憩室に行くと
カツ丼と野菜炒めが置いてあった。

メモには

『凛さんと華子さんの仕打ちに頭にきたから
二人から二切れづつかつをとり上げて
美味しいカツ丼を作ったから食べなさいね。』

シノさんからだった。

嬉しかった。
カツ丼が食べたかったからではなくて
一人でも味方になってくれたのに感動した。

私は泣きながら屋上のベンチでカツ丼を頬張った。

「美味しい～～～」
星に向かって叫んだ。

「負けるもんか……」そう言ったけどやっぱり
圭さんの前でかいた恥が悲しかった。

これが家族だけの話なら　切り替えはできるけど・・・
好きな人の前だったのが切なかった。

「うまいか？」

突然声がして驚いた。

「シノさんいいとこあるな～～」

カツ丼を頬張ってる私を見て圭さんが微笑んだ。

突然のことで驚いて頬一杯につめこんでいた
ご飯が飲み込めなくなった。

「リスか～」
圭さんが笑いながら　飲んでいた缶コーヒーを私にくれた。

「ん・・？ん・・・？」
うまく話せない私は　この状況にとても混乱していた。

「少し残ってるから飲んでいいよ。
喉つまりしてるんだろ～慌てて食べるからだぞ～」

そう言うと声を出して笑った。

圭さんの口のついたコーヒーを私は一気に流し込んだ。

夢みたいだった。

間接キスじゃん～～～

もう頬が燃えそうになっている。

「カツ丼あるとは知らなくてさ……みんな寝たからキッチンで
作ってきたんだ、ほらカツサンド～」

カツとキャベツがサンドされて三角形に切られた
ラップに包まれたカツサンドを私に手渡した。

「太っちゃうかな？
でも幸ちゃんは　もっと食べた方がいいよ。」

たいらげたカツ丼のどんぶりを圭さんが奪い取って

「これも食べなさい。
大きくなるから。」と言って笑った。

「だって・・・こんなに…食べたら……」私が困っていると

「俺のカツサンドめっちゃ美味いんだよ。
スーパーで半額になったカツを買ってソースとマヨネーズとからし
であえて
キャベツを挟んで食うんだ～～
今日はシノさんの揚げてくれたとんかつだったから

多分それはめちゃめちゃ美味いはずだよ。」

圭さんの話を聞いていると急に食べたくなって
私はカツサンドにかぶりついた。

「どう？」

「美味しいです～～めちゃめちゃ美味しい～～
大好物なのにとんかつ残してくれたんですか？」

「ちょっとだけだ。
気にすんな。」圭さんは笑顔で私を見つめてくれた。

嬉しかった。
さっきあんなに辱められたのに……圭さんはあきれずに
また話しかけてくれたから……。

「ごめんな　あいつら意地悪なことして……。」

「圭さんが謝ることじゃないです。
私がうかつでした。もう二度とあの人たちのものには手を触れません。」

悔しさがこみあげてきてまた涙が溢れた。

「私だって…お洒落にだって興味あるし…
学校の友達との会話にも…ついていきたかっただけ……
新聞読んでるだけじゃ…わかんないことたくさんあるから……
だけど……もう絶対…しません……。
捨ててあるものを拾うのもやめます……。」

カツサンドを頬張って話てるから
モゴモゴして…嗚咽して……

私は圭さんの胸あたりを見ながら涙をゴシゴシ拭いた。

その時だった。
圭さんの厚い胸に抱きしめられた。

私は口がきけずにただモゴモゴしてる。
圭さんは何も言わなかった。

ただ私を強く抱きしめてる。
心臓の音もカツサンドと一緒に口の中にいるようだった。

「幸・・・・」

圭さんが幸って呼んだ。

「はい……。」私の声は震える…。

「カツサンド……食ったか?」

「え・・・?あ…はい……。」

やっとのことでのみ込んで答えた。

圭さんは私の体を離して　顔を上に向けた。

ドキドキ　ドキドキ

「ドキドキって…聞こえますか?

あまりに大きな音で　私は恥ずかしくなって圭さんに聞いてみた。

「聞こえるよ……。」至近距離で見つめ合う圭さんは

とても男らしい顔をしていた。

「心臓が壊れそうです……。」

やっとのことで圭さんにそう言うと　圭さんが

「俺もすごくドキドキしてるよ。」と言って私の手を持って厚く固い自分の胸に押し当てた。

ドキドキ・・・してる……。

「同じですね…。」そう言うと私はおかしくなって笑った。

「幸の笑顔　たくさん見たいな。
もっともっと笑い上手になれ……。」

「笑うこと…あんまりないから……。」

「じゃあ…俺のこと考えて…これからは笑え。」

「そんな笑うとか……。」圭さんの言ってることが今一つ分からない私はどまどった。

「幸はこれから俺の前では笑う事……。
俺がたくさん笑わせてやるから……。」

圭さんの高い鼻が近づいてきて　私の心臓はもう破裂寸前

柔らかい唇が触れて　私は目を閉じた。
それから圭さんのリードで甘くて熱いキスを経験した。
唇の湿った音が星空に響く……。

夢見てる？私……。

ハッと気づいて傷が痛む前に自分で傷を思いっきりつねった。

いた～～～い……

思わず唇を離しかけたら　また圭さんの唇につかまった。

ファーストキス……
星が見ているから…ちょっと恥ずかしいけど……
こんな甘いキス…してるの……いいでしょう？
と　星に言いたくなった。

私はしばらく圭さんとの夢のようなキスに酔いしれていた。

動き出す運命～四十五話～

夢のようだった。

圭さんはやっと私から唇を離した。

「ごめん…。驚いた？」

いつもの圭さんの笑顔にホッとした。

私は恥ずかしくて下を向いて

「はい。」声が震えていた。

「俺は来年卒業したら　こっちに戻ってくるから……

頑張って待ってろよ。」

「え・・・？」

「そんなまんまるい目して……」

そう言うと圭さんはまた私を抱きしめた。

幸せな気分だった。

温かくて安らいでこのまま眠ってしまいたくらいだった。

「俺が幸を幸せにするよ。」

「幸せ？」

「そうその名前に負けないように　たくさん幸せにするからもう少し待ってろ。」

嬉しかった。

「なんか夢見てるみたい……。
圭さんにそんなこと言われるなんて……。」

「ただ…俺たちのことは誰にも知られてはいけない。
凛や華子も勘がいいからな。
幸は細心の注意が必要だぞ。
俺も義兄さんとのこともあるし……」

そう言うと少し暗い表情になった。

「裏切りってやつでしょ・・・・。これって……。
俺は義兄さんに感謝している。だから本当はこんなことしてはいけないんだけどさ……。
恩返ししてから…そう思ってたけど……

幸が泣いてばかりいるから　たまらなくなった。」

裏切り……

そうだ裏切りだ
叔父は　私と圭さんが結ばれるなんてバカな結末を望むわけない。

「だから絶対これだけは……
大切にするためにも……わかるよな？」

「はい……」嬉しくて涙が出た。

「泣き虫だな。」

そう言うと私の目尻を指で優しく撫ぜた。

「幸のここはいつも赤くなってるんだよね。」

「え？そうですか？」

「涙で荒れてるんだぞ。
泣いてばっかりいるだろ？」

「はい……泣かない日はないかな……。」

「次に会う時はさ　ここ赤くしてるなよ。
心配になるから。」

圭さんの唇が目尻にたまった涙をとってくれた。

「可愛いよ　幸……。」

「え・・・だって私　全然お洒落してないし…
服だってこんなのばっかで…可愛いとこなんて一つもない……」

「違うよ。そんな飾りをしなくても
充分に幸は可愛いから……だから凛や華子は幸が気になるんだよ。
幸は気づいてないんだよ。
自分の魅力に……。」

圭さんの唇がまた私の唇に触れる。

「愛してる……。」

信じられない言葉だった……。
私も目を閉じてまた圭さんのキスに酔った。

たくさんキスをして　圭さんは
私に携帯の電話番号を教えてくれた。

「これは幸にしか教えてないから」

その秘密にワクワクした。

私だけの圭さん……

次の日　私が学校に行っている間に圭さんは
東京に戻って行った。

私に素敵な夢を与えて……

愛してる

その一言で私は　シンデレラになった気分だった。

動き出す運命〜四十六話〜

あの日　先に傷を自分でつねったからなのか
こんなに幸せな気分なのに不思議に傷は痛まなかった。
今までもしかしたらたまたま痛かったのかもしれない。

私は今までの人生の中で一番幸せだった。

「愛してる。」あの夜　圭さんとかわした約束を思い出すたび
胸がドキドキする。

あの圭さんが……
この家の誰からも愛される圭さんが
私を愛してるって言った。

凛や華子の陰湿ないじめは続いたけれど
私はそれをやりすごすことを覚えた。

あなたたちの大好きな圭さんはね…
私のことが好きなんだよ。
私と圭さんはキスをして　一年待ってろって言われたの。

優越感で一杯だった。
この二人がこの事実を知ったら

どんな悔しい顔するんだろうって…めちゃめちゃ楽しかった。

でも圭さんは絶対に気づかれるなって
そう言ったから　残念だけど教えてあげない……。

圭さんを手に入れたのは
この家に対する…叔父に対する復讐なのかもしれない。

圭さんの裏切りを知った時
叔父はどんな顔をするんだろう。
それならいっそ　派手に裏切ってやりたい……

私の心の底に淀んでいる復讐心が圭さんを手に入れたことによって
むくむくと大きくなってきていることを実感した。
純粋な気持ちで圭さんに恋をしてる。
これは真実だけど

でも…復讐心もここにはあるから。

学校帰り　公衆電話から電話をした。

お金がなくてニ　三分しかお話ができなかったけど

声を聞けるだけで充分だった。

「圭さんは　ちゃんと食べろよ。」

「勉強しとけよ〜」

「泣くなよ〜」といつも言う。

「約束したから泣かないよ。
早く会いたいな。」私が言うと

「バイト代ためてまたひょっこり行くかもよ。」と圭さんが笑う。

些細な時間だけど私にとっては幸せの絶頂だった。

それと同時に鏡の中の私は自分で見てもキレイになった気がした。

「幸ちゃん　なんだか急にキレイになったわね。
彼氏でもできた?」
シノさんとナオさんにひやかされたけど

「デートする時間なんてないですよ。」と言うと

「ほんとね。それにしても幸ちゃんはエライと思ってるよ。」
二人がそう言ってくれてすごくうれしかった。

「ありがとう。二人にそんなこと言われたら
頑張ろうって気になります。
私は嬉しくて涙が出そうになった。

「泣き虫ね～」そう笑いながらも二人も

「ヤダ～おばあさんたちは涙もろいんだから～」
そう言いながら
三人でわんやわんやと　泣き笑い。

私を認めてくれる人がいる……

それだけでも感動なのに・・・・・
あの空の向こう側に　私を愛してくれる人がいる

奇跡に感謝した。

早く会いたい・・・・・。

次に会う時はもっともっと幸を好きになってくれるように
自分磨きをしよう

高価な化粧水もいらない
今流行りのメイクやアクセサリーや洋服もいらない

今の私を磨くのには何が必要か
そんなことを考えてるだけでも幸せだった。

愛される自信〜四十七話〜

学校での勉強は今まで以上に集中した。
勉強家の圭さんに褒めてもらいたい一心。
家での手伝いは　今までイヤイヤだったけど
圭さんのためにいつか　何かをしてあげられる修行だと思った。
料理に関しては　もっと集中した

　美味しいものを圭さんのためだけに作る
そう考えると　この作業が一番楽しかった。

季節が輝いて見えた。
来年になったら　この季節も一緒に感じられる

春も夏も秋も冬も　圭さんと一緒なら
どんなに素敵なんだろう。

雪がハラハラ舞いだした。
大嫌いだった冬は　あの王子さまとの出会いから
神聖なものへと変わって行ったけど

圭さんを好きになったら
王子さまへの罪悪感も大きくなった。

いつか迎えに来てくれた時・・・・・
私が待ってなかったらガッカリするかな……

でも…今は圭さんのために輝きたい……。
王子さまの存在を静かに隠している。

いつものように学校帰りのことだった。
中学生のグループが向こう側から歩いてきた。

不良たちのようだった。
最近中学の評判がすごく悪くなって卒業生の私は胸を痛めた。
そこに通っている睦月を　叔父と叔母も心配していた。

次の瞬間私は目を疑った
そのかたまりの中心に　あの睦月がいたからだった。

え？睦月・・・・？

家でのひ弱な姿からは想像できない　睦月の姿に
私は茫然とした。
睦月も私に気がついた。
一瞬困ったような顔をしたけど　笑いかけて手を振った。

「今　帰り？」睦月が離しかけてきた。

「うん……。」最近帰りが少しだけ遅かったけど
睦月は笑顔で図書室にいたと言っていた。
体力作りのために学校も送りも車はいらないと言ってたけど……。

「睦月　誰？」血気さかんな中学生が私と睦月の関係に注目した。

「俺のいとこ。」睦月はそう答えた。

「K高じゃん～～すげ～優秀だな～～
それにめっちゃ可愛いやん！！」

可愛いって……

その言葉についつい嬉しくなったけど

「睦月　だいじょうぶなの？」

「何が？」

「叔母さん心配してたから……。」

「楽しいよ。すっごく楽しい。」睦月が笑顔でそう言った。

笑顔があまりに輝いていたので
私はそれ以上は何も言えなかった。

「遅くならないようにね。」

「会わなかったことでよろしく～」睦月はそう言うとまた歩き出した。

思いがけない睦月の一面を見て
私は驚いたのと同時に

これから何かが起こるような気がした。

そしてそれ以上に
睦月の変化をまだ知らない叔父が　これを知るのも楽しみになった。

家ではいつものようにひ弱な睦月を演じている。
目が合うと意味深に微笑んだ。
もちろん睦月は私がそのことを叔父に話すとは思ってないないし
そのつもりもなかったから

ひ弱だった睦月は少しづつ　男らしく変化していく。
そしてその中には叔父と同じ冷たさも育っている気がした。

半年の間で睦月は　まるで違う子のように劇的に変化を遂げた。
ひ弱の皮を脱ぎすてる日は近づいていた。

愛される自信〜四十八話〜

「おとうさま　圭くんの就職決まったんでしょ？もういいじゃない。教えてくれても……。」

華子は最近こればっか叔父に聞いている。

「まだだよ。圭にも一応覚悟っていうものがあるからな。」

叔父がはぐらかす。

「もうもったいつけないで早くこっちに帰ってこればいいのに。」

華子はそう言うと部屋に戻って行った。

「あなた…」叔母

「どうした？」

「圭はうちの会社で働いてもいいのかしら。」

「どうしてそんなことを言う？」

「このまま華子と離した方がいいんじゃないかしら。」

「ん……。」叔父も難しい顔をしていたけど

「圭には　こっちに来たらすぐにでも見合いをさせて
早めに落ち着かせようと思っているんだ。」

「お見合いね・・・・。
圭が納得するかしら。」

「ああ見えても圭は　そんな決まった女はいない様子だし……
おかしな虫がつくまえに俺がしっかりした奥さんを見つけて
圭の憧れのうちのような家庭を築かせる。
それでいいんじゃないかな。
うちの会社の将来には　圭は欠かせない。
そのために勉強してくれたんだ。」

「それはそうだけど……。」

「睦月もまだまだあんなんだし……
圭に肩腕になってもらわないと　安心して死ねないよ。
圭に経営をまかせたら　二人でゆっくり海外で暮らそう。」

「海外ね…すてきね…。」

叔母の声がすこし　明るくなった。

大切な圭さんが　私と好き合ってるなんて知ったら
この人たちどうなるかしら
華子だって…きっと気が狂うだろうな。

楽しみだわ

そこに睦月の正体も　ばれたら
この幸せ家族はいったいどうなるんだろう。

もうすぐ　もうすぐ

「幸　進路はどう考えているんだ。」

「あ・・・まだ何も考えてないですけど……」

「今からしっかり準備しておかないと。」

「はい。」

叔父は書斎に入って行った。

「睦月　遅いわね……。」暗い窓の外を見ながらため息をついた。

睦月はきっとあの仲間たちと
街を徘徊しているんだろう。

キレイな横顔だった。
少しだけ圭さんに似てる気がしたした。

叔母さん圭さんは　私のものです。

心の中でつぶやいた。

あなたは祝福してくれますか?

叔母はカーテンを閉めて　部屋を出て行った。

愛される自信〜四十九話〜

「付き合って下さい。」告白されたのはもうすぐ圭さんが
戻ってくる三学期の終わりだった。
初めての経験で頬が真っ赤になった。

告白してくれたのは同じクラスの後藤くん
学級代表をしている。
たまに話をしたりして　私も好感はもっていた。

「あ…ごめんなさい。私は付き合ったりとか…そういう時間は
全くなくて……それにまだそういう気が起らなくて……
すごく嬉しいんだけど　今まで通り
なんでもお話のできる友人でいたいんだけど……。」

言葉を選びながら慎重にそう話した。

「わかったよ。角谷のそういう誠実さ　俺好きなんだ。
だから友達でいられることだけでもうれしいんだけど
ちょっと俺贅沢を求めすぎた?」そう言うと頭をかいた。

「そんな贅沢なんて……
私なんて他の人たちから比べたら　地味だしつまんない女だから
後藤くんみたいな素敵な人にそんなこと言われて嬉しいよ。」

「もしさ　こうやって友人として付き合ってて俺のこと
もっと知りたいとか思ったら　そんときは付き合って。」

後藤くんも真っ赤になっていた。

「ありがとう。」私も心臓がドキドキした。

初めての経験だったからすごく刺激的だった。
圭さんにあとで教えてあげて少しやきもちやいてもらおう。

昨日の電話の時は　飲み会だって言って
周りで女の人の声も聞こえていたし
圭さん　素敵だから　すごく心配なんだもん……。

幸だって　心配しておかないとマズイよって少しお灸をすえておこう。

帰ったら　テストで帰りの早い　凛と華子がソファーに座っていた。

凛　来たのか

私はまた防御をしないといけないから少し気が重い。

二人は圭さんの話で盛り上がっていた。

「もうすぐ毎日あえるのね。」華子

「ずるいから　私は毎日ここに圭くんに会いに来るから。」

「どうぞ～ただお互い抜け駆けだけはやめようね。」

二人はとても楽しそうだった。

「圭くんがここから外に出て何年?」

「高校の時からだからもう十年近いよ。」

「早く帰って来ないかな　今までの分全部あまえてやろう。」

圭さんのことではライバルのなのか友達なのかよくわかんないけど
なんだかんだいってこの二人は仲がいいのか
それともやっぱり悪いのか……。

どんなに頑張ったて圭さんは私のものよ

そう言ってやりたかったけど
素敵な秘密は心の中にしまった。

もうすぐ圭さんが帰ってくる……

今か今かと　凛や華子と同じくらい…ううん…その百倍その日を待っていた。

電話をして聞いても圭さんは
笑って教えてくれなかった。

「圭くん…帰ってくるんだ……。」
後を通りかかった睦月がつぶやいた。

「そう・・・みたいね……。二人とも盛り上がってるから・・・」
わざとに興味なさげにかわした。

「圭くん　圭くん　って
ホント俺　圭くんがうんと年上でよかったよ。
これで年が近かったら比べられて　うんざりだ。」

いつも圭さんがきたら　べったりな睦月から意外な言葉

「睦月さんも…大人になったんだ。」

「なんで?」

「圭さんを複雑な気持ちで見てるから…。」

「幸はよく見てんな～。」

「私もうらやましいもん。
あんなに家族に愛されて…圭さんの存在は太陽だわ。」

「俺も大人には否定的だけど　圭さんだけはバイブルだから……。」

「睦月さん…タバコ臭いわよ……。」

「マジ？わかる？」

睦月はすっかり男らしくなった。
ひ弱だった細い体の線は　少しだけガッチリしたような気がする。
すっかり１７０を越えて
私を見下ろすようになって　声も太くなった。
そして少しづつ　家族の前で変化を見せるようになっていた。
その言動は　睦月を溺愛する叔母を悩ませ始めていた。

「体によくないんだから……。」

「もうさ…そういう壁に閉じ込められてんの…俺さ
イヤなんだ……。
死ぬ時はいつか必ず来るんだし
人生に後悔したくない……幸だってそう思うだろ。」

「うらやましいよ。それは睦月があたりまえにこうして家族の中で
主張できるからでしょ?私にはここに閉じ込められて生きるしか
今は何もできないから……。早くここから出て　そうやって
強く歩いてみたい……。」

「恨んでる?おやじたちのこと……。」

睦月の言葉になんて返そうか一瞬考えた。

「感謝……しなきゃだめでしょ。こうして学校で勉強させて
ご飯食べて　部屋や寝るところを確保してもらって……
それ以上求めさえしなければ…あきらめなくちゃね……。
ただ悲しいのは　叔父さまが父親にそっくりなこと……
全然違う人だってことかな……。」

「幸のおとうさんってどんな人だった?」

「もう記憶もあいまいだけどね…優しくて温かくていつも笑ってた。
三人でいろんなとこ行って　うん
きっと幸せを絵にかいたような家族だった。
だからここに来て叔父さまを見た時　父が生き返ったって
錯覚したけど…叔父さまが私を見る目は　冷たいんだよね。
何が合ったのか知らないけれど……。
それがこたえるかな～～」

「悪いな幸。」

「睦月さんが謝ることじゃないわ。
私の人生がこういう人生なんだから仕方ないわ。」

睦月がどんどんたくましくなって
この家族の中でこうして話ができるようになってきた。

「俺が・・・・・」

「ん？何？」

「あ…いやなんでもないよ。」

「人生楽しむのはいいけどあんまり心配かけない方がいいよ。」

「ほどほどに楽しむよ。
もう籠の鳥ではいたくないんだ。」

睦月の言葉が心に残った。

籠の鳥・・・・・・

睦月がうらやましいと思った。

「そうだ……最近さ　幸　めっちゃキレイに見えるんだけど？
俺の気のせいか？」

睦月の言葉に思わず頬が緩んだ。

愛されてるから……

「な・・・こと言ったって何もないよ～でもありがと…
私だって女だからね。」

私はわざとに明るく流した。

愛される自信〜五十一話〜

いつものように学校を終えて急いで校門を飛び出すと

「幸!!」声がして私は慌てて辺りを見回した。

「ここだよ。」

黒い小さい車が停まっている。

圭さん?

助手席の窓から手だけ見えたから恐る恐る近づいてみると

「ひさしぶり〜」と笑う圭さんがいた。

「あ〜〜!!どうしたんですか!?」うれしくて大きな声を出すと

「元気そうだな〜」と言った。

あまりに突然で私はすっかり舞い上がっていた。

圭さんは運転席から降りてきて

助手席のドアを開けて

「どうぞ。お姫様。」と笑った。

「キャ～～」私は興奮がなかなか冷めずに涙まで出てきた。
車が動きだして　ハンカチで涙を拭いてる私を笑う圭さん。

「そんなにうれしかった?」

「はい…だってすっごく突然なんだもの……。
それも学校に来てくれるなんて……感動しました～」

「悲しくても泣いて　嬉しくても泣いて　それならいつになっても
そこの赤いのとれないじゃん。」

信号が停まったとこで圭さんはいたずらっぽく
私の目尻にキスをした。

「こ…こら～～ぁ前しっかり見てないと
捕まりますから～～」

「お・・・いけねーいけねー」

圭さんはゲラゲラ笑って前を向いた。

嬉しい・・・こんなに会えたことが嬉しいなんて……

「あ…でも私家に帰らないと……。」

「大事なレポートを提出しないといけなくて
調べ物をして六時くらいまで帰るって電話しろ。」

「え?だってウソついたら……。」

「今日はそうしろ。」

「はい・・・・・。」

「公衆電話ないかな～～～」圭さんがつぶやいた。

「いつも圭さんに電話するところこの近くです。」

貴重な公衆電話の前に車を停めて

「女優しろよ～」と笑った。

嘘つくのはドキドキだけど・・・こんな嬉しい嘘をつくのは最高に楽しかった。

シノさんごめんね……

シノさんは快く快諾してくれた。

「でも遅くならないでね。」

「はい。六時までには帰ります。」

そう言って電話をきった。

「どうだった？しっかり演技したか？」

「シノさんに悪いな……ってしっかり演技しました。」

解放された気分だった。

ここに来て初めてだった。

外でこうしてゆっくりできるのは……

「じゃあ　行くか～」

「行くって？」嬉しくて私はたまらない。

「俺の城〜〜」

「城？？」

圭さんの横顔を見ていたらこのままずっと一緒にいたいそう思った。

愛される自信〜五十二話〜

「はい〜ここだよ。俺の城〜」

そう言うと圭さんは運転席を降りて　助手席のドアを開けてくれた。

「まいりましょうか　お姫様。」

車を出て見上げると七階建てのマンション

「え?俺の城って?」さっきから何度も質問してんのに笑ってはぐらかされていた。

「質問は城に入ってから答えるから。」

そう言うと私に鍵を渡した。

「これは　幸が持っていて。
これからここに入るやり方を教えるからちゃんと聞いとけよ。」

圭さんの話を真剣に聞きながら
私はワクワクしていた。

「そんでここを７１０と押します。押してみろ～」

ワクワク

エレベーターに乗って　７１０号室に鍵をさして回した。

「ようこそ～」

圭さんが先にホールに上がって私は慌てて靴を脱いだ。

体がふわ～と宙に舞って圭さんが私を抱き上げた。

ホールを進んで行くとドアがあってそこを開けたら一面に札幌の街が見えた。

「うわ～～すごい～～～」

私は圭さんの体から身を乗り出して叫んだ。

「すごいだろ?この窓全部　幸のものだよ。」

「え?」

「この部屋にあるもの全部　俺と幸のもの。」

「うれしい……」涙で窓の外がにじんだ。

圭さんはとりあえず最初は板垣の家に引越してくるんだけど
この城は落ち着いたらこっちに越してくるために用意した。
そして一人になりたい時や
私と二人になりたい時

そして私だけのお城として用意してくれたと言った。

その話を聞きながら私は感動で胸が一杯だった。

「バイト死にもの狂いでやったんだぞ～～～
幸は信じてなかったみたいだけど　ほんと誰ともあんまり遊ばず
とにかくバイトした。
だけど不思議に辛くなかったのは　きっと
幸がこんな顔して喜んでくれるって信じてたから……。」

そう言うと私を抱きしめて
長いキスをしてくれた。

私は圭さんの熱い唇を受けながら　傷を何度も自分で

つねってみた。

自分で与える痛みなら　前みたいに何も起らないから……

「どうした?」唇を離して　圭さんが私を見た。

「ううん〜〜」

今度は自分から圭さんを求めた。

「あ・・・幸　そんなことする子じゃなかったぞ!?」

「だって…幸　学校の子に告白されたんだもん〜」

「なに?どいつだ?」圭さんは笑った。

「やきもちやいてくれないの?」私は圭さんの様子に少しガッカリした。

「幸は俺のことしか見てないから……」

圭さんはそう言うと私を強く抱きしめた。

「憎たらしい～～幸のことはなんでもわかるって悔しいんだけど……」

「俺のことは幸にはわかんないか？」

「……やっぱり心配だもん…圭さん素敵すぎるから……」

「愛情の注ぎが足りないのかな？
ではこれからお仕置きをしないといけないな。」

ドキドキ・・・ドキドキ・・・

私は頬が燃えそうだった。
圭さんは私をまた抱き上げて違う部屋のドアを開けた。

その部屋にも少し明かりのつきだした街の風景が広がっていた。
そしてその中央にある少し大きめのベットが視界に入った時
私の心臓はドキドキからバクバクに変わった。

圭さんが静かに私をそのベットに寝かせた。
いつもの優しい顔にホッとした。

「ずっと・・・ずっとこの時を待ってた・・・・。」

私は少し潤んだ視界で圭さんを見つめた。

「幸は俺が絶対に　幸せにする…そう誓ったんだ……。」

うれしくて涙が流れ落ちた。

「幸も……圭さんに幸せにしてもらいたい……。」

これからここで何が始まるのかは　なんとなく想像はできたけど
未知の世界だった。

「愛してるよ。
俺の愛にもっと……自信を持っていいんだよ。
不安にさせるならそれは俺の表現不足だよな……って
ほんとこれ　精一杯だから……。
大切にする……。いろんなもの裏切っても俺の人生に幸しか…いら

ない……。」

私は目をつぶって

「私も圭さんとずっと一緒にいたい…」そう言った。

部屋が薄暗くなって窓の外の夜景が輝きだした時　私は圭さんの腕の中で裸のまま抱きしめられていた。

私は圭さんに　女にしてもらった。

「愛してるよ……。」圭さんの言葉に

「このまま死んでもいい……。」私はそう言って泣いた。

愛される自信〜五十三話〜

圭さんが　私の太ももの傷をどう見たのか少し心配だった。
気のせいか傷に圭さんが　何度かキスをした気がしたから……。

「足の傷・・・見た？」

真っ赤に肌から浮き上がった爪のあとは
数本のミミズバレとなって私の太ももを這っていた。

「あ…うん…なんかの傷かな。」圭さんが少し慌てたように言った。

「なんか不思議なの……。
でも…話すと罰が下りそうだから言わない……。」

「そっか〜」

圭さんが私をまた強く抱きしめた。

「圭さん…帰んないと……。」

タイムリミット一時間前

「帰りたくないけど……帰んないとね……。」

「ごめんな。俺がもっと大人だったらこのまま幸を
どこにもやらないんだけど……。
それまで俺たちは　この時間を守るためにいろんな裏切りを
していかないといけない。
わかるよな？」

「はい……。」

「とりあえず明日からそっちに帰るから……
でも向こうに行ったら　俺はそう簡単には幸を抱きしめたりはしない。
前のように屋上で二人で会うのも危険だ。
わかるよね。」

「はい。」

「その代わり　ここで会う時はその百倍抱きしめるから……。
我慢しような・・・・。
俺がもう少し立派な大人になって幸をさらっていく
準備ができるまで…この秘密を大切にするために
お互い慎重にやっていこう。」

そのつもりだった。
圭さんが与えてくれる私への愛は絶対誰にも邪魔されたくない。
この城は私に与えられた幸せの空間……
そしてこの胸は　私の幸せの場所。
それを守るためならどんな女優にでもなれる。

「幸　主演女優賞とるくらい頑張るよ。」

「あはは・・・」圭さんが大爆笑した。
それから私たちは別れを惜しむようにもう一度キスをした。

「いつでもおいで。
怪しまれないようにな。」

「はい！！」

圭さんと私のお城は　私の学校の裏側の高台にあった。
怪しまれずに私が来れるようにとそれから美しい景色の見える部屋を
探すのに苦労したと笑った。
地下鉄駅まで車で送ってくれた。

「気をつけて。」

「はい。今日は夢のようでした。」

圭さんが助手席から出ようとした私の手をつかんで
思いっきり握ったから

「痛い～～」と声をあげた。

「バカだな～夢なんかじゃないだろ?」

圭さんがウインクをしたから　私はまた胸がキュンとなる。

「明日も行っていい?」

「いいよ。」

「学校終わったらすぐ行く!!明日は午前授業だから……
あ～神様に感謝しなきゃ～～なんていいタイミング～～」

「じゃあ昼メシ一緒に食べよう。」

「私が作る！！」

「じゃあ　後で一緒に買い物行こうか。」

「キャ～なんて素敵なの～～」私は大喜び。

「じゃあ明日な～～早く行け。
他の男に声かけられても絶対　ふり向くなよ。」

圭さんの笑顔に見送られて　現実の入り口へと帰って行く……。
だけど今日は辛いことなんてなかった。

この短い時間での出来事は私にとっての
一生分の幸せな時間だったから……。

私の・・・王子さまは…圭さんなのかもしれない……

上手な女優になって…圭さんとの愛を絶対に守って行こうと強く決意した。

秘密〜五十四話〜

圭さんが帰ってきて　板垣家は大変な活気だった。
凛は毎日のようにやってきては　娘を迎えに父親洋一までもが
毎晩ギリギリまで家に居座った。

シノさんやナオさんが帰ってからは私だけになるから　最悪だった。

私は自分の時間がなかなかつくれなくて
キッチンのカウンターで勉強や宿題をしていた。

圭さんは目も合わせてくれなかった。
ここでは事務的に私に接する圭さんは
二人っきりになって私が

「あのとき　こうしたでしょう〜」と執念深くつめよると

「ごめんね」　その分キスをしてくれる。

圭さんのお城に私の洋服が増えた。
最初は　近くのスーパーで圭さんがワンピースとボレロをかってくれてて

午前授業で飛んで行った日
私はそのワンピースに着替えて髪の毛をおろして
圭さんと手をつないでスーパーで買いものをした。

「新婚さんみたいだね。」嬉しくて嬉しくて
天にも昇る気持ちだった。

愛する人のためだけにつくるささやかな料理
そして反応をたしかめながら二人で食べる食事

わいのわいのと一緒に片づけて
私はソファーに圭さんをおいやって掃除をダッシュでやった。

「いいよ～そんなこと
俺が休みの時　時間作ってくるからさ、
それよりさ…おいで……。」圭さんがむくれてる。

むくれてる顔が可愛い。
わざとに反応を楽しんで圭さんの手から逃れた。

「怒ったからな～」そう言って圭さんは寝室に入って行った。

子供みたい…

そう思って吹き出した。

あんなに落ち着いた様子の圭さんが　子供みたいに駄々をこねたり
むくれたり

少ししてからベットに近づくと

「やっときたか～～」

「キャ～～」

私はあっという間にベットに引き込まれて圭さんのお仕置きを受ける。

「圭さんのガキ……。」

「何よ～～許さん～～」

圭さんによってどんどん私は幸せな女になっていく
心も愛で満たされて
体も圭さんの唇や指・・・そして舌で未知への扉を開いて行く。

呪いの傷にキスをしてくれる。
優しい指が傷を撫ぜてくれる。

私の　呪い　を知っているかのように・・・・。

あんなに激しく愛してくれた圭さんは板垣家では　全く違う人になる。
圭さんの方が
主演男優賞のようだった。

ベットに入ると隣の部屋から二人で決めた暗号でささやきあう。

コンコンが五つ　あいしてる

どちらかが眠りにつくまで静かに愛してるを語り合う。

コンコンコンコンコンコン

秘密の時間は私を　どんどん変えて行く。

幸せになれない幸から　幸せな幸へと……。
圭さんのためにもっともっとキレイになりたい……。
もっともっと輝きたい。

私の愛される自信に拍車がかかって
幸せな秘密がどんどん増えて行く。

圭さんが板垣の会社に就職して　なかなか時間がとれなくても
私は毎日お城に通う。

そこで圭さんを一杯感じる。
白いコピー用紙にたくさんの愛を書いて　テーブルの上に置いて帰
ってくると
必ず圭さんからのお返事が書かれている。

お城から携帯に電話をして　外回りをしていたら
圭さんは必ず帰ってきてくれた。

短い時間で忙しく愛を語り合い　抱きしめ合う。

まるで魔法にかかったように私と圭さんは時間を惜しんで愛し合う。

「愛してる…」

その魔法は私を美しくしてくれる気がする。

「俺のもの……。」幸せな愛の言葉に包まれて私は幸せの絶頂に立
っていた。

秘密～五十五話～

甘い秘密は私の体も心も溢れるくらい増えて行く。
どこにもいかなくても　二人で一緒にいたら楽しかった。
板垣の家で触れあえなくても愛してるの合図だけでも充分満足だったし
それ以上に今度二人っきりになれる時間を想えば穏やかに過ごせた。

「大介　すごい評判だぞ。圭がいい仕事をするって。」
凛の父親洋一が　また親ばかに娘を迎えにきていた。

「そうらしいな。大口の仕事をとって来たとか。
何人もアタックしてたのになかなか動いてくれなかったから…
たいしたものだな。
アイツの知識がものを言ったらしい。」
叔父は嬉しそうにそう言った。

「考えておいてくれ。圭をうちの凛の婿に。
華子がどんなに好きでも　圭とは結婚できるわけじゃなし……
何なら華子を留学でもさせたらいいさ。
離れたらあきらめるかもしれないぞ。
一つ屋根の下に圭をおいておいたってかえって華子が可哀そうだ。」

「凛はまずいだろ。」

叔父が苦笑いをすると

「圭にここをまかせるつもりなんだし　親族と結婚させた方が
圭もやりやすいだろうさ。」

洋一は卑屈に笑った。

私は　はらわたが煮えくりかえっていた。

圭さんは私のものだし!!

そう叫んでやれたらどんなにいいだろう。

「悪い虫がつくまえに　考えておいてくれ。
静さんだって安心だろ?」

「まだ圭は……働いたばかりだし…もう少したたないと
家族を養う力なんてないわ。
その時凛ちゃんがまだ圭を好きで
圭も凛ちゃんがいいって言ったら考えたらいいでしょう?
まだまだ　圭は子供だから。」

叔母は目を細めた。

「そんなにおちついてると悪い女に持って行かれるぞ。」

一瞬偶然に私と洋一の目が合った。
私は心臓が止まりそうになった。

「それに・・・幸だって大学に入れるのか？
幸だってとりあえずは板垣の親族になるんだから……
どこかの会社の御曹司と見合いでもさせたらいいさ。
器量はいいから誰でもすぐオッケーだろ。」

いやらしく私を見る視線に鳥肌が立った。

「幸はあれ・・・男いないのか？
なんか最近怪しい魅力が出てきてるぞ。」

コソコソと叔父に言ったけど　丸聞こえだ。

怒りで頭が爆発しそうになった。
そんな目で私を見るな　けがらわしい・・・・。
それを言うならおまえが　凛の婿にと思ってる圭に私は愛されているんだ。

仕事を終わらせて

「おやすみなさい。」と叔父と叔母に頭をさげた。

「その目つきがそっくりだな父親に……。
雌豹みたいで…怖い怖い…。」
洋一が大げさにソファーに倒れ込んだ。

娘がバカなら父親もかい…

「おまえら双子だけど顔は似てたけど…ほんと全然違うタイプだったよな。
番犬と狼くらい違ったけど……
あいつはホント狼すぎて　叔父さんに嫌われたんだよな。」

「いい加減にしろ。」
叔父が洋一を遮った。

「おやすみなさい……。」叔母が優しく微笑んだ。

笑い顔が圭さんに似ていた。

その笑顔に少し癒された。

今度　圭さんに会った時　言いつけてやる。
あの親子の陰謀を……

いつかきっと復讐してやる……。
板垣家に……私の心に宿る黒い心がフツフツと芽生え始めている。

秘密～五十六話～

「幸は進路どうするんだ？」圭さんが私を抱きしめながら聞いた。
正直すごく悩んでいた。

「周りはあたりまえに大学に進むけど……私はまだ決まらない……。
板垣家から出たいけど…出るだけの準備はできてないし…高卒で就職は
専門の学校出てるわけじゃないから難しいって……。」

私が圭さんに愛されるようになって
二人の後で季節が流れて……私は高校三年になっていた。
周りは進路を決定して　それにむけて準備を始めていて
そんな中でも決まらない私に　担任が気をもんでいた。

「角谷は国立目指せばいいんじゃないか？
叔父さんの世話になりたくないなら　奨学金とかいろんな手助けはあるんだから心配しないで進学しろ。
言いづらかったら俺が叔父さんにお願いしてやるから。」

「いえ叔父は進みたいなら進みなさいって言ってくれてます。」

「それなら話は早いだろうが
何をそんなに悩んでるんだ？」

先生がそういうのも仕方がない。
好きなところに進学しなさい　大学までは責任持つから
そう言われてはいるけど　その額はあまりに大きい。
これ以上板垣の庇護を受けたくない。

「俺にもっと力があれば・・・・・・。」

圭さんがつぶやいた。

「力？たくさんあるよ。
幸をこんなに幸せな気持ちにさせてくれるんだもん。
これ以上求めたら……」

次の言葉を言いかけて　口をとじた。

罰を受ける

傷の存在を思い出してドキッとした。
圭さんとこうなっても傷は痛まない。
そのうち傷を見ないと忘れてしまいそうになった。
もしかしてあの思い出も

ママ達が言ったように私の思い違いだったのかもしれないし……

「ん？」圭さんが覗き込んだ。

「幸せすぎて怖い……。」

私は圭さんに抱きついた。

この生活でもう　圭さんを失ったら生きていけない……。

「圭さんの体に入りこんで一生一緒にいられたら
どんなに幸せなんだろう。」

「俺も全てを捨てて…幸を奪って逃げれれば……って……。
だけど受けた恩があまりに大きすぎて……
俺ってさ…姉さんとは父親が違うんだけど……
かあさんが男好きだったみたいで　だから俺と姉さんは年も離れているんだ。」

圭さんが語りだしたのは小さい頃の話だった。

圭さんの父親は誰かわからないらしい。
叔母がそのことを多くは語らずに　そのうち体を壊した母親が死んで
叔母はまだ赤ちゃんだった圭と二人で生きてきたらしい。

「だから姉さんには頭あがんないんだ。
恩着せがましいことはないんだけどほんと……世話になった。
それから・・・義兄さん……そして……。」
言いかけて圭さんは　話をやめた。

「や～～め た～～昔の話だ～～～。
とにかく仕事頑張って　義兄さんに恩返しして……
それから俺は自由になる。」

「自由？」

「そう～自分のしたいことやりたいこと
ほしいもの……それに囲まれて俺らしく生きて行きたい。
そんときは幸も一緒に来てくれるか？」

「もちろん。絶対に一緒にいる。」

「約束だぞ。」

「うん。」

幸せな約束だった。

「そういえば　睦月　またなんかやらかしたのか？
姉さん　泣いてたから。」

睦月は高校生になったけど勉強もせずに遊んでばかりいるようになった。
この間は　叔母にこづかいをくれとせまっていたのを
偶然見かけたけど　見ないふりをして立ち去った。

「最近　俺のことも避けるしな。
話もできないんだよね。どうしちゃったんだか……
そういう年頃でもあるからあんまり干渉するとなお　反抗するからさ、
男ってむずかしいんだぞ。」

「圭さんもあったの？」

「めちゃめちゃあったけど…世話になった人を悲しませられないから…
だから少し離れたところで勉強したんだよ。」

「そうなんだ。」

「幸……もう少し待っててね。
そしたら二人でどこかに逃げよう。」

そう言うと圭さんはまた私を愛し始める。

私の甘い吐息が城に充満して・・・・二人は秘密を重ねて行く。

秘密〜五十七話〜

華子と凛はエスカレーター式の大学へなんとか推薦枠で行けると大騒ぎ。
その日も圭さんを待って
二人が小競り合いを始めていた。

どんなに争っても圭さんは私のもの

優越感が広がる。

叔父が帰ってきて　凛が詰め寄った。

「叔父さま　パパから聞いたと思うけど　大学卒業するまで四年あるからその間は圭くん修行させて　卒業したらすぐに結婚するから。
叔母さまもいいでしょう？
今日　圭くん帰ってきたらその話するから。」

これ見よがしに凛は　華子を威嚇するように言った。

めずらしく睦月がキッチンから入ってきて

「今日のメシはなんだ？」

「今日は生姜焼き。早く手洗って。」

睦月はなぜか私には　よく話しかけてくる。

「部屋に持ってきてよ。」

「ダメよ。ちゃんと座って食べなさい。」

「またうるさくなりそうだしな～
あいつらいつまでああやってくっだらねーことで対抗しあってんだか・・・。」

その間も凛と華子の言い合いが聞こえる。

ほんと・・・バカみたい

私が料理をキッチンに運び出す頃　また二人は激しくなった。

「おとうさま!!」華子が叔父に言い寄った。

「そんな話みとめてないわよね。」

「圭が決めることだから私が口を入れることじゃない。
おまえたちはそんなことはいいから少し勉強しなさい。
成績が悪すぎる。」」

「じゃあ睦月はどうなのよ。」

席についた睦月に矛先な向いた。

「俺？勘弁してよ。そういうくだらねー話はさ　二人だけでやれよ。
そんなに熱くなったって圭くんは絶対　二人は選ばないからさ。
ねえちゃんは最初からムリ～～
凛は絶対ムッリ～～～」

すごくバカにした様子がおかしくて私はついつい
食器をだしながら笑ってしまった。

「なに？」凛の目が光った。

「あ…睦月の言い方がおかしかったから……。」

睦月が私を見て

「どうせ相手になってされないのに　ここで争ってバカみたいだよ

な～幸～
俺が三人見てどうするか考えるなら絶対幸さな。
肌はきれいだし　スタイルはいいし～
ここでずっと幸を見かけていたら圭くんだって幸だろう？」

睦月～～もうやめてよ～～
笑えない冗談・・・・・・。

私が運んできた生姜焼きを入れたさらを華子が奪い取って
睦月にぶっかけた。

「あっち～～」
シノさんが焼いたばっかだもん……

睦月の顔を直撃した。

私は慌ててキッチンにあったおしぼりで　睦月の顔をおさえた。

「何すんだよてめー頭おかしいんだよ！！
だいたいさ血のつながった叔父さんにそんなに熱くなってる自体おかしいんだよ！！」

「やめなさい！！」叔父が一喝したけどもう止まらなかった。

華子は気が狂ったように食卓にのった料理を手当たり次第に睦月に投げかけた。

「華子！！」叔父や叔母が叫んでも華子は興奮状態だった。

熱い味噌汁に手をかけた。

叔父は熱い味噌汁を好むから　私は危険を察した。

睦月は一瞬違う方を向いていたから

「危ない！！」そう言って睦月をかばった。

背中に熱い味噌汁がかかって　私は

「キャー」と叫んだ。

「幸！？」そのまま睦月にしがみついてその痛みにのたうち回った。

そのとき私の体が宙に浮いて　浴室に入れられて

「我慢しろ。」

シャワーの水が背中向けてかけられた。

「ひゃ～～冷たい～～」私はガタガタと震えた。

冷たい水は私の全身の体温を奪って行くようだった。

「助けて…」

「ごめんな…幸　我慢しろよ。」

見上げるとそこに圭さんが立っていた。

秘密～五十八話～

「痛むか？」

処置が終わった私のベットに圭さんが近づいてきた。

あのあとみんなを巻き込んで
圭さんは私を抱き上げて　病院に飛び込んだんだ。

車の中で圭さんはずっと

「ごめんな……ごめんな」と繰り返していた。

なるべく心配かけたくないから
私は無理にニッコリ笑った。

「うん……ヒリヒリするよ……。寒いし……。」

「ごめんな……。」

「圭さんのおかげでね…そんなに大したことにはならなかったから
……

服の上から…お水かけてくれたのがよかったって。」

うつぶせ寝の私はしばらく入院することになった。

応急処置がよかったおかげで大事にはいたらなかったと
お医者さんが圭さんを褒めていた。

本当は入院までしなくてもよかったんだけど圭さんが
「せっかくだから　ゆっくり休め。
帰ったってまた　寝てられないだろう?俺は毎日来るから。」

「個室だよ。大丈夫?」

「いいさ。それにこうして二人になれるだろ?」

うつぶせ寝の私の頬にキスをした。

「傷は少し残ってしまうかもしれないって……。」

傷なんてなれてるもん

「ごめん…ほんと……。」

圭さんの目が潤んできた。

「泣かないでって・・・大丈夫だから……
うつぶせ　ちょっとつらいだけだもん……。」

あのあと圭さんは　華子と凛に帰って来てから話そうと言った。

何を話すんだろう・・・・・。

「少しここでゆっくり寝て…何も考えるな。」

「はい。退院したらいっぱいご褒美くれる?」

それまで心配そうな顔だった圭さんが吹き出した。

「もちろん。もういらないお腹一杯って幸が泣くまで
ご褒美あげるから。」

「なんか圭さん…やらしい顔ですよ。」

「何〜?失礼な!!
とにかく今日は帰るけど　明日仕事中でもくるからいい子にしてろよ。」

うつぶせ寝の私の唇を指ではじいた。

「なんか赤ちゃんの時みたいだな。」

「え?赤ちゃん?」私が聞き返すと

「いや〜うまそうなたらこみたいだな〜って思ってさ。」

「失礼な〜〜だって口寄るでしょ。
もう〜〜意地悪なんだから。」

顔を枕に押し付けた。

「ごめん〜〜ほら俺帰るからさ。
顔見せて。」圭さんの優しい声

渋々　顔をまた圭さんの方に向けると　ひざまついてた圭さんの顔が近づいてきた。

チュッ……

「俺の夢・・・一杯見ろよ。」

圭さんはそういうと病室を出て行った。
彼のいなくなった空間は……色のない世界のように寂しかった。

秘密～五十九話～

次の日　病室に現れたのは　睦月だった。

「よ・・・」

「あら……」

さすがにうつぶせがつらくなって体を起こしたところだった。

「大丈夫か？」

「うん…体勢がちょっとキツイだけ…
お見舞いきてくれたんだ。うれしいな～。」

「俺をかばったからさ・・・
幸がかばってくれなかったら　顔やられてたよ。
サンキューな……。肉ついただけでも
こんなにひりひりしてんのにさ……痛いだろ？」

「だいぶいいよ。
顔はまずいって瞬間的に思ったの。

睦月の顔　かっこいいからね…生姜焼きでも私ビックリした。」

「華子頭おかしいんだ。あいつ圭くんのことだったら
殺すよ　マジで……。頭いかれてる。」

殺す・・・・

なんかわかる気がして怖くなった。

「幸と圭さんって……」言いかけて睦月はやめた。

「何?気持ち悪いよ。」

「まさかさ・・・。なんか交流あったりすんの?」

「ないよ。」冷や汗が出てる。

「圭くんがさ～～すんごく慌ててたから
あんな圭くん俺　初めてだった・・・・・・。
交流ないなら…圭くん　もしかしたらさ幸のこと……。」

「そんなことあるわけないじゃん！！」

思わず大声を出した。

「華子や凛に何かされたくないよ……怖いもん…」

大げさに答える。

秘密がばれたら大変だから

私は必死になる。

「殺されるかもよ・・・・。」睦月が笑った。

「なんか言ってた?私が病院行ってから……。」

こわごわ聞いた。

「華子と凛は　圭くんに叱られるとか言って騒いでた。」

「叔父さんや叔母さんは?」

「何もこれと言って言わなかったかな。
その代わり　帰ってきた圭くんが…出て行くって言いだして…
パニック状態だったよ。圭くんがあんなに怒ったりするなんて
昔一回だけ…見たな。
あの後　圭くん　地方の高校に進学先変えちゃったんだ。
だからあのバカ二人がパニックだよ。
出て行くって言うんだから。」

睦月の報告に胸が痛くなった。

ちょっと怪しまれてるかもしれない私たちの関係

それから圭さんがとうとう
事を起こし始めたという予感。

「大変なことになってるのね。」
私はつとめて無関心なふりをした。

秘密が今　ばれるわけにはいかないから……
少しづつ　私が板垣家から解放される日が近づいているような気が
した。

それはいろんな危険が入り混じった……
危ない橋のようにも感じた。

「幸もやっぱ圭くん　カッコいいとか思う？」
睦月が探ってるような気がした。

「…だってずっと年上だし…そんなことになったら
華子や凛にもっといじめられるし
それに…学校に好きな人いるから……。」

必死なごまかし

「へ～～好きな人いるんだ～～」

「あたりまえよ。高校生なんだから。」

「だから最近　幸　またキレイになったんだ……。」

睦月がつぶやいた。
私は　もっと上手な女優にならないと…と危険を察していた。

秘密～六十話～

「圭さん……」
面会ギリギリで飛び込んできた圭に声をかけた。

「今日　睦月が来たんだけど昨日…出て行くって…言ったって…。」

「睦月来てくれたんだ。
うん　いい機会だからさ。もうほんとウンザリなんだ。
可愛いよ二人とも　ちっこい時からずっとなついてくれていて
幸には　意地の悪いこともするけど
叔父としてはやっぱ可愛い姪っ子なんだ。華子はもちろん　凛だって
俺にはとても女には思えないし…ねえさんにも言われてたんだ。
華子のためにならないって……。
ほんとは大学も地方を狙わせたかったけど　華子はガンとしてひか
ないし
俺もあっちの家で暮らしたいなって……。」

「でも…そうしたら会えないじゃない…。」

「どうして。今度はいつでも会えるじゃん。」

「そうだけど…でも板垣の家だったら遅くなったって会えるし

向こうに行ったら仕事が遅くなったら全然会えないもん…。」

私は悲しくなってきた。

「一緒に暮らすための下準備だよ。
幸が卒業したら義兄さんやねえさんに話そうと思ってる。
理解はしてくれないだろうけどね。」

「してくれなかったら?」

「いいよ。してくれないって思ってるよ。
後はゆっくりわかってもらおう。
いつかきっと…わかってくれるさ。」

そうかな…そんな簡単なもんじゃない…と思うけど

「そんな不安そうな顔すんなよ。」

圭さんが抱きしめてくれた。

「あ・・・痛い・・・。」

背中の傷に触れて　声をあげた。

「ごめん　ごめん～～～
そうだった背中……痛かったか？ごめんな。」
圭さんが私を覗き込んだ。

「華子や凛…なんて言ってた？」

「そりゃ…ビービーうるさいよ。
引越し先教えろとか……でも絶対教えないって言ったんだ。
しばらくうるさいだろうけど……
週に一度だけ板垣の家に行くって約束させられたから
幸にも会えるよ。」

「私たちのこと気づかれてない？
睦月には言われたの。圭さんと交流あるのかって……
ビックリしたもん……。」

「睦月は勘がいいからな……。
気をつけないと・・・…。」

「圭さんが慌ててて…なんか変だなって思ったんだって……。
ビックリした？」

「ビックリしたよ。
可愛いあいつらだけどさ……幸を傷つけることは許せない。」

私は恥ずかしくなって圭さんのキレイな指を掴んだ。

「好き…大好き…圭さんとずっと一緒にいられたら…
どんなに幸せなんだろって……。」

「早く傷治せ。そしたら幸が不安がらないように
抱きしめてやるから……。」

「うん・・・幸せで・・・・幸せすぎて・・・
不安になっちゃうの……。」

「俺の心は幸しかないよ。」

ありがとう…ありがとう私の王子さま……

心が熱くなった……。

秘密～六十一話目～

結局三日間の入院で見舞にきたのは
圭さんとシノさんナオさん以外で　板垣家からは
睦月一人で

ケガをさせた当事者も親も顔を出さなかった。

ふざけんな・・・・

まだしばらく痕が残るから日に焼かないようにと言われたけど
海にいくわけでもないからそのうち治るだろう。

太ももの傷といい　背中のやけどといい
私の体には何か所そんないわくつきの傷跡が残るんだろう。

「まだ本調子じゃないから　今週一杯はやすんでいなさいって
旦那さまから言われてるから
食事は運んであげるから　ゆっくり休みなさい。
ほんとにひどい目にあったわね。」シノさんがためいきをつく。

「華子さんはかなり異常だわよね。
圭さんと結ばれないという決定的なことを認めたくないから
凛さんにも異常にからんでるしね。」

退院の荷物をつめながらナオさんがあきれた様子で言った。

「圭さんがね　ものすごく怒って出て行くことになったのよ。
その方がいいわ。
華子さんの気違いっぷりと　凛さんの毎日来るのは勘弁よ。」

私は思わず笑ってしまった。

「でも圭さんのおこり方はんぱじゃなかったから
華子さんや凛さんが不審がってる気がするから　幸ちゃんも
いい迷惑だと思うけど気をつけてね。」」

「え・・・そうなんですか・・・？」

不安でぞっとした。
私たちの秘密はぜったいにばれてはいけない・・・・・。
作戦決行日まで

慎重にしなくちゃ・・・・そう思った。

板垣家に戻ってから　少ししてノックが聞こえた。

「はい・・・・」シノさんはさっき　ご飯持ってきてくれたし・・・

ドアが開いて入ってきたのは叔母だった。

「ごめんなさいね。お見舞いにも行かないで……。」

「いいえ…。」胸が緊張で震えている。

「痛みは？」

「ずいぶんよくなりました。」

「うちの子供たちの争いで　幸には迷惑かけてしまって……。」

叔母は必要以外は絶対声をかけてこないけど
やっぱりどことなく圭さんに似ている。

おだやかなキレイな人だと思う。
あの冷酷な叔父がこの人の前では別人に変わってしまうんだから嘘みたい……。

「幸はこれからどうするの？もう進路考えたの？」

「あ・・・まだどうしようか……。」

「大学行きたいなら遠慮はいらないわよ。
お嫁さんに出すまでここにいてもらって構わないから……。」

お嫁さん……

「ありがとうございます……。」

「幸には夫がいい旦那さまを見つけてくれるから……安心してなさいね。」

そんな・・・遠慮するわ

「いえ…それは自分の好きな人と一緒に生きて行きたいし
別に叔父さまのお世話になるつもりはないから……」

思わず拒否していた。

「好きな人はいるの？」

ドキン・・・・

「いえ…別にまだそんな人はいないですけど……
私は自分が早くに親と別れてしまったけど　父や母のように
いつも幸せに笑っているそんな人生を送りたいんです。
二人の変わりに…それを私が叶えてあげるつもりです。」

「ご両親は幸せそうだった？」

「はい…もう記憶は遠いけど　でもいつもいつも笑顔でした。
父は母と私を包み込んでくれる逞しい人でしたし　母はそんな父を
信じて生きて行くみたいなおだやかな人だったと記憶しています。」

「そうなんだ……。」

一瞬　叔母の声が低くなった気がした。

「幸は　そんな二人の子供なんだものね……。」

ゆっくりと言う言葉になぜか違和感を感じた。

「とにかくゆっくり休んで　また忙しくなるからお願いね。
圭も出て行くって言うし……
華子には本当に困ったものだわ。」

「華子さんはよっぽど好きなんですね圭さんのこと・・・・・・。」

「報われない恋をするのは　華子の運命かしらね…。
圭には　一日も早く家庭を持たせて　華子を納得させなきゃ…。」

一人ごとを言うように　叔母が部屋を出て行った。

秘密～六十二話～

あんまりにも暇だったから　勉強でもしようかと机についていると
下が騒がしくなってきて　圭さんが帰ってきたことがわかった。
華子も凛も私が帰ってきても謝罪一つない。

ほんとふざけんな……

背中にはまだ赤い痕がついているのに…

「痛いから　わかりましたって！！」その騒がしさが近づいてきて
私は慌ててベットにもぐった。

ドンドン

ノックする音　私は体を固くした。

「幸　入るよ。」
圭さんの声がして布団から顔を出した。

「ほら　謝れ　華子！！」
私のベットの前に華子と凛をつきだした。

「私には関係ないじゃん。」凛が圭さんに媚びるように言った。

「うるさい！！もとはと言えばおまえたちの喧嘩から始まったんだろ？
迷惑をかけた幸に　ちゃんと謝りなさい。
俺をまた怒らせる気か？」

圭さんの声が怖いくらい怒っているから
二人は慌てて私の前にきて

「ごめんね。」と事務的に言った。
心は一つもこもってない。

「もういいでしょ？それより圭くんいつ引越すの？
どうして住所教えてくれないのよ！！」もう心ここにあらず。

一気にむかついてきた。
こっちはもしかしたら傷は残るかもしれないって言われて
うつぶせ寝だって苦しくて……

「土下座してよ。」自分でも怖いくらいつめたい声が出た。

「はぁ？」見るからにバカにした二人の顔に余計に怒りが爆発した。

「口で謝るのはいいから
土下座して。」

「なんなの?こいつ調子こいてねー?」

二人の顔が意地悪顔　ＭＡＸになっている。
負けるもんか・・・

圭さんが少し驚いた顔をしたけど　私の方を見てウインクをした。

「痛かったの。傷が残るかもしれないの。土下座して。」

「あんたが余計なことするからよ。」凛が凄んだ。

「これが睦月の顔だったら　あんたたちどう責任とんの?
顔だったら一生傷残ったら?どうする気なの?」

「別にいいじゃん。睦月なんか家のために何もなってないしね。」
華子が吐き捨てるように言った。

「虚弱体質のマザコン男が　急に調子こいて
誰も何も言わないことをいいことに

圭くんに助けられて生きるしかできないただの社長の息子
どうだっていいわ。
外で迷惑かけんなら火傷で外に出られない方がよかったんじゃない？」

華子の言葉に耳を疑った。

「それってあんた　本気で言ったの？」

「あんた？世話になってるのにその態度何よ。」

「あんたに世話になってない。
あんたの親に世話になってんだよ。」私だって言いたいことうっぷんいろいろある。

「ちょっと生意気じゃね？園から来たくせに
うちの親がここに住まわせて　学費払って　なのにその態度？
少し頭がいいからって　上から目線でしょ？
自分の身分も知らずにね～」華子が私を睨みつける。

「身分？何よそれ……」

「あんたちって人に不快感を与える血統なのよね。」

あんたたち？

「あんたのおとうさんってすごく悪かったんですってね。不良で喧嘩してばっかりで　迷惑ばっかりかけてたって。」華子がニヤリと笑った。

パパが？

「うちのパパが言ってたわよ。どうしようもないヤツで追い出されたって。
板垣家のガンのようなやつで　幸が板垣じゃないのは
おじいさんが許さなかったんだって　それだけ嫌われていたのね。」

凛の鼻の穴が広がった。

「嘘つくな。」私はもう発狂寸前だった。

「いい加減にしろ。おまえらここに何しに来たんだ？」

圭さんの怒鳴り声に私たちは余りに怖くて黙り込んだ。
圭さんの後に睦月が見えた。

睦月に悪いことしたかな

散々言われた睦月が傷ついてないことを祈った。

「おまえらってほんと最低だよな。
それじゃあ絶対に圭さんどころか他の男一人
近づくことねーな。
顔も醜きゃ心はもっと醜い
おまえらソックリだもんな。」

睦月が圭さんの後から出てきた。

事がまた複雑になってきた・・・・・・。
どっちにしても

華子と凛が最低すぎる。
私は父を悪く言ったのを絶対許さないと叫んでいた。

憎しみと愛〜六十三話〜

悔しかった…悔しくて部屋に当たり散らした。
ここでいろいろ辛い思いもしたけど　今日くらいは腹の立つ日はめずらしい。

「何にもしらないくせに……
最高のパパのこと…バカにして絶対許さない……。」

私は枕を壁に叩きつけ　暴れ続けた。
この怒りをどこにぶつけたらいいんだろう。

「頭冷やして来よう……。」

さすがに暴れすぎて疲れて……

私は久々にバルコニーのドアを開けた。

ここで圭さんと初めてキスしたんだった。

絶対明日　圭さんのとこに行こう。

そう思ったらスーッと怒りがひいた。

ベンチに横たわって目の前に広がる星を見ていた。

「絶対に幸せになってやるんだ。」
あの二人の悔しげな顔を想像して少しだけ幸せな気分だった。

だって…私の隣には
憎き　あの二人が愛してやまない人が私を支えてくれるんだから

私と圭さんが愛し合ってるって知ったら
あの二人どんなに悔しがるかしら……

想像したらおかしくて笑えた。

「あはは・・・あはは・・・・・。」

今に…今に見てなさい

板垣家に対しての復讐心で一杯な心が　けがれていくのを
私はまだ気が付いていなかった。

ただ　ただ憎くて……
私と圭さんの愛までもその汚れが広がっていく……。

その時だった

「痛っ！！」

ひさしぶりだったあの傷が痛くて痛くて

やだ　やめて　絶対やめて……

「こんな痛みは絶対偶然なんだって…そんな呪いなんてあるわけないじゃん……。」

私は必死にそう思った。
思うようにしていた。

邪魔しないで…

もうすぐもうすぐ　私は幸せになれるんだから……

ベンチの上で痛みにのたうちまわりながら叫んだ。

「絶対　負けないから！！」

絶対幸せになるんだ。

くだらない偶然なんてクソくらえだ……。

圭さんが引越してから　凛は来なくなったし
華子は部屋にこもるようになった。

そんな華子を叔父と叔母は心配していた。

「圭がいなくなってずっとあんな調子だぞ。
華子は大丈夫なのか？」

「なんだか体調がすぐれないとか言って…また学校も休んだの。
どうしたら圭をあきらめてくれるのかしら。」

華子は大嫌いだけど　でも圭さんを愛する深い心の強さには
敵ながらあっぱれなところもある。

「好きな人とかが現れてくれたらいいんだけど……。
あなた…早くあのお話を進めて・・・。」

お話？

二人の声に集中した。

「いい感じだけどまだ急がせても……

彼女はゆっくりと私を必要としてもらってから話てくれと言うんだ。
」

彼女？
私の心は凍りついた。

「圭にはまだ　彼女がそういう相手なのを話すなと言うから……
もう少し見守ることにするよ。
今の仕事も　かなり彼女のサポートがきいているようだし
なるべく二人で組ませるようにはしてるんだが……。」

叔父と叔母が何か企んでいる
私は不安で胸が押しつぶされそうだった。

実際　最近の圭さんはとても忙しそうで
私は学校帰り毎日行っているけど　圭さんには会えずに帰ってくる。

昨日はとうとう悲しくて
電話口で泣いてしまった。

「お仕事なのに泣いてごめんなさい。でもあいたくて……。」

「ごめんな。ほんとごめん。
悲しい思いさせて…今の仕事がもう少しで一段落つくから
もう少し待ってて～～もう千倍可愛がってやるから～」

圭さんはいつもの圭さんで

「わがまま言ってごめんなさい。」と私が謝ると

「めっちゃ抱きしめたい。
やっぱ引越ししたのは間違ってたな。」と笑った。

目を盗めばいつでも圭さんを感じられるから……。

その仕事の中に　企みがあるのを知って私はさらに不安になった。

どんな人なんだろう…

キレイな大人の人だったら勝てるわけがない…

会えない時間は　不安を育てて行く・・・・。

「なんか最近　元気ないな～おまえもねえちゃんと同じで
圭くんいない症候群か？」

睦月は勘が鋭い・・・・

「え?何言ってんだか…凛が来なくてせいせいしてるよ。」
それは本当〜〜

「平和だよな〜あの二人が騒がないんだからさ。
そう言えば　この間圭くん見かけたよ。
すごいキレイな女の人と仕事してんだな。」

!!!

「キレイ?」恐る恐る感情を見せないようにさぐりをいれた。

「スーツ来ててもスタイルのよさはわかったな〜
こう言う感じ」と言って

「ボン　キュ〜〜ッ　ボン」

ウエストのくびれを象徴したジェスチャーで教えてくれた。

「へ〜〜そうなんだ〜〜」平静を保つのに必死

一瞬自分を素早く比べてみた。

くびれ・・・・ちょっと幼児体型かな私・・・・

「好きなヤツとうまくやってんの？」睦月の切り替えになかなかついていけない。

動揺してる自分がいる。

「え？」

「好きは人いるんだろ？」

「あ・・・うん……いい感じだよ…」心ここにあらずを必死に手繰り寄せた。

叔父の企み……

圭さんを私から奪おうとしてるのは　確かだった。

憎しみと愛〜六十五話〜

暗い気持ちをひきずっていた。
圭さんを信じたい気持ちと　ライバルがキレイでスタイルがいいと知って
私は動揺した。

だって毎日そんな人が近くにいたら
圭さんだって…好きになるかもしれない……
今は間違いなく私以上にその人は　圭さんとの時間を共有しているから……。

あいたいよ……

電話する時間もままならない私は　もうしばらく圭さんとまともに話していない。

仕事中で留守番電話に

「お仕事頑張って」努めて明るく言うのがやっとだった。

そんな日が続いていたある日のことだった。
登校中に

「幸～～」と声をかけられてそこに車に乗った圭さんがいた。

私は驚いてそして感動して泣きそうになった。
こんなに人を愛おしいと思ったことは初めてだった。

会えない時間は不安も愛しい想いも全部育ててくれていた。

「どうしたの？」もう泣きそうだった。

圭さんはあたりを見渡して

「乗れ。」と言った。

私は慌てて助手席に乗った。

圭さんは助手席の私に覆いかぶさって
「めっちゃ会いたかった～～」と抱きしめてくれて頬づりをしてくれた。

「うわ…つめたい…
もうすぐ雪になるかな？」

胸がときめいて息苦しい・・・・

人目なんて気にしないで　思いっきり愛をぶつけたい衝動に襲われる。

「今日って・・・早退して来い～～ムリか？」圭さんが笑った。

「早退してくる～～今日休みなんですか？」

「うん　もう幸に会いたくてとっちゃったし～～」

嬉しかった。

「いっぱい演技してすぐ帰ってくるから。」

「よし　頑張れ
って大人のセリフじゃねーな…反省する……」苦笑する圭さん

私は一時間目が終わる時間に早退して
待ち合わせ場所に迎えにきてもらう約束をして　学校へと急いだ。

授業になんか集中できない。
演技しなくても胸が一杯で息苦しかった。
いつも真面目な私を先生の方が気遣ってくれて　私はなんなく

正門までを演技して
正門を出たところで走り出した。

圭さんの車を見つけて　また感動する。

愛してる…もうこのまま死んでもいい……。

早く圭さんの体で抱きしめられて一つに溶けてしまいたいと思った。

そんな恥ずかしい自分がここにいるのはなんとも複雑だったけど
でもでも…心が募って募って

体全部がもう圭さんを求めている。

「おかえり～」圭さんがニッコリ笑った。

「サボりはダメだからな～～と一応大人だから・・・
って自分が言ったんだから俺って・・・ダメな大人だな。」

「ありがとう…もう今日これからの時間は
一分一秒私にとっての宝物だわ。」

もう耐えきれずに涙がこぼれおちる。

「なんで泣くんだ?」圭さんが慌てた。

「大好きで…大好きで…たまらないの……。ヒック…ヒック…」

圭さんが私の顔を覗き込んだ。

「俺もだよ。毛穴まで幸を求めてるから…
今日の俺はかなり野獣化してるから〜」

恥ずかしくてドキドキする。

「早く二人っきりになりたい……。」思わず私はそうつぶやいていた。

憎しみと愛～六十六話～

私と圭さん以外の時が止まってしまえばいい。

愛する人に愛されながら私はそう叫んでいた。
もっともっと一緒にいたい……
離れている時間が不安で…そして愛が圭さんを求めて
バランスが崩れてしまう。

「幸・・・・？」圭さんの甘い声

「愛してる…圭さん……。」

「俺もだよ……このまま二人で溶けてなくなってしまいたい…。」
めずらしく圭さんが苦しそうに囁いた。

「圭さん？なんだか辛そう……。」

「辛いよ…幸を愛しすぎて一緒にいられない時間が苦しすぎて……
俺がもっともっと頑張んなきゃ…頑張る……。」

「無理……しないで……
圭さんが辛いのは…幸はもっと辛いの……。」

圭さんが…私を愛してくれる気持ちを嬉しいと思った。
なぜ人間は　離れていると不安になってしまうんだろう。
信じていても…不安が覆うのはどうしてなの？

「幸の不安を取り除いてあげられなくて…ごめんな……。」

「そんな……。」

「姉さんや義兄さんには　本当に感謝してるんだ。
だから…少しでも…恩に報いたい。
幸とこんなことしてるのわかったら…それだけでも裏切りだと…わかってても…
俺　よくばりなのかな……。」

「幸は圭さんが愛してくれてるってわかるだけで安心するよ。
離れていると不安が大きくなってわがままになっちゃうね。
幸が…悪い……圭さんを追い詰めてるんなら…あやまるよ……。」

圭さんが優しく微笑んだ。

「幸を愛してる。
愛おしくて愛おしくて…俺の世界に幸だけが女だから……。」

圭さんの言葉は　魔法……
かくさず話してくれるその言葉は私を幸せにしてくれるの……。

「幸せだよ圭さん……。」

「卒業したら……結婚しよ……。」

信じられない言葉だった。

「え？卒業・・・・もうすぐだよ・・・・・。」
圭さんの素敵な言葉にも
驚いてしまう私……。

「進路に困ってるんだろ？」

確かにそうだった。
これ以上板垣に恩という呪縛をかけられるのがイヤだった。

「就職したいって先生に言ったら本気で怒鳴られたの…。」

「そりゃ怒るだろ。

幸はH大も狙えるっていう成績なんだろ？
そういう生徒を国立に入れる学校の評判も上がるだろ？
就職って言ったら怒るだろ。」

「でも…もうあそこにいたくないの…。
恩という縛りはもうたくさん……だから…民間就職探すことにした。
」

「かわいそうに……幸……。
あんな事故にならなきゃ……今頃いつも元気で笑顔で
普通の女子高生だったんだろうな…。」

「いつだって両親を恨んで生きてきたけど…
でもこうなったから圭さんと会えたんだと思うだから感謝してる。」

「あはは・・・そうか・・・。」

圭さんが私の背中の傷を丹念にキスをした。

「幸の体は……傷も美しくみえるよ。」

恥ずかしくて身をよじる。

その時だった。

「いたっ・・・」太ももの傷が激しく痛みだした。

「幸・・・？」

「圭さん・・・・お願い強く・・・強く抱きしめて・・・・。」

圭さんは私をしっかり抱きしめてくれた。

「幸？どうした？やけどの傷が痛むのか？」

脂汗が私の額を覆った。

「足が・・・足の傷が・・・痛いの・・・・・。
でも絶対に負けたくない。
この痛みだけにはもう絶対に泣かない……泣いたら…
全部夢になりそうで……。」

必死だった。

圭さんんが折れそうな力で私を抱きしめる。

「愛してるよ幸……。俺を信じろ……。」

圭さんが　太ももの傷に唇を這わす。
痛みでのけぞっていた私は・・・・圭さんの愛撫で
いつしか甘い感覚に変わって行く痛みを遠くで感じていた。
そして遠くなっていく呪いの傷に

勝った……

そう思った瞬間　私はまた愛される悦びに声をあげていた。

憎しみと愛〜六十七話〜

ベットから出て　昼食を用意しようとキッチンに行った。

キッチンのシンクには洗いものがどっさり

「いいよ〜俺　あとでやるから
食洗機っていういいお手伝いさんがいるから。」

グラスが四つ

「誰か来てたんですか？」

「会社の人たち。」

胸が少し　キュンとした。
二人の城に私以外が　来ているのは少しショックだった。

「昨日もちょっと遅くまでのんでたんだ。」

バカ・・・・圭さんの鈍感

「そうですか・・・・・。」

私はそのグラスやおつまみを食べたんだろう皿を片方に寄せて
パスタのお湯をきった。

「あ～～そうだ～～忘れてた！！」
いきなり圭さんがリビングを出て行って
箱を持って私の前に立った。

「これ・・・これ・・・・開けてみて。」

「だってまだ…パスタ・・・・・・。」

「いいからいいから～～」

私は慌ててその箱を開けた。

真っ赤なリボンは柔らかくほどけた。

「あ～可愛い～～～」思わず声をあげたのは真っ白なフリルのついたエプロン

「圭さんこういう趣味なんですか？」

圭さんは頭をかきながら

「結構これって男のロマン。」そう言うと私にエプロンをつけだした。

途中何度も額や頬　首筋にキスをして

「パスタのびちゃう……。」甘い声で体をよじった。

「うわ～～ロマン征服～～」圭さんが手をたたいた。

板垣の家では　ほんとのエプロンでそれもシノさんたちがつけるおばちゃんエプロンだったから

「エプロンにもこんな可愛いのあるんだ～～」

私も感動していた。

「これほんとは……すっぽんぽんで…つけてほしい～～」
ふざけた圭さんが私の服を脱がすマネをした。

「キャ～～変態～～」私が抵抗すると
圭さんは笑った。

「これまた男のロマン…その二～～」

「もう～パスタ作りますよ。」

「は～～い。今度やってね。」

圭さんが子供みたいでめっちゃキュンとする。

「はいは～い～～。」

圭さんのしてほしいこと全部してあげる。

二人で少しのびたパスタを食べた。
圭さんは

「幸の料理は最高だな～」と頬を膨らませて食べた。

圭さんの食べ方が大好き。
本当に美味しそうに食べるから。

その時　携帯が鳴った。

「お・・・・・。」

圭さんが携帯を見て

「松下さんか……。」そう言うと急いでパスタをのみこんだ。

「はい・・・・・・。」
さっきまでとは全然違う声。

「すみません。本日有休です。……作ってくれたんだ……。
ありがとう・・・・・・これから?・・・・ん……もうちょっと
夜なら
出て行けるけど……どこに?……じゃあまた電話するよ。
うち?……あ…今うちにいないから……うん……じゃあ後で……。」

圭さんは携帯をおいてパソコンを開いた。

無言でパソコンの画面を見て　キーボードの音がした。

空気読まない人から仕事の電話ね・・・

さっきまでの甘い空気がすっかり仕事モードの圭さんに変わってしまった。

でも……そんな圭さんにドキドキときめく……。

圭さんの背中から静かに抱きついた。

「あ…ごめんな……。ちょっと待ってろよ。」

「うん…仕事モードの圭さんも素敵……。」

「マジ？」そう言いながらキーボードを打つのは驚異的に早くてビックリ

「こんなに素敵だったら会社の女の人にもてちゃうんだろうな……。」思わず本音が飛び出してしまう。

「あはは～～んなことね～～よ。

俺なんてまだまだ子供扱いだからな～～

今も心配して同じ課の先輩から電話来てさ……

急がされてるし……。

仕事出来る人でさ……女にしとくのもったいないよ……。」

女の人？

これから会うのって……

私は言葉をしばらく発せなかった。

「よ～～し　終わったぞ～」

そう言うと圭さんはイスのままふり向いて私を膝の上に抱き上げて
優しくキスをしてくれた。

「ん～～～」

ちょっとすねてる私に気づいた。

「どうした？」

「女の人と夜会うの？」

「ヤキモチやいてるのか～。」圭さんが笑う。

「子供扱いして…嫌い～～。」
もう・・・バカ・・・・圭さんのバカ・・・・

「俺には幸しか女じゃないって言ったろ……。」

素早くTシャツを脱がされて　圭さんの思うがまま
私はまた圭さんの甘い魔法の中で　幸せを感じている。

太ももがチクンとだけ痛んだ。
でも・・・もうその痛みも圭さんとの甘い快感の中では
たいした事に思えなかった。

「愛してる…圭さん……。」

「俺もだよ……。幸がいればなにもいらない……。」

圭さんの指や唇の魔法で
みるみるうちに部屋が甘い吐息で満たされて行く……。

圭さんがいれば…なにもいらない……

私は圭さんに強くしがみついた。

憎しみと愛～六十八話～

圭さんが板垣の家で食事をする夜は　凛もやってきて
二人は競い合って圭さんのそばに陣取る。

私はいつものように騒がしい食卓に　料理を運んだ。

何もないかのように演じる私たちが
秘密を楽しんでいるようで楽しかった。

華子と凛が　かわるがわるに圭さんに話かけていた時
睦月が帰ってきた。

「おかえりなさい。」

叔母はとろけそうな笑顔で睦月を迎える。

「睦月　またいい男になったな。」圭さんも眩しそうにしている。

睦月はまた少し背が伸びてすっかり声も男らしくなった。
どこか圭さんに似ているのは　叔母が圭さんのおねえさんだから。

「圭くんも相変わらず大変そうだね。

うちではまたうるさいやつらに囲まれて
一人暮らしを始めたら　大人の女の人と・・・・・。
やるな～圭くんは～～
今度そういうテクニックも教えてもらわないと……。」

華子と凛の手が止まった。
そして私もその言葉に激しく動揺した。

「圭　何かいい人がいるの？」叔母がすかさず尋ねた。

「睦月　余計なこと言うなよ。
誤解されるだろ？それでなくてもうるさいのに。」
圭さんの顔も警戒顔に変わった。

「ほら松下女史のことだよ。」

圭さんが叔父にそう言った。

「松下くんは優秀だろう？」

叔父が言ってた人が・・・・・

「うん。優秀だよ、彼女のおかげでずい分やりやすいから。」

結婚相手にって企んでいる人が……

「めっちゃ美人だよな。
圭くんはあんなキレイな人と仕事してるんだ。」

睦月のバカ・・・・・

聞きたくないのに・・・・・。

「女じゃないよ。あの人は絶対に
結婚とかしないんじゃないかな。
女でいるのがもったいないよ。」

「頭のいい人だからな。
きっとお前の仕事にも欠かせない存在になるよ。」

叔父の言葉の意味を知っている私の心は落ち着かなかった。

企んでるんだよ

そう叫びたくなった。

憎しみと愛～六十九話～

「その人とは仕事だけの関係なんでしょ？」

華子が不機嫌そうに言った。

「あたりまえだ。年上だしそれに彼女が相手にしてくれないって…」

圭さんは笑った。

「年上なの？それじゃあ大丈夫ね。」凛が言った。

「年上っていいんだよな～なんでも許してくれて
優しくて…頼れて…俺は好きだな～年上～」

睦月がそう言って笑った。

「そうなの？睦月？」叔母が目を白黒させた。

「いろんなこと教えてくれるよ。手取り足取り。」

「うわ～～キモいし・・・睦月なんかそれって下ネタなの？」

華子と凛から大きなブーイング

「おまえらはさ…恋してないから不細工なんだって」

睦月の言葉は最近本当にキツイ

「睦月そんな言い方するなけんかになるぞ。」

叔父が見かねて声をかけた。

「松下女史は本当に美しい人だから…圭も惚れてしまうかもな。」

叔父が嬉しそうに言った。

「おとうさま！！」華子がヒステリックに叫んだ。

「そろそろ華子も卒業しなさい。圭だってあと二年三年中には家族を持つんだぞ。」

華子は立ちあがって

「おとうさま今度そんなこと言ったら
二度と口きかないから……。」そう言ってフォークをハンバーグにぶッ刺した。

ハンバーグが私・・・・・
重なってぞっとした。

「華子・・・この際だから・・・義兄さんやねえさんにも
話しておくけど…・・・俺　決めた人がいるからね。
その人と結婚するつもりでいるから・・・。」

私は心臓が高鳴って　スポンジを持つ手が震えた。

「そんな話聞いてないぞ。いつからそんな人がいるんだ?
どんな女性なんだ?」

叔父もパニくってきた。

「もうずっと前から決めてるんだ。

まだ会わすことはできないけど・・・プロポーズもしたし・・・
きっと俺のところに来てくれるはずだよ。」

頬が赤くなっていないか心配だった。
それが私・・・そう知ったらこの家の人たちはどういう風になるんだろ。

華子や凛には殺されるかな・・・・・・。

「いい加減にして・・・!!
これ以上くだらないこと言わないでよ。」

華子が圭さんに抱きついた。

「絶対許さない・・・。
おとうさまもおかあさまも　許さないわよね。
そんな話。圭くんも・・・冗談やめてよ。」
華子の声は涙声だった。

「華子・・・俺はおまえを妹以外には思えない。
家族として愛してるけど・・・女としては愛せない。
それは・・・凛だって同じだよ。」

凛は唇をかみしている。

「大変なことに…なったわね・・・。」

シノがつぶやいた。
いつかは知らせなければいけない。
もしも許されないなら・・・二人でどこかに逃げればいい
圭さんはそう言っていた。

幸だけいればいい世界に・・・逃げようって・・・・・

私は圭さんの告白を　そう簡単に聞いていたのかもしれない。
逃げれば・・・裏切っちゃえばいいって・・・

私にとって板垣家は敵だった。
長い年月　恩という呪縛で私を雁字搦めに縛りつけてきた。

だから知らせたいと思った。

その相手は私なのよ・・・・

そんなことを考えていたら　睦月と目が合った。

マズイ・・・

睦月は何を考えてるのかわからない・・・・。

平静を保とうとした時　睦月がニヤリと笑った。
その笑いはとてもひっかかるような・・・何か意味があるのかと
考えてしまうような・・・意味深な笑いだった。

私は平静を心がけてその視線から目をそらさずにはいられなかった。

「圭くん　大変だな～～。
ここはまともな考えなんて一つもない家だからな。
そうは簡単にはいかないんじゃね？」

睦月が視線を圭さんにうつした。

「だからさ…だから燃えるんだよ睦月。
命より大切な人を守りたいって・・・・・・
おまえもいつかわかるよ。
本気で女を愛したらさ。」

圭さんが私に言ってくれた気がして　幸せな気持ちになった。

太ももの傷がチクンとしたけど・・・

もうあんたに負けないもん

華子が手で顔を覆って　大きな声で

「絶対許さない。そんなことしたらその人殺すから。」

完全に目が座っていた。

怖い・・・・・。

華子の様子に　凍りついた・・・・・・・。

「勝手なことは許さないぞ。おまえには
おまえが一番幸せになるように俺は考えているんだ。
そんなどこの馬の骨かわからない女に大事なおまえを任せられない。」

叔父が言った。

「義兄さんには感謝してるよ。
ここまで俺を育ててくれたのは義兄さんと姉さんだって
ほんとうにどんなに感謝しても足りないけど
これからは俺だって　俺の愛した女と一緒に残りの人生歩きたい。」

華子が耳をふさいだ。

「そんな話聞きたくない。もうお願いだからやめて…」

泣き声が悲鳴のように聞こえた。

「おじさまの責任でこの話しっかり潰して下さいね。
うちのパパも絶対許さないわ。
圭くんは会社を背負っていくんだから。」

凛が強い口調で言った。

「背負うって…ここには睦月って立派な後継ぎがいるんだし…」

「睦月なんてムリじゃん。
今だって勉強もしないでこんなことして
虚弱体質だし
うちのパパは　睦月には荷が重いって言ってたわ。
睦月は圭くんのサポートなしではムリだって
この大きな会社を経営するには力不足だから
おじさまだってわかってるでしょ？
帰ります。」

言いたいこと言って　凛はリビングを後にした。

睦月の気持ちを考えると気の毒に感じた。

凛がとんでもない発言をして帰ったから空気はすごく悪くなっていた。

「おまえには睦月の肩腕になってほしい。」叔父が言うと

「俺は別にここを継ぐとか考えてないし
圭くんに全部お任せしてくれていいよ。」

睦月が口を開いた。

「バカな事を言うな。おまえは俺の息子なんだぞ。
もっとしっかりしろ!!いつまでもそんなことしてるから
バカにされるんだ!!!」

叔父がめずらしく声を荒げたので　私はビックリした。

「とにかく圭も睦月も俺にとっては大事な後継ぎだからな。
勝手なことは絶対に許さない。
圭には圭にふさわしい最高の女を見つけてやる。
わかったな。」

叔父はそう怒鳴ると　部屋を出て行った。

「圭……そんな裏切り方はないわ。
私はあなたのためにいろんなことを犠牲にしてきたのよ。
もし大介が許しても　私は絶対に許さない。
その資格は私にはある。
圭は私を裏切る?そんな非道な子じゃないわよね。」

いつもおだやかな叔母がまるで別人のようだった。

「絶対に許さないからわかってるわね。」

叔母も部屋から出て行った。

圭さんがうなだれていた。

私も不安で一杯になった。

憎しみと愛～七十一話～

「大変なことになったわね。ナオさんにも教えてあげなきゃ。」

シノさんが楽しそうに見えた。

「圭さんに恋人がいたなんてね…ビックリしたわ。」

中途半端に残った料理をタッパにいれながらシノさんは本当に楽しそうだった。

「圭さんの恋人きっと　呪い殺されるわよ。」

「え・・？そうなんですか？」

「だってすごかったじゃない。華子さんや凛さんはしかたないけど旦那さまも奥さまも顔色変わったもの。
可哀そうに…この恋は終わりね。
圭さん　お可哀そうに……。」

そう叔父はともかく叔母の変わり方に驚いた。
あんな顔すること・・・あるんだ……。あまりの意外さに本当にビックリだった。

でもそんなの最初からわかってたし

きっとその相手が誰なのかわからないのにあの怒りっぷりなら
私がその相手だってわかったら
あの人たちどんなに驚いて　嘆くのかしら

想像するだけでウキウキしてる。

圭さんのことを純粋に愛してるけど
その中に少しだけ汚れている私がいて
そんな想像で喜んだりしてる自分がいるのは確かだった。

今までこの家で　受けてきた恩という名の呪縛が解けるとき
それは

圭さんが板垣を裏切る日
ここの家族が一番嘆く日になるだろう

それまで私は　大人しく目立たぬように圭さんに愛されればいい……。

いつしか心に宿った復讐という文字
それは板垣の家から　圭さんという誰からも愛され暮らしてきた人の裏切り

誰も見送りに降りて来なかった。

「寂しいですね。今日は誰も来ませんね。」私が言うと

「覚悟の上だよ。」と笑った。

「うれしかった……。」思わず出た言葉を圭さんが唇で止めた。

唇を離して圭さんが笑った。

私は驚いて周りを見渡す。

「圭さん！！」

「ごめん　ごめん～～」

「もう～～ビックリするじゃないですか……。」

「俺もビックリしたよ。」

「じゃあ週末な。楽しみにしてるから。」
そう言うと圭さんは玄関のドアを開けて手を振って出て行った。

週末　私はものすごい大嘘をついて圭さんと温泉に行く予定をたてていた。
シノさんには話して　叔父からも承諾をもらった。
ここに来て初めての外泊許可だった。

学校で一泊　恒例になっているクリスマス前期末補習というイベントだった。
大学受験を控える学校の恒例のイベントだった。

そのイベントに最後だから出たいと　シノに言うと
「今まで外泊だってしたことがないんだから　行きなさい。
旦那さまには話しておくから。」

そう心よく私の嘘にのってくれて少し胸が痛んだ。

もちろんこんなチャンスめったにない。
長い時間　圭さんと一緒にいられるなんて…圭さんに話したら

「悪い子だな〜」って笑ったけど
すぐに温泉を予約してくれた。

「やった〜〜〜!!行ってみたかったの〜〜」

毎年板垣家は年末年始を温泉で過ごしていた。
もちろん私はいつも留守番だったけど
最近は　睦月が参加しなくなって　そのイベントもなくなったけど
でもせいせいできる時間で
嫌いじゃなかった。

「部屋に露天風呂がついてるとこ　奮発したからな。
期末いい点数とれよ。」

「まかせておいて～」

私はおおはしゃぎ。

圭さんと夜を過ごして　朝を迎えられる　それも温泉で
私は幸せで幸せでたまらなかった。

圭さんは私のもの……

どんな邪魔も入らない…二人だけの時間……。
想像するだけで胸がときめいてしまう。

裏切りの代償～七十二話～

「勉強するためにわざわざ泊まるなんて　どんだけ勉強好きな学校なのかしら。
あんたなんてそんなに勉強して　いったい何になるの？」
凛の意地悪な質問を背中でうけている。

「だいたいにして必要ないじゃん。
大学だって行くような身分じゃないし　図々しいってあんたのこと言うのね。」

言っとけ…

私はこれから愛する人と一緒に初の温泉旅行
こんなヤツにかまってなんかいられない。

「聞いてんの？」

凛が私の背中に雑誌を投げつけて　まだたまに痛む傷にぶつかった。

「すげーご機嫌斜めだよな。
凛おじょうさまはさ…まるで鬼のような顔してる。」

睦月の声がした。

「何よ　虚弱ダメ男が……。んな口たたくなら重い荷物一つでも
持てるようになったら？あんたが頼りないから
叔父さまやうちのパパは苦労してんのよ。わかってんの？」

「俺の親父は社長だけど　おまえのとうちゃんって
別になんか関係あんのか？おこぼれにありつこうと必死な
親戚風ふかしたバカヤローにしか見えないけど
その娘のおまえはなんでそんなにえらそうなんだ？」

睦月の口の悪さも最近は拍車がかかってる。
でも・・・すごく面白い……。

「腹立つわ～～こいつ～～」

「圭くんに相手にされるかよ。おまえなんか。
まだ血が繋がってる姉ちゃんの方がまともだよな。」

凛の平手が睦月に飛んだけどそれを睦月がかわして
その手首をねじあげた。

「いつまでもバカにすんなよ。
おまえの一人や二人　どうにでもできるんだっておぼえとけや。」

「痛い～～ちょっと叔父さまに言いつけるから～～」

凛がヒステリックに叫んだ。

「その顔　鏡で見たら？メスに飢えてる豚だって相手にしねーや。」

「おぼえときなさいよ。」凛が退散した。

私は思わずおかしくて笑ってしまった。

「何？そんなにおかしいか？
俺はめっちゃマジに戦ってるけど？」
睦月が言った。

「だって…すごい言葉悪いんだもん。どこでそんな言葉覚えるの？
ひどすぎだからね～」

私はお腹を抱えて笑った。

「ずっとずっとたまってた言葉を最近やっと
吐けるようになったからさ～～
俺がここまですごいというなら　おまえもすごいんだろうな～」

「え？何が？」

「おまえの武器は何？口？それとも・・・・・・。」と言いかけて睦月は黙った。

「それともって何よ。」

「いや～なんか秘密兵器もってるのかなって思ってさ。」

「秘密兵器か・・・。何か用意しとくわ。」

「わかってないな　すごい秘密兵器もってんのに……。」

「え？私が？教えて何？」

「気づいてないならまだ教えない。
教えてもっと力持ったらおっかねーし～～」

「失礼な。おっかない・・・・あ～おっかないかもね～～。」

睦月はどんどん逞しくなる。

「睦月　男らしくなったね。
ホント虚弱なマザコンだとばっか思ってたけど…眩しいくらいよ。
大人になった・・・。きっといい男になるよ。」

心の底からそう思っていた。
睦月の不思議な魅力は　これもけっこうな武器になるんだろうなって。

「上から目線だな。気にいらいない。」

「だって年上じゃん私～上からでしょ?睦月くん～～。」

睦月がいきなり近づいてきて私の両頬をおさえた。

ドキドキ…・…
何する気?

私が動揺しているのを見透かして
いきなり額に　頭突きをくらわせた。

「キャ～～痛い～～～し～～」
私が悲鳴をあげると　睦月が子供のようにゲラゲラ笑った。

「男をからかうと痛い目にあうぜ。」

ものすごいふざけたポーズで睦月がこんな言葉を吐くから
私はお腹の皮がよじれるくらい大笑いした。

こんなに笑ったの・・・・初めてかもしれない・・・・。

裏切りの代償～七十三話～

楽しみにしていた温泉旅行を　ブチ壊す出来事が起きた。
その日　いつも一緒に食事をする叔父が
めずらしく仕事優先で帰って来なかった。

「おとうさま　めずらしいわね。」
華子が叔母に話しかけた。

「ほんとに　それだけ大変なことになったのね。」叔母のためいき。

「どうしたの？」

「詳しくはわからないんだけど
なんだかとても大変なことになったらしいのよ。」

「圭くんも……かな…。」

「多分ね……圭も大変だと思うわよ。」

イヤな予感がした。
でも……大丈夫だよね……。

木曜日の朝　地下鉄の改札に圭さんが立っていた。
思いがけない登場にすごく嬉しくなった。

「おはようございます　どうしたんですか？」
駆け寄って抱きつきたい気分

スーツ姿の圭さんは大人の男でめちゃめちゃカッコいい
圭さんの足元にスーツケースが見えた。

「あれ？」

「ごめん本当にごめん。これから東京に行くんだ。」

「え・・・・？」

「温泉はキャンセル……。」

「え・・・・・。」今一番私が　マヌケな顔してるだろう。

「土曜日まで出張になっちゃって　どうしても
抜けられないんだ。ほんとごめん……。」

天国から地獄ってこんな感じなのか

「俺の担当していた仕事で　大きなミスがあって……
会社にも大変な損害を与えそうなんだ
ごめん　この埋め合わせは絶対にするから。」

圭さんがやつれているのは目の充血でわかったけど…
すごく悲しかった。

「わかった……仕事なら仕方ないから……。」

「ありがと…土曜は俺の部屋で待ってて
遅くなるかもしれないけど　必ず帰るし連絡もするからいい？」

「はい　わかりました…。
部屋で夕飯作って待ってるから。」

泣きそうになっていた。

「夕飯食べる時間には帰れないから　先に食べて寝ていていいよ。
日曜日はなんとか時間つくれるように頑張ってくるからさ」

「いってらっしゃい……。」

スーツケースを引っ張って圭さんがエスカレーターに消えて行った。
そしてホームに放送がかかって
その地下鉄に飛び乗って私が下りた時は圭さんの姿はなかった

バカ・・・・バカ・・・・・

一気に地獄に落ちた気がしたけど
土曜は遅くでも帰ってくるって言ったから
なんとか一緒にいられる時間はできそうで安心した

仕事と私

仕事を選んだ圭さんにちょっとショックを受けた。

でも　男だもん

そう言い聞かせてテンション下がった私は土曜日　ボストンバックを持って
圭さんの部屋に行った。

めずらしく部屋が散らかっていてテーブルには置き手紙

『ごめんな幸　おまけに部屋も汚くてごめん
なるべく早く帰ってくるから待っててね。』

圭さんの手紙を握りしめてキスをした。

「大好き…圭さん…早く帰ってきてね。」

気を紛らすように　掃除を始めた。
散らかりようで圭さんの言ったように大変なことになったのがわかった気がした。

散乱する書類を机の上にまとめておいて
投げっぱなしのスーツをハンガーにかけた。
洗濯をしたり洗いものをしたり午前中は忙しかった。

やっときれいになった部屋でココアをのんだ。
愛する人のために何かできるって幸せなことだね……。
圭さんの残り香に包まれたスーツに唇を寄せる。

その時
ポケットの膨らみに気がついて中を探ってみた。

中から出て来たのは　女性もののハンカチと一枚のプリクラだった。

「これって……。」

恐る恐るプリクラに目をやった。
幸いなことに数人写っていたからホッとしたけど
一番上にちょっとめんどくさそうに笑う圭さん

その横で圭さんの肩に頭を乗せるキレイな女の人が飛び込んだ。

営業二課　飲んだぞ～　とかかれたプリクラの文字

多分課の人たちとのプリクラ
だけどこの二人だけはなぜか異質に見えた。

美男美女　大人のカップル
何より隣の女の人は　ものすごい美人だった。

もしかして・・・この人が・・・・・

叔父が企んでいた人ではないんだろうか……。

そう考えると不安で一杯になった。

大人の女性は　私に向けて笑ってる気がした。

ハンカチとプリクラを、ポケットに戻して私は一気に暗くなった。

裏切りの代償～七十四話～

不安な気持ちで鏡をのぞく。
仕方ないそう思うのは　あの人は私より　圭さんに年が近いから…
…。
私よりずっと一緒にいる時間が長いのは　一緒に仕事をしているから

そう自分を慰めるけれど　でもすべてを受け入れられることもできなくて
ただ鏡にうつる幼稚な幼い顔をした自分に
なんの魅力があるのかと考えてしまう。

電話が鳴って　ナンバーを確認すると圭さんからだった。

私は慌てて電話をとる。

「ごめん…今日はやっぱ帰れそうない……。
明日の始発をとるから一人で寝られるよね？」

私をまた地獄に落とした。

「え・・・・今日帰れないの？」

「ごめん……長引いちゃってさ……」そう言いかけたところに
後に女の声で

「日高さん　今夜はパッと飲みましょうよ。」と声がした。

「幸?聞いてる?」一瞬間をおいて圭さんが聞いた。

聞こえたよ…あの人も一緒なのね…

「幸?」優しい声　裏切っているなんて思ってないけど

「はい……。」

私はそう言うのがやっとだった。

「明日は幸が目が覚める頃に帰るから・・・ゆっくり寝てろ。」

涙が落ちた。
仕事なのはわかってるから・・・・
でも私がこんな気持ちなのに　圭さんは女の人と飲んでるんだって…
なんか悲しすぎる……。

私は答えずに電話をきってクッションに顔を埋めた。

初めてこんなに一緒にいられる時間をとったのに
温泉だって今頃きっと楽しんでたし
もうこんなことできない

そう考えるとこの時間が無意味に思えて仕方がなかった。

圭さんが揃えてくれた洋服に着替えて街に出た。
こんな時間に街をうろつくのは初めてだった。
雪が舞ってきて

今日の雪は嫌い

そう叫びたかった。
圭さんと一緒に見てるはずの雪……。

化粧品の店員に声をかけられた。

「学生さん？」

「大学生です。」
思わずそう答える。

「今　イベントしてるんだけど　時間ある？」

「あ…まぁ……。」

「じゃあ　お願い～～試供品たくさんあげるから！！」

メークアーティストによるお化粧講座とかいう看板の隣にすわらされて
男性が私の前髪にピンをして　喋り出した。
私の顔を手本にして化粧を始めた。

「今日はどういう化粧してほしい？」

「思いっきり大人の女にしてください。」

私はそう答えていた。

「オッケ～やり甲斐のあるモデルさんだから　頑張っちゃいますか～」

ギャラリーに冗談を飛ばして笑わせたりしながら
アーティストさんは私にいろいろなものを塗ったくった。

大人の女は毎日こんな　面倒なことするんだ
なんて感心していたけど
あのプリクラにうつった女の人は　本当にキレイな人だった。
あんなキレイな人と一緒にいたら　圭さんはときめいたりしないの？
好きになったりしないの？

されるがままの時間で　そんなことばっか考えていた。

もう一人男の人が現れて私の髪の毛を　華子がたまに使ってる
ヘアーアイロンで巻きだした。

「髪の毛　めっちゃ健康ですね。
この年頃の子ってほとんど痛んでるけど　普段こういうことしない
んですか？」

「アイロンは初めてです。」

初めてだらけの感触が新鮮だった。

「さっきまでの幼い美しさもこうやって重ねて行くことによって」

私の前髪のピンを外した。

ギャラリーが拍手した。

「さ…どうぞ…」ギャラリーの視線が集まった。

鏡を手渡されて私はビックリした。

「これが…私ですか？」

そこにいるのは　あの人にも負けてない私だった。

裏切りの代償～七十五話～

「これ試供品ありがとうね。」店員さんが袋に入れてくれた。

「いえ…こっちこそこんなにキレイにしてもらって
ビックリです。お化粧ってこんなに変えてしまうんですね。」

「間違ったメイクを覚えちゃダメだよ。
自分に合ったメイクを見つけて…正直君にはこのメイクは似合わないかな。」

さっき私にメイクをしてくれた人がそう言った。

「似合いませんか?私はとっても気にいってるけど。」

だって今ここにいる私を幸だとは誰も思わないもの。

「きみが大人の女の顔にしてって言ったからさ。
お任せしますって言ったらきみの美しさを素直に表現させるメイクをしてあげたんだけどね。」

「それも気になるけど…
でも今日は大人の女になりたかったから…ありがとうございました。

」

「こちらこそ　素晴らしい素材を呼んできてくれた
山下くんもありがとうね。」

「そ…そんな……。」
店員さんが真っ赤になって慌てた。

「これは俺からね～お礼にあげるよ。
基礎化粧品…これはめっちゃ高価だけどもらいものだと思って
存分に使ってそのキレイなお肌を大事にしてください。」

そう言って袋をくれた。

「ありがとうございます。」

私はお礼を言って化粧品売り場を離れた。

私じゃない私がいる。
すれ違った女子高生のグループが
「きれい～～」と言っているのが聞こえて　舞いあがりそうだった。

なんか帰りたくないな……。

圭さんが帰って来ない部屋で　また不安になるのがイヤだった。

喉が渇いたのでみんなの会話からよく聞く　ハンバーガー屋でシェイクを頼んだ。

さっきもらった試供品の袋を覗き込んでいると

「ん・・・・？」

アーティストがくれた袋の中から一枚のメモが入っていて

『ごはんご馳走したいから　連絡下さい。』

電話番号とメアドが書かれていた。

ごはんか・・・・・。

私ももっとあの人と話したい気分だったし　部屋に帰るのはまだいやだったけど
することもないし……

思わず公衆電話を探して　電話をかけていた。

「もしもし?」あの人が出た。

「あ…私…さっき……」なんて言っていいのかモゴモゴしてたら

「電話くれて嬉しいよ　俺もう少しで終わるからさ……。」

ということで私は地下の駐車場であの人と待ち合わせをした。

いいのかな……
悪い人な気はしなかったから……
ご飯食べて　お話するだけだもん　圭さんと変わらないよ…

そう自分に何度も言い聞かせていた。

お化粧が私を大胆にしているのかな……
今日の私はいつもの私とは違う……この貴重な時間を…有意義に過ごしたい……。

そんな気持ちが大きくて
冒険してみたくなる。

「お待たせ。」いつの間にか近づいてきた車の窓からあの人が顔を出した。

「乗って。」

私は言われるがままに車に乗り込んだ。

「俺　星野　裕也…きみは?」

「あ……舞……佐藤　舞……。」思わず嘘をついた。

「舞ちゃんね～～女子大生だったよね。」

「はい……。」完璧に嘘をついて私は違う女の子になった。

「俺のことは　裕也って呼んでいいよ。
俺も舞って呼んでいいよね?」

「はい。」さすがにノリがいい。

「敬語いらないから・・・俺がおじさんだからって気使わないで
なんか寂しい気になるからさ。」

「そんなおじさんだなんて…。」慌てる。

「何歳だと思う?」

「男の人の年って…難しいけど…三十歳くらい?」

「惜しい~~いいとこいってるよ。三十二歳~~だいたい正解かな。
」

裕也はさすがに女の人相手の商売だからか
とても話していて楽しい気分になった。
いつしか警戒心もなくなって私は　舞っていう女子大生になって
全然違う人間になっていた。

こうしたかった……

両親がいたらきっと私はこうなっていただろう女の子が舞・・・・。

明るくて元気でよく笑って　言いたいこと言って怒って泣いて
人に好かれる術を知っている……。
すべての願望が　舞という架空の中に入りこんでいる。

短い時間だけど　私はすっかり舞になって笑っていた。

秘密を守りながら　影のように生きている幸に疲れていた。
堂々と好きな人を好きって言いたい。
自分に自信を持って生きたい……。

裕也と食事をしてそれから送ってもらうつもりだったけど

「お酒でも飲んで行こう。」と誘われた。

今頃　圭さんだって…あの人と一緒にお酒飲んでるんだし…

お酒なんて飲んだことないけど……
少しでも圭さんやあの人に近づきたいと思った。

「帰りはタクシーチケットあげるから安心して。」
裕也はそう言うと私の額を紙でペタペタと拭いた。

「おじょうさま大事なメイクが少し落ちてきましたね～」

圭さんよりずっと大人の裕也に
私の願望を入れこんだ　舞　という女の子

私は小悪魔のように
「うふふ……」と笑って見せた。

裏切りの代償～七十六話～

幸と舞が入れ替わったようだった。
初めて足を踏み入れるバーで裕也があんまりにも
お洒落に振る舞うから　すっかり安心していた。

口から出まかせを　裕也に話す。

「最近の女子大生はすごいな～～」

裕也は大げさに驚いて見せた。
全部　雑誌で読んでる話……。

舞は両親と三人でとても大きな家に住んでいて
わがまま放題で育ってきた。
勉強は苦手
親が大学に行きなさいっていうから仕方なく行って
将来の夢もなんもまだ見つけられていない。

初めて口をつけたお酒は　とても美味しかった。

板垣の家ではそんな変わった飲み物をのむことも　私にはなかったから
甘いジュースのようでとっても飲みやすかった。

「大丈夫か？もう三杯目だぞ。」

「うん大丈夫だよ。」調子にのって飲んでいたらとうとう目が回りだした。

裕也の顔がぼんやりと見えて……
私はそのまま気を失ってしまった。

「ん・・・・・・」目が覚めたらベットに寝ていた。

「あれ……」いつ部屋に戻ったんだろ　それとも夢だったんだろうか
次の瞬間　私は飛び起きた。

「あ・・・・・・。」

隣で寝息を立てているのは　圭さんじゃなくて裕也だった。

私は慌てて立ちあがって自分が裸なのを知った。

あ・・・・・

崩れ落ちそうになる体を必死にとどまらせて私は洋服を探して

慌てて着替えた。

裕也にばれないように息を殺して……
大丈夫・・・昨日までは舞だから……。

幸じゃない……。
幸じゃないもん……。

髪を整えながら部屋を飛び出して
裕也が追って来ないかドキドキしていた

私昨日のことなんにも覚えてないの・・・・。
何をしたんだろ……。

裸だった・・・・。
裕也も……。

まさか……まさかだよね……

でも…裸って……。

途中の窓にうつった自分を見て驚いた。

朝までスナックで唄い飲んできたそんな女に見えた。

こんな顔　圭さんには見せられない。
まだ・・・真暗な朝日の登らない街でタクシーを拾って
圭さんの部屋に逃げ込んだ。

タクシーのおじさんもチラチラと私を見ていた。
きっとはたから見たらこんなバカな女乗せたくなかったんだろうな。

圭さん・・・・・私はいったい。

部屋に飛び込んでシャワーに駆け込んだ
それから隅々まで石鹸できれいに洗う。

「頭…痛いよ……。」完璧な二日酔い

裕也しか知らない私と裕也に起きたこと
でも裕也は　私を舞だと思っている。

もう二度と会う事もないだろう。

いいよ　大丈夫わかんないって……

風呂の鏡にうつった体をジッと見ていた。

大丈夫　わかんないって……。

舞が心配症な　幸を嘲笑った。

バカだ・・・・・私・・・・・。

その時傷がチクンと軽く痛んだ。

傷が私をバカにしているように感じて思いっきり太ももを真っ赤になるまで
叩いた。

「ふざけるな…バカにしやがって……」

情けない・・・・・

たいした知らない男に抱かれて……いや抱かれてなくても
何も覚えてないんだから……。

シャワーを出た私は　幸に戻っていた。
あの昨日の化粧で別人になった舞はもういない……。

「帰ろう……。」

私は荷物を片づけて圭さんの部屋を出た。

本当はもうすぐ会えたのに……バカなことした自分が情けなくて笑うしかなかった。
調子にのってたからだ……。

愛されることにあたりまえになって
自分を見失っていた。

あの女の人にやきもちをやいて

私は私なのに……どんなに背伸びして求めたって
圭さんは私を愛してくれてたのに……。

雪が深々と降りだしてきた。
私は朝　まだみんなが寝ている時間に板垣家に戻ってくるしかなかった。

悔しいけどここにしか居場所がない

それが自分が置かれている現状だった。

圭さんから　逃げるようにして私は板垣家に身を隠した。

裏切りの代償＝七十七話～

裏切ったんじゃないもん

何度軽率だった行動を反省してもいても朝の光景では
私は裸で男と寝ていた。

圭さんだけのものだった私の誇りが
崩れてしまっていた。
汚れてしまったようで苦しかった。

何があったのか
私は裕也がくれたメモを見ていた。

明日…電話してみよう……

はっきりさせないと前に進めないから……

とにかく少し寝よう……。
飲み過ぎて痛い頭でいろんなことを考えて私は疲れてしまった。

しばらくして
「あら・・・幸ちゃん戻ってたの!?」

大きな声で目が覚めた。

「あ・・・ただいま……
すみませんちょっと体調が悪くて帰ってきてまっすぐ寝てたの。」

「勉強のし過ぎかしらね。
下にはうまくいっておくから寝ていなさい。」

「すみません。」

私はまた目を閉じて夢の中へと戻って行った。

「幸……？幸……。」

私は心地よい声に静かに目を開けた。
そこには今一番会いたくて　会いたくない人がいた。

「どうして待ってないんだ？
心配したんだぞ、昨日も何度かけても電話にでないし
帰ってたのか昨日から？」

「ごめんなさい・・・。

体調が悪くて…帰ってきました。」

嘘をついた

「そうか…ごめんな一人で心細かっただろ……。
またチャンス作って今度は必ず連れて行くから
ごめんな。仕事も何とかうまくいったから……。
今日は幸の顔　もう少し見たいからここで過ごすことにした。
おみやげ買ってあるから今度来た時渡すからね。」

圭さんの指が額に触れて　私は目を閉じた。

心苦しかった。
昨日のこと全部話して楽になりたいと思ったけど
絶対言っちゃダメ

舞がそう言っている。

幸と舞の真逆な二人が心の中で　まるで凛と華子のように言い合ってる。

圭さんの登場で下からは賑やかな声がした。

また私は眠りについた。

「幸ちゃん・・・・どう?具合は・・・・。」

シノさんの声で起こされた。

「もうだいぶいいです。すみません。」

「そうよかった。じゃあお願いがあるの。
下にお客さまがくるらしくて　手伝ってくれる?」

「あ・・・はい
わかりました……。」

気乗りはしなかったけど　圭さんの顔もやっぱ見ていたい
私は着替えをして髪の毛を束ねた。
エプロンをして下に降りて行くと
圭さんが優しく微笑んでくれた。

胸が痛い・・・・。

凛も来ていて圭さんの周りに華子とまとわりついていた。

いつもの光景。

キッチンに行ってシノに合流して料理を手伝った。

「旦那さまが急にお客様をお呼びになるって……
幸ちゃんが元気になってくれて助かったわ。」

「もう大丈夫です。心配かけてごめんなさい。」

叔父も叔母も今日は上機嫌だった。
きっと圭さんの仕事がうまくいったからだと思う。

「圭　本当によくやってくれた。
おまえは私の誇りだよ。いい義弟をもって私は嬉しいよ。」

叔父の笑顔はめずらしい。
今日は本当にご機嫌がいいんだと思った。

「みんな頑張ってくれたから。
もともと俺たちのプランが甘くて…もっと勉強しないと
義兄さんに迷惑かけたから申し訳ないよ。」

今夜はとりあえず楽しい食事になるんだろうと私は思っていた。

「勉強好きな変わりものさん　おかえり。」睦月がつまみ食いをした。

「あら　これお客様用だから　睦月のはこっちだよ。」

「いいじゃん～。お客さん　来たよ。」

その時リビングの入り口に　数人の人達が入ってきた。
その中に・・・プリクラにうつっていたあの女の人もいた。

「ほら…あの人だよ。圭くんと一緒にいた人。
絶対　怪しげだよな～メッチャお似合いだもん。」　睦月はそう言うと自分の部屋に入って行った。

「おじゃまいたします。」

美しい黒髪が輝いていた。
そして実物も驚くほど　キレイな人だった。

裏切りの代償～七十八話～

「座りなさい。よく来てくれたね。
わが社の誇る優秀な社員たちだから。今日は
思い存分食べて飲んで行ってくれ。」

「すみません・・・言葉にあまさせてもらいます。」
男性社員が三人　そしてあの女の人……

「そうそう・・・
これが私のあいする妻でそれから　長女の華子もう一人息子がいる
んだけど・・・」

「さっき玄関でお会いしました。
社長に似て　イケメンですね。」男性社員が恐縮しながら
叔父に酒をついでもらっている。

私が料理を運んでいると
私のことの紹介はないのかと不思議そうな顔をした。

「お手伝いさんですか?」

シノさんと私を見てそう言った。

「……そうだ。」叔父はそっけなく流す。

お手伝いとしか言えないだろうな……

身内の子なのにこうやってお手伝いみたいなことしてたら
叔父の人格が疑われるし。

社員は叔母に向かって挨拶をし始めた。

そして

「松下　真理絵と申します。」あの人が頭を下げた。

「松下さん…優秀な女性が圭のサポートをしてくれているって
主人から聞いていますが…いつもお世話になってます。」

「そんな…お世話だなんて…
私の方こそ　日高さんにはお世話かけてばっかりで
今回のミスも元はと言えば私の責任ですが　日高さん始め課の
みなさんに助けられました。

こちらの方こそ感謝しています。」

一瞬の見かけだけでも　この人の魅力は充分に伝わってくる。

「圭は　こうと決めたらそれが間違っていても曲げない
頑固なところがあるので　みなさんにもやりずらいところは多いと
思いますがどうぞよろしくお願いします。」

叔母は深く頭を下げた。

「いえ…いえ…そんな奥さま……
日高くんはとても優秀で…僕たちこそ支えてもらうことが
多いのですから…。」

「そう言ってくれると本当に助かります。
圭には親がいなくて私が育てて来たようなものなので…私も若くて
いたらないことたくさんあって　今思うと反省と後悔ばかり
圭がまともにこうして生きてくれるのが奇跡だと感謝してます。
姉というより…母みたいなもので……。」

叔母の目がとても優しく感じた。

いろんな事情で　弟を育ててきた姉

圭さんにとっても叔母は大切な人なんだろう。
でもそんな叔母を圭さんは　裏切って私と愛を誓った。

優越感と・・・
そしてその優越感を覆しそうな後悔が私を襲っていた。

「おじさま・・・私を紹介してませんけど。」
凛が起こった口調でそう言った。

「あ…すまん凛…」

叔父が話そうとしたら

「板垣　凛　です。　営業部長の板垣　洋一の　娘です。」

「あ・・・板垣部長の・・・」

社員たちは急に焦ったように頭をさげた。
多分　みんなに煙たがられる存在なのは間違いない。

「私は物心ついた頃から　圭くんが好きです。
その気持ちは今もどんどん膨らんできています。
だから私は数年後　圭くんが一人前になった時　結婚しますから。
それまで悪い虫がつかないように
みなさんで守って下さいね。」

上から目線の生意気ないい方に
社員たちも一斉にひいてしまっていた。

凛は感がいい。

それからまっすぐに　松下さんを見て

「よろしくお願いします。」と言った。

凛にとっても　危険人物なのがわかったのか……
それだけ松下さんは魅力的な女性だった。

華子もいいたげにしていたけど　叔父が

「仕事の話だから　おまえたちは部屋に行きなさい。」
それを見透かしてか強い口調で言ったので
二人は渋々部屋に戻って行った。

「ごめんなさいね。

なんだか二人で圭のこと取り合っているうちに
何か勘違いしてしまったようで困っているのよ。」

「日高くんはキレイな女性に囲まれて暮らしているから
理想が高いのかな?」

一人の社員がそう言って圭さんをからかった。

「ある意味女性恐怖症ですよ　俺。」

圭さんはうまく流した。

「ありがとうございます。」私が料理をテーブルの上に置いたら
この上もない笑顔で松下さんが微笑んだ。

香水の香りが心地よく鼻をくすぐった。

「旦那さま　シノはそろそろおいとまさせていただきますが…」

シノさんが背中を丸くしてやってきた。

「あ…そうだったね。今日は悪かったね。
急なことで忙しい思いさせて……。」叔父が言った。

「あとは…幸にやってもらうからシノさんは帰りなさい。」

私が付き合うの…？

これ以上松下さんを見てるも辛い・・・・。
余計な嫉妬で落ちこみそうになっていた。

清楚で教養があってそして美人でスタイルがいい……。

叔父たちはこの人と企みを抱えているんだ。

裏切りの代償～七十九話～

話が盛り上がって私から見るとそこは別世界。
自分の考えを熱く語る圭さん

それを見つめる　叔父と叔母の温かいまなざし
そしてきっと松下さんは

圭さんに恋をしている

それがはっきり私にはわかった。

途中氷を取り換えたり　おつまみを足しに行ったり
私がここにいる意味・・・・

情けなかった……。

私はお手伝いでしかない
あの熱く語るあの中に入って行くことができない

そう考えると
私と圭さんの距離は大きく

いつもそばにいる松下さんは私より数倍　いろんな表情の圭さんを

知っているんだ

哀しくなる。

愛してるのに

裏切った・・・・・・。

スキがあった……。

圭さんに愛される資格があるんだろうか……。

圭さんを想う気持ちだけは純粋でありたいと思っているのに……。

「これ・・・・。」

ふり向くと　松下さんがグラスを持ってきた。

「氷いただける?」

「はい……。」なんだかドキドキしたこの人には負けたくないって

「日高さん　いつものでいいですか?」

いつもの・・・・

「ああ　ちょっとジュース多めにして。」

「昨日もずい分酔ったから　その方がいいですよ。」

昨日は…酔ったんだ・・・・

「圭　いい方がそばにいてくれて私も安心だわ。」

叔母がこれ見よがしに言った。

「会社でも松下さんは人気あるんですよ。
でも・・・・なぁ～～」

男性社員は顔を見合わせて笑った。

「何?何ですか?」松下さんは慌てて駆け寄った。

「日高くんとお似合いだから～～～なぁ～～」

みんなが爆笑した。

「もう～やだわ～～そんなこと言って
日高さんに迷惑だから……。」

カワイ子ぶりっこ…

「圭　いいんじゃないか?真面目に考えてみたら。」叔父がとうとう企みを決行し出した。

「社長～やめてください～～」松下さんが頬をおさえる。

圭さんと一瞬目が合って　私は下を向いた。

「松下さんは素敵な人だけど
俺には決めてる人がいるから……。」圭さんの言葉に周りが凍りつく。

「日高さん恋人がいるって…
酔うとその人のこと少しだけ教えてくれるんですよ。

うらやましいな…って思うくらい大切に想ってるみたいで……。」

松下さんの言葉に　男性社員たちが

「初耳だぞ～～～。俺らはてっきり松下さんといい感じなのかなって噂してたんだけどな。」

私はおそるおそる叔父と叔母を見た。

二人はすごい顔をしていた。
怖いくらいに…きっとその恋人を憎んでるんだろう。
それが私と知ったら
憎しみは倍増するに違いない。

「もしかして…まさか…部長の娘さん…ってことないよな?
今回帰る前に
めちゃめちゃ可愛いパジャマ…買ってたじゃん……。
俺はてっきり松下さんにプレゼントするのかなって思ってたからさ…
あれはその彼女へのプレゼントだったりして?」

みんなが酔ってるから会話が弾むけど
叔父と叔母　そして松下さんだけはとてもそんな楽しい空気じゃない。

「いつ見たんですか!?

やだな～～～それってプライバシーですからね。」

圭さんが少し照れながら笑った。

圭さんを見つめる

三人の顔が　氷のようで…怖かった。

「圭　松下さんは女性だからちゃんと送って行きなさい。」

帰り支度を始めた圭さんたちに叔父が言った。

「わかった。」圭さんはそう言った。

「付き合わせて悪かったね。」

圭さんがグラスを下げに来た。

「いえ……。」

「明日からやっと余裕が出るから…また連絡して。」

小さな声で圭さんが言った。

「はい…。」私は圭さんの顔も見れなくて
先に男性社員たちが帰って行った。

「松下さん　タクシー来たよ　行こうか。」

圭さんがそう言うと　美しい微笑みで
「おじゃまいたしました。」と頭を下げた。

二人が去ってから　叔父と叔母は私にコーヒーを入れてくれるようにいった。

「どうぞ。」

「幸　今日はもういいわ。ありがとう。」

「はい。洗いものだけ片づけたらあがります。」

私はキッチンに戻って洗いものを食洗機にしまった。

「あなた　松下さんいいお嬢さんね。
圭のそばにいてくれたら理想的ね。」

「親御さんもしっかりした方だし　彼女も圭には好意を寄せている

ようだ。
何より似合いの二人だろう。
ああいう女性と一緒になれたら　圭はきっと幸せになるよ。」

「でも…あの子いつのまに恋人なんて……
大学だって地方だし…本当にそんな子いるのか……。
何を考えてるのかわからないわ。」

「どっちにしろ圭には松下さんと結婚させる。」

叔父はそう言い切った。

圭さんを物扱いしてる。
それもやっぱり恩という呪縛で圭さんをしばりつけている。

私と圭さんはもしかしたら　同じなのかもしれない。

「言う事聞くかしら。」

「聞くさ。あいつはきみを大切に思っている。
感謝の心を忘れていない。
彼女との結婚が　圭にとっても俺たちにとっても絶対に幸せなことなんだ。
悪い虫が動きださないうちに話を進めて行こう。」

悪い虫って私のこと・・・？

「幸。」いきなり名前を呼ばれて驚いた。

「進学しないのか？どうするんだ？
こっちにも用意というものがある突然いろんなこと言われても対応できなくなるぞ。」

「就職します。」思わず声を大にした。

「就職？」叔父の声が驚いている。

「いつまでもお世話になるつもりはないので…
学業に関しては　充分感謝してます。
早く自分で生きていける力をつけたいので…就職希望を出しました。」

「そうか。」叔父は今度はそっけなく言った。

「おやすみなさい。」

私は頭を下げてリビングを出て　とうとう

ここから出ることを言ってやったと　足元が震えていた。

引き裂かれる心～八十一話～

次の日の朝　公衆電話から裕也に電話した。
何度もためらいながら……
でも聞かないことには前に進めないから

「舞ちゃん？驚いたよ。
目が覚めたらいないんだもん。」

「あの・・・あのね…朝　私裸だった・・・もしかしてあなたと……。」

言葉が見つからなかった。

「覚えてないのかい？」

「ごめんなさい　私かなり酔ってたから……。」

裕也からはかれるだろう真実が怖くて声が震えた。

「舞ちゃん？」

「あ・・・はい・・・。」

「なんかあの夜の舞ちゃんとずい分違うけど……。」

「すみません酔ってて調子にのってました。
大事なことなんです。何も覚えてなくて……。」

「そっか。ごめん。不安にさせたんだな。
舞ちゃん　めっちゃノリいいから　俺はその気満々だったんだけどさ…
服脱がしてる間中　他の男の名前をずっと呼ぶから…
やる気うせちゃって……そうしてるうちに完全に寝ちゃうし…
それで俺はふて寝したってとこかな。
とりあえず俺は大人の男だし…ムリなことはしたくないから……。」

「よかった……。」安堵が広がった。

「彼氏がいるんだろ?」

「はい…いろいろあってなんだから苦しさから逃れたいとか
思ってしまって…メイクで別人になった気になって…恥ずかしいです
ごめんなさい……。」

「だから俺言ったよね。
きみにはあの化粧は似合わないってさ。」

「はい…ご迷惑おかけしました。」

「今度はきみらしいメイクをしてみたいな。」

裕也がいい人でよかった。
完全に疑いがはれたわけではないけど　裕也の言葉を信じてもいいと思った。

「自信を持って　きみはとても魅力的だよ。
きっと背伸びしなくても……今のままで……。」

自分にとってはいい経験だと思った。
愛する人を裏切るという行為がどんなに後味の悪いことか……
そして何も埋められないから

圭さんのまっすぐな愛の中で私は
不安でも辛くても　抱きしめてもらえる瞬間のために…
私は圭さんの部屋に向かって走り出した。

少しでも……会いたい

解放された喜びが私を優しく包んでくれた。

引き裂かれる心～八十二話～

部屋の前で一応インターフォンを鳴らした。
しばらく待ったけど出てこない
鍵を開けて部屋に入る。

「圭さん・・・・？」

部屋には出張のカバンの中から　洗濯物を出した形跡と
それから多分私に買ってくれたというプレゼントと思われる箱

真っ赤なリボンが可愛かった。

同僚の人が「可愛いパジャマ」って言ってた。
早く開けたい気持ちを我慢してその箱を抱きしめた。

「まだ・・・寝てるのかな…。」

シャワーに入った形跡もないので私は
静かに寝室のドアをあけた。

「圭さん？まだ寝てるの？」

圭さんはいなかった。
ベットも私がなおしたままで片付いている。

「圭？」部屋の中を一通りにみたけど圭さんはいない。
というより帰ってきてる形跡がなかった。

昨日・・・松下さんを送っていって

不安が胸一杯になった。

松下さんと何かあったのかしら……。
携帯電話に電話をかけようと思ったけど…怖くてやめた。

とりあえず学校に行かないとと思って
部屋を出てマンションを後にした時だった。

マンションの向かいの
コンビニで立ち読みしていると　赤い車がマンションの前に停まった。

何気に見てるとそこから　圭さんが飛び出してきた。

圭・・・・・

圭さんは赤い車に手をあげて猛ダッシュでマンションに入って行った。
赤い車の人は誰なんだろう
不安な気持ちで押しつぶされそうだった。

半分わかってる…でも違うって思いたい。
もしかしたら友達か何かで……。
心の中で必死につぶやく。

確かめなきゃ

赤い車に目を凝らしているとコンビニの駐車場に入ってきた。

そして運転席から降りてきたのは　皮のコートを羽織った松下さんだった。
きれいにお化粧して髪の毛は後でまとめていて
大人の女を醸し出している。

心が粉々に壊れた音がした。

一緒だったんだ。

私は松下さんに見つからないようにして隠れて歩いた。

松下さんはとても嬉しそうに見えた。
携帯を出して　電話をしだした。パン売り場で少し迷っているようだった。

「あ…松下です。
朝食食べる時間ないんじゃないですか？
日高さんのはまってるパンあるから　買って行きますね。
遅刻しないように…え？…そうでした…。
すみません……はい…いえ…かえってありがとうございました・・・・。」

電話を切ると　圭さんがはまっているというパンを買って
それからいつも圭さんが飲んでいる缶コーヒーを二つづつ買って
コンビニを出て行った。

圭さん　このパンにはまってるんだ……

涙がポロンと落ちて　自分でも驚いた。

学校行かなきゃ……

もしかしたら何か理由があって　松下さんと一緒だったのかもしれない。
圭さんは私を裏切らない。

だから圭さんに言われたこと…信じよう……。

一日中上の空だった。
授業も身に入らずに…思い出すと涙があふれてきた。

「幸?具合悪いの?」友達が心配してくれた。

「今…優しくしないで……。」哀しくて顔を覆う。

何もなかったとはいえ　男の人についていって裸で朝を迎えた私よりは
絶対圭さんは　悪いことしてないから……
自分のこと棚にあげて……
圭さんは絶対に嘘なんかつかないから……

「幸・・・・・。」友達が頭を撫ぜてくれた。

「泣いていい?」

「いいよ。胸かしてあげる。」

私は友達の胸の中で思いっきり泣いた。

きっと神様が罰を与えたんだわ。

私があんなことしたから…

だから我慢しなきゃ…忘れなきゃ…きっと圭さんが

「幸は心配症だな」そう言って抱きしめてくれるから……。

引き裂かれた心～八十三話～

しばらく圭さんに会う気になれなかった。
また　いなかったら
そう思うと　怖くてとても部屋に行くこともできなくて
真実を知るのが怖くて目をそむけていた。

華子もすこぶる機嫌が悪かった。

「華子　聞いてるの？」叔母が聞いた。

「・・・・・・。」

「華子　おかあさんが話してるんだぞ。
なんとか言ったらどうなんだ？」

「・・・・・・。」

「華子！！」叔父が声を荒げる。

「企んでるんでしょ？凛が言ってたわ。
あの松下って女を　圭くんの彼女にしようってそういう魂胆らしいわね。
あの女もしおらしいわ、
そんなこと全然考えてませんみたいな素振りして
圭くんに近づいてるんだから。」

「圭はあきらめなさい。」

「やだ。勝手に身内にしたんじゃない。
圭くんは私の運命の人なんだから！！」

「圭の運命の人は華子じゃないのよ。
圭にはそんな気はまったくないんだから。」

叔母が困ったように華子に言った。

「圭くんに女としてみてもらう。
そしてちゃんと考えてもらう。」

華子は顔を覆った。

華子は可哀そうだと初めて思った。
最初から恋から除外されて少しの期待も持てない。
まだ凛の方がマシかもしれない。

華子が顔を覆った。

「どうして私だけ圭さんと恋しちゃいけないの？
凛にだって恋する資格はあるのに……
ひどいよ……おかあさまのせいよ……。」

華子が可哀そうだった。

華子を見て切なくなった。
恋をする資格

私と圭さんは……結ばれるんだろうか……
それとも……。

週末　圭さんがやってきた。

家の中には誰もいなくて　シノさんは買いものに出ていた。

「何してた?幸。全然来ないから……こっちから来てしまった。」
いつもの圭さんがそこにいる。

「幸?どうした?」

「圭さん……あの日…朝電話したけど出なかったよ。」

「あの日?」

「ここで会社の人と飲んだ次の日……。」

一瞬圭さんの顔がとまった。

「電話したの。出なかったよ。」もう一度言った。

心臓がドキドキしていた。
圭さんの言葉を受け入れる準備をしている、

自分も後ろめたいから

「あ～あの日か。
俺さ　仕事やり残してて…早くに出勤したんだ。
出張先で足りなかった書類もあったし。ごめん。
心配かけちゃったね。」

よそよそしい嘘に聞こえた。

「お仕事だったんだ。」

「忙しくてさ。」

「松下さんも一緒?」

「松下さん?なんで一緒なの。」圭さんがとぼけた。

「そうだよね。ちょっと心配しただけ
あの人キレイな人だったから…叔父さんたちもなんだかすごく
気に言ってたから。」

「彼女は　義兄さんの知り合いの娘らしよ。」

そうか　ならお見通しだもん

「キレイな人だよね。」

「そうだね。ってそんな話はどうでもいいんだけど……」

圭さんは私を強く抱きしめた。

嘘つき　圭さんのバカ

「抱きしめたかったんだ。」

「圭さん…ここはまずいよ……。」

いつもの圭さんじゃなかった。
荒々しい息が私の耳元にかかる。

圭さんは私を抱き上げて　階段を登った。

「圭さん　シノさんも帰ってくるよ……
ダメだよ……圭さん……。」

さすがに私も慌てた。

圭さんは自分の部屋の使っていないベットに私を押し倒して
まるで別人のように私に覆いかぶさった。

「け・・・圭さん!!やめて!!」

私は思わず大きな声で叫んでいた。

引き裂かれた心～八十四話～

「変だよ。圭さん。
何かあったの？」

圭さんはハッと我に帰った顔に戻った。

「ごめん…ほんとごめん…。」

そう言うと私をベットから起こして乱れた髪を直した。

ごめん……

私の聞きたいのはそんなごめんじゃない……。

正直に話して……
嘘　つかれるほうが不安だよ。
隠そうとしないで…ほんとのこと言って……。

「クリスマス・・・になっちゃうな。
友達の名前使って…また少しでも一緒にいれないかな。」

私が聞きたいのはそんな言葉じゃない。

「・・・ムリ・・・・。」私は思わず横を向いた。

「そ…そっか…そんなに嘘つけないよな。」

圭さんがついてるんじゃない……。

私だって…ほんとのこと話すよ。
あの日のこと……。

だから…
私に嘘つかないで……
松下さんと一緒だったの…知っているんだから……。

「じゃあな……。
次に会う時まで　機嫌なおしておいてね。」

圭さんが私の頬にふれた。

圭さんの嘘つき

私は圭さんの目をずっと見ていた。
圭さんはそんな私の目を　避けるように目を伏せる。

「幸の目　なんか怖いな。
俺を読もうとしてるだろう?」

「読む?意味わかんないです。」

「いや…なんでもない…。
怒らせたならごめんな。」

圭さんは階段を降りて行った。

「キライ・・・圭さん……。」

だけど…だけど…

愛してるの……。

私は圭さんのベットをなおして　慌てて後を追った。

圭さんが玄関で靴を履いていた。

「待って!!!」私は叫んだ。
圭さんがふり向いたと同時に慌てた私は階段から　足を踏み外した。

ダダダダ・・・・・

階段のカーブの踊り場で止まった。

「いたいた・・・・。」私はお尻をおさえた。

「大丈夫か!?」圭さんが慌てて階段を登ってきて

「うん…でも…お尻……いたた……。」力が入らないけど
なんだかおかしくなって
私は急に　ゲラゲラと笑いだした。

「あははは・・・何してんだか…あはは…」

笑いながら涙が出る。

痛い涙なのか…それとも恥ずかしいのか……それとも
圭さんの嘘がショックなのか……

圭さんが私を抱きしめた。

「バカだな……。
危ないじゃないか……。」

「ごめんなさい…あはは……
なんか…わかんないんだけど……笑いがとまんない…。
だけど…嘘はダメだよ……。
私も…圭さんも　嘘ついて隠しちゃダメなんだよ……。
だから…哀しい気持ちになっちゃうのかもしれない……。」

「幸？」

「信じてるから……だから嘘はイヤ……。」

圭さんは私を強く抱きしめた。

そしてひさしぶりに熱くて甘いキスのシャワーを私に注ぐ。

唇が離れるたびに圭さんの息が荒くなって

「愛してる幸…」何度も何度もそう囁いては　またキスをした。

「結婚しよ……。卒業したらすぐに……。
ここを出て……二人でどこか遠くに行こう……。」

耳にかかる髪の毛をかきあげ　耳タブを噛む……。

「ヤン……。」

「いいな?幸……なるべく早く…誰にも見つからないところに……
俺と二人で逃げようね。」

「はい……圭さんとだったら
地獄でも…ついて行きます……。」

圭さんが私を強く抱きしめて・・・・時が止まった。
背中を抱く腕に力がこもった。

「圭さん・・・?」

また圭さんの腕に力がこもる。

「け・・・?苦しいよ…どうしたの?」

その時　私たちは一気に地獄におちた。

「おまえたち　何してんだ!?」叔父の声
私は体が硬くなっていくのがわかった。

「圭!?
おまえ……いったいどういうつもりなんだ?」

「幸…大丈夫だよ。
俺が……守るから……。」圭さんは私の耳でそうささやいた。

「圭!?何とか言いなさい!!」叔母の声がヒステリックに聞こえた。

叔父と叔母にみられるなんて……

「離れてよ!!圭くんから離れて〜〜〜〜!!!」
華子の悲鳴が響き渡る。

華子もいたんだ……。

次の瞬間　私の復讐心に火がついた。
長い間私を　ないがしろにしてきたあなたたち

愛する圭さんと私のこんな姿を見たら
さぞかしショックでしょうね。

圭さんの胸に顔を押しつけて　私は優越感に　微笑んでいた。

引き裂かれる心～八十五話～

絶体絶命の姿を見られてしまった私たちを
板垣家の人たちが鬼の形相で見ている。

どこかで私は
他人事のようにそれを見てる。

今まで虐げられてきた　私の復讐心が
こういう形で遂げられるとはあまりに突然のことで　自分でも
どうしていいのか戸惑って入る。

リビングは重苦しい緊張感

その後帰ってきた　シノさんが何があったのかと
心配そうに見ていた。

そして睦月も帰ってきて
それから華子が呼んだ　凛も駆け付けた。

凛はものすごい足音を立てて私の前に立ちはだかって
頭を思いっきり叩かれた。

「だから…だからあんたが大嫌いだったんだわ。
可哀そうな子のふりして　圭くんに近づいたんでしょ？」

凛の目からは涙が流れだした。

「圭くん…ひどいよ。
こんな裏切り方ってある？
ここは私と華子の城なのに……こんなことしてるなんて……ひどいよ…。」

圭さんの表情が苦しそうだった。

「大丈夫か？」私の頭を優しく撫ぜてくれて

「暴力はやめろ。
俺の大切なものに傷をつけるヤツは
おまえたちでも　許さない。おぼておけ。」ときっぱりと言った。

「圭・・・・。この場に及んでおまえってやつは……。」
叔父も声が震えていた。

「こんな形で俺たちに…返すっていうのがおまえは何とも思わないのか圭?」

「すみません。裏切っているとはわかっています。だけど…大切な人を自分のものにしたいって気持ちは義兄さんだってわかりますよね。ねえさんを自分のものにした幸せな気持ち俺だって幸を自分のものにしたいって思ったから。」

「それがなんで幸なんだ?」

「幸と結婚するつもりです。卒業したら二人で遠くで暮らすともりです。義兄さんやねえさんの目につかないところで。」

「何を言ってるのかわかってるのか?今まで俺たちがおまえのために注いできた愛情をおまえは踏みにじるのか?こんな結末のために　俺はおまえを大切に育てて来たのか?」

「俺にとって幸は運命の人です。

いろんな偶然の中で　幸は俺の心にすみついて
俺はやっとこうして幸を手に入れた。
だから絶対幸と離れません。
たとえ二人から縁を切られたとしても。」

うれしかった。
こんなに正々堂々と私を愛してくれることを
この場で言ってくれて……

さっきまで松下さんのことで不安で一杯だった雲が晴れて行く……。

「なんで・・・なんで幸なの？
うちらこうして同じ年で…どうしてうちらを見てくれないのに
幸を女として見たの？
うちらと何が違うの？
同情は愛じゃないよ圭くん。
可哀そうで哀れな幸にただ同情しただけだよ圭くん
目を覚ましてよ。
圭くん　優しいkら　惑わされたんだよ。」

華子の声が消えてしまいそうだった。

「違うよ華子……。

俺が一番先に好きになったんだよ。
俺は…幸がまだ赤ちゃんのころ一度あってるんだ。
その時俺の目をじーっと見ていた幸の瞳のきれいさを
忘れられなかった。
俺の心を一瞬で…洗ってくれたんだ。」

圭さんの言葉に私も驚いた。

「え?私と会ったことあるの?」

圭さんは優しい微笑みをくれた。

「あの頃から…俺はずっといつか幸を手に入れたい
そればかりを考えてきた。」

その時

叔母が私たちに向かって　テーブルの上にあった林檎を投げつけた。

「この…泥棒猫……。
おまえは…母親と同じことするのね……。」

いつも穏やかで麗しい叔母が鬼のような形相に変わっていた。

母親と同じ？

「圭まで奪う事は絶対に許さない……。」

叔母の声に家族中が　冷え切った。

「殺すわよ。幸・・・・・・。」

叔母が静かに近づいてきて　私は恐ろしさで圭さんにしがみついた。

「ねえさん…やめろよ。
もう幸には関係ないだろ。」

「痛……！！！」

呪いの傷跡が　激しく痛みだした。
今までかつて経験のない痛みが私を襲う。

「死ね……。幸……。
あの女の面影を持っているおまえは一生幸せになれないんだ。」

痛みの中で　立ちはだかる叔母の姿に　昔…会ったことがあると思った。

引き裂かれる心～八十六話～

「大丈夫か？痛むのか？」

圭さんが私を覗き込んだ。

「逃げる気？」叔母の容赦ない言葉の矢が突き刺さる。

私はこれみよがしに圭さんにしがみつく。

「ムカツク……」凛が叫んだ。

「ごめん…なんと罵られても俺の幸への想いは
変わらない。ねえさんや義兄さんには感謝してる……。
だけど…幸をあきらめることはできない。
守ってやりたいんだ。
ねえさんが…幸に呪いをかけたあの日から俺は　幸が忘れられなくなった。
幸への罪悪感で…俺はまだ子供だったけど
呪いを背負った幸が可哀そうで仕方がなかった。
壮介さんが…交通事故で亡くなったのを知った時は
全身の震えが止まらなかった。
幸へ…どうつぐなえばいいのか…そればかり考えていた。」

圭さんの言葉に私は衝撃を受けた。

呪いをかけたのは……

「義兄さんが幸の身内だということもあって何度も施設にいった。
もちろん義兄さんと壮介さんの関係が最悪だったのも知ってる。
だから幸を遠くで見るだけだった。
孤独な小さい幸を抱きしめたくて仕方なかった。
壮介さんがいたらきっと…幸は壮介さんに似て
笑顔の可愛い女の子だったに違いない。
ねえさんの呪いに効力があるとは思わなかったけど
でも幸が一人ぼっちになったのは俺にとってもショックなことだった。
隠れて何度も通ううちに…俺は幸に対して
特別な感情を抱くようになって…怖かった。
幼い幸を俺が絶対に幸せにしてやりたい　そんな対象で見る自分が…
義兄とねえさんを裏切ってる気がして
だから…逃げたんだ。
あの日…おこづかいをためて買った　ピンクのランドセルに……
俺の変わりに幸の友達になってくれと　念をこめてプレゼントした。
ランドセルを背負って楽しそうに一人ごとを言う幸を見て……
嬉しかった。
俺の変わりに…しばらく幸を頼む
そう後姿に声をかけた。」

「ランドセル?ランドセルは圭さんが?」私は驚いた。

「そうだよ。

昔壮介さんが言ったんだ。

『俺は女の子ができたら　ランドセルはピンクだな』って。

壮介さんは自分がランドセルを買ってもらえなかったから…って話
てくれた。

明るくなった幸を遠くで見てるだけでよかった

そのまましばらく遠くに行けば…何かが変わると信じていたけど

旅立つ前日…もう一度だけ幸に会いに言った。

幸は泣きながらあの道を歩いてきた。

大きな・・・大きな泣き声だった。

胸が潰れそうだった。

幸の泣き声が　胸に突き刺さって…俺はとうとう

幸の前に姿を現してしまった。」

あの淡雪の降る日・・・・・・。

私は…王子さまと出会った。

王子さまはきっとまた会えるよって…そう言ってくれた……。

痛みに耐えながら私は次に圭さんが言う言葉に集中していた。

「あのピンクのランドセルは…やっぱり幸だったんだ。」

凛が声を荒げた。

「圭くんの部屋にあったランドセル……

まさか幸だとは思わなかったけど　入学して幸が背負ってるランドセルを見た時

なぜか憎しみが湧いたのは……

あのランドセルを……圭くんが幸にあげたからなのね。」

王子さまが・・・圭さんだった……。

「圭さんが…あの時の王子さまなの?」

目が潤んで圭さんが見えなくなった。

「そうだよ。幸は俺の顔　すっかり忘れてしまってたんだね。

まだ小さかったから…仕方ないけど……

いつか話そうと思ってたんだ。

幸が俺を愛してくれるずっとずっと昔から…幸を愛してしまったんだ。

赤ちゃんだった幸をずっと見てきた。

これから先も絶対に…この想いは変わらない。
たとえお世話になった義兄さんやねえさんに……罵られても
長い年月をかけて幸に注いできた想いは
誰にも止められない……。」

圭さんの言葉に　心が洗われて行く。
私と圭さんは　結ばれる運命だったんだ。

「許さないわよ圭……。」叔母がつぶやいた。

あの日私に呪いをかけて　この傷を残したのは叔母・・・・・・
恐ろしさに私は圭にしがみついた。

「こないで……悪魔……。」

私は叔母に叫んだ。

「幸…ねえさんをどうか許してほしい……。
壮介さんを愛してたんだ…深く……愛してたんだ。」

圭さんが言った。

「離れてよ…ヒック…ヒック…圭くん…やめて……。」

華子の嗚咽に振り返った。

「その女から離れて……お願い…ヒック…。」

「ごめん…華子……。
俺は……幸しか愛せない。
華子は大切な姪っ子だから…可愛くて愛しい天使だから
女とは思えないんだ。」

「死ぬから……。
圭くんが…悪い……。
圭くんが幸と一緒にいるって言うなら　そんな圭くん見たくない。
死んでやるから…
そして今度は私がおかあさまの変わりに呪ってやる……。」

華子はそう言って部屋を飛び出した。

「華子！！！」

言葉通りのことを　華子は実行した……。

歩道橋から飛びおりたんだ……。

引き裂かれる心～八十七話～

「おじょうさま　命はとりとめたって……。」

シノさんからの電話をきったナオさんが言った。

「そうですか。」

あの後　追いかけていた叔父と睦月の目の前で　華子が
歩道橋から飛び降りた。

叔父が身を呈して　華子を守り　車にひかれることはなかったけど
華子は意識が戻らなかった。

「どうするの？これから……。」ナオさんが言った。

「ここにはもう…いられないから……。だけど…どうすることも
今の私にはできない……。もう少し大人だったら……。」

「ここはもう幸ちゃんにとっては地獄だからね。
圭さんのところに行くしかないでしょ……っていっても

おじょうさまがそれを体を張って阻止した感じだね。」

華子は卑怯だと思った。
きっと…そう……

いろんな事実がわかって私の頭の中はごちゃごちゃになっている。
ただ…私の生れる前の過去に
何かがあって…

私の父と叔母
父と叔父……

そして父と圭さん……

もっともっと奥深いところからからまって…
今があるんだと知った。

だから叔父は私につめたく…圭さんは私を愛した。

そして叔母は　あの日赤い爪を私にたてたんだ・・・・・・。

電話が鳴ってナオさんが

「幸ちゃん　圭さんからだよ。」と受話器をくれた。

「もしもし……。」

「幸……ごめんな。
俺が……軽率だったばっかりにみんなに知られてしまって
華子もこんなことになってしまった。」

「圭さん……私はまだいろんなことを知りたいの。
私が生まれる前に　からまった糸を……。」

「わかってるよ。幸にはしっかり話すつもりだった。」

「華子のことで…責められてるんでしょう…。」

「俺のやりかたが子供だったから…華子を傷つけてしまった。
幸を巻き込んでしまった。
何やってんだか…俺……。
今まで守ってきたのに…こんな形になるなんてさ……。」

「私はどんなことがあってもついていく……。

恨まれようが呪われようが…圭さんと私は運命なんだもん。」

私は自分にも言い聞かせた。

これから何があっても絶対に離れない……。

そう誓う。

「俺も…覚悟したよ。
どんなに恨まれても蔑まされても…大切なものを裏切っても
幸だけがいればいい……。
一緒に逃げよう幸……。」

「うん……私も圭さんがいればいい……。」

私はナオさんが帰るのを待って　家を出ることにした。
とりあえず荷物をまとめているとランドセルが出てきて強く抱きしめる

このランドセルは…圭さんと私をつないでいたんだ。

「じゃあね…幸ちゃん
きっと旦那さまが帰ってきたら　いろいろ責められるとおもうけれど…
私も想像するだけで辛くなるわ。」

「すみません。ナオさんにもシノさんにも迷惑かけて……。」

「シノさんとも言ってたの。
幸ちゃんがここに来てからずっと…可哀そうな思いしてたから
幸せになれるといいねって応援してるのよ。」

思いがけない言葉に胸が熱くなる。

「二人には優しくしてもらったから…いろんなこと教えてもらって…
だからきっとお嫁にいっても大丈夫です。」

「真面目に生きてればきっといいことあるから。」

そう言ってナオさんが帰って行った。

私は急いで荷物を降ろして　玄関で靴をはいた。

早くここから……出ないと…

ドアを開けて自由になろうとした瞬間だった。
私はあの日の思い出が鮮明に蘇ってきた。
恐ろしくて言葉も出ない。

叔母があの時と同じ顔をして立っていた。

「幸せになれないって言ったでしょう幸……。
私の呪いはとけてないんだから……。」

冷たい微笑みで私を家の中に突き飛ばす。
そして

「この爪でその顔に・・・傷入れようか?」と言った。

私は恐ろしさで震えていた、

殺される……。

叔母は私のジャンバーの襟元をもちあげて私を家の中に引きずり込んだ。

「話はまだ…終わってないからね。」

ガタガタと歯が震えた。

第二章～八十八話～

叔母が気味の悪い微笑みで私を見下ろした。

「おまえが幸せになるのは許さない……。
私の宝物の圭をたぶらかしてたなんて…本当におまえは母親と同じだね。
壮介も圭も……そして華子からも……こんな形で大切なものを奪おうとするのは
絶対に許さない……。」

叔母はそういうと不気味に笑った。

冷たくそして怖いほど美しい微笑みで私の頬を打った。

「キャ……。」私は床に転がった。

「今のは…華子から……。」

叔母は転がった私の横腹を蹴りあげた。

「や…やめて……。」

殺される……

私は恐怖感で一杯になった。

「これからは私の分……壮介は……私の恋人だった。
将来を誓い合って……人生を一緒に歩く夢を見ていた。
それなのに……おまえの母親が出てきて私の人生を変えてしまったんだ。
おまえの母親は卑怯で最低の女だった。」

叔母は私の背中を踏みつけた。

「ママのことそんな風に言わないで！！
私のママは明るくて元気で…いつも笑顔で…それにそんな
ママをパパはたくさん愛してて…だからうちはいつも幸せだった…。
」

恐ろしかったけど大好きな母を侮辱するのは許せなかった。
私は抵抗する。

背中を思いっきり踏まれてまた悲鳴をあげた。

「そこにいるのは…私だったのに…
壮介に愛されて…子供を産んで…毎日笑顔でいるのは
おまえの母親じゃなくて私だったはず……。」叔母の顔には表情もなくなった。

「私は壮介を愛していた……。」

叔母はそういうとソファーに深く腰をかけた。

「静……。もうやめなさい。」後を振り返ると叔父が睦月と立っていた。

叔母は激しく動揺し始めた。

「大介……。」

「わかってるよ。きみが…今でも壮介を忘れられないこと……。」
叔父は優しく叔母の肩を抱き寄せた。

「ごめんなさい…ごめんなさい……。」

さっきまでの鬼が　叔父に抱きしめられて子供のように泣きじゃくる。

私と圭さんが生まれる前……

ずっとずっと前に何があって　今　私はこんな境遇なのか……

過去の扉が開かれた。

昔・・・昔・・・

大きな会社を経営する父
夫の愛人の存在に　苦しめられている母

その二人から生まれた　叔父と父

大介と壮介

双子で生まれた二人にいつ憎しみが芽生えて
一緒にいるはずの兄弟が離れ離れになったのか……

叔母

日高　静

そしてその弟　圭

私の母

角谷　瞳

赤ちゃんだった私に近づき　呪いをかけ
そして爪痕を残した叔母が

なぜそこまでして私を憎んだのか

私はその過去に飛び込んで行く……。

愛憎の始まり～八十九話～

「おめでとうございます。」

マサヨは病院のベットで目を開けた。

「あ…子供は？」

「少し小さいけれど元気なおぼっちゃまでしたよ
それも二人とも元気一杯泣いてました。」

お手伝いの松代が目頭を押さえた。

「夫は？」マサヨは急に起き上がった。

松代が困った顔をして
「旦那さまは　まだお見えでありませんが
きっといらっしゃいますから…奥さまは体を休めて…
何もお考えにならないで……。」

「だって…あの人ったら…昨日だってその前だって

帰って来ないのよ。
きっと私が子供を産んでることすら知らないのよ。」

マサヨは泣き出した。

「可哀そうに…奥さま……。」松代はマサヨの涙をハンカチで拭いた。

見合い結婚の夫は　板垣　強　と言って
一人で親の代から受け継いだ事業を軌道に乗せた。
若いけど野心家で
マサヨの父親の事業を吸収するために　マサヨと結婚したのではないかと
最近になって疑問に思うようになった。

マサヨには恋人がいたけれど
両親に会社のために…と泣かれて恋人と泣く泣く別れてきた。

結婚してしばらくは優しい夫で　そして仕事のできる夫で
恋人と別れてきて正解だったのだと　マサヨはとても幸せだった。
そんな中での妊娠で　マサヨは有頂天になっていたが
少しづつお腹が大きくなるにつれて
いつの日からか
その夫の後に女の影を見るようになっていた。

最初はその影を見せないようにしていた夫だったが
マサヨが問い詰めて
面倒になったのか
最近では堂々と帰って来なくなっていた。

昔からいるお手伝いの松代に　少し多めの給料を握らせて
マサヨはいろいろさぐっているうちに
夫には愛人がいることを突き止めた。

その愛人はまだ若く高校を卒業したばかりの子供のような女だったが
真面目一本でやってきた夫はその女に夢中になってしまったようだった。

「こんな立派な後継ぎが二人も生れたんですから
旦那さまもきっと改心なさいますよ。」

松代の言葉になんとか立ち直った。

その次の夜　夫がやってきて息子たちに対面した。

「よくやったな。御苦労さま。」
いつもの夫が戻って来たようで　マサヨは嬉し涙を流した。
これから改心してくれるなら
今までの裏切りを許してもいいと思っていた。

「だけど…二人も後継者にはいらないんだよな。
よくあるだろ血縁の争いとかになって戦国時代とかなら
殺し合いになって滅びたとか……
足元救われるわけにはいかないんだ。」

マサヨは夫が何を言いたいのかわからなかった。

「今から決めておくよ。
うちの後継者は　長男
これからは双子だからと言って平等にはしないから
区別をつけて育てて行くつもりだ。」

夫からの信じられない言葉を聞いてマサヨは落ちこんだ。

長男　大介
次男　壮介

この日から　双子は　区別をつけられて育っていく。

愛憎の始まり～九十話～

夫　強は　宣言したように長男の大介を溺愛し始める。
マサヨは壮介が不憫で仕方がなかった。
その分　マサヨは壮介を愛してあげようと誓っていた。

相変わらず強の浮気は続いていたけど
子供たちのためにだけ生きていこう　マサヨは誓った。

大介は強の期待を背負って
そつなくなんでもこなす子供だった。
聞きわけがよく利口で　なんでも他の子より早くいろんなことを習得していく。
強の溺愛ぶりがどんどん強くなっていく中で

壮介は物心がついてからは　なぜ同じ双子なのにこんな扱いをされるのか
傷つき　絶望していった。
大介がやりたいと言わなくても強はなんでもさせた。

ピアノ　家庭教師　剣道
文句を言わずにやり通す大介にマサヨは不安でならない。

めずらしいことに小学校四年生の時に　壮介はサッカー少年団に入

りたいと言う。
マサヨはなんとか叶えてやりたいと思った。
勉強ではとても大介にかなわず

『ぜんぜん違う双子』とバカにされて
悔し涙にくれている壮介に胸が押しつぶされそうだった。
ただ一つ勝てるものは　運動だった。

足も速く徒競争でも断トツ一位
スポーツはなんでもこなして　興味も深かった。

壮介とは必要以上に話をしない父親だった。
何度も足をとめてマサヨを不安気振り返った。

「自分でお願いしなさい。」マサヨは背中を押した。
壮介にだってやりたいことやらせてやりたい。

しばらくして壮介が泣きながら出てきた。

「どうだった?」マサヨは不安で一杯だった。

「おかあさ〜ん〜」壮介はマサヨに抱きついて泣いた。

「おとうさんは僕が嫌いなんだね……。」

「反対されたの？」

「うん　そんなことする暇があるなら…その頭の悪さをなんとかしなさいって言われた……。」

マサヨははらわたが煮えくりかえってきた。

傷つく壮介をしっかり抱きしめて
「おかあさんは壮介が大好きよ。
おかあさんが守ってあげるからね。」

壮介を抱きしめていつものように優しく頭を撫ぜたら
泣きつかれて壮介は眠ってしまった。

いつの間にかいたのか　大介がキッチンで牛乳をのんでいた。

「マザコン。」壮介を一瞥した顔が強にそっくりだった。

「いやな子ね……。」嫌悪感で一杯になったマサヨは少し重くなってきた

壮介を抱き上げて　部屋に戻った。

同じ顔をしているのに…大介には子供らしさが
一つもなかった。
まるで強の人形のように　表情なくこなす大介がとても嫌いだった。
反面　子供らしく愛らしくそして不憫な壮介が
いつのまにか宝物になっていた。

大介と壮介

両親の偏った愛の中で　絶望と葛藤を繰り返していた。

大介は母親の愛を求めて
壮介は父親の愛を求めて

同じ顔をしたお互いが持つ　違うものに強いおもいを持ち始めて
そしてお互いを批判する心が育っていく。

同じ顔をした双子だった。
目の横のほくろで　壮介とわかるくらい　顔はよく似ていた。
だけど似ているのは顔のパーツだけで

大介はいつしか冷淡で表情に心を表さない子供になって行き
壮介は　反対に熱くはっきりした性格に成長し始める。

あの日　ひさしぶりに強と会話した。

「サッカーやらせてあげて下さい。」

「無駄なことに時間を使うなら勉強させろ。
大介の足をひっぱらせるな。
あいつにはあいつ自身の将来を見つけさせる訓練でもしておけ。」

「え？どういう意味ですの？」

「板垣の会社に　壮介はいらないということだ。
あいつは民間の会社に入れるからおまえもそのつもりで準備しとけ。
」

「それでも壮介の父親ですか？」

マサヨは情けなくて壮介が不憫でそう叫んでいた。

愛憎の始まり～九十一話～

「おかあさん　俺負けないからね。」

悔しくて泣いていると　壮介がそう語りかけた。

「ごめんね。どうしてこんなことになるのか……
同じ双子で…二人とも大事な子供なのに…私までもが大介を愛せなくなっている。
あまりに壮介が可哀そうで……。」

「いいよ。俺にはおかあさんがいるから。
だから絶対に負けない。おかあさんも俺のこと可哀そうとか言わないで。」

壮介はそう言うと笑顔で微笑んだ。

「たくましくなったわね。
おかあさんの宝物よ……。壮介は……。」

壮介を抱き寄せて頭を撫ぜた。

ふと視線に気づいて目をやると大介が部屋から出て行く後姿

大介……ごめんね……。

愛せなくなった息子に語りかけたかった。

中学の制服を購入しに行く時

「大介はいいから　壮介だけつれていきなさい。」

強がそう言ったから

「帰り美味しいもの食べて帰りましょうね。」壮介に耳打ちした。

「やった～～！！」無邪気に喜ぶ壮介が愛しい。

制服を合わせる壮介がすっかり男らしくなったことに気がついて胸が熱くなる。

「おかあさん　こんなとこで泣かないでよ。」

「だって…なんか大きくなって…感激してるの。」

「泣き虫だな　おかあさんは……。」
ちょっと照れたように壮介はカーテンを閉じる。

いろんなことがあった。
強と別れたくて…でも子供がいるからと必死でしがみついていた。

壮介がもう少し大人になったら……
別れてもいいだろうか

マサヨはそう思っていた。

「今日は奮発して　ステーキにでもしようか。」

「マジに?うわ〜〜最高〜〜〜。」

昔　強がよく連れて行ってくれた老舗のステーキ屋
子供が生まれてからは一度も連れて行ってくれていない。

店の中は変わっていなかった。
いつも特別ルームをとって　強と食事を楽しんでいたけど
今日は奥のカウンターでお肉を焼くのを見ながら座ることにした。

壮介が
「美味い～～美味い～～すごい柔らかい～～」
絶賛しながらかぶりついているのを見て　幸せな気持ちになる。
壮介のためにも頑張らないとと……。

すると入り口が　騒がしい。

強が入ってきた。
その後を　大介……そしてその後をキレイな女がついてきた。

「いらっしゃいませ板垣様……。」

黒服の従業員が丁寧に挨拶をした。

「今日はおぼっちゃまもご一緒ですか？
利発なお顔立ちで…いらっしゃいませ。」

大介は落ち着いた様子で軽く会釈した。

「奥さまも　お変わりなく。」

奥さま・・・・・？

女はきれいに巻いた髪の毛をかきあげて
「息子がもうすぐ中学にあがるので　今日はお祝いなの。
ね～～大くん～～。」

そういうと大介の頭を優しく撫ぜて微笑んだ。

マサヨの心臓は壊れそうだった。
奥さまと呼ばれているのは　ずっと裏切り続けていた若い女……。

まだ続いていたんだ。

大介も笑顔で女を見た。

母親にさえ見せたことない笑顔……

マサヨの心は粉々に割れた。

「おかあさん……。」心配そうに壮介が見上げる。

「大丈夫……食べよう……今日はおかあさんがお祝いしてあげるんだから。」

特別室から高らかに女の笑う声。

「大くん～制服すごく似合ったよね。パパに似て本当に素敵だわ～～。」

「素敵だっておとうさん。」

「ママはそうやって俺を有頂天にして　また何か買ってもらおうとしてるんだぞ。
大介　女には気をつけろ～～。」

笑い声

マサヨはその声を聞きながら　理想としていた家族の会話を聞いた気がした。

私だってあんなふうに四人で笑いあいたかったのに……

若くて華やかで美しい女に敗北感で一杯になった。

「おかあさん　俺はおとうさんなんかいらないよ。
兄弟もいらないし…おかあさんだけがいればいい……。」

壮介はそう言うとマサヨの皿に肉を入れた。

「これ食べて　元気だそうね。」

「壮介……。」

マサヨは離婚する決意をした。
これ以上　虐げられる人生を送りたくはない。

「おかあさんも壮介がいればいいわ。
ありがとう。」

くれた肉にもう一枚肉をさして　壮介の口の中に入れた。

「せっかくあげたのに～～」壮介は嬉しそうにモグモグ食べた。

「早く大きくなれ　壮介～～。
おかあさんの宝物～～～。」

マサヨは涙で見えなくなった壮介にそう語りかけた。

「俺がおかあさんを守ってやるからね。」

中学一年に上がる春　壮介は　母の旧姓を名乗り　角谷　壮介になった。

愛憎の始まり～九十二話～

別れることに対して　強はすぐに承諾した。
若い女を妻に迎え入れる準備はできていたのだろう。

「壮介はとりあえず私の息子で　大介の兄弟だ。
同じ顔をしている子供ということもあるから　きちんとした教育をしてもらわなければならない。
泥でもぬられたら目をあてられないからな。
大学まで壮介の教育費は持たせてもらおう。
おまえもその方が助かるだろうからな。
養育費兼慰謝料とでも言えるだろう。」

「私の実家だってあなたにいいようにされて……
両親も騙されたと言ってます。」

「騙した？大きくしてやったんだろうが。
年よりは隠居した方がいいんだ。」

なんのためにこの男の妻になったのか

そう考えると情けなくて死にたくなった。

情けないけれど今は事実上父親の　この男の経済力を借りないと生きていけない。
マサヨは屈辱感に傷つきながら　壮介を育てるために強からの養育費を受け取ることにした。

生活費を稼ぐために慣れない仕事を始めた。

実家に戻りたいと言ったが　おまえの旦那に騙されたと両親と兄夫婦に邪魔者扱いをされてとても世話になれる状態ではなかった。

夫に頼んで　家を借りた。

「どうあがいても　おまえのような女が子供を育てられるわけがない。」

強にバカにされても耐えるしかなかった。

「頑張っていつか　二人だけで生きて行こうね。」

マサヨはそう言って泣いた。

壮介もそんな母が可哀そうで仕方がなかった。
塾も行ける余裕もなくでも　母のために勉強を必死にした。
生活費を少しでもおさえるために　わがままを言わずに　ほしいものも我慢した。
節電節約　自分が我慢できることは　率先して実行した。

慣れない仕事で母は疲れ始めていた。

「かあさん…大丈夫か?」

「うん　大丈夫よ。壮介だって頑張ってるんだもん
おかあさんが頑張らないと罰が当たるわ。」

疲れ顔で必死に笑いを作る母が哀れで仕方がなかった。
俺がいなきゃもっと
楽だっただろうに……。

壮介はそう思うと　母に申し訳なくなった。

隣の中学に通いだした壮介だったが

その学校に
いとこの　洋一が通っていた。

小さい頃から　大介の金魚のフンみたいな存在で
壮介をバカにしては喜んでいた。
大嫌いな洋一と再会した時には

終わった

壮介はそう思ったけど　母の手前　泣きごとは言えないと覚悟した。

同じ年の洋一は　学校でも偉そうで金持ちということを鼻にかけてる
どうしようもないイヤな男だった。

嫌われてはいるけれど　洋一に怯えて誰も逆らえない。

先生もそうだった。
他の生徒にはうるさく注意したが　洋一には一目置いて何も言わな
かった。

そんな洋一が壮介を攻撃してくるのも見ない振りだった。

強く…強くなるんだ……。

壮介は母に見つからないように悔し涙にくれる。

「ただいま～」母の声がしたら顔を洗った。

心配はかけられない……。

「おかえり～かあさん疲れたろ。」

麦茶をいれてやる。

「美味しいわ～～壮介の笑顔見たら　疲れも吹っ飛んじゃうもん。」

母がにっこり笑う。

かあさんも頑張ってるんだ

俺も頑張らなきゃ……

壮介は必死で洋一の嫌がらせに耐える日々だった。

そして学校では笑う事のない子供に変わって行った。

そんな壮介を　狼　と呼ぶ。

母の前だけは　本当の壮介だった。
自分を守るため
母を守るため

壮介も壮介なりに戦っている。

「あいつらを　絶対に見返してやる。」

それだけが　壮介の目標だった。
母と自分をないがしろにした父親を・・・・
母親意外の女におべんちゃらを振る大介を・・・・

その周りにいる金魚のフンを絶対に許さないそう誓った。

愛憎の始まり～九十三話～

母の体調が悪くなって　働くことも厳しそうに思えてきたのを
壮介は感じていた。
おじょうさま育ちの母親には　この環境が辛いのだろうと哀れになった。

自分の存在が母を追い詰めていると　壮介は辛くなっていた。

「かあさん　休んだらいいだろ？」

「大丈夫よ。仕事も行くと楽しいのよ。お友達もできるし。」

母は力なく笑った。
でも壮介は知っていた。

母もイジメにあっていると……。
洋一が

「おまえの母親　仕事がグズだから叱られてるの見たぞ。」と
得意そうになって言っていたから

勤めてるスーパーまで行って　母の様子を隠れて見ていた。

母はスーパーのパン屋で働いていた。
案の定　同僚らしき女から

「何回言ったらできるんですか？」と怒鳴られていた。
壮介は自分が言われているようで　胸が押しつぶされた。

「すみません。すぐにやりなおします。」

母は背を丸くして働いている。

トレイを持ってきた母から　女が乱暴にトレイを奪った。

「あ・・・」

「のろのろしてないで！！」

「すみません……。」

母の謝る声がいつまでも離れなかった。

高校進学が近づいてきた。

壮介は担任に就職したいと　進路を提出した。

「就職？無理だぞ。絶対に進められない。
おとうさんの会社にでも入れてもらえるならそれも可能だけど……
民間では中卒は難しいぞ。」

洋一が　壮介の身の上話を振れ回っているおかげで
家の事情は先生も知ることになっていた。

「父親には絶対…助けてもらいたくない。」

先生にそう伝えた。

学校が終わって校門を出たところで黒い車が停まっていた。

後部座席の窓が開いて顔を出したのは　憎い父親だった。

「ひさしぶりだな。少し話がしたい。乗りなさい。」

「俺は話はないです。」

「いいから乗りなさい。おかあさんのことだ。」

父の言葉に仕方なく乗り込んだ。

「大きくなったな。おまえたちは双子で顔はよく似てるけど
体つきが違う。おまえは大介よりずいぶんでかい
いい暮らししてるのか。　ははは～」能天気に笑った。

ムカついて殴ってやりたかった。
拳を握りしめた。

「今日担任にあってきた。おまえ就職したいと言ったらしいな。
母親に遠慮してだろう？」

「関係ないだろう。
俺はあんたに捨てられたんだし…もう気にするな。」

言葉使いに多分ムカついているとは思うけど
それが本音だったから俺は　もうこの恨みをぶつけたくて仕方がな

かった。

「かあさん楽させてやりたいんだろ？」

「そりゃそうだ。俺にとって大切な一人っきりの親だ。」

「おまえが俺の望む高校に入れれば　生活費をもう少し工面してやってもいい。
どうだ？俺を利用すればいいだろう？
そしたらかあさんを働かすことはない。
おまえも別れたとはいえ　俺の息子だからな。
学歴だけはしっかりさせておきたい。
あと後面倒にならないように……。悪い話ではないよな？
担任の話によれば
もう一息頑張ってくれれば奇跡を可能にかえられるって言ってたぞ。
」

正直　もう母には働いてほしくなかった。
疲れ果ててそれでも必死に出かける母が　楽しい仕事をしてるわけでもなくて
あんな風に罵られながら耐えている姿を知れば
もう大切な母親に苦労はかけたくなかった。

「俺を利用しなさい。」父親がまた言った。

「わかった。俺がその結果を掴み取れば母さんは楽になるんだな。」

「今より何倍も楽だろうさ。」

壮介は意地になっていた。
金を見せびらかして　笑うこの男をいつかきっと蹴落としてやるんだ。

その誓いをまた悔しくて悔しくて……胸にやきつける。

愛憎の始まり～九十四話～

「そんな頭のいい高校を受けて　大丈夫なの？」

母がそう不安がるのも仕方がなかった。

「もしさ…落ちても心配しないで。
そんときはなんでも働く覚悟だから。」壮介はそうかえした。

「働くって？そんなことさせられないわ。
大丈夫…それは大丈夫　おかあさんなんとか頑張るから。」

母は壮介が落ちて　私立に行くことになったという方向を考えて心配しているのだろう。

そんときはそんとき
足元を見られている父親から潔く解放してもらう。
なんでもやるさできることなら。

「先生はなんて言ってるの？」

「ビックリしてたけどさ　もう一息頑張れってさ。
とにかくやるっきゃない。」

「そんなムリしなくてもその下の高校だっていいのに…。」

「いや男の意地でもあそこを受けて合格してやる。」

壮介の決心に母として

「応援するわ。」と言ったマサヨだった。

自分は本当に不器用で何もできない女で自己嫌悪さえ覚える。
仕事でも叱られてばかりで　どんどん孤立していく。
だけどやめるわけにはいかない。

ここに辛くてもしがみついて働かないと　壮介を抱えて生きていけない。
とりあえず元夫から養育費はもらっているが
これもいつまで入れてくれるのかだってわからない。
生活費は毎月赤字で　壮介に何ひとつ欲しいものを買ってやれずに我慢させている。
塾にだって行かせてあげたかったけど
そんな余裕はもうないに等しかった。

女一人苦しい毎日は続くけど　壮介のためにも
元夫を見返すために
壮介をしっかり育てあげてやりたい。

それだけがマサヨにとっての楽しみだから　辛くても壮介のため
そう切り替えて生きていくしかないから。

なぜ壮介が自分の力以上の高校を選んだのかは
わからなかったが信じて応援してやろう

それが愛する息子の願いならば……。

仕事はしんどかった。
もの覚えが悪いし　不器用だし
今までおじょうさまだから　守られてきたんだと思った。
世の奥さんたちは家計を助けるためにパートしている人の方が多いから

前を向いて生きてくしかない。
頼る人が誰もいないのだから。

その学期の定期テストがものすごく上がったと喜んでいた。

「俺　なんで今までこんなに勉強しなかったんだろ。
やれば俺もできるんだな。」

「そうよ。壮介はやればできるのよ。」

冬が近づいて来て　ストーブをつけなさいと言っても

「もったいないよ。」壮介はそう言って毛布をかぶって勉強していた。

マサヨは温かいミルクを壮介に運ぶ。

「無理しないでね。」

「今まで無理してきてないし　おかあさんだって無理して
働いてくれているんだし俺も頑張るよ。
心配しないで　明日も早いんだから　寝ていいよ。」

壮介の優しい言葉に　神に感謝した。

「不憫な思いをたくさんさせてきたけれど　こんな優しい子供でいてくれて
感謝します。私の宝物です。」

「また神さまにお礼言ってんのか？
かあさんも好きだな～～。」

壮介の屈託のない笑顔が愛しい。
辛くても　頑張らなきゃ

母子二人　心が通い合い　貧しいけれど温かい毎日に感謝した。

洋一がどこからかぎつけてきたのか　壮介に

「おまえさ・・・志望校K高受けるってマジ？」

「・・・・・・。」

「無理だよな。おまえ塾も行けないのにそんなとこ行けるわけないよな。
無駄な努力してるってことか？」

無視をするしかない。
こいつを相手にしていたら殺すかもしれない。
よくも人の心を簡単に傷つける特技をもっているものだなと
壮介は　おかしなことだけど感心してしまう。

今はそんなことに心をくじけさせている時間はない。
言いたい奴には言わせておけ。
そう心に言い聞かせて

母のために
母を少しでも楽にしてあげたい。

憎い父親でも　利用するしかなかった。

少しでも母の負担が減るのならば……。

愛憎の始まり～九十五話～

受験の日が近づいてきたある日のことだった。

「ただいま～～」母の声に壮介はいつものように玄関まで出迎えに行った。

「おかえり。」母はニッコリと笑って

「ちょっとおきゃくさま連れてきちゃった。」と後から壮介と同じくらいの年の女の子を前に出した。

女の子は変なコートを着ていて
壮介は不思議に思ってじろじろ見ていると後から

「う…ギャーーーー」と赤ちゃんの泣き声がしてビックリした。

「さぁ　入りなさい。」

壮介は慌てて勉強机に座った。

「おじゃまします。」女の子はそう言うと　小さな居間に入ってきた。

「寒かったでしょう。」

母は女の子のコートを脱がして紐でくくられている赤ちゃんを抱っこした。

「ウンギャ～～～」赤ん坊は元気に泣いた。

「静ちゃん　これが私の息子　壮介。」

「壮介　静ちゃん。おかあさんの仕事場の人の娘さんなの。」

静という子は壮介を見ないで下を向いた。

「今夜はうちでご飯食べていきなさい。
何にもないけど　おうどんにするから。」母はひさしぶりに明るい顔をしていた。

「すみません。おばさん。」静は頭を深く下げた。

「壮介　ほら　ダッコしてて。
圭くんよ　まだ赤ちゃんだから大切にダッコしててよ。」

壮介はおそるおそる赤ん坊を抱いた。

けっこう重い・・・・

「かあさん・・・・でも壊れそうだ・・・・・。」

「命の重みよ。よく勉強して下さい。
おかあさん　ご飯支度するから　静ちゃんと一緒に見ててあげて。」

そう言うと母は台所へ入って行った。

そんないくら母親の知り合いだと言っても
同じ年くらいの女子と　簡単に話なんかできないのに…
壮介はすごく緊張していた。

静はやせていて　おかっぱの髪の毛は少しギトギトしていた。

「男の子?」思い切って話かける。

「うん。日高　圭　って言うの。
私は日高　静。」

「さっき名前は聞いたよ。」

「あ…そうだった。」静は恥ずかしそうにしたを向く。

「弟？だよね。」

「そう。今年の冬に生まれたの。もうすぐ一歳。」

「可愛いだろ？」

「うん　とっても可愛い。」

圭は　静に手を伸ばし　静も圭を慣れた手つきで抱き上げた、

「すごいね。慣れてる。」

「私が面倒を見てるから。おかあさん仕事とかあるし
あんまり家にいないの。」

「お父さんは？」思わず聞きずらい事を聞いてしまったと後悔した。

「離婚して・・・おかあさん一人なの。」

「俺とおなじだね。」

静も同じ境遇な子だと知ってなんだか親近感を覚えた。
母親のために弟の面倒をみているなんてエライなと思った。

「面倒みてるってえらいな。」

「たまに辛い時もあるけどね。
なんで私がこんな思いしなきゃなんないのって
遊びたい時もあるわ。」

「俺もさ。
だけどかあさんに前でそんなこと絶対言えないからさ

けっこう必死に耐えてるよ。
子供だっていろいろあるよな。」

「あはは・・・あはは・・・・
壮介くんおもしろい」静の口元から可愛い八重歯が見えた。

愛憎の始まり～九十六話～

お金もないのに母マサヨは　静に千円握らせた。
「雪も降ってるし　遅くなったからタクシーでも乗りなさい。」

「おばさん困ります。
大丈夫だから　ごはんもご馳走になってほんと困りますから。」

丁寧な言葉で静はお金をかえした。

「子供らしくもらって。
何かにつかって少ないけど……」

母が受け取らなかったから　静は

「ありがとうございます。」と言った。

「壮介ちょっと……。」机の前にいる壮介を呼んで

「悪いけれど途中までいいから送ってあげて。」と言ったから

「わかった。」とジャンバーを着た。

雪が降ってきたから背中で静かに眠っている圭に　コートのフードをかけた。

「ごめんね。勉強中なのに。」

「いいよ。気分転換しなきゃさ。」

「ありがとね。」恥ずかしそうにうつむいた。

「おかあさん　優しくてうらやましいな～。」

「俺の？」

「うん　すごく優しい笑顔で会うと癒される。」
褒めてくれたのがうれしかった。

「優しいよ。大事なかあさんだから～。
静ちゃんのおかあさんは？」

静の横顔が曇った。

「軽蔑してる。大嫌い……人間としても母としても最低の低だわ。」

自分の親のことをそんな風にいうのに驚いた。
母子家庭って親子で助け合って生活していくものだと思った。

「今日は　おばさんに感謝した。
おいしいうどんも食べられたし……大切にしてあげてね。
あ…もうここでいいよ。
ここからバスに乗るから　ありがとね。
おばさんによろしくね。」

そう言うと静は少し寂しげに微笑んでうつむき加減でバスセンターに入って行った。

事情がありそうだなと思いながら家に戻った。

「ありがとね。勉強してたのに。」

母が優しい笑顔で壮介の雪をはらってくれた。

「寒かったでしょう。」いつもの温かいミルクをくれた。
俺のかあさんは最高だよ。

「あの子がよろしくって言ってたよ。
かあさんに感謝してるって。」

「そう　あの子はホントに可哀そうな子で……」

母の仕事場の同僚の娘で　生活のだらしない人らしい。
周りからもかなりの借金をしていて　母も給料日に一万円を貸したことがあったが
戻ってくる気配もなかったらしい。
人あたりのいい人だったようで
まわりからもかなりの額を　借りているようだった。

赤ん坊のことも全然知らなかったらしい。
突然　身内に不幸があって二週間休みほしいと言ってその間に出産をしてきたという
噂だった。

静はたまにそんな母親のところに顔を出していて
母と顔見知りになったらしい。

「おかあさん　あの子のおかあさんに
優しくしてもらってたの。すごく嬉しかった。
お金は帰って来ないけど　日高さんに救ってもらっていたから
あきらめちゃった。」

「おかあさんらしいな～。」

母がいじめられている姿を見ていたから
あの子の母親はそんな母に優しくしてくれたんだと壮介も感謝したくなった。

「あの子えらいな。
弟の世話してて　あれ？母子家庭だろ？
赤ん坊は？」

「最近まで一緒に暮らしてた人らしいけど　知らない間に出て行ったらしいのよ。
籍も入ってなかったから　静ちゃんのお父さんは昔死んじゃったらしいわ。」

「そうなんだ。あの子大変だな。」

「そうそう受験生だから壮介と同じ年よ。
どこ受けるのかは知らないけど。」

「弟の世話しながら受験勉強か……
いろんな人がいるんだね。」

「ほんと・・・・。
おかあさんも最初はおかあさんくらい不幸な女はいないと思ってたけど
おかあさんには宝物いるから
だからもっともっと不幸な人はいるんだよね。
辛いこともあるけど　帰ってきて壮介の笑顔や頑張りを見られるだけで
幸せよ。壮介には苦労させるけど
二人だけの生活は最高に幸せだからね。」

母の笑顔に救われるのは自分の方だと思った。

「俺も幸せだよ。かあさん。」

母は嬉しそうに壮介の頭を撫ぜた。

窓の外は雪が激しくなった。
小さな弟を背負って　あの子は今頃どうしているんだろう

壮介はそう思うと胸が締め付けられるようだった。

壮介と静

そして圭・・・・・

三人が出会った・・・・・・・。

愛憎の始まり～九十七話～

貧しいけれど幸せだった。
マサヨは自分の決断は正解だと思っていた。
お互いを思いやる生活は　狭い部屋でも楽しかった。
壮介の笑顔のためなら　どんなことも我慢しよう　そんな生活が幸せだと思った。

しかし・・・・
しかし・・・・壮介と同じ顔をした大介を置いてきた罪悪感が心の隅に残っていた。

いいのよ大介は夫になついていたし……

私なんかいなくても若くてきれいな母親もできたし

遠くからでいいから

何度もマサヨは大介を遠くから見ていた。

大介は華奢で背もあまり大きくなっていなかった。
貧乏をしてるはずの　壮介の方が　背も高く体もがっちりしていた。

ちゃんと食べさせてもらっているのかしら

大介はどこから見ても勉強のできる賢そうな顔をしていた。

幸せに暮らしているのかしら

大介も自分の子供
そう思うと母親として　大介を捨ててしまったことが辛かった。
でも大介は夫になついていたから

これでよかったんだ

そう思いながら　大介を見つめている。

「ごめんね…大介……。」

大介は　校門前に停まった車に乗り込んだ。

大介は違う世界で生きて行く子　マサヨはその車を見送った。

受験が終わった夜　マサヨは壮介を連れて　街へ出かけた。

「今日は好きなもの食べていいのよ。
たまにはお酒も飲みたいし居酒屋でも行こうか？」

「いいよ、普通のラーメンとかで～お金もったいないだろ。
これから制服とかいろいろかかるんだぞ。」

「壮介ったら……ほんとあなたは…
いいのよたまには　食べたいものは食べたい　好きなものは手に入れたい
欲しいものは欲しい　そう言って……。
おかあさんとの生活で　壮介はあきらめることがうまくなっちゃってごめんなさいね。」

壮介が可哀そうで申し訳なかった。

「かあさん　今日はラーメンでいいよ。
合格したら居酒屋に連れて行ってよ。」

「壮介ったら。」

素直で逞しい男の子に成長してきた壮介

「高校合格したら時計を買ってあげるからね。」

「時計？いらないよ。」

「ダメよ。高校行くようになったら時計は大事よ。
バスに乗ったり地下鉄に乗ったり　時間を見ながら移動するんだから。」

「大丈夫だよ。いろんなとこに時計あるし
そんな金もったいからさ。
俺は　かあさんがいてくれればそれでいいからさ。」

「え？何？なんて言ったの？」

壮介は頭をボリボリと掻いた。

「俺だって年頃なんだからな～～
マザコンって言われるからもう言わない。」

マサヨは聞こえていた。

かあさんがいてくれればそれでいい

「おかあさん　ちゃんと聞こえなかった～～～。」
わざとに照れる壮介に聞き返した。

「かあさん…わざと?
もう絶対に言わない～～～～。
死んでも言わない～～。」

壮介はマサヨから逃げる様にして歩きだした。

「壮介ったら～～」嬉しかった。
本当に心が温かくなった。

宝物…私の大事な宝物……

「かあさん　早く食べようよ～～～。」

壮介の後を追って　人気のラーメン屋ののれんをくぐった。

そんな二人の様子を見ている影があった。
冷たい目をした大介だった。

「ふざけるな……。」
拳を握りしめて　大介は二人が消えたラーメン屋を睨みつけていた。

愛憎の始まり～九十八話～

母親に見捨てられて育った大介だった。

母親が壮介を抱きしめるのを見ながら　どうして自分は抱いてもらえないんだろう
そう思った。

自分は何か悪いことをしたから　母親は大介を嫌うのか

幼心に大介はそう葛藤していた。

同じ顔の壮介が甘える姿を見ては
嫉妬でおかしくなりそうだった。

壮介が憎い

大介はいつの頃から　そう思って暮らしてきた。
母親が自分のことを

「嫌な子・・・・。」そう言って
憎しみに満ちた目で自分を睨みつけた時

心に宿った母を恋しがる心が音をたてて壊れた。

母の温かい胸に抱きしめられない自分
愛されない自分

それなら父を求めるしかない。

しかし父親に抱きしめられたり　愛されていると実感することもなかった。
ただ言われたままに過ごせば

父親が喜んでくれるからと
反抗せずに　何でも受け入れてきた。

自分には父親しかいない

必死だった。
勉強なんかやりたくもない
ピアノだって　英会話だって　何一つ望んだこともない。

そんなある日　壮介がサッカーをやりたいと父親に言われて
撃沈していた。

何も押し付けられない壮介が憎らしかった。
学校でも休み時間は　ボールを持ってグランドにかけだして行った。

父親に叱られているのを見て　嘲笑った。
意気消沈している壮介を　母親が優しい笑顔で接しているのを見て

憎しみだけが　心に宿って行く。

父親に愛人がいるのを知った時
母親の顔を浮かべて「ざまみろ」と思った。

若くて愛らしくて　母親とは全く違うタイプの女に
あの厳格な父はメロメロだった。

情けないな……。

「おまえも結婚しても　女の一人や二人しっかりと
手玉にとれる男になれ。」

父親は得意げに言った。

そんなもんなんだ・・・・・。

父親は全く違う顔を見せる。

俺にはとうさんが手玉にとられてる気がするな。

愛人は　欲しいものをねだる時は　うんと甘えた声を出した。

「仕方がないな～～。」

鼻の下を長くする　普段　厳格な父親が崩れて行くけど
大介はそれを冷ややかに見ていた。

自分が生きて行く場所はもう　ここしかないから。

愛人は母親とはまったく違う女だった。

じゃあなんで結婚したんだ。

大人の汚い所を　見て育ってきた自分はいつしか
心を隠すようになった。

母親が壮介を連れて出て行った。

二人が出て行った夜　大介はひさしぶりに泣いた。

「捨てられた……。」

自分と壮介の何がそんなに違うんだろう。
同じ顔をして

自分の方が努力している。

勉強だって習い事だって……いつか母親に褒めてもらいたかった。

「頑張ってるね」って……。

絶望感が大介を包んだ。
同じ顔をしているもう一人のかたわれに嫉妬して憎んだ。

「あいつら絶対に許さない。」

母親が出て行って　愛人が入ってきた。
大介は　それでも普通にしていた。

さらに鼻の下を伸ばしている父親に嫌悪感を抱いても
尊敬するふりをして

愛人にも素直なふりをした。

　みんなバカ野郎だな……

いつかおまえらみんなここから追い出してやる。

母親に捨てられた今
愛されることのない父親のそばに今はいるしかない。

人生に絶望した。
男女の関係に失望して
親子の絆を憎んだ・・・・・。

俺は一人ぼっちだ。

大介は強くなろうと心に誓うのだった。

愛憎の始まり～九十九話～

本当の自分はどこにいるんだろう。
大介は模索していた。

いつしか自分を見失った　どうでもよくなった。
ただ生きて行くために　父親に好かれるように努力するだけ。

中学に行くと　父親が求める高校を志望校にした。
この街でもトップクラスに入る学校だった。
仕方がないやるしかない。

「勉強だけじゃダメだぞ。おまえは将来会社を背負う人間だからもっと人とかかわりなさい。」と言った。

どれだけ俺に人間像をかぶせたら納得できるんだろう。
それでも自分はやるしかない大介は　生徒会に入部して　頭角を現す。
先生　生徒に信頼をされるようになって　気持ちもよかった。それが本当に自分なのかは
わからなかったけど。

二年の後半には生徒会長となった。
父親は喜んだ。

「さすが俺の子供だ。自慢の息子だ。」上機嫌な父親認めてもらえたと大介は嬉しかった。

三年生の卒業プロジェクトを企画していた時のことだった。

「二年六組　まだ企画あがらないのか?」

「ごめん。いろいろと手がかかって……。」六組の代表が口ごもる。

「最近　一人で出てるけどさ　女子の代表はどうした?」

「なんか忙しいとかで…学校が終わるとすぐ帰ってしまって　だから自分も
今一人でやってるとこなんだ。」

「無責任だな。」

六組の女子の代表が最近委員会をさぼっているのは　執行部の中でも問題になっていた。
三年を追いだすプロジェクトは　大介の初の仕事だったからなんとか真面目にやってほしいと思った。

「会長から言ってもらえないか。俺が言っても返事はするけどさぼってばっかだし……。」六組の代表も困っていた。

「わかった。」

大介は次の日の放課後　玄関で待ち伏せた。

すごい勢いで六組の代表が玄関に向かって走ってきて　慌ただしく靴をはいた。

「日高さん。」

大介が声をかけると　ふり向いた。

日高　静　　学校では大介とトップ争いをしている一人だった。

「今　急いでいるから……。」困った顔をした。

「俺たちも急いでんだよ。企画書は?」

「ごめんなさい。今そんな暇がなくて……。」

「暇？俺らだって忙しいんだよ。
もう少し真面目に取り組んでくれないかな？」

静は　大介よりかなり大きかった。
大介は背が伸びないことに　コンプレックスを感じている。

静を　見上げて話すのはプライドも壊れてしまいそうだった。

「企画書だけ作ってきます。でも委員会にはしばらく欠席します。
家庭の事情でどうしても出席できないんです。」

そう言うと逃げる様に　静は走り出した。

なんだ　あいつ……

二年間同じ　執行部にいる日高　静は
名前の通り　静で存在感のないタイプだった。
学校では　クラス代表は　成績のいい人間がすることになっていたから
トップ争いをしている静が代表委員に選ばれたんだろう。

責任感のない奴だな。

「会長ってちっこいよね～」後で女子が騒いでいるのが耳に入った。

慌てて　気づかなかったようにしてその場を離れて
聞こえるところに体を隠した。

「聞こえたんじゃないの？」

「だって…めっちゃちっこくて可愛いじゃん。」

女子の笑い声がコンプレックスに突き刺さる。
「特に　日高さんと話してるとさ　笑えるよ。」

静は女子の中でも大きかった。
そして大介は男子の中でも　小さかった。

「もうちょっと大きかったら　カッコいいのにね。
顔はまぁまぁだしやることやるし　頭はいいし　ちょっと冷たい感じもいいよね。」

「そう言えば　会長って双子だったじゃん。
この間　見たよ。壮介くんの方。」

「まじ～～？あそこ離婚したんでしょ？壮介くんはおかあさんの方についていったって聞いたけど。」

「小学校から全然タイプ違ったじゃん。
やっぱ違うよ。壮介くんは大きいもん。ガッチリしてるし。
なんか野性的で男らしかった～～～。」

「いいな～～私もあってみたい。
壮介くん　かっこよかったんだね。女子はけっこうファン多かったよね。」

その話を最後まで聞くのがイヤになって大介は靴をはいて外に出た。

壮介の話をこんなところで聞くとは思ってもいなかったから　すごく不愉快だった。
そして大きくてかっこいい

そんな話を聞いたらなおさら腹が立つ。

あいつは俺より大きいのか……
男らしくて　かっこいいのか・・・・・・・・・。

大介は庭の小枝を一本折って　何度も何度も足で踏みつける。

あいつにだけは　絶対負けたくない…

母親を自分からとりあげて……一人で愛情を一身に受けて……

俺から　母親を奪った……

大介の中でまた　新たな憎しみが湧きあがった。

愛憎の始まり～百話～

三年に上がって勉強が忙しくなってきた。
塾に行ったり家庭教師が来たり　息をつく暇もない。

父親は若い女と　週末アメリカに遊びに行ったりと　留守をすることが多くなった。

昔からいる　お手伝いの松代が大介を不憫だと泣いてくれた。
人から情けをかけられるくらい自分は何なんだろうと思った。

とりあえず高校に合格したらきっと何かが見えてくる。
何かが変わっていく

そう信じて必死に勉強する大介だったが
三年の二学期　生徒会も引退してなんだか　気が抜けてしまっていた。

一日の授業が終わって窓の外を見ていると　日高静が　走っている。

相変わらず　何をそんなに急いでいるんだろう。

静は　相変わらず大介とのトップ争いの中にいる。
噂によると家は貧乏で　塾すら通ってないと聞いた。
トップを争う中では　塾は外せない存在だけど　静はそうではない。

生まれつき頭がいいのか…
帰ってから勉強してるのか……

そんな興味がわいてきて　ある日　小走りに家路に急ぐ静の後を追った。

静の家とみられるアパートはもうかなりの古さで
そこの一階に飛び込んでから　すぐに　女が出てきた。
結構年だけど　かなり派手に装っていて　夜の仕事をしているのが見てすぐわかった。

脇に停まっていた白い車の　助手席に乗り込んで出かけて行った。

母親か？

しばらくするとおかしなコートを着て　静が出てきた。
髪の毛は一本に横に結んでドアのカギをかけた。

後姿を見て驚いた

静の背中には赤ん坊がいるようだった。

え・・・・・・。

雪がちらついてきた。
静は後の赤ん坊にコートの帽子をかぶせて歩き出した。

大介はそれに引き込まれるようについていった。
かなり歩いて　スーパーに入って行った。

赤ちゃんって…あいつの兄弟なのかな

その後を追って　店の中に入って行った。
カゴをもって野菜を見ている。しばらくあとをつけて歩いた。

もっと近いスーパーあるだろうに……

そう思ってついて行くと　静がパン屋で立ち止まった。
中を気にしているようだった。

「いらっしゃいませ。」白い白衣を着た従業員が出てきた。

「静ちゃん　いらっしゃい～～
圭くんも元気かな。」その人は　コートの中の赤ちゃんを覗き込んだ。

「買いもの?遠くまで…歩いてきたんでしょう?」

聞き覚えのある声に　大介は反応していた。

「同じ学校の人に見られたくないから……。それにこの間のお礼も言いたくて。」

「お礼?何言ってるの。お金はないけど困った時はおばさんの所へ来なさい、遠慮しないで。」

「ありがとう　おばさん……。
あ…息子さんにもよろしくお伝えください。」

「あの子も　静ちゃんのことほめてたわ。同じような境遇だから…仲良くなれると思うわ。
またお誘いするから　静ちゃんも遊びに来てね。」

「うれしい　ありがとうございます。」

「今日は遅番だから　ごめんなさいね。」

「ううん…。宿題もたっぷりあるから　買いもの済ませたら勉強しなくっちゃいけないので……。」

「うちの受験生も頑張ってるから…静ちゃんも頑張ってね。」

静はその場を立ち去ったけど　大介は去れなかった。

かあさん……

売り場にいるのは　母親だった。

「角谷さん。」

「あ…すみません。」

母は慌ててレジに戻った。

「日高さんの娘さんでしょう?
あなたもお人よしに付き合わなくてもいいわよ。
お金返してもらってないんでしょう?噂によると　夜の仕事してる
みたいよ。」

「静ちゃんが気の毒で……。」

母はそういうと　お客の来たレジを打ち始めた。

大介は体が動かなかった。
心で全て拒否していた母の姿だった。

忙しそうに働く母親
怒られたりしてる……複雑な思いがこみあげてくる。

出て行ってから　初めての母の姿だった。

愛憎の始まり～百一話～

この世で何よりも憎いもの……それは壮介だった。
同じ顔を持って生まれてきた壮介……

しかし母親は　大介より壮介を愛して　自分を置いて行ってしまった。

母親は生き生きとしているような気がした。
見てる間ずい分と叱られていたけれど　それでも家で見ていた母とは違った。

やつれた感はあったけどそれでも
なんだかハツラツとして見えた。

恋しいと何度　泣いただろう
なぜ自分は母親に　嫌われたんだろう……。
一生懸命頑張ってきたし……それが親の望みだと思ったから。
壮介がうらやましかった。

自由な時間　縛られない毎日

なんで俺だけこんなに辛いんだ

そう思えば　自由に生きている壮介が憎らしくて仕方ない。
いつも母に甘えて　愛されて……嫉妬で気が狂いそうになった……。

そして自分は捨てられて　母親は出て行った。
壮介だけを連れて……。

母親は自分を見たら　なんて言うだろう。

大介はスーパーの閉店時間まで　立ち読みをしたり時間をつぶしていた。
どうしても母と会いたくて仕方がなかった。

しばらくして　閉店の放送が流れて冷え込んだ外に移動して隠れて母の
出てくるのを待った。

なんて言う?

そう考えてたけど言葉が見つからなかった。
でも　会いたい

思いだけが膨らんでくる。

外は思いっきり冷えていた。
数人の従業員が　固まって出てきた中に母がいるのかはわからなかった。

「かあさん！！」

駐車場の車の陰から声がした。

「あら？どうしたの？」
その声は母の声だった。

大介は影から出てくる背の高い男を直視していた。

「遅い時間だからさ…ちょっと心配になって…
頭を冷やすのにもいいかなって思ってさ。」
自分よりずっと低い男の声だった。

「あら　角谷さん　息子さんなの？」

「はい！！」母の声が弾んでいた。

「壮介です。母がいつもお世話になっております。」

「あら～～ちょっとしっかりしてるわね。
もうすぐ受験だものね。おかあさん迎えにきて風邪なんかひかないでよ。」

「ありがとうございます。」

母は壮介と一緒に歩き出した。

「あらちょっと本当に　手が冷えてるわよ。」

「あのね　かあさん　俺はもう中三だからね。
手とかつながないでしょ？」

「あらあら　そうだったわね。いつまでも小さい壮介じゃないもの

ね。」

「そうだよ。学校でも一番背が高いんだからな。」

「壮介もどんどん大人になっていくのね。
帰りにコンビニでおでんでも買って行こうか。」

「お金もったいないよ。」

「いいじゃない～せっかく来てくれたんだもん。
アツアツなの食べながら帰ろう。」

二人は寄り添って大介を置いて　どんどん遠くに消えて行く。
幸せそうな笑い声を残して

ふと頬が冷たくなった。

「何してんだ……俺は……。」

頬伝う涙をゴシゴシ痛いくらいに拭いた。

「俺は一人なんだ……。母親も兄弟もいない……。
そんなところに期待してどうする……。」

そう思っても溢れ出る涙
幸せそうな二人を見て・・・なおのこと孤独感が増す。

「俺は・・・・一人だ。
だけど絶対　壮介にだけは負けたくない……。」

暗い帰り道　雪が降り積もる。
もう二度と会いにこない

そう誓いながら・・・・頬に伝う涙を拭きながら歩く。

しかしまた　すぐにその想いはくつがえさせられた。

受験が終わって　ホッとしたのもつかの間だった。
玄関を出て行く壮介を見つけた時　冷たい汗を背中に感じた。

まさか……ここを受けたのか…？

いとこの洋一が同じ学校で　一度壮介のことを話だしたことがあった。

その時大介は

「俺の前でアイツの話を二度とするな。」と一喝した。

大介の言う事なら何でも聞く洋一は　それから一切壮介の話をしなかった。

あいつの志望校聞いとけばよかった。

しかし・・・あの壮介がここを受けるなんて
自分は何年も勉強で努力してきてここを受けにきた。
父親が絶対ここだという　押しもあったし・・・・
なのにあいつは簡単にここを受けたというのか・・・・・・・・。

どうせ落ちるに決まってる……。

壮介のたくましい体と自分の情けない体を比べていた。

あいつにだけは絶対負けたくない

拳を握りしめた。

愛憎の始まり～百二話～

「ビックリしただろ？」　大介の後から声がして振り返った。
洋一がニヤニヤして立っている。

「あいつもここ受けるなんて思わなかったよな。」

「なんで俺に言わなかった？」

「は？壮介のこと一切言うなって命令したのは大介だろ？」

「それとこれとは……。」
確かにそうだったから　次の言葉に迷った。

「だけどさ　よ～～く見ないと双子だってわかんないよな。
俺いっつも思ってたけど　中学行って壮介は　かなり別人になったからな。」

成長具合が悪いとでもいいたいんだろう。
洋一はいつもそういうやらしいいい方で　大介に挑んでくる。

相手にしてる暇はない

「多分落ちるとはおもうけどな。何　意地になってここ受けてんだか
理由わかんないよな。私立になんか行ったらさ母さん地獄だろうさ。
それでなくてもよく勤め先で怒られてるから。」

カチンときた。
母親のその姿は何度も見ていた。
大介が思うに　あれは仕事ができないんじゃなくて　単なるイジメ
だと思った。

「おばさんって　おじょうさま育ちだから順応できないんじゃない
かって
母さんが言ってたよ。可哀そう通り越して　哀れになるな。
壮介も身なりからして　貧乏くさいし
学校でも嫌われてるからな。」

やっと解禁だという勢いで　喋り出した。

壮介のことは別によかったが　母親を侮辱するのが許せなかった。
憎んでいるはずなのに……。

これ以上聞いていたら　志望校先で暴力事件でもおこしそうだったから
足早に玄関に向かった。

「大介　待てよ～～。」

「悪い。車来てるんだ。」

今夜は行きたくないけど　父親と若い女と食事に行くことになっていた。

迎えの車に乗り込んだ。
周りの目が　大介を見ている。

こいつ何者?

こういう視線は心地よかった。

車が動きだしてから少しすると　壮介の後姿が見えた。

「少しゆっくり行って。」運転手に指示した。

壮介少し駆け足で走っていて　前の女子生徒に並んだ。
そして笑顔で話しかけていた。爽やかな優しそうな笑顔だった。

そしてその相手はうちの学校の　あの日高　静
静はうつむき加減で歩いている。
その横で壮介がこちら向きに　人懐っこい笑顔を見せていた。

壮介を追い越した。

まさかおまえとまたこんな形で会うなんて思わなかった。

洋一の言った通りだった。
俺たちが双子だということは　多分静も　気づかないだろう。

貧乏してるわりに　壮介はもう軽く１７０を越えて　大人の男のようだった。
それに比べて　大介は
やせていて背はまだ１６５にも満たない。

おまえにだけは会いたくなかった。

もしもこの学校に入学してきたら　自分は壮介という一生涯のライバルと
戦って行かなければならない。

それが気がかりだった。
負けたくないその気持ちが強すぎて　自分がコントロールできなくなる恐怖に
襲われていた。

静が微笑んでいた。

マジに？

絶対笑わない静が　笑顔を返していた。

うっそ……

楽しそうに会話をしている。
その姿を後にして……

大介の心に闘争心が芽生えた。

絡まる糸～百三話～

「壮介…よかったね。本当によかった。
よく頑張ったね。」母は　詰襟に手を通した壮介にそう言うと泣き笑った。

「入学式に泣く親なんていないから。」壮介は少しくすぐったかった。

「だっておかあさん　卒業式にはいかれなかったから…
そう言えば入学式にもいけなかったから…今日初めて出席できるのね。
嬉しい…本当に嬉しいわ。」

母は壮介が行きたいと願った高校に入ってすごく喜んでくれた。

無理しなくても　本当はまだ下の学校でもよかったけど

あいつをギャフンと言わせてやりたい

そんな気持ちも心の奥底にはあった。

父親に会ったら少しでも母親の負担が軽くなるように頼んでみよう。
学費は出してやると母親と別れる時にそう約束したけど学費だけじゃ
母親の負担は軽くしてやれない。

母親がやつれたのは　子供の目から見てもよくわかった。
実家も手を貸してはくれない……。

母は孤独になっていた。

自分が働いて家計を助けてやれるようになるまではまだ数年かかる
けど……
それまでは一応父親面をしているあの男を利用するしかない。

母がそれを知ったら…きっと怒るだろうけど……
でも…これから高校に上がることによってまた家計が苦しくなる。
それは間違いないことだった。

気がかかりなのは　洋一も同じ学校だと言う事だった。
洋一に大介のことを聞きたかったけど……大介は英語が得意だった
から
きっと英文科にでも行くんだろうと思っていた。

「これからの経営者は英会話ができないと話にならない。
おまえはもっともっとその力をつけなさい。」大介は父親からいつ
もそう言われていた。

母だって口には出さないけれど　やっぱり大介を気にしている。
壮介が気にする何倍もきっと……。

正面玄関に張り出されたクラス表を見たら一組になっていた。

「あら…日高…静ちゃん…も同じクラスよ。
仲良くしてあげてね。」母はそう言って手を叩いた。

静も　合格したんだ

入試の帰り道　静と少し話をした。

「どうだった?難しかったよね。」

「そう?私はなんとか大丈夫そうだけど…壮介くん…大丈夫?」
静は本当に心配そうに壮介を覗き込んだ。

「すごいな。そんな自信どっからくるんだ?うらやましいな。
俺はもうヒヤヒヤだよ。家計をこれ以上苦しめるわけにはいかないからな。」

「そう自覚してるんだったら大丈夫よ。
私たちには失敗は許されないっていう　十字架を背負ってるんだから。
壮介くんだって絶対大丈夫よ。」

「十字架か・・・・。」
思わずたとえに苦笑した。

「高校に行ったら　アルバイトしようと思ってるの。」

「あそこの学校はダメだよね。」

「それは内緒にして…じゃないとうちは本当に大変だから……。」

「それなら俺だって同じだよ。」

「でも壮介くんのおかあさんはちゃんと働いているでしょう。
うちの母親は最低な女だから……これからどうなるのかわからないわ……。」

「最低って…自分の親だろ？」

「子供は親を選べないから…それなのにまた弟を産んじゃって……。どうする気なのか…女としても母親としても…最低の低…絶対あんな女にはならない。」

静が唇をかみしめた。

「そっか…いろいろあるんだな。」

「あるよ。ほんと。壮介くんのおかあさんみたいなおかあさんだったら私すごく幸せだったと思うわ。」

「うん。俺は幸せだよ。かあさんが喜んでくれるから頑張れるんだ。」

「うらやましいな。」

「またおいでよ。かあさんも喜ぶよ。赤ちゃんにも会いたいし……。」

「ありがとう。またおじゃまさせてね。同じ学校になれるといいな。」

静が下を向いて恥ずかしそうにしていた。

「静ちゃんも大変だからね。」母がそう言った。

「あの子またうちに来たいって言ってたよ。呼んであげたら?」

「そうね。静ちゃんには罪はないから…おかあさんもそのつもり。」

「罪って?」

「お金にだらしない人でね…仕事場の人達からもずい分お金を借りて　そのまま
やめてしまったから…おかあさんも泣きつかれて貸しちゃったの。」

「マジに?そうなんだ。」

「でもおかあさんもわかるのよ。お金ないって…本当にどこかに泣きつきたいけど
でも返すあてもないし…おかあさんはそんな根性もないわ。」

「それでいいよ。我慢すればいい、そんな人に迷惑かけてまで美味いもの喰ったりしなくていい。」

「壮介がそう言う子で　おかあさんは助かったわ。」

母は笑った。

静が　最低の低と呼んだ　自分の母親……
そんなことを言わなきゃならない静が　哀れだった。

一旦　母と別れて　壮介は新しい生活の場へ向かった。
幸いなことに洋一はいなくて　ホッとした。

「壮介くん。」後から声がして振り返ると　セーラー服姿の静が笑っていた。

「おめでとう。それに同じクラスだなんてうれしいわ。」

「おめでとう。俺もうれしいよ。」

そう言ったけどなんだか恥ずかしくて壮介は　照れた。

「おばさん来てる?」

「うん　今日は初めて来られたんだ。小学校以来だよ。」

「お休みとれてよかったね。」

静は髪の毛をみつ編みにして微笑んだ。

クラスには頭のよさそうな人がたくさんいた。

これは入ってから大変なことになるな……。

そんなプレッシャーも感じさせられた。

とりあえず　ここで新しい生活を送るんだ。

体育館に入場していく時は胸をはった。
なぜか簡単に並ばせた背の順で　ダントツ一番後だった。
そしてその横には静

思わず二人で顔を見合わせて笑った。

吹奏楽が流れる。さすがにいい音なのは　素人にもよくわかった。
入場していく時は　鳥肌が立って仕方がなかった。
母の姿は緊張して探せられなかったけど　母が喜んでくれるように
胸をはって堂々と歩いた。
なんだか　母が来てることでとても緊張したような壮介だった。

式が始まり　入学生代表の名前を聞いて　愕然とした。

「一年八組　板垣　大介。」

「はい。」大きな凛とした声が響いた。

板垣・・・・・？大介って・・・・・・・。

壮介の心は激しく動揺した。

まさか……あいつと同じ学校？

ステージに上がってきたひさしぶりに見た大介は　まだ背が小さくて華奢な感じだったけど　見るからに頭がよさそうな表情をしていた。
頭の中で　ガンガンと音が鳴っている。

一見　絶対誰も　双子だなんて思わないだろうけど……
大介は堂々と代表としての挨拶をこなしていた。

かあさんはどんな気持ちでいるんだろう……
もしかしてとうさんも……いるのか……。

「新入生代表　一年八組　板垣　大介。」話終えると大介は堂々と

ステージを降りて行った。

「板垣　大介くんは　我が校始まって以来の　入試点満点という素晴らしい成績で
合格してきました。今年の新入生のレベルは高い　どうかここで
必死に頑張って　国公立大学目指して頑張ってください。
それでは　上位五人の発表です。
第一位　一年八組　板垣　大介　　第二位　一年一組　日高　静
第三位・・・・・・第四位・・・・・・・
最後に　第五位　一年一組　角谷　壮介　　以上。」

俺・・・五位??

驚いて顔から火が出そうだった。
しかし　一位には満点の　大介が君臨していた。

父親の笑う顔が想像できた。
ここで二人を争わせるために　ここに壮介を入れさせたんだ。
いろんな感情が入り乱れる実は双子の大介と壮介

父親の策略が見えた気がした。

まんまとひっかかったな……

まさか自分たち双子をこんな形で再会させるなんて…親としてはありえないことだ。

あいつは父親としての血も流れてないのか……。

あんなに必死で勉強してきた結果がこれか…壮介はバカらしくなった。
大介だけとは絶対に会いたくはなかった。

もっともっと自分が立派な男になって見返してやりたかった。
母もきっと動揺しているだろう……。

壮介は　母親が心配になった。

堂々と臆せずに挨拶した大介がいつまでも心に残っていた。

俺はおまえにだけは負けたくない

壮介は拳を握りしめた。

絡まる糸～百五話～

「ひさしぶりだな。」動揺を隠しきれずに体育館から出た　マサヨに一番会いたくな男が近づいてきた。

「少しやつれたんじゃないか?」勝ち誇った顔　首を絞めてやりたくなった。

「大介の挨拶　聞いてくれたか?立派だろ?
満点だなんて　さすが次期　板垣の会社を任せられる息子に育った。
おまえも俺に礼を言ったらどうだ?」

「あの子は…あなたのお人形だから……。いいんじゃないですか?」

「人形か?母親のくせにひどいいい方するな。
あはは・・・・・。」強はわざとに大きな声で笑った。

「壮介もすごいじゃないか。貧乏暮らししてるのに…たいしたものだな。
環境が整っている大介に近づいているなんて　あいつも頭脳はいいのかな?」

「努力家ですから。私を気遣ってくれて必死に勉強してました。
私は別にここにこなくても　もっと楽に入れる高校でよかったんですけど…。」

「あいつも野心家なんだよ。俺の息子だぞ。
お人よしじゃない。それが今回この結果でよくわかった。
立派な息子に育ってくれて嬉しいよ。」

「あなたに壮介を息子だなんて言ってほしくありません。
大介をあんな形でとりあげて　壮介までとりあげないでください。」

「選ぶのは壮介だからな。
あいつは親孝行な子供だ・・・・・。」

「どういう意味ですか？孝行なのは私に対してだけです。
あなたに対しては父親だという気持ちはないですから。」

「いつまでも壮介は貧乏でいたくないだろうよ。
おまえだけの給料じゃ不安でたまらないんだ。欲しいものも我慢してきたけど

壮介だってそんな生活が続けば辛いだろうさ。」

マサヨも壮介が不憫だと思ってはいた。

「壮介から聞いてないのか?」

「何をですか?」

「ここに合格したら　生活費として少し援助してやるって約束したんだ。
とりあえず最低限の　学費はださせてもらってはいるけど　おまえの働きだけじゃ
まともな暮らしもできないんだろう?
壮介が哀れで仕方ない。」

マサヨは頭に血がのぼった。

「あなたのせいでしょう?私をずっと裏切って鼻の下のばして
若い女にいいように利用されて…大介を奪って…私と壮介を捨てたんじゃないですか?」

「捨てた?人聞きの悪い話だな。
おまえに母親としての自覚が足りないからだ。我慢できない…

子供たちのために犠牲になる気がない。」

「あなたと話してたら…血圧上がります。
生活費の話は断ります。ここに壮介を入れて何をする気なの？
大介と競わせてどうするつもり？あなたは壮介には関心がなかったでしょ？」

強はネクタイを緩めた。

「壮介は強い男に育った。あの目の奥にある光……ゾクゾクするね。
大介にはああいう野性的なところがないんだ。もやしみたいに…言われたことしかできない。
反面壮介には可能性を感じる。
お互いないところを持って生まれてきたんだな双子って面白いな。」

強の顔は父親というよりも　大介と壮介を操ろうとしている悪魔にしかみえなかった。

「これから今までの生活みたいなことしてたら　壮介は離れていくぞ。」

その言葉は　マサヨにとって一番怖い言葉だった。

今の生活に壮介が満足しているなんて思ってはいない……。
だけど……この男の庇護だけは絶対に受けたくない。

「壮介とよく話合ってくれ。俺の方は援助する準備はできているから。」

そう言うと　強は玄関を出て　迎えの車に乗り込んだ。

マサヨは必死で悔し涙をこらえていた。

「かあさん・・・・・。」

壮介が来たことも気づかずにマサヨはボーッとしていた。

「大丈夫か？」

「あ…壮介……。」マサヨは言葉も出ないくらい混乱していた。

「会ったのか？」

「うん……。考えてもいなかったから…混乱しちゃって……。」

学校の正門を出て歩き出した。

「ごめん。俺もしらなかったから…ビックりした。
一番会いたくないヤツに会っちゃったって感じで……。
そしてやっぱりあいつは　俺の上を走ってるし……。」

「大介は大介　壮介は壮介でしょう？
おかあさんは胸をはりたいわ。五位だなんて…よく頑張ったわね。」

「俺もビックリだった。」
壮介が嬉しそうに微笑んだ。

「壮介…せっかくおかあさんのためにここに入ってくれたけど……
おとうさんにもう甘えたくないの。
本当は学費だってもう出してもらいたくない…板垣という家から完全に解放されたい。
だけどそれは…無理だから……壮介は貧乏がイヤなんだよね？」

「俺は別に貧乏だからいやだとかそんなこと言ってないよ。
かあさんが辛そうだから…俺にはもうかあさんしかいないから……
大変そうで見てるのが辛いんだ。とうさんに援助してもらえればかあさんだって仕事の時間も減らしてもっと楽にしてもらいたいんだ。
俺にはまだかあさんを　助ける力がないから……俺が大人になるまでもう少しかかるから。」

壮介は辛くなった。
自分は母親を助けたい一心だったけど…それはもしかしたら
母を傷つけてしまったのかもしれない。

「壮介は気持ちの優しい子だから　おかあさんもついつい甘えていたんだね。
ごめんね。一生懸命頑張ってくれたのは……
おかあさんを助けようとしてくれたのね。何もしらなくてごめんなさいね。」

母親のためと思ってしたことだったけれど
傷つけてしまった気がした後悔した。

「あの人は全然変わらなかったわ。大介は…大丈夫なのかしら……。」

母親はポツリと言った。

横を黒い車が通り過ぎて行った。

その横顔は　大介だった。

「大介・・・・・・。」母の顔が哀しそうだった。

次の日の登校から　静がこなくなった。

一週間を過ぎた頃　少しづつ話をしだし始めたクラスの中に　静と同じ
中学出身がいたから思いきって聞いてみた。

「日高さんて　こうやって休む人なのか?」

「あんまり接点もたない感じで学校でも一人でいたな。
修学旅行とか学校行事は参加しなかったし…なんか母子家庭で
虐待を受けてるとかそんな噂もあったな～～。風呂とかちゃんと入ってないのか
みんなから不潔だとか言われてたし……。だけど学校だけは来てたよ。
どうしたんだろうな。」

「虐待か・・・・。」

静は母親のことを嫌いだと言っていたことを思い出した。

「だらしない母親らしいよ。」

壮介の母親をうらやましいと言っていた。

「静ちゃん　学校に来た?」母も心配していた。

静が　休み出して１０日たったころだった。
風邪で体調を崩した　母親のために弁当屋によった。

その時　レジに出てきたのは　静だった。

「日高さん?」

「あ・・・・壮介くん・・・・・。」

「何してんの?」

「バイト……。」哀しそうに目を伏せた。

一度家に戻って母に　静のことを話して
また弁当屋に戻った。

ちょうど向こう側から　静が歩いてきた。

「静ちゃん。」壮介が声をかけると　驚いた顔をして足を止めた。

「なんで学校来ないんだ？」

「いろいろあって…先生には話たんだけどね……。
学校やめることになると思うの。」

「え？」耳を疑った。

「だって　入学してきたばっかだろ？」

「家庭の事情ってやつ……。」

静の家が大変そうなのはわかるけれど　学校をやめなければいけないというのは

「せっかく入学できたのに？」

「うん・・・・。母親がいなくなったの。」

「いなくなったって何で？」

「面倒になったんじゃない。あの女には母親の資格なんてないから。」

「だって弟だってまだ赤ちゃんだよ？」

壮介は信じられなかった。

「新しい男と逃げたの。

私と圭の父親だって違うから…圭の父親だってどこのだれかわかんない。

愛してる人の子供だから産んだなんてきれいごと言ったけど

結局また他に愛してる人ができたから　私たちを捨てた。」

「ひどいな。」

「母親じゃなくて　女なの。
あの血が流れていると思うとぞっとするわ。
私は絶対　あんな人間にはなりたくない。」

「今は圭はどうしてんの？」

「２４時間預かってくれる保育園にいるの。これから迎えに行く。
バイトする時間だけでも預かってもらえれば助かるの。
親戚の家に今いるんだけど…生活費としていれられるし……肩身狭いの。」

「学校なんかいけないでしょ・・・・。」

静の言葉に　返す言葉が見つからない。

「子供は親を選べないからね・・・・・。
私と圭は　助け合って生きて行くしかない。母親を憎みながら……。」

「送ってく・・・。」それしか言葉が見つからない。

「ありがと。壮介くんの言葉いつもありがたい。
人に優しくしてもらったことなんかないから。」

「何もしてやれないな。俺に金があったら母さんも静ちゃんも助けてやれんのに。」

静が空を見上げて

「ありがとう。その言葉すっごく嬉しい。
壮介くんは　いいおかあさんに育てられてうらやましいな。」

保育園で圭を受け取った。

圭は壮介を見ると　手を出した。

「だっこしてほしいらしいわ。圭も男の人に憧れるんだよね。
おとうさんって言う人間を知らないから……。
この子もいったいどんな人生を歩くんだろ……。全部私にかかってきてるから…

すごくプレッシャーなんだよね。」

壮介は圭を抱き上げた。

圭は　嬉しそうに足をばたつかせて
キャッキャと喜んだ。

「よかったね～おにいちゃんにだっこしてもらって～～」

暗い夜道を三人で歩いた。
壮介は　静が哀れで仕方がなかった。
境遇が似ている静を　なんとか助けることはできないのかと考えたけど
答えは見つからない。

優秀な静は　奨学金という制度のおかげで学校に来られるようになった。
そして母親の妹宅に身を寄せることになって
偶然にも　壮介の家の近所に　引越すことになったと
めずらしく笑顔で　静が　弁当屋に寄った　壮介に教えてくれた。

いろいろ話を聞いていくと　その叔母と言う人に壮介は何度か会っていた。

よく犬を散歩させている女性で　壮介はなぜかそこの犬に
気にいられていて　姿をみかけると　挨拶をする人だった。

ある日の朝　またいつものようにその人は犬を散歩させていた。

その人は自分と静が友人だということを知らない様子だったけど
なんだかありがたくて　壮介はその女性に

「日高さんのおばさんなんですね。」と声をかけた。

「あら…やっぱり知り合いだったんだ。制服が同じだったから…
もしかしたらって思っていたの。」

「角谷　壮介　っていいます。同じクラスなんです。ちょっといろいろあって学校に来てなくて心配したんですけどありがとうございました。」思わずなんて言っていいか　そう挨拶した。

「ありがとうって……」静の叔母は笑った。

「いえ…日高さんは勉強もできるし…もったいないって思ってて…小さい弟もいて　これからどうするんだろうって心配してたんです。」

「静　あなたにそんなお話していたの?よっぽど信頼できる仲なのね。」

「そんな・・・ただ自分たち境遇がよく似てて…母しかいないので…すごく心配してました。」

叔母の女性は　犬を抱き上げた。

「もっと早くなんとかしてあげたかったんだけど　あの子たちの母親……

私の姉なんだけど…とんでもない女で…ずいぶん私も苦労したの。
だから…静は不憫だったけど…姉にまた巻きこまれたくなくて…あの子たちとは
一切関わりを持たなかったんだけど…仕方ないものね。
子供に罪はないわ。それにまだあんな小さな子供までいるんだもん。
うちは幸いに子供はいないから…姉さえ出てこなければ…余裕もあるし…
なんとか手を貸してあげられると思って……。」

「よかったです。これで僕も安心しました。」

「あはは・・・・。
なんだかきみにすごく感謝されて　私もいいことしたようで嬉しいわ。」

犬の頭を撫ぜた。

「あの子にそんな友達がいるなんて…ちょっと安心したわ。
前の学校ではいじめられてるって聞いたから……。これからもあの子のことよろしくね。」

「はい。

壮介は頭をさげた。
なんでこんなに　自分のことのように嬉しいんだろう。

壮介は　静がやっと幸せになれると確信してすごく幸せな気分になった。

母親にそのことを話すると
「よかったわね。あのうちは　社長さんらしいわよ。うちのスーパーにもよく買いものに奥さんくるから　他のパートさんが言ってた。
静ちゃん　幸せになれそうね。」

「よかったよ。なんか俺もホッとしたよ。」

母親は目を丸くして
「あら?そうなんだ〜。」と含み笑いをした。

「なんだよ。かあさん。感じ悪いぞ。」壮介は照れて怒った。

「何よ〜〜おかあさん何にも言ってないじゃない。」

母親が壮介の脇腹をこちょばした。

「やめろよ～～俺ももう大人なんだぞ～～。」

楽しい笑い声。
まだ自分は幸せだと思った。
一人じゃない　かあさんがいつも俺を愛してくれている……。

それだけでも　人生が幸せだと思った。
誰か一人でも　自分を必要としてくれて愛してくれる毎日……。

いつか照れずに言おう。

「かあさん俺　かあさんの子でよかったよ。」って。

絡まる糸～百九話～

静は学校からの許可をもらって週四回　テスト期間を抜かして弁当屋でアルバイトをすることになった。

「おばさんがそんなことしなくていいのにって言ってくれたけど私がイヤだったから…微々たるものでも生活費としておばさんに入れたいの。
圭もその間　今の保育園で見てもらって…おばさんも忙しい人だから…。
圭も団体生活させてあげられれば　もっと成長するだろうし……。
残った分はちょっとおこづかいにもなるでしょう。
そうじゃないと　申し訳なくて…居づらくなるから。」

「偉いな。感心するよ。」

静のすごさに　壮介は感動していた。

「違うよ。偉いとかじゃなくて…負けず嫌いなんだよ。
もう…人にバカにされたくないの。蔑まされるのは……もうイヤなの。」

一瞬　静の目が　熱く壮介を見た気がして　驚いた。

「今日もバイトだから…おばさんが会社に行く前に
車で圭を保育園に送ってくれるから
すごく助かるわ。」

静は慌てて目をそらした。

家を引っ越しして　叔母の家に身を寄せて　静はすごく変わった。
いつも少し脂ぎっていたいた　髪の毛はいい香りがした。

やぼったさで隠れていた静の本当の姿が見えてきた気がして
今まで鼻にもかけなかった男子からも静の変化が眩しく見えだしたようだった。

もちろんそれは壮介にも　伝わってきた。
変わって行く静に一番戸惑っているのは壮介だったから。

なんだ・・・この気持ちは・・・・。

今まで　友情というか　同じような境遇だったから気になっていたと思っていた。
だけど最近　それが少し違うことに気がついていた。

遅くなって帰ってくる静が気になって　ついつい用事をつけては
自然に向いている足に気がついていた。

暗闇の向こう側から　歩いてくる静と　背中で眠る圭を
いつしか迎えにいく自分がいた。

　おかしなことをしてる……。

自分でもそれはわかっていたけど…
幸いなことに　母はそれには　何も言わないでくれた。
母に言われたら　恥ずかしくて　こもってしまうところだったけれど

母は

「壮介がついているから　安心だわ。」そう言って送り出してくれた。

反対に静のバイトが休みの時は　寂しかった。
なんだかんだいって会いたいと思っているのは　自分の方なんだと思った。

やっと静も幸せになれた

壮介は　そう思いながらも　学校でも存在が輝いてきた静に
少し寂しいような複雑な気持ちを抱いていた。

勉強ができて　スポーツも万能
だけど……静に微笑むその表情は　見るものを癒してくれた。

生活状況がよくなって少しふっくらとした静は　柔らかそうで
そんな静に抱かれている圭がうらやましいと思うまでになっていた。

俺は変態か……。

複雑な想いに翻弄されながら毎日が過ぎて行く。
それが恋だって　気づかない振りを必死にしていた。

絡まる糸〜百十話〜

静は　今　生きていて一番充実した時を過ごしていた。
叔母の家ではあたりまえに風呂に入って　ご飯を食べて　温かい布団に寝れる。

静はずっと……
母親の虐待や　育児放置　新しい男を次々と家に連れ込み　小さい頃から耳をふさぎ生きてきた。

男に捨てられるたびに　「おまえがいるから自由になれない。」
そう言うと　ご飯も食べさせてはもらえなかった。
テレビも見たくても　母と男が居間にいる時は　部屋から出られなかった。
風呂にも入れなくて

クラスメートが

「臭い」　「不潔」　そう言ってバカにしているのが聞こえる。
悔しかった。入りたくない訳じゃない。クラスメートがあたりまえにできる
日常的なことも静にはできなかった。

やることは　勉強しかなかった。

母が出かけても　男は家にいた。
怖かった。だから母がいない時は　部屋のドアに突っ張り棒をおいて願う。

どうか入ってきませんように・・・・。

トイレも窓から外に出て　コンビニのトイレに駆け込んだ。

いつまでこんな地獄が続くんだろう

生きた心地のしない毎日だった。

学校にいるのが一番安全だとは限らない。
安全な場所でいてほしいこの場所も　悪口陰口で静を傷つけていた。
とりあえず仕事をこなす静を面倒だからと代表を押しつける女子。

男子の代表が言った。
「臭いから一緒に仕事したくねーんだよな。」

容赦ない言葉の矢が突き刺さる。

そんなある日のことだった。

「静　あんたにきょうだいができるからね。」母がそばにいた男に

体を寄せて言った。

「きょうだいって……。」

静は目を丸くして言葉を失った。

「涼ちゃんの子供ができたの。今度は幸せになるから。」

そう言って男の頬に口を寄せて何かをささやいた。

背筋がぞっとした。

男は少し年がいった男だった。家庭を持っているようでいつもそのことで母親ともめていた。

「それからスーパーもやめるよ。もう子供生れてしまうし。」

「いつ？」

華奢な母親の妊娠は　静にもわからなかった。

「ギリギリまで働いたしね…。とうとう昨日気がつかれちゃったわ。一緒に働いてる角谷さんに……。どっちにしてももう限界だし涼ちゃんがちゃんと結婚してくれるって言ってくれたし…これで私も奥さんになれるわ。」

静は男の目を見た。
男は目をそらす。
　捨てられるのは時間の問題なのに・・・・・。

反対する間もなく　弟が生まれた。
入院したのと同時に　男は姿を消した。
母はまた　裏切られて　そして子供まで作ってしまった。

「静　この子の名前　あんたが決めな。」完全に育児放棄をする手前だった。

静は真剣に考えて考えて　圭と名づけた。
自分と同じ境遇をこれから歩く　この赤ん坊が哀れだった。
そして愛しさがこみあげてくる。
学校もそこそこに圭の育児に追われ始める。自分の時間はまったくなくなった。
それでも自分の味方ができたようで　静は嬉しかった。

そのころは圭の育児をまったくしなくなった。
静が学校にいっている間　睡眠をする母親は　圭がうるさくて仕方ないと怒った。

二人っきりになってまだ口のきけない圭に聞いた。

「あんたも不幸だね……。あんな女が母親なんだから……。」

オムツを取り替えた時　圭の太ももにちねられたような小さなあざがあった。
可哀そうで静は圭を抱きしめた。

しばらくしてまた母親が　男をつれこみ始めた。今度は若い男だった。
ホストクラブに勤めているようで　母と一緒に夕方出かけていく。
母親は静がいない時間で　圭を保育園に預けることにした。

「働かなきゃ食って行けないでしょ？あんがが学校終わったらまっすぐ迎えに行って。」

静は学校から保育園そして家　忙しく往復して勉強と育児に奮闘していた。

絡まる糸～百十一話～

人に優しくされたという記憶は少ないけど　とても優しい女性がいた。
母親の同僚で一度　会った時の印象がとてもよくて　あんな人が自分のおかあさんだったら
そんな憧れを抱いてしまうような女性だった。

初めて会った時　その人はすごく叱られていた。
母親が「新しく来た人は　ちょっととろいんだよね。いつもお局に叱られればかりいるんだよね。」
と笑い話にして　言っていた　きっとその人かなと　静は思った。

あまりに叱られていて　気の毒だと思っていたら　その人は静ににっこりと笑いかけた。

「いらっしゃいませ。」

「あ…あの…私　日高の娘です。」

「あ　日高さんのね～～。角谷マサヨです。お世話になっています。」笑顔が優しそうだった。

それからその人の笑顔に会いたくて　買いものはなるべく遠かったけど
そこのスーパーに出かけては姿を探した。
母親が店をやめても　静は通った。

母親がそこの人たちからお金をかりて　どうしようもなくなったのはかかってくる電話のやりとりでわかっていた。だから仕事を辞めたんだ。

「おばさんからも・・・お金かりたんでしょう?」
ある日　圭をおんぶしていつものように　マサヨを探して勇気を出して聞いてみた。

マサヨは困惑した表情だったけれど
「きっと大変だったのよ。うちもそうだから……返すのも難しいものね。
子供はそんなこと気にしちゃだめよ。」

マサヨは静の背中をポンと叩いた。

人から大切なお金を借りて…若い男に貢いでいる母が憎かった。

そんなある日のこと

「うちに来ない？」そんな静を察したのか　マサヨはそう言うと微笑んだ。

自然に首が動く

「はい。」すごくすごく嬉しかった。

マサヨと一緒に買いものをした。
母親と一緒に買い物をするようですごく新鮮だった。
母親とは一度もそんな記憶はなく　クラスメートがよく会話している母親とのやり取りを聞きながら　うらやましく思っていた。

「何が食べたい？」優しい笑顔。
この人がおかあさんだったら・・・・そんな気持ちになると胸が熱くなる。

「手伝います。」マサヨが圭を寝かしつけてくれたので台所に立ったマサヨに　静はそう言った。

「いいわね～女の子も～～～。じゃあ甘えちゃおうかな。」
マサヨが笑った。

マサヨも母子家庭で静と同じ年の男の子がいて　生活が大変だと笑った。
子供はとてもいい子で　よく協力してくれて助かると教えてくれた。
母子家庭でも　こんな母親の元で暮らせたら　どんなに幸せだろうと静はうらやましく思った。

楽しい時間だった。

おかあさん・・・・・

そう呼びたい・・・・・そう思った。

絡まる糸～百十二話～

マサヨの子供が帰ってきた。
低い声を聞きながら　静はドキドキしていた。

そして入ってきた息子壮介はとても背が高くて…そして男らしく端正な顔だちをしていた。

静の胸はすぐにドキドキと脈を打つ。
マサヨから聞いた通りの優しい男の子で
自分と同じ学年だと聞いていたから　とても恥ずかしくなった。

盗み見する顔は・・・どこかで見たことのあるきがした。

似てる……。

姿形は全然違うけれど…どうしても重なってしまった。

静の学校の生徒会長だった　板垣　大介・・・・。
中学の入学式の日　新入生代表の挨拶をした板垣　大介は
凛として堂々として自分とはまったく違うものを持っていた。

毎日　大介は黒塗りの車で登下校していた。

お金もちの子供

みんながそう噂していた。
勉強もできて　悔しいけれど静は一度もまだ勝てたことがない。

あたりまえのように生徒会に入った大介とは反対に
やらされてクラス代表になった静は　大介の人の上に立つという能力に
優れたところに　いつも感心していた。

先輩たちにも一目おかれる大介は
女子の憧れの的でもあった。

全然私とは　違う人種……。

ここにまた全然境遇が違うのに　大介に感じの似てる壮介がいる。
お互い母子家庭ということでなんだかとても親近感がわいた。
同時に　マサヨという憧れの母親像を母に持つ　壮介がうらやましかった。

男子とこんなに話たことは初めてだったけど
壮介はとても優しく話してくれるから　心がすぐに打ち解けた。
ときどき

どうして会長と表情がだぶるのかな

そんなことを考えながら…マサヨによく似た優しい笑顔に
静の心はいつしかほんわかと温かくなって　特別な感情が芽生えて
いるのがわかっていた。

恋をしてる……？

そんな壮介とまた再会したのもつかの間で
とうとう母親が出て行った。

借金から逃げている若い男を追って

「圭を育ててる暇はない
あんたには悪いと思ってるよ。
だけど私だって……愛が欲しい……女でいたいんだ……。」と言う。

「じゃあ　どうして私と圭を産んだの？」

「愛した人の子供だったから……。」
そう言い残してある日　学校から帰ってきたら　テーブルに一枚の
書き置き

『私は母親にはなれない。
自分を愛してくれる人の腕の中で　暮したい。
いつかきっとあんたが大人になったら　わかってくれる…。』

貯金通帳には少しだけ当面の額が入っていた。
無造作におかれた三文判

それから妹に頼れと書いてあった。

不思議と寂しいと思わなかった。やっと解放された…そう思った。
狭い家の中に次々と変わる男への恐怖感
耳をふさぎ泣きながら眠った夜……
母は男の前では　女だった。

男と女に絶望して…ずっとずっと耐えてきたから
母親がいなくなって　すっきりとした気分だった。

働かなきゃ

静を母だと思いこんでる圭のためにも……
今までの生活を考えれば…幸せだった。なんとかなる……。

顔見知りのお弁当やでアルバイトをさせてもらえた。
学校は行けなくなったけど　仕方がないと思った。

　壮介くん…心配してくれてるかな……。

壮介に会えないことだけが悲しかった。
でも今は　生活していかなければならない……。
母親が失踪したのは　まだ誰にも言わないでいたけど　ある日女性が訪ねてきた。

母の妹と名乗る人は　近田　頼子　と言った。

「ねえさんから　連絡もらったんだけど……。」

家に入ってきて　叔母は

「本当にあの人　あんたたち置いて出て行ったの？
あきれるわ…。何考えてるんだか…。」

少し時間をちょうだいと言って　叔母は帰って行った。

弁当屋に壮介が現れた。
偶然に　静の心は熱くなった。
心配してくれる様子に　嬉しくて　なんだかウキウキした。

壮介くんが…好き……。

静の心に芽生えた　恋の芽がまっすぐ伸びて行った。

絡まる糸～百十三話～

あってはならないことだった。
一学期の期末テストで　大介は初めて一位の座を明け渡した。

二者懇談で先生から
「板垣　今回も接戦だたけど……今回は…学年三位だったな。
一位とは十点差　二位とは三点差…レベルが高いベスト3争いだな……。」
先生の言葉に大介は　動揺した。

じゃあ一位は…日高　静か・・・・・。

同じ　中学出身で…いつも俺のあとに続いて成績のいい女

初めてだった。

三位……。
二人にも抜かされてしまって……気が動転していた。

「大介　とうとう抜かされたな～～。」洋一が　どこから情報を仕

入れたのか
面白そうな顔で言った。

こいつの情報には頭がさがるな……。

「すごいんだな。日高って。
大介の学校だったんだろ?それに最近　綺麗になったらしいよな。
クラスの奴が劇的に変わったって　言ってた。」

やはり　静か……。

確かに　日高　静　は　ものすごく変わった。
三年間　一緒に生徒会の仕事をしたけど　話たことは本当に数回
陰気で少し不潔っぽくて　最後の方はまともに仕事もしない無責任
なタイプ。
だけど　最近見かける静は　友人ができ　笑顔ですれ違う。
少し不潔っぽかった外見も　さなぎから抜け出た蝶のように……
今は　すっかりあかぬけていた。

女ってすごいな……。

「おじさん・・・　キレるんじゃないか?」

洋一の嬉しそうな顔が悔しい。

父親にとっては　一位なんて位置はあたりまえにすぎなかった。
あたりまえすぎて・・・・想像もつかない。

三位……

「おまえは少しあがったのか?」話をかえしてやる。

洋一は
「俺のことはいいじゃん…どうせ…たいしたもんじゃないよ。
ところで二位は誰なんだろうな。」

「どうでもいいよ。おまえは人のことはいいからさ……
自分のこと頑張れよ。」

「俺と大介はさ　もう将来が決まってるだろ?」

「おまえは社長で　俺は副社長　って感じ?」

おまえみたいな　無能な奴　無理だ。

大介は思わず吹き出した。

「何よ?なんか問題あっか?」
さすがの洋一も気分を損ねたのかムッとしている。

洋一は　思った通り　中学でもあまり好かれてはいないようだった。
クラスの女子が
体育の授業でグランドに立ってる　洋一を名指しで

「あいつ　ほんと嫌い。宇宙に拉致されたらいいのに~」と
心底大嫌いと言いたげな表情で吐き捨てたのが　おかしかった。
それは　洋一に教えてやりたいけれど…さすがに気の毒だから
大介の胸におさめてやっている。

「告白されるんだけど　断ってんだよな。」

なんてあれは見栄はりまくりか……。
洋一の欠点は　そんなところから来るんだろう。

それにしても　今回の結果は　いつものように父親はあたりまえで
無関心だから自分から言わないでおこうと大介は考えていた。

「壮介とは喋ったのか?」

一番ふれたくない壮介の名前が出て　さすがに大介もムッとしてきた。

「話す内容がないだろ。」

「双子なのに…まぁ…全然似てないから…周りもまだ気づいてないみたいだし…。」

いちいちムカつく男だなと大介はイライラしてきた。

壮介とは他人だった。

向こうからも話かけてくることもなく　廊下で会ってもお互い目線がぶつかることもなく……他人としてすれ違う。

それにしても…大介のコンプレックスは　体格の貧弱さと少し成長が遅いことだった。

なかなか背が伸びてこない。

父親からは　好き嫌いばかりしてきたからだ　と言われた。

同じ双子の壮介は　もう完璧にでき上っている。

きっとその成長の違いで　誰も二人が兄弟だとは分からないのかもしれない。

このまま成長しなかったら……

周りがみんな男らしくなる中で　大介だけがまだ　少年だった。

勉強も運動も…それから人をまとめる力もあるのに……

高校に入ると周りが大人過ぎて　自分だけが異質な感じがした。

そう大介に　痛感させるのは　やはり壮介の存在だった。

絡まる糸～百十四話～

「壮介くん～～」

正門を出たところで　後から声がして振り返った。

「待って～～。」息を切らせて　静が走ってきた。

「今日は　バイトかい？」

「だったんだけど…店長からメールきてシフトが変更になったの。」

静がカバンの中から携帯電話を出した。

叔母の家に引越してから　一番今欲しいものは？と聞かれて

携帯と言ったら…買ってもらったと　嬉しそうに報告してくれた。

「これで　保育園や　店や　家に　電話かけたりできるから

圭のこともあるし…一安心。携帯代も増えたからまた仕事頑張らないと～」

静もとうとう携帯を持ったんだ……。

壮介は嬉しそうな静を見ながら　少し複雑だった。

昨日　男子からアドレスを教えてほしいと言われて困っていたけど
静は　すっかり外見だけじゃなく　内面も変わってきてしまった。
壮介以外に友達はいなさそうだった生活が一転

最近は人の輪の中心で　笑っている姿をよく見るようになっていた。
クラスも一緒だし　壮介はそんな幸せそうな静を見ながら

よかったな…

そう思うものの　どんどん距離が広がってくるようで寂しかった。

「もう…圭は保育園にいるんだけど…夕方まで……
壮介くんと一緒にいたいなって…あ…これ変な意味じゃないよ……。
圭もいないから…少しゆっくり話せるかなって……。」

真っ赤になった静が慌てる。

「あはは・・・そんな思いっきり否定すんなよ。」

壮介は思いがけない誘いに一気にバラ色になる。

「かあさん　今日休みだからうちに来るか?」

「ほんと?嬉しい~~。おばさんにも会いたかったの。
いろいろ報告したいこともあったし。
突然行ったら　驚くだろうから　壮介くん電話して聞いてくれる?」

静が携帯を貸してくれた。

これが・・携帯か~~便利だな~~

変な感心をしながら　大歓迎の母親の声を聞きながら家に向かった。

「壮介くん　学校だと非常に話しかけにくいんだけど……。」

「ああ…あんまり人とかかわるの苦手なんだよな。」

「そうなんだ。
でも女子からは　そんなとこがけっこう人気だったりしてるみたい。
」

「え~~?マジ?それはうれしいっしょ。」

まんざら悪い気もしない　反対にすごく嬉しかったりする。

「壮介くんとこんなにお話できるのって…もしかして私だけ？」

「考えてみると……実際そうかもしれないな～～。」

「それは大光栄だわ。うふふ・・・・・」
肩をすぼめて静が笑う。

可愛く笑うんだな・・・・・・。

思わず見とれていたら　目が合って　慌ててそらした。

「なんか圭がいないって変だよな。
静ちゃんと一心同体イメージが強くてさ。」

「私の宝物だもん。でもたまには…こうしてゆっくりと
自分のために使う時間も欲しい……最近　恵まれ過ぎていて
少し贅沢になってるのかな。
だから今日みたいな　思いがけない貴重な時間は　壮介くんと
いっぱいお話したかったの。」

愛の告白なわけじゃないのに
壮介の体中から　汗が噴き出してきた。

「どうしたの？」覗き込む静が少しアップで
心臓が高鳴った。

「あっつくない？」思わず目をそらす。

「ううん～～ちょうどいいけど？」

まずい・・・俺の心の中にやばいもんがいる……。

壮介はそう確信した。
静に心を奪われていた。

これが…恋……なんだ……。

静に対する胸のときめきに　壮介はパニックになっていた。

俺　静ちゃんが…好きなんだ……。

バカみたいに何度も心で　つぶやいていた。

大人の階段〜百十五話〜

家につくとマサヨが笑顔で迎えた。

「静ちゃん　本当によかったね。
いい子で頑張ってるから　きっと神様が力を貸してくれたんだよ。
幸せに暮らしなさいね　応援してるから。」

「ありがとうおばさん。」

静が涙ぐむと　マサヨも涙を拭いた。

「今日はちょっと急いで作ったから
大したものはないんだけどね食べて行きなさいね。」

「すみません。」

しばらく居間で　マサヨと静が話をしていた。
壮介は部屋に行って着替えながら　二人の話を聞いていた。

今の叔母の家での暮らしはとても　幸せなことや
圭も自分も　あたりまえのことができなかったから　あたりまえができて
すごくすごく嬉しいと　静は声を震わせた。

それから　自分の母親への恨みの言葉を語りだして

静の母親がどんなにひどい女なのかw
めずらしく早口で話した。

「そうなの。おかあさんは…女でいたい人だったのね。
誰かに女として愛されたいって…そう思ったんだ……。
でもその気持ち　わかる気がするの。こうやって離婚して…一人でいるとね
すごく切なくなる時があるのよ私だって……。
男の人一人にもまともに愛されなかった…自分は女としてダメな女なのかなって……。
静ちゃんのおかあさんは…自分にきっと自信があったのね。
私との違いはそこにあるのかもしれないわ。」

壮介はその言葉に少し複雑だった。

「愛される女がうらやましいなって…思うよ。」

マサヨの言葉に　父が選んだ若い女が浮かんできて
壮介は母親がとても可哀そうに感じた。

「何言ってんだよ。かあさんは…俺には最高の女だよ。
世界一の母親なんだぞ。」

思わずそう叫んでいた。

一瞬　マサヨと静は目を合わせて　笑い始めた。

「なんだよ。」

「ありがと・・・。ほんと……ありがと……。
おかあさんも壮介の母親で幸せだよ……。そうだね……。
ほんとありがとうね壮介……。」

そういうとマサヨは泣き出した。

壮介が驚いて立ちつくしていると　静がマサヨを抱きしめた。

「私も…子供にそう言ってもらえるおかあさんになりたい……。
私も…おばさんが大好き。おばさんが私のおかあさんだったら…
いつも想像してたの。壮介くんが自慢するの私よくわかる。」

「静ちゃんまで……。
そしたら…もう二人は絶対に結婚して……。
私は二人のいい母親でいられるから……。」

マサヨの冗談話に　壮介はドキンと胸が鳴った。

「うん…。壮介くんに私からも頼んでみる。お嫁さんにしてって……。」

静の言葉の返しに　壮介はドキドキして

「何でそんな……話に発展すんだよ。」

マサヨと静が笑いだして…つられて壮介も笑った。

いいかもしれないな～～

壮介は　そんなことを考えていた。

大人の階段〜百十六話〜

電話が鳴ってマサヨが立ち上がった。
仕事場の人のようで　電話を切って

「仕事場の人が具合悪いらしいの。
おかあさん　変わりに行ってくるわ。
ごめんね　静ちゃん。
壮介　帰りちゃんと送ってあげてね。」

「まったくかあさんは…
お人よしだな。この間だって
そいつ　かあさん具合悪い時　頼んだけど変わってくれなかった。」

「そういうこと言わない〜
やられたことを返していたってしょうがないわ。
私は気持ちよく受けるタイプだから。

優しい笑顔だった。

マサヨが出て行って部屋は二人っきりになった。
なんだか急に落ち着かなくなって　壮介は慌てていた。

「どうしたの？壮介くん。」

「あ…いや…」カッコ悪くて汗が出る。

二人で食事を済ませて　静がお茶碗を洗い始めたから
壮介は茶碗を受け取って片づけを手伝った。

「おばさん　ほんと素敵な人だよね。」

「自分の母親だけど俺も…実はそう思うんだよね。
お嬢さん育ちでさ　ずっと家政婦さんいたから
大変だったんだよ　最初は。だけど俺を育てるので必死だったから
俺も多少の失敗は見ない振りしてたよ。」

思いだして苦笑した。

「いいおかあさんだね。私もあんなおかあさんに
絶対なるんだ。子供のこと一番に愛してあげられるおかあさんに…
…。」

「なれるよ。静ちゃんなら絶対
いいおかあさんになるそう思うよ。」

「そのまえに…いい奥さんにならなくっちゃ……。」

そう言うと静は　壮介を見つめた。

「私…壮介くんに…恋してると思う。」

壮介は持って行ったふきんを落としそうになった。

「え・・・？」頬が熱くなってくるのがわかった。

「今まで　誰にも心配されたりしたこと…なかったから…
壮介くんが私に同情してくれてすごくすごく嬉しかった。
ずっと死んでしまいたいって思ってたけど
壮介くんと同じ学校に行きたいとか…今まではキレイにすることさえ
許されなかったけど…今　おばさんのところで
あたりまえの生活をさせてもらえて…鏡の前に立ってる私は
壮介くんに見てもらいたくて…必死だったりするの…。」

静はそう言うと　またお茶碗を洗い始めた。

「壮介くんだけに…キレイになったとか
思ってもらいたい……。」

壮介に皿を渡した。
その皿を壮介は静かに下に置いて　その赤くなった手を

思わず握りしめた。

静は驚いた様子で　壮介を見つめた。

「俺も……俺もずっと気になってた。
初めて会った時から……境遇が似てたりするのもあったけど…。
静ちゃんが学校に来なくなってすごく心配だったし
最近キレイになる姿にドキドキしてたり……
初めての感情に……戸惑ってた。」

静の頬も赤くなっていた。

「きっと俺は　静ちゃんに恋してるのかなって…最近そう思った。」

「手…ザラザラでしょ？最近は　おばさんのところで
幸せ気分でお手伝いするけど…なかなか手荒れが治らない……。」

「働き者の手だよ。かあさんと同じ。
頑張ってる手……。

壮介は思わずその手にキスをした。

「俺と…付き合ってください。」

「え・・・・？」

「その言葉は先に俺に言わせて。」

静がクスクス笑った。
壮介も恥ずかしそうに笑う静がとても愛おしく思えた。

「おばさんが一番で私が二番でいいから。そんな壮介くんを好きになったの。優しくて思いやりがあって…そういう教育をしてきた
おばさんを尊敬してる。」

「ありがとう。かあさんも喜ぶよ。きっと。
あ…だけど三番目もいるよ。」
壮介が言うと
静が　不安そうな表情に変わった。

「三番目は……圭でしょ。
俺と静ちゃんの　子供にして可愛がってやろうね。」

静は目を丸くして　そして泣き笑いをした。

「大好き…大好き…壮介くん……。」
静が愛おしくてたまらなかった。
初めてのキスは　静の涙の味がした。

「俺が静を……幸せにしてやるから……。」
壮介はそう言うと　静を強く抱きしめた。

大人の階段〜百十七話〜

引きつけられるように　お互いの寂しさをうめるように
壮介と静は親密になっていった。

「結婚したら…絶対に死ぬまで一緒にいる夫婦になろうね。」

家庭運が悪い二人は　そう言い合いながら
まだ幼いなりに結婚の約束をしていた。

「親の勝手で子供に寂しい思いをさせることは　自分たちが親になった時は
絶対にしたくない。一緒に子供を育てて　子供が出て行ったら　二人で好きなことをして
そして最後の瞬間まで一緒にいよう。」

それが家庭に恵まれなかった二人の誓いだった。

幼い圭も　壮介によくなつき　「そうちゃん」と呼ぶようになった。
壮介は男の意地とプライドにかけて　静に負けまいと必死に勉強をした。
二人でいる時は　抱き合って愛を語り合っている以外は
勉強をするようになっていた。

「静はどうしてそんな頭いいの?うらやましいな。」

「勉強するしか趣味なかったし　テレビも漫画もみれなかったでしょ。
教科書見るしかないじゃん。」

「そっか～俺はそこらへんはまったく自由だからな。」

大介を入れて三人で上位争いをしていたが　今は一位争いを静としている。
大介を抜かすことよりも静に勝ちたいと思っていた。
だけどまだ静に勝ったことはなかった。

「この間　阿部さんに聞かれた。壮介くんと仲いいのって。」

「ああ…阿部さんね……告白されたよ。断ったけどね。」

「え～～告白されたの!?知らなかったよ。え～～!!」動揺する静に
少し嬉しい壮介だった。

一人だけではなかった。最近モテ期なのか…続けて三人から告白された。
断ると　「好きな人いるの?」と聞かれたから

「いるよ。」と答えた。

壮介はもうばれてもいいと思っていた。
真剣な気持ちで付き合ってるんだし……それにキレイになってきた静を
見る男子たちの視線にも少し心配だったから……。

「私と付き合ってるなんてわかったら…大変よ。
壮介…バカにされてしまうわ。」　静は慌てた。

「俺は静が彼女で　すごく自慢したい気分だけどね。」

「自慢？私なんて昔…不潔とか臭いとか…言われてたから……。」
悲しそうに下を向いた。

「それは清潔にできない事情があったんだよ。
今の静を見て　誰もそんなこと言うやつはいないよ。
反対にさなぎから生れた　綺麗な蝶みたいだ。」

「蝶だなんて……。」静は嬉しそうに笑った。

「俺が見つけた…俺だけの蝶だから…静は……。」

今は勉強よりもずっと　静を知ることが楽しかった。
静は壮介の生きた教材で　静が喜んだり　恥ずかしがったり　すねたり
いろんな表情をみるのが　一番楽しかった。

「静をもっともっと…知りたい……。」

「私ももっと知ってもらいたい。」

大人の階段を登り始めた二人は　今までの寂しさを愛で埋めるのに必死だった。

「私を壮介のお嫁さんにしてね。」

「うん。ずっと死ぬまで一緒だよ。」

二人は一つになるたび　幸せの誓いを立て合った。

そう……二人はずっと信じていた。
初めての安らぎに　一生　二人一緒にいれる……そう思いこんでいた。

大人の階段～百十八話～

幸せで満ちた毎日を送る壮介と静だったが
二年になり　クラス替えをしたあたりから　二人を取り巻く環境が
少しづつ変わってきた。

静とはまた同じクラスになって喜んでいたけれど
その喜びもつかの間だった。

「同じクラスだな。よろしくな。」

洋一が名簿に乗った時に　壮介は　終わった・・・と思った。
中学の頃　こいつのせいでどれだけイヤな思いや悔しい思いをしたことか。

おまけに大介も隣のクラスになり
体育に授業で一緒になることになって　さらに気が重かった。

入学時の大介は華奢で細かったけれど
ここ半年くらいで　身長も伸びて　二人の容姿が似てきているのはよく見ればわかることだった。

大介は生徒会で活躍している。
生徒総会や学年集会で　その頭角を現している。

次期生徒会長は　壮介から見ても大きく見えた。

「学年ベスト三位争いの二人が同じクラスですか～～」
嫌味くさそうに洋一が言った。

「なんか壮介　最近怖い顔してるよ。」静に指摘されたように
中学の時あだ名をつけられた

狼

壮介は洋一がきっと何かしてくると
気が抜けなくなってきていた。

「洋一には気をつけろ。」

「うん　わかった。」静も巻き込まれたら大変だと思った。

そんなある日のことだった。

「角谷くん　ちょっといい？」

大介のクラスの女子に声をかけられた。

壮介は足を止めてふり向いた。

「あの……つきあってほしいんだけど……。」

頬を真っ赤にして緊張している様子が　微笑ましかった。

「ごめんね。俺は好きな人がいるから…。」

女子は悲しそうにうつむいた。

「ありがとう。俺みたいなのに勇気出してくれて。」

「ううん。好きな人がいるって噂は聞いてたから……
それでも気持ち押しつけてごめんなさい。」

そう言うと女子は逃げるように待っていた女子のグループに
戻って行った。
最近　告白されることが増えて

静とのことをはっきり言えたら　罪悪感もなくなるんだけどなと
壮介はため息をついた。

女子は泣いていた。

まいったな……。

「すごいな～すごいな～～壮介くんは～～。」

教室に戻ると　洋一が大きな声で言った。

「モテモテだね～～～。」とうとう始まった…と思った。

「さっきの子さ俺と前同じクラスなんだけど　けっこう可愛いじゃん。
どうした?付き合うことにしたのか?」

洋一に対しての嫌悪感は小さい頃からあった。

大介の後ばかりついて　壮介を見るとバカにした顔で何かにつけていちゃもんをつけてきた。
大介は何も言わなかったが　洋一が二人の間を駆け回って口をあまり聞かない二人を遠ざけていたような気がする。

「断ったのか～～?すごいな～～～。
断っちゃうんだ。壮介くんは　理想が高いんだ～～。」

バカにしたようなその言い方に　ムカムカしてきた。

静が心配そうに壮介を見つめた。

「同じ双子ならさ…俺なら大介の方が絶対にいいな。
だってさ　次期社長で金持ちで～～～。」

そう言いかけて　洋一は口をおさえた。

「え～～～～何?板垣と角谷って…双子なの!?」

その言葉にクラスが騒然となった。

「あ～～～やべ～～～。」洋一はそう言いながら笑いを浮かべた。

「そう言えば…なんか似てるよな。」
クラス中がいたるとこで
壮介と大介の共通点を　議論し始める。

壮介は思わず洋一を睨みつけた。

「お～～こわ～～狼が目を覚ましたな。
そろそろよそいきの顔はやめた方がいい。おまえは
そういう顔が本当の顔だからな。」

これ以上話したら殴りつけそうだったから
教室から外へ出た。

クラスの中では　大介と壮介が双子だという驚きの話題で持ち切り
になっていた。

やっぱりな

洋一の存在は　壮介の生活を狂わして行く気がした。

静も驚いているだろうな

隣の教室で読書をしている大介を見つけた。

双子で悪いか？

相変わらず　落ち着いた様子の大介を見ながら

違う俺が　もう一人いる……。

一卵性双生児の二人は　大介の成長とともにやはり似てきていた。
どこが似ている？

顔は似ていても　性格は全く違うし…好きな事も興味も一切
共通点はなかった。

大介を見ていると焦る。
　こいつにだけは　負けたくない

そう思う気持ちがまた　強くなっていた。

大人の階段～百十九話～

洋一と同じクラスになったばかりに　平穏だった生活が一変した。
壮介は無表情に　洋一の言葉を聞き流すのが必死だった。

「壮介…大丈夫？」静が心配そうに言った。

「静もいじめられてきたって言ってたろ。俺もそう。
きっかけはアイツ。最悪な気分だよ。」

「あの人女子の間でも人気ないよ。すごく嫌われてる。
壮介が可哀そうって同情してたもん。」

「そうか。人間まだ捨てたもんじゃないな。アイツのおかげで
知られたくないこともまた知られたし……。」

「板垣くんのこと？私もビックリしたわ。中学の時同じだったから。
でも初めて壮介に会った時　誰かに似てるって思ってたから……。」

「タイプは全く違うんだけど双子だからな。
でも俺たちはもう何年も話したことないんだ。兄弟だけど一番遠い
存在かな。」

一番遠い存在・・・・・。

「好きよ。私は壮介が一番好き……。
もし板垣くんが　壮介と全く同じ顔になったとしても私だけは
壮介を見分けることができるもん。」

「え？どうやって？」

壮介は静を抱きしめた。

「私を見つめる目が……壮介は優しいから……。」

壮介と静は一つになるたびに心も体も溶けあうような気がした。

「俺は世界中の人間からそっぽむかれても
静だけが俺をわかってくれれば……それでいいよ。」

静と出会えてよかった……
壮介はそう思った。人に愛され抱きしめられることがこんなに心地
よいことだということを
静によって教えられた気がした。

「アイツに負けないで。」

「うん。」

静がいれば……何も望まない……。

壮介はそう思った。

「日高さん。」ある日洋一が　友達と話している静に声をかけた。

「何？」

「この間さ　塾で一緒だった友達に日高さんと同じ中学出身がいてさ
アルバム見せてもらって　ビックリしたよ。
すごい変わったんだね。大介も同じ中学だったんだって？
アイツはあんまり他人に興味示さないからわかんなかったけど。」

静が変わったというのは　もうずいぶん前にピークを終えた話しだった。

「個人写真みてさ　ぶっ飛んだよ。」

静はムッとした顔をしていた。
あの頃のことには触れてほしくはない　それも　壮介の前では
してほしくない話題なんだろうと思っていた。

「俺　今の日高さんにしか知らないから　そいつに言ったら
そいつもぶっ飛んでた。あはは～二人でぶっ飛んだ～あはは～～」

しらけた空気が教室内に広がった。
壮介は次に何か言ったら　飛んで行こうと思って息を整えていた。

気をきかせて　友達が
「静ちゃん　トイレ行こうか。」と静の手を引いた。

「あ…うん。」静が立ち上がった。

壮介は友達に感謝した。

静が教室を出た後　洋一がそばにいた男子に

「ほんと別人だから。不潔で臭くて嫌われてたらしいぞ。

今とは想像もつかないぶさいくな女。整形したんじゃないのか？」
そばにいた男子がリアクションに困っている様子だったが

「ばけもんだな。」

また静を悲しい子にするのかと壮介は　カッとなった。
自分と静が重なって　いじめられたりバカにされることがどんなに
辛いことか　このバカは何もわかっていない。

「日高　静には騙されんなよ～～。」そう言って高笑いする洋一の
背後から近づいて振り向かせた。

「テメーいい加減にしろや。」
壮介はカッとしているのに　冷めた声が出て自分でも驚いた。

「正義の味方のふりですか？狼さん。」小憎らしい顔

「人が嫌がっていることを言うのはやめろよ。空気読めよ。」

「は？俺はホントのこと言ってるだ……」言い終える瞬間
洋一の頬に拳が入った。

机をバタバタと倒して　派手に洋一がひっくり返った。

大人の階段〜百二十話〜

相談室のドアを開ける時　マサヨは大きく息をした。
休みで家にいたマサヨにかかってきた電話は

「壮介くんが暴力事件を起こしたので　すぐに学校に来て下さい。」

という担任からの電話だった。

暴力って……

壮介のような優しい子供が　暴力事件を起こすなんて
考えられなかった。

世間が壮介を責めても母親の私だけは
彼の味方でいよう

大きく息を吐いて　ドアを開けた。

壮介は申し訳なさそうな顔でマサヨを見ていた。

背中越しに座っている母親らしき女性がふり向いた時
マサヨは心臓が止まりそうになった。

「あ・・・あなたは……。」

元夫の弟の妻で　何度も面識はあったけれど
あまり好きな家族ではなかった。

まさか……

「おかあさんどうぞ　お座り下さい。」

担任が手を指した場所に　マサヨは立った。

「おひさしぶりね。マサヨさん。」

「おひさしぶり。」

「こんな形で会えるなんて…思ってもなかったわ。」
洋一の妻は　上から下をバカにしたような顔で見ていた。

すっかりみすぼらしくなったマサヨにバカにしたように
「なんだか　人違いみたいに変わったわね。
苦労なさってるんでしょ?たまにスーパーで見かけてたんだけど
声をかけるのもためらっちゃって……。」

「仕事中だから…声かけられても困るのよ。

これからもそうして。」と拳を握りしめた。

「よろしいですか?」担任が口をはさんだ。

マサヨは座った。

洋一の口元が切れて　青くなっていた。

いきさつを聞きながら　マサヨは壮介は間違ってないとおもったけれど
どんなことがあっても暴力はダメだと思ったから

「暴力に出たことは絶対にいけないことですので母親として
息子にはしっかり言い聞かせます。
でも…壮介をそこまで怒らせた洋一くんには
問題はないのですか?息子は嫌がらせを受けていたクラスメートを
助けただけですよね。先生の報告はそうとれます。」

「確かに洋一くんにも問題はありますので　今回はお互いに注意ということで
保護者の方に立ち会っていただくために来ていただきました。」

マサヨは

「ありがとうございます。」担任に頭を下げた。

「ちょっと待ってください。」立ちあがったのは　洋一の母親。

「納得いきません。息子はケガしたんですよ。
いくらきっかけがうちだとしても　すぐ手が出るじゃ怖くて学校に
通わせられませんよ。
こんな進学校で暴力なんて…外に知れたら大変ですよ。」

その時だった校長と一緒に入ってきたのは　強だった。

マサヨと壮介が驚いていると　校長が

「ＰＴＡ会長も来てくださったので　しっかりと話しあいましょう。
」

校長は担任に手招きをして　一度退席した。

強はイスに深く腰かけて　大きくため息をついた。

「おまえたちは　俺の顔に泥を塗るつもりか？」

洋一と洋一の母親は小さくなっていた。

壮介はまっすぐ前を見て　強を睨みつけた。

大人の階段〜百二十一話〜

「それも親戚同士で……何を考えてんだ?」

「すみません…。息子にもよく言い聞かせます。」

洋一の母親は頭を何度も下げた。

「まったく……。おまえたちの教育の悪さにはあきれるな。」

マサヨはカチンときた。

「そちらの息子さんは　どうかわかりませんけどね
うちの壮介への教育はしっかりさせてもらってます。
こんなことは初めてです。先生のお話では　洋一くんのクラスメートへの
暴言に壮介が怒ったと言ってました。
暴力はいいことではないのは　壮介はよくわかってますけど
よっぽどだったんじゃないですか?」

マサヨは自分でも驚くほど　よく言いかえしたと思った。

「壮介……おまえ逞しくなったな。」

強は急に話題を変えた。

「大介を抜かしたんだとか?やっぱり俺の子だな。」

強の言葉に　マサヨは怒り心頭だったが

「俺はあなたの子供ではありません。」壮介がキッパリと言い放った。

「あははは・・・・」強が高笑いをして壮介の肩を叩いた。

「おまえのその根性の入ったプライドの高さがいいな。
やればできるんだ。おまえは。
いつまでもそこで　貧乏な暮らしをしていないで　俺のところへ
戻って来い　教育しておまえを俺の跡取りにしてもいいと思ってるんだ。」

「あなた…大介はどうするんですか?」マサヨは急に不安になった。

「大介がそんなこと知ったら傷つくじゃないですか?
あなたに言われるがままに必死にやりたいこともしないで　勉強してきたんですよ?
気まぐれにおかしなこと言わないで下さい!!
もういいなら　壮介　帰りましょう。」

マサヨが立ち上がると　壮介も立ち上がった。

「またゆっくり話をしよう　壮介。」

「それはないです。俺はあなたの子供ではないんですから。
あなたの自由にはなりませんから。」

教室を出た時　マサヨはとても満足だった。

「かあさん　ごめんね。俺のせいでイヤな思いされてしまった。」

「そんなことないわ。おかあさんは嬉しいの。
あなたが本当に逞しく成長してくれて　それもあの人の目のまえで
それを証明してくれて…本当に誇らしいわ。」

「そう言ってくれたら安心するけど……。」

「それにしても洋一くんは　昔から卑怯な子だったけど
あのままなのね。彼の父親も強にずい分おさえ付けられて卑屈だった
から
息子もそっくりに育ってしまって……
静ちゃんを助けたんでしょう？えらかったね壮介。
ただ暴力だけは……わかってるでしょうから　何も言わないけど……
自分が間違ってなくても不利になってしまうから……。」

「わかったよ。今回は俺も悪かった。
アイツ　ずっと腹立ってたからさ……。」

マサヨは壮介の耳元で小さな声で

「わかるわかる。」

二人で顔を見合わせて　爆笑した。

「今日は　何か美味しいものでも食べて帰ろうよ。」

「いいね～～じゃあ…ラーメンで～～。」壮介が笑った。

「ラーメン？もういつもいつもラーメンなんだから。」

「いいよ。無駄使いできないだろ。
俺も静みたいにバイトしようかな。」

「まだ大丈夫よ。これは私のプライドだから。
大学に行くようになったら　よろしくね。」

そんな二人のやりとりを　少し離れたところから大介が見ていた。

かあさん……。

壮介の腕をとって歩く　母の姿を見て複雑な思いが交差していた。
自分には見せなかった母の笑顔

いつから母親との距離が広がって行ったんだろう。

「大介。」ふり向くと洋一が立っていた。

「どうした?その顔・・・・。」

「壮介に殴られた。」洋一は唇の切れたところをおさえた。

「停学か?」

「おじさんが握りつぶした感じかな。」

また親父が出てきたんだ……。

「おじさん　壮介に　跡取りになれって言ってたぞ。」
洋一の言葉に大介は衝撃を受けた。
「何・・・・？それ・・・・・。」
「壮介　調子こきやがって……。」洋一の顔が歪んでいた。

大人の階段～百二十二話～

壮介に嫉妬が膨らむ。
母を一人占めして　そしてさらに父にまで期待された。

俺はいったい何なんだ？

大介は怒りで一杯だった。辛くても父のそばにいれば
次期社長になって　好きなように会社を動かせる　それだけが楽しみだった。

ふざけんな……。

ここのとこ壮介にずっと抜かされていたのも
父はお見通しだったと知って　自分が情けなくなった。

見離される
そんな恐怖感で大介は押しつぶされそうだった。

母の愛情を一身に受け　父からも期待され　壮介は欲張りだと
大介はひさしぶりにベットに入って泣いた。

アイツだけには絶対負けたくない

朝にはまたその思いだけを強くした。

洋一の話では　壮介は　日高　静のことで
強烈に怒ったと聞いた。
それまでそんなに気にしていなかった　静に　注目してみた。

確かに別人のように　輝いている静だった。
脂っぽくベタついていた髪の毛は　黒い艶のある思わず触れてみたくなるくらいの
美しい髪の毛になっていた。

廊下ですれ違うとシャンプーの香りがした。

そしてどうしてかずっと　大介と学力を張りあってきた知性のある表情は
その辺の女子よりずば抜けて　オーラーを発している。

完全下校の日　迎えの車を頼まず　普通に帰ることにした。
昔もこうして　静の後をつけて帰ったことがあったと　おかしくなった。

日高　静という女を　知りたい　あの時もそうだった。

後から気がつかれないように
ついて歩いていると　学校から離れた交差点の前に　壮介が立っていた。
静は　跳ねるようにして壮介の元に駆け寄って　寄り添った。

！？

次の瞬間　二人は自然に手をつなぎ　交差点を渡った。

アイツら……付き合ってんのか……？

静に対して芽生えた　興味が　壮介によって奪われた気がした。

洋一を殴った時も　静のことだった。

二人がそういう関係なら　ありえないことではない。

好きな女を守るための　暴力……。

しばらくそんな楽しそうに見つめ合う　二人を見ながら

ついて行くことにした。

不思議なことに　そんな二人を見ているうちに

大介の中で何かが大きくなりだしていた。

やばいだろ……。

いや……アイツに思い知らせろ。

欲しいもの全部　手に入ると思ったらそれは違うって

壮介と見つめ合って微笑む静を　複雑な想いで見ていた。

静が…欲しいな……。

自分によく似たもう一人の壮介を　自分にすり替える。
最近　遅咲きの自分が成長してきて　嫌でも　よく似てきた双子の兄弟

静の美しい黒髪が揺れる。

壮介から…奪え……。

大介の気持ちが　決まった。

弁当屋の前で名残惜しそうにしてる　二人を見ながら

「何でも自分のものにするなよ。壮介……。」

大介はそうつぶやいていた。

大人の階段～百二十三話～

一年生の最後のテストで　大介は学年一位になった。
負けたくない一心だった。
父親まで奪われたら　自分はどうしたらいいんだろう
父親に愛されてるとは思ったことはない……。ただ都合のいいように利用されているだけ。

外では冷酷な父親だけど　女の前では　猫のように喉を鳴らしている。

　女って怖いよな……。
自分は父親のような情けない男にはなりたくない　そう思わされた。

静を越えることが　とりあえず作戦に入っていたから
大介は必死に勉強をした。

休み時間　図書室で静は読書をしているのが日課だった。
学校では壮介と付き合っていることを　隠しているのだろう。
二人の接点は学校では　まったくなかった。

「日高さん　何読んでるの？」静に声をかけるのは中学以来だった。

「あ…うん…家ではなかなか集中できないから…ここで読んでるの。」
静は一瞬　大介を見て目をそらした。

「今回は俺が勝ったよ。」

「あ…そうだったわね。おめでとう。
次は私も負けないように頑張らなきゃ。」

「それは困るよ。俺　ほんと必死だったんだぜ。
日高さんの頭の中　すごすぎるよ。どうやって勉強してるんだ?
塾とかも行ってないんだろ?」

「うん……。ほら別にやることもないから…教科書読んでた…みたいな感じ。」

「そうなんだ。
俺なんて塾行って　家教つけて　それでも日高さんには勝てないんだから
落ちこんじゃうよ・・・・。」

静は顔をあげて　やっと大介と目を合わせた。

「私はずっとすごいと思ってたわ。
板垣くんのように　生徒会で頑張ってて　人をまとめて
そのオーラは他の人にはないもの。」

以前　静と話した時　一度も静は大介と目を合わせなかった。
でも今は　キラキラと光る瞳が大介を見つめている。

「変わったね　日高さん。」

「あの頃はちょっと…いろいろ大変だったから……。
今は天国みたいで　幸せすぎて怖いくらい……。」
静が幸せそうに微笑んで　大介の胸がキュンと音とたてた。

な…なんだ…この息苦しさ……

「あたりまえのことを　あたりまえにできるって幸せなことなのね。
あの頃は地獄だったけど…あの地獄があったから
今のこの　幸せを感じられるのかもしれない……。
あ…ごめんなさい……こんな話　板垣くんにしても…
なんだか…ほんと何言ってんだか…私……。」

静は頬を赤らめて　立ちあがった。

「俺ら子供はさ…生きて行く背景を選べないからね。
早くおとなになって自分の足で自分の思うままに生きて行きたいよね。」

静が大介を振り返った。

「板垣くんもそう思うの？
私もそう思ってた。　私も早く大人になりたい。
誰にも迷惑かけないで生きて行きたいわ。それには今から計画立てて行かないと…。」

静の目がキラキラ輝いている。

「あ…また　しゃべりすぎちゃった。
ついつい板垣くんには　口数が多くなっちゃう…。
やっぱり…似て……」と言いかけて静が言葉を止めた。

「似てるって・・・？」

「あ……あの……。」静が完全に真っ白になっている。
その様子も　また可愛いと思った。

「壮介のこと?そうか似てるか?」

好感を持ってもらうために無理して大介は微笑んだ。

大人の階段〜百二十四話〜

「双子だしね。」他人には言ったことのない言葉だった。

「初めて壮介くんに会った時　誰かに似てるって
ずっと思ってたの。それは板垣くんだったのね。
今思うと　なるほどなって思っちゃうわ。」

静が悪戯っぽく微笑んだ。
大介の胸が今まで感じたことのない感情を覚えていた。

最初は壮介から奪うだけの気持ちからだった。
だけど今は　静の表情一つ一つに　脈拍がはやくなる。

「板垣くんも…辛かったでしょう。
おかあさんがいなくなって……。すごく素敵な人だから…おばさん……。
子供は大人に振りまわされて生きていかなきゃならないから……
なんでこんな人生なんだとのろったり嘆いたり……
私なんて何度も死にたいって思ったわ。」

「日高さんが?」

「板垣くんの眼中にはなかっただろうけどずっと

人に蔑まされて生きてきたから……。あたりまえのことすらできなかった。
毎日お風呂に入るとか　みんなみたいに遊んだり　テレビを見たりゲームなんてしたこともなかったから
今　あたりまえに近づけて…毎日ちゃんとお風呂に入れてご飯も食べて　テレビも見れる……。
だからこうして友達もできたし…板垣くんが私に話かけてきた。」

悪戯っぽい目で大介を見上げた。

「あ…いやそんなつもりはなかったんだけど……。」
大介は慌てた。

「あ…そんなそんな冗談だから～～うふふ……。」
静が笑った。大介も嬉しくなって笑った。

「板垣くんって結構気さくな人なのね。こんなに話せる人だとは思ってなかったわ。やっぱ双子ね……。」

「俺とアイツって似てる?」

「最近　激似してきたよ。みんな噂してるもの。
二人とも無愛想だし……話しかけにくいし……。」

「日高さんとは壮介よく話すんだ。」

少し困った表情を浮かべたが静は

「私の一番最初の友達だったの。大切な人……。
あの人がいなかったら…自殺してたかもしれない……。」

自殺か……。

「境遇も少し似てたし　母子家庭だけね……。
私の母親は最低だったけど……。壮介くんのおかあさんは素敵な人よ。
優しくて温かくて…何より壮介くんを一番に愛してるから……。」

そう言いかけて静は口をおさえた。

「ごめんね…。私ったら…板垣くんのことも考えずベラベラと……でもおとうさんが愛してくれるでしょ?お金持ちだし困ることもないし……私たちは生きて行くのも結構我慢の連続だから……。」

チャイムが鳴った。

「あ…次は体育だね。急がなくちゃ。」
静が立ち上がった。

「また……また　話しかけていい？」
大介が慌てて声をかけた。

「もちろんよ。じゃあ……。」
静が図書室を出て行った。

シャンプーのいい香りが残っていた。
大介は完全に　静に恋をしたと　思った。

大人の階段～百二十五話～

それから学校で会うと気軽に大介は声をかけてきた。
最初は　自分とは違う雲の上の人だと静は思っていた、
中学校の頃の大介は　できないことがない子で　そして金持ちで。
時期社長だと噂されている大介は
生徒会でも中心にたって議会を進めて行く様子は圧巻だった。

自分にもってないものをたくさんもっている大介は　雲の上の人
静はそう思ってたけれど　気さくな笑顔で
近づいてくる大介はそんなバリアは取り去っていた。

壮介がきっとイヤな思いをするだろうと
なるべく壮介の前では　声をかけてほしくなかった。
不思議なことに大介は　静が一人の時だけ声をかけてきて
すれちがうときだけ　静に微笑んでくれた。

少しだけ壮介を裏切ってしまっているような気がしていた。

そんなある日のことだった。

三時間目の授業中に　教室のドアがノックされて　職員室の先生が
「角谷　今　病院から連絡があって…おかあさんが倒れたそうだ。
すごに帰り支度をして一度職員室に寄りなさい。送って行くから。」
教室に緊張感が走った。

壮介は立ちあがったまま茫然としていた。

「角谷　急ぎなさい！！」

「先生？そんなに…悪いんですか……。」壮介は棒読みのようにそう言った。

「とにかく急いでと病院で言われてるから……。」

「今朝…具合が…悪そうだった…から…
仕事……変わってもらって…って言ったけど……。」
壮介はブツブツと一人ごとのように言った。

静は　壮介の教科書を急いでカバンに詰め込んだ。

「壮介！！しっかりしなさいよ！！」思わず叫んだ。

「あ・・・どうしよ。かあさん…大丈夫だよね…。」

「先生　私も一緒に行かせてください。角谷くんパニックみたいだから。」

静の口調に引きずられたように先生が

「それじゃ頼む。」と言った。

「ほら　行くわよ。しっかりしなさいよ。」静が厳しく言い放った。

壮介は急に我に返ったようにカバンを持って教室を
飛び出した。

「壮介！！」静が呼んだ。

「大丈夫。俺一人で……サンキューな静。」壮介はそう言うと階段
を降りて行った。

壮介を見送って
静は胸騒ぎを覚えた。

「大丈夫よね。絶対大丈夫よ。」静は何度もそう言った。

隣の教室に目をやると　大介と目が合った。

大介には　言わなくていいのだろうか。

大介はニッコリ笑い返した。
静は複雑な気持ちになった。

おばさんは……きっときっと…大丈夫だよ……。

その日一日　何も手につかなかった。
壮介からは連絡が来ないまま　朝を迎えた。

廊下であった担任に聞いてみた。

「角谷は今日は　おかあさんについているといってたから休みだよ。」

「どうなんですか?」恐る恐る尋ねた。

担任は複雑な顔をしていた。

大切なもの〜百二十六話〜

マサヨは一週間前から少し体調が悪かったけれど
職場で風邪がはやりだして　休みを変更したりして
なかなか休めずにいた。

その朝は起き上がるのもやっとだった。
今までと違うのは　息苦しさだった　さすがに布団からなかなか
起き上がれないマサヨに　心配そうな壮介

「明日は休みをとるから大丈夫よ。」そう言って
壮介を送りだして　やっとのことで職場に行った。

息苦しさは頂点だった。
そのうち胸に激痛が走りだしてうずくまった。
それからのことはあまり覚えてはいなかった。気づいたら救急車の
中だった。

死ぬのか…壮介をおいて

頭の中に死の文字だけが浮かぶ。

大介に…謝りたい……

思い残すことばかりが頭をよぎて　色のない夢を見た。

「かあさん　かあさん」

壮介……

酸素マスクをしているからうまく声が出ない。
壮介はもう泣きそうな顔をしていた。

ごめんね…壮介……

マサヨは　心配だった　まさか壮介をおいて……
あともう少し・・・時間をください……一週間でいい
壮介と話す時間と

それから大介に会って　謝る時間を・・・・・。

「かあさん　今日は学校やすんで　かあさんのそばにいるから。」

いつもしっかりとしている壮介が
怯えた目をしていた。

不安で仕方がない　そんな表情にマサヨの胸が痛む。

壮介の手を握った。

「かあさん…大丈夫だよね。俺を一人にしないよね?」

返事のかわりに強く握ると　壮介は笑顔になった。

壮介に伝えたいことがたくさんある。

愛しい息子……心配させてごめんね……。

涙が流れた。

「かあさん……かあさん……。」壮介も泣いていた。

「角谷さん…お見舞いの方が来てるけど…息子さんちょっと変わりに対応してくれる?」

看護師が壮介を呼びに来た。

「かあさん　ちょっと行ってくるね。」

壮介は眠る母に声をかける。

静かに病室を出ると　心配そうな静が立っていた。
壮介はそのまま静に抱きついた。

「大丈夫？」

「かあさんが死んだらどうしよう…それぱっかり考えてる。」

「信じよう。きっと大丈夫よ。」

静は壮介の背中を優しく撫ぜる。
面会室で静と並んで座った。

「無理してたの俺に言わないで……朝だけせつなかったのかなかなか起きれなくて　休めばっていったんだけど
大丈夫　明日休むから…ってかあさん笑ったから……」

いつも落ち着いてる壮介がとても小さな子供に見えた。

「次に不整脈を起こしたら…かあさんダメだろうって言われた。」

「え・・・？そんな……。」

静も急に不安になった。
二人で病室に入ると　マサヨが目を開けていた。

「おばさん……。」

「手をにぎってあげて。」壮介のいうとおり　マサヨの手を握った。

「俺…トイレに行ってくるね。」壮介が病室を出て行った。

マサヨは静の手を強く握って涙を流した。
「静…ちゃん……壮介…さ…さえて…あげ…て。」

マサヨは辛さそうな声で必死に静に訴えた。

大切なもの～百二十七話～

「思い残した……ことばっかり…壮介のこ…とも
大介の…ことも……。」

マサヨの苦しい息の中で
伝えようとする言葉を必死に静は聞きとっていた。

「おばさん…私　今大介くんとけっこう話をしてるの。
もしおばさんが会いたいなら…私…大介くん連れてくるよ。」

静がそう言うと
マサヨは静の手を強く握った。

「お願い…できる？もう…なんだか時間が…ない…気がするの。」

「そんなこと言わないで　おばさん。
壮介くんのためにも　まだまだ元気でいて……。」

静は涙が溢れ出て来た。

「静ちゃん……壮介はいい子よ……。」

「わかってます。私のことも圭のことも大切にしてくれます。」

「よろしく…ね…。大介のことも…よろしく……。」

病室に壮介が戻ってきた。

「お弁当　作ってきたの。ごはん食べてないでしょ？」

「あ・・・忘れてたよ。」壮介は反対側のマサヨの手を握った。

「壮介…せっかくだから…食べてきなさ…い……。
おかあさんなら…まだまだ…大丈夫……。」

医者と看護師が入ってきた。

「しばらくいるから安心してご飯食べてきなさい。」

若い医者はそう言った。

「おねがいします。」壮介は頭を下げた。

面会室には誰もいなかった。

「圭も行きたがったんだけど　おばさんにお願いしてきた。
壮介に会いたいって。」静が言うと
壮介がすごく優しい笑顔に変わった。

「圭もずい分話すようになったよな。
俺のこと壮介って呼び捨てなのはいかがなものだけどな。」

静はお弁当を広げて　壮介の口に卵焼きを入れてやった。

「うめ・・・・・。」壮介がみるみるうちに泣き顔に変わった。

「壮介・・・？」

「ごめん…かあさんの卵焼きに・・・味がすごく似てるから……。」

「おばさんが元気になるまで　壮介が食べたい時は私が　作るから
……
一緒に応援する…だから一人で泣かないで……。」

静も涙が溢れた。

「うん…うんサンキュー……。」

壮介は泣き笑いしながら　弁当のおかずを口に頬張った。

「静・・・すげー美味いよ。」

静はそんな壮介を　自分が絶対守るんだと誓った。

大切なもの～百二十八話～

「え？かあさんが・・・？」

次の日　図書室で会った大介に　静は会いに行くように言った。

大介はとても複雑な表情を見せたが
「今さら・・・俺を捨てた女に会ったところで……。
死ぬ前にすっきりさせたいとか　天国に行ったら地獄におとされたくないとか？」

大介は冷たい横顔に変わった。

「会いたがってたの。そう思いたくないけど
おばさん容態が悪いから…会っておいた方が絶対にいいわ。」

「悪いって・・・？
いとこが壮介が休んでるって言ってたけど
そんなに悪いのか？」

「壮介はおかあさんがいつ自分のそばから
いなくなってしまう恐怖感と戦っているわ・・・・。」

「ふう～ん。
だけど俺が行ったらアイツいやなんじゃねーの？」

「きっとね。だから壮介には言わない方がいいから。
私と板垣くんだけの秘密にしておいて。」

秘密か……。悪くない……。

静と壮介の間に秘密を持たせる。
それも絶対に受け入れないだろう自分との秘密……。

大介はそれもありか・・・と急に楽しくなった。

「わかったよ。静ちゃんがうまくセッティングしてくれれば
それに従うから。」

「ほんと?私　おばさんにはお世話になったの。
おばさんが元気になったら　壮介も元気になるから…。」

静は祈るように手を合わせた。

その美しさに　大介の嫉妬は荒れ狂う。

絶対　静を奪ってやるんだ。
俺から母親を奪った…その俺の悲しさをアイツにも知らしめて

やる。

ひさしぶりに学校に出てきた壮介が放課後　補習になることを知って静は急いで待ち合わせ場所に走った。

コンビニの前にはいつもの大介のお迎え車が停まっていた。

「乗って。」後部座席が開いた。

車に乗り込んで　驚いた。

運転席としきられた壁には　テレビがついている。

「すごい広いのね。」静は驚いた、

「でも…若いんだから少しは自分の足で歩かないと…体に悪いと思うわ。」

「俺　あの人混みとかほんとダメ……吐き気する。いろんな臭いがするだろ…。好きじゃないヤツの匂い嗅ぐのは絶対無理無理……。」

大介はそう言うと静に笑顔を向けた。

いつも笑っていたらいいのに……

静は自分にしか見せないだろう大介の笑顔を見て

こんなにチャーミングに笑えるのに

そう思った。

「学校でももっとそんな顔見せるといいのに。すごく素敵よ。」

「え・・・？俺…笑うのって静ちゃんの前だけだな…。そう言えば……。

いいよ俺のこんなとこは　静ちゃん一人が知ってくれてればいい。」

そう言うと前を向いた。

静は思わず恥ずかしくなって下を向いた。

「静ちゃんの…そういうとこ　すっごく可愛いんだ。」

「やだ。可愛くないから…もうからかわないで。」

静は大介を何度も何度も　叩いた。

「あはは・・・・」大介は楽しくて声をあげて笑った。

「や～～もう～～！！」静が愛おしかった。

二人だけの秘密をもって大介は　静との仲が前進しているのを確信していた。

大切なもの～百二十九話～

それまでは静とのやりとりが楽しかった大介だったが
病院に入ってからは急に落ち着かなくなってきた。
母と会うのは何年ぶりだろうか……。
何を話せばいいんだろうか……。

「どうしたの？」静が覗き込んだ。

「いや　なんか落ち着かなくてさ……母親と会うのも数年ぶりだし
増して会話なんて一緒に暮らしている時だってしたことないんだ。」
静には素直に話すことができる自分に驚いていた。

「そうなの？」

静が驚いた顔をした。

「あの人はさ…俺を可愛いと思ったことがあるんだろうか。
物心ついた時から　俺はあの人に愛されてなかったな　どっちかと
いうと
嫌われていた……。壮介を大切にしていたから。」

「壮介とおばさんに絆は深いけれど…そうなんだ……。
どこかで歯車が狂ってしまったのね　だからおばさんもあなたに会いたかったのね。
うちの母親は最低だったけど　おばさんは素敵な人よ。
もしわだかまりがあったなら……今日それがなくなればいいね。」

静はそう言うと大介の肩を叩いた。

そうだな……。

「静ちゃんって魔法使いみたいだな。」

「え？何が？」静が長い髪の毛をかけあげる。
シャンプーの香りがした。

「俺に対して母親との確執の　根は深いけれど…
きみがいてくれたら…もしかしたらそんなこと吹っ飛んでしまうかもしれない。
そうなったら…めっちゃ嬉しいな。
そばにいてくれるか？」

本心すがるような思いだった。
もしも母親との確執を越えられたら自分はもっと高いところへ

行ける気がしていた。

「おばさんがイヤじゃなかったら……。」

「サンキュー。俺自身も君がいてくれるだけで　なんだか落ち着くんだよな。」

「そう？じゃあ魔法かけてあげる。
おかあさんと仲直りできますように……。板垣くんがおかあさんのまえで
素直になれますように……。」

静の細い指が俺の額に触れた。

どきん　どきん　どきん

心臓の音が力強く打つ。

病棟の一番はじの病室を静が開けると　医療器具に繋がれたマサヨが横になっていた。

「おばさん……おばさん……。大介くん連れてきたよ。」

静がマサヨに声をかけた。

マサヨの目が開いて　ひさしぶりに親子は目線を合わせた。

マサヨの目尻から涙が数本流れた。

「来てくれて……あり…がと……ね……。会って……もらえないと…思ってたから……静ちゃん…ありがと……。」

苦しげな息が混じる。

「大介…大きくなったわね……。逞しく…立派になってね。ごめんなさい……。あなたには　いい母親には……なれなくて……。」

静は大介の背中を押した。

仕方なく大介は　イスに腰掛けた。

「今度いつ会えるか……わからなくて……あなたに……謝っておきたくて……ご…めんね。

本当にごめんね……。」

大介は母親が普通の病気じゃないことを感じていた。

多分　長くない

そう感じ取っていた。

「うん。」大介はそう答えた。

「ありがとう……会えて……ほんと……よかった……。」

マサヨは涙を次から次へと流した。

ティッシュをとって大介はその涙を優しくおさえた。

不思議だった　憎くて憎くて仕方のなかった母をこんなに簡単に許せるのは

母親の変わり果てた姿のせいか

それとも

後を振り向くと笑顔で顔をくしゃくしゃにした静が立っていた。

静の魔法のせいか……。

「壮介と…壮介とも……兄弟として…よろしく……お願い…します。」

壮介だけは別だった。
だけどこの状況では　うなづくしかなかった。

「ありがと……。大介……。
私の自慢の……息子……。」
マサヨはそう言うと静に目を閉じた。

看護師が入ってきて
「面会はもう…いい？おかあさん疲れるとよくないから。」

「また…来ます。」思わず大介はそう言った。

行くか行かないかはわからないけれど…もしかしたら…そんな予感が
大介にはあった。

この人に会うのはこれが最後かもしれない……。

「待ってるね……。」

母は細い腕を出して大介の手を握った。

「またね。」大介が言うと

母は美しい笑顔で微笑んだ。
その笑顔を大介は　胸に刻み込む。

「おじゃまします。」

大きな家だった。
静は大介についてきたことを後悔したけど
流れ的には断れずお手伝いさんが出したスリッパをはいた。

「すごい家ね。」静はまるで夢の世界でみる家具や調度品に目を奪われた。

「俺にとっては檻のようなとこだよ。」

「え？」

「楽しいこと一つない家……笑い声も聞いたことない家……。」

「うちだってそうよ。
だけどこんな大きな家で　あたり前以上の生活ができて……
多少つまらなくても贅沢ってものよ。私の檻なんて…ほんと息をするのも
辛いくらいだったもの。」

静の顔が曇った。

「私の母親って人は母じゃなくて女だったから……
耳をふさいだって狭い家の中で…新しい男を引っ張り込んでは　女の声を聞かされて…
私はその男たちにいつ…母と同じことをされるのかという恐怖で生きた心地もしなかったもの。」

「今は？」

「今はおばの家で生活させてもらってる。
本当に幸せよ。おじとおばには感謝で一杯。大人になったらお返ししなくちゃ……。」

「そうなんだ。よかったね。
その安心感で静ちゃん　きれいになったんだね。」

思いがけない大介の言葉に　頬赤くなった。

「きれいなんて言ってもらえてうれしいわ。照れちゃう。ウフフ…
…」

静が嬉しそうに笑ったから　大介もうれしくなった。

「静ちゃんの笑顔って最高だね。

守ってあげたくなる……。」

「やだ～～あははは～～」笑いでごまかされてしまったなと大介は思ったけど

絶対　静は　俺のものにする

そう固く決意したのだった。

「今日のことは……。」静の言葉に

「わかってるって…誰にも言わない。特に壮介には……ね？」

「ごめんね。壮介がこのこと知ったらすごく傷つくと思うの。」

「静ちゃんが秘密を持ったこと？」

「え？」

「俺との秘密を持ったこと。」

「うん…それもあるけど……。壮介にはおかあさんが一番だから…。
あなたに会いたがったっていうことは
壮介にとっては一番キツイと思うの。」

「あいつはなんでも一人占めしちゃうからさ……。
かあさんも…静ちゃんも……ね……。」

「何言ってんの。」静が笑った。

「その笑顔も壮介一人占めか～～。」

「え?」

「壮介とつきあっているんでしょ?」

「あ……やだ…ちょっと…あの……。」しどろもどろな静。

めちゃめちゃ可愛くて嫉妬する。

「言わないよ。安心して。」
大介は自分が今　羊の顔をしていることを知っている。

「だけどたまにはその笑顔　俺にも向けてほしいな。
これからも友達でいてくれる？」」

「もちろん…こちらこそ…友達でいてほしいわ。」

まずは前進・・・・・。
これからは勉強以外に　考えることができた。

壮介から静を奪う楽しみ

「壮介も板垣くんのこういうところ知ってくれたら……いいな。」

「俺と壮介は交うことはないと思うよ。
根が深すぎてさ……。こうしてたまに俺にも会ってくれる？
俺は気の合う友人とかっていないしさ…家だってこんなんだし…。
静ちゃんが一番の友達でいてくれたら嬉しい…なんて　迷惑かな。」

「そんなことないよ。」

大介は静に握手を求めた。
その手を静が握って　目を合わせた時だった。

「大介に　友達が来てるのか?」

強の声がして　大介は静の手を離した。

大切なもの～百三十一話～

「女？」そう言いながら　強が入ってきた。

「親父・・・大丈夫だから。」大介は静に小さくそう言った。

「おかえりなさい。」大介

「おじゃましています。日高です。」静はまっすぐに顔をあげて挨拶した。

大介は静の毅然とした態度にまた感動していた。

強は上から下までじっと静を観察している様子だったが

「いらっしゃい。大介のまさか…彼女とか？」

強が静を見る目が　大介には許せなかった。

静が汚れてしまう。

「いいえ。友人です。」静がきっぱりと言った。

悲しいくらいにハッキリと・・・・。

強が笑った。

「おじょうさん　ハッキリしてるね。」

「私　そろそろ帰ります。おじゃまいたしました。」

静が頭を下げた時

「日高…日高さんと言えば　学年トップの日高さんか?」

困ったように静が大介を見た。

「そうだよ。いつも俺が勝てない日高さん。」

「あ　あの日高さん……。こんなキレイな人だとは思ってなかったよ。

塾とか家庭教師とかつけているのかい?」

「いいえ。うちにはそんな余裕はないんです。」

「それでも学年一位の才女か。すごいな。」
強が言った。

「それしか趣味が今までなかったものですから。」
静は美しく微笑んだ。

「それじゃ　板垣くんまた明日ね。」

「あ・・・送って行くよ。」

「大丈夫よ。方向音痴じゃないから。」

そう言うと静は出て行った。

「大介……まだ女にうつつを抜かすのは早いな。
おまえはこれから大学受験もあるし　あの娘を抜かせるように
勉強に力を入れろ。」

大介はムッときていた。

「おまえの女は俺が見つけてやるから　どこの馬の骨かわからない
女は

後で面倒なことになるからな。」

「自分のことは自分でやりますから。」

もしかしたら初めてだった。

父親に言い返したのは。

「おまえ？まさか……本気って感じか？」

「そんなことまで言われたくないです。」

「とにかくおまえは俺の言うとおりにしておけ。」

「おとうさんだって　女の見る目はあるんですか？」

「なんだと？」

「離婚したくせに・・・・・。」思わず口ばしったのは

今まで大介がずっと恨んでいたことなのかもしれない。

母の苦しそうな顔が浮かんだ。

母だって父親の犠牲になって　今　ああして苦しんでいる。

いろんな柵があっても　自分を産んだ母親だった。

「あれとのことは…いろいろ事情があったんだ。」

さすがに強も口ごもっているから

「俺たちは　おとうさんの被害者ですね。」と言った。

「生意気なことを言うな!!」

父親の手が大介の頭を　思いっきり殴った。
今まで逆らう事をしなかった大介だった。

「あなたのおかげで　俺もかあさんも……壮介だって…不幸になっている。
あなたは人間として　父親として　男として…最低な人ですね。」

悔しかったけど泣くものかと我慢した。

「おぼっちゃま!!」松代が飛んできて二人の間に入ってきた。

父親への憎悪が溢れだした。

大切なもの～百三十二話～

「かあさん　遅くなってごめんよ。」

補習を終えて　壮介はまっすぐ母の元へ

マサヨは優しく微笑んだ。

「壮介…私の自慢の息子。」

「わかってるって。」

「ごめんね　おかあさん　こんな体に…なってこれから
どうしたらいいのか……。」

「今まで　働きすぎたんだって。
俺だって静みたいに生きればいいんだよ。バイトしようと思ってる。
ちゃんと両立させるから…安心して。」

「壮介……おとうさんの…とこに…お願いしよ……。」

「なんで?」

「約束はしてたんだもん…お願いして……。
壮介をきちんと教育するのが…私の夢だった。
私が至らなくて　壮介と二人で見てきた夢が……こんな…
形で壊れてしまう……死んでも…死にきれない……。」

マサヨは涙を流した。

「かあさん…泣くなよ……。死ぬなんて言うな。
俺を一人にしないでくれよ。」

子供のように心細くなった。

「おとうさんに…来るように…話して……。
あの人の力を借りないことには……悔しいけど……。
ここのこともあるし……。
ああ・…情けない……どうしてこんなことに……。」

点滴だらけの手で顔を覆った。

「ごめんね…壮介…ほんと…許してね……。
ダメなおかあさんだけど…壮介への愛は誰にも負けない……。
あなたの幸せだけを…祈ってるから……。

愛する人と優しい家庭を…作って
子供に一杯愛をあげてね……。寂しい子にしちゃダメよ。」

「おかしなこと言うなって…。
そんな遺言みたいで…やめてくれよ　かあさん……。」

壮介の声が震えた。

「俺だって…世界一のかあさんの息子に生まれて
幸せだよ……たっぷり愛をもらって……だから…もう少ししたら
俺がかあさんを世界一幸せなばあちゃんにするから……
待ってろって……優しい家庭の中には　かあちゃんもいるんだから
な。」

「壮介……。ありがとう。
親として最高の言葉をもらったわ……。
ありがとう…私の壮介……。」

病室を出て　電話を探した。

複雑な思いだった……あれだけ頼ることをしたくなかった母親が
父を呼んでくれと言った。

「私も…あの人に言いたいこと言わなきゃ…死にきれないわ…。」

公衆電話から電話をかける。
お手伝いの松代の声がなつかしかった。

少しして強が出た。

「もしもし　壮介か？俺に電話してくるなんてどうした？」

「かあさんが…あなたに会いたいと言ってます。
今日来てくれって……行ってやってください。」

病院の名前と病室を告げて　電話を切った。

頭の中でいろいろな事を考えた。
考えれば考えるほど不安は大きくなる。
アパートの前に立った時　玄関の前に静が座って眠っていた。

「静・・・？」

急いで静を起こすと体中が冷え切っていた。

「おかえりなさい……。」

「何してんだよ　こんなに冷たくなって……。」

「今日は家にはバイトって言ったから…壮介と一緒にいたいって思ったの。」

慌てて鍵を開けて　玄関の中に入った。
冷え切った静を強く抱きしめた。

「壮介・・・・・・？」

「今…静に会えて本当感動してる…。」

「よかった。私も感動してる…。ずっとこうしてもらえなかったから……。」

壮介の心は急に熱くなった。
冷たい静を　温めてやりたい……。
熱い唇が静の唇に触れた。

そのまま　二人は玄関に倒れ込んだ。

「愛してるよ　静……。
俺の家族になってくれるか？」

「もちろんよ……。二人なら絶対幸せになれるから……。」

静が溶けだしそうになるまで　時間はかからなかった。
温かくなった静を　優しく抱きしめた。

「俺がいつもこうしておまえを守ってやるから……。」

二人は見つめ合って　微笑み合って　キスを交わした。

大切なもの～百三十三話～

マサヨは経験したことのない
恐怖の中にいた。

死と隣り合わせなのは
自分でもわかっていた。

ふと目を開けるとそこに強がいた。

「大丈夫か？」

「あ…すみません……。わざわざ
およびして……。」

世界で一番憎らしい男……

「こんなことになってしまって…あなたに頼ることだけは
したくなかったのに……残念です。」

「こんな時だ……。そう言うな。

壮介のことだろう。俺もあいつの親だからな
安心しろ。悪いようにはしない。」

「あなたの束縛から壮介は守りたかったのに……。」

「仕方ないだろう。金銭的なことはまかしておけ。
おまえはゆっくり体を休めて早く元気になりなさい。」

「あなた…大介と壮介を頼みますね。
大切な子供ですから。愛してあげて下さいね。
お願いします。どうか……。」

「おまえは早く体をなおすことを考えろ。」

「ありがとう…ございます……。」

強はそう言い残して出て行った。

今まで背負ってきた責任から解放された気がした。
元気な時なら絶対にこんなことには　ならなかっただろう。
でも　もう自分は子供たちに何もしてやれない　そう感じていた。

ホッとした。
壮介にも大介にも会って話ができたし
強にふたりのことをお願いもできたし……。

これでいつ…お迎えがきても

子供たちのそれぞれの人生が幸多かれと……
そう願いながら眠りについた。

息苦しさに目がかすかに開いた。
壮介が泣いている。

「かあさん　俺を一人にしないで……かあさん……かあさん……。」

一瞬小さかった頃の壮介が頭の中に蘇ってきた。

「おかーたん……おかーたん……」

壮介はいつもマサヨを追って泣いていた。
反対に大介はそんな壮介を　離れたところで冷めた目で見ていた。

「いかないで・・・俺がかあさんを幸せにしてやるから
それまで…元気でいてくれよ……かあさん！！」

ごめんね　壮介

ごめんね　大介

最後まで母としての責任を果たせなかった……。

すごく長い距離を走らされて　マサヨはひどく疲れていた。

もう…もう…疲れた…休ませて……

どこまで走ったらゴールは見えるのか……。

その時明るい光がどんどん広がって迫ってきた。

ゴールだ・・・・。

マサヨはその光に　飛び込んで行った。

すれ違う想い～百三十四話～

「いってきます。」

「いってらっしゃいませ。」
おばあちゃんになった松代と母親くらいの年の良子が見送りに出てくる。

「松代さん　見送りは家の中でいいよ。
転んだりしたら大変だからさ。俺には気を使わないで。」

壮介が言うと

「何を言ってますか。マサヨ奥さまの分まで　松代が責任もって壮介ぼっちゃまを
見守らせていただきますから。それにこう見えてもまだまだ!!
後輩の者たちにしっかりと仕込むまでは　気が弱いこと言ってられません!!」

確かに松代は元気一杯
父が老いてきた松代に暇をとらせないのは　多分この存在感で
少しは人間らしさも見えた。

松代が一人で切り盛りしてきた板垣家には　短時間のお手伝いと
通しのお手伝いが
二人　松代の厳しいゲキが飛んでいた。

母が亡くなって　壮介は強制的に板垣家に戻された。

「かあさんがおまえを頼むと俺に頭を下げてきた。」父はそう言った。

それが母の望んだことなら　一人立ちするまでここにいるしかないと思った。

同じような顔をした大介とは　お互い避けるように過ごしている。
たまに洋一が来て　嫌味の一言二言残してはいくが
壮介が板垣に戻ったことであまり言えないのか　不完全燃焼している様子だった。

自分の居場所があるだけいいが　困ったことが一つあった。
静となかなか会えないことだった。

二人っきりの時間がなくて
抱き合うこともできなかった。

話すことはできても　愛し合う場所がなかった。

ここに連れてくるわけにもいかず……

体だけの関係ではないはずなのに　少しづつ距離が広がって行く気がした。

しばらく歩いていると

「そーくーん！！」

可愛い声がして　一気に壮介は心が和んだ。

「おはよう　圭！！」

圭は壮介の家の近くの　幼稚園に通っていた。

「おはよう　壮介。」静が微笑む。

静は毎朝　少し早目に圭を送りに来ていた。　途中で壮介と合流して少しの時間でも二人でいたいそう思っていた。

圭が幼稚園であったことを一生懸命に壮介に伝える。

「そっか～～えらいな～～。」圭を見ているとすっかり自分が親になっているような気がした。

圭が愛しくて仕方がなかった。
母を失い　涙にくれていた簡単な葬式の時　圭が小さな体で壮介を抱きしめて

「泣いちゃダメ。」そう言って小さな手で壮介の頭を撫ぜた。

それがおかしくて…壮介は吹き出した。

「ダメ。男は泣いちゃダメってそーちゃん言ったでしょ?」

壮介の目を見て　圭がそう諭した。

「あ…。そうだったね。もう泣かないよ。」

壮介は圭を抱きしめて　もう…泣かないと誓ったのだった。

小さい手　手が壮介の手をしっかりと握る。
三人で歩く道が　壮介の一番幸せな時間になっていた。

すれ違う想い～百三十五話～

「大学はどこを狙うつもりだ？」

父親が壮介に聞いた。

「俺は……できれば就職したいんですが。」

父親はバカにした顔で俺を見た。

「就職してどうする？
大学に出ないと出世もできないぞ。
おまえは自分のうちの会社で働けばいい。
慌てることはない。」

「これ以上　ここに世話になるいわれはないので。」

壮介はそう言った。

「ここはおまえの家で　俺は父親だ。
おまえがここにいるのはあたりまえのことだ。」

「ここはあなたと大介の家です。」

「意地を張るな。おまえは俺の息子なんだ。」

「今さら……。それじゃ　かあさんが死んだ意味がない。俺はあなたに愛されなかった　それを不憫に思って俺を連れて出て行ってくれた。働いて…働いて…もしかあさんが一人で出ていっていたら…こんなことにはならなかったのかもしれない……。俺のために必死で働いてくれた……。」

「マサヨが死ぬまえに俺に　おまえのこと頼むと言い続けていた。しっかりとした教育をさせて社会で胸を張って生きていける人間にしてくれと。マサヨとはおまえたちを挟んでは　親ということだ。おまえには俺のところで　しかるべきポジションで働いてもらう。それがおまえが俺に対してする　恩返しでいいんじゃないか。」

「俺は……自分の道を行きます。俺のような子にはさせない。　家族だけはしっかり守って行ける人生でありたい。」

「あはは…それはいい。そういう気持ちは大切だ。そのためにも

おまえには　俺の決めたしっかりとした相手をちゃんと合わせてやるから
心配はいらないぞ。」

壮介は立ちあがった。

「俺には将来を約束した人がいます。高校を卒業したらその人と結婚します。
あなたに決められた人生は絶対におくりません。
そういう相手をあてがうなら　大介にしてください。
大介はここの後継者なんだし。」

「若いうちはなどんどん遊べ。本気になるな。
女を利用できる男になれ。真剣に考えるな。名誉と金があれば
なんでもできるんだ。」

「だから　だからあんたがそういう考えだから…かあさんは不幸になった。
俺はあんたのような人間にはならない。
静だけがいればいい。他には何もいらないし　ほしくない。
名誉も金も…家族が仲良く暮らしていける金さえあれば　何も望まない！！
あんたは…不幸だ。
結局誰からも愛されてはいない。そんな人生ならいらない！！」

壮介はそう言うと書斎を飛び出した。

次の言葉を父親からいわれるのが怖かった。

階段を登ろうとしていた大介と目が合った。
顔の似ているもう一人の自分……。

そのまま壮介はリビングに向かった。

ここから…早く出なければ

父親という人間がそう簡単な男だとは　思えなかった。
自分の利益のためなら　なんでもする人間だと……。

俺は絶対あんな人間にはならない。

しかし反面怖かった。

これから何かが起きそうなそんな恐怖感に襲われて行った。

すれ違う想い～百三十六話～

静が暗い顔をしていた。

「どうした?」

「うん……。なんだかおじの会社の経営がうまくいってないみたい。」

「え～～そうなのか。堅実な会社なのに…。」

「よくわからないけれど…心配だな。」

静と圭を自分の子供のように　可愛がってくれるおば夫婦。
ここで暮らすようになって特に静は　生活環境が一変して　毎日が幸せそうに感じる。

「何かできること探さなくちゃ。」

静の一生懸命さが愛おしくなる。
思わず抱きしめると　静も体を預けてきた。

「もう…ずいぶん……してないな……。」思わずの本音。

「壮介…私を欲しいって思ってる？」

「思ってるよ。今の家じゃ…なかなか……。」

「よかった。だって全然いつも通りだから　私魅力なかったのかなって心配だった。」

「なことないよ。俺の頭の中半分以上悶々としてる。」

「うふふ・・・・。」

「明日…学校さぼっちゃうか。」

「え？」

「午前中にお手伝いさんが買い出しに出るからさ　その間に一緒に戻って……部屋には絶対来ないから入るのと出るのを気をつければ……
なんとかなる……。」

壮介の頭の中はもう爆発しそうだった。

「うん。さぼる。」静は笑顔でそう言った。

静を抱ける……。

壮介はその喜びでその日一日顔が　緩みそうだった。

「おまえさ…今日なんかニヤニヤしてないか?」洋一が近づいてきた。

「そうか?別に何も?」口元を閉める。

「気持ち悪いな。頭おかしんじゃね?」

第三者から見られてもわかる自分を想像して　恥ずかしくなった。
黒板に立って　静が問題を問いでいる。

明日は静を・・・・

そう思うとまた口元が緩みだした。

すれ違う想い～百三十七話～

壮介と静はひさしぶりに　抱きしめ合っていた。
無我夢中で　何度も何度も　時間を忘れて愛し合った。

壮介は　心地よい疲労感に肩を揺らして息をする　静を静かに見つめていた。

　なんてキレイなんだろう……

静の美しさは　今は蝶のようだった。
今までさなぎの中で眠っていた美しさが　目を覚まして
それを一人占めできる自分は幸せだと思った。

壮介の視線に気がついた静が　慌てた様子で目だけ残したまま布団にもぐった。

「何？やだ……なんかついてる？」

「違うよ。キレイだなって思ってさ…。」

「嘘……そんなこと……。」恥じらいながら布団をかぶった。

「静は俺のそばにずっといてくれるよな。」

静はやっと顔を出して

「あたりまえよ。私には壮介しかいないもの。」

そう言うと壮介を包み込むように抱きしめた。

「高校出たら　結婚しよう。
俺は就職するつもりだから……絶対一緒にいようね。」

「うれしい・・・・。」

「圭は俺たちの子供のようにして　育てていこう。」

「私も働くわ。働くの好きだから……。」

しばらく二人は未来について語り合った。
家族運に見放されて育った二人は　絶対どっちから死ぬまで一緒にいて

子供たちに呆れられるくらい　仲のいい夫婦でいよう

そう語り合った。少し眠ると目覚ましが鳴った。

「もう…時間なのね…。」

「これからはこうやって…過ごそう。」

「うん。しょっちゅうサボるのはいけないけど
たまにならいいわよね。」

「見ないでね。」隠れるようにして　帰り支度を始めた静をもう一度
押し倒した。

幸せだった。
壮介にとって静は　絶対離れることのない家族の一人だった。
守るべき人だった。

周りを見渡して　壮介は静の手を引いて階段を駆け降りた。
そして慌てて靴をはいて　家を飛び出した。

風を二人できると　笑顔になれた。

「大好きよ　壮介・・・・。」

「俺もだよ。」

繋いだ手をまた力いっぱい握って　二人は道を駆け抜ける。

すれ違う想い～百三十八話～

板垣の家の目を盗んで　二人になれる時間を
夢中になって過ごしていたある日のことだった。

「静　ちょっといい？」おばが静を呼びに来た。

最近　経営がうまくいってないというのは　静の耳にも入っていた。

「ごめんね。ちょっと大人の話なの。」おばが静にココアを運んできた。

「はい。」静はおじを見た。

「ちょっと経営がうまく回らなくてさ……。」言いづらそうなおじが気の毒に思えた。

「大学のことなら　私は就職するつもりなの。少しでも
恩返しして　圭の学費だけでも払わせてもらうつもりなので
ここにだけおいてください。おじさんとおばさんのそばにいさせてください。」

思わず焦って喋って頭をさげた。

「いや・・・いや
そんなことでは……。おまえたちはもう俺たちの子供同然だ。
できる限りのことはするつもりなんだ。静は頭がいんだし
圭もできるし　楽しませてもらってる。そんなことは心配しなくて
いい。」

おじもおばも　いつものように優しく微笑んでいる。

「ありがとう。だけど大学には行かない。
就職するから。それはずっと昔から決めてたの。」

「そんな心配はしなくていいのよ。」おばが肩を抱いてくれた。

「静の学校に　板垣くんっているだろう?」

「え?板垣・・・うんいるよ。」

「話したこととかあるのかい。」

「うん　あるけど…どうしたの？」

「ちょっと板垣さんと絡んでる仕事があってそれがうまくいけばちょっと落ちこんでいる会社の経営も立て直せそうなんだけど板垣さんと顔見知りになっておきたいなと…思ってるんだ。」

壮介もその板垣の子供だけれど　それは言ってはいけない気がしていた。

「私が　大介くんと何をしたらいいの？」

「いや・・・何かしてくれという事じゃなくて　板垣の社長に姪がおたくの息子さんと友達だとか…そんなことを言って橋渡しをしたいなと……。」

「あまり感じのいい人じゃないわ。」

壮介からも父親のことをよく聞かされていたから

静はあまり好きにはなれなかった。

「そうなんだよな。でも今　牛耳ってるのは　あの社長なもんだから
なんとか顔みしりになっておきたいなと……それで息子を使って
近づこうかなと思って…。」

「そう……。」静はなんだか不安だった。

「下心みたいで悪いんだけど　早速　うちに遊びに来てもらったり
できないだろうか。なんとか…頼む。
少しだけでいいから…協力してもらえないだろうか。」

二人の様子から　切羽詰まっているのを感じた。

「わかった。」

「ありがとう～～この仕事がうまくいったら
助かるよ。なんとか頼むな。」

二人のホッとした様子に　大変な事を頼まれてしまった
静はそう思った。

しかしこの二人のおかげで　今の生活がある。
どれだけ　助けてもらってきたか・・・・・・

「力になれるように　頑張ってみるわ。」

このことは　壮介には言えない・・・・・。
また　傷つけてしまうような気がして……

また壮介に嘘が増えてしまう…
そう考えると静は　気が重くなってきた。

すれ違う想い～百三十九話～

大介は気持ちよく引き受けてくれた。

夕方　私はわき道から大介の車に乗って　家に戻った。
おばが満面の笑みで　玄関に立っていた。

「板垣くん……。」

私が紹介すると　一瞬怪訝な表情をしたけれど

「板垣くん…ね？」と聞き直した。
多分　壮介と似てると感じたんだろう。

「はい。今日はお招きいただいてありがとうございます。」
そう言ってキレイなお辞儀をした。

「いえ…いえ　こちらこそいつもお世話になって…。
どうぞ　どうぞ……。」

会社の未来がかかっているから　おばもものすごいプレッシャーのようだけど
別に大介を接待したからと言って　何かが変わるんだろうか

静はそう思いながら　大介にスリッパを揃えた。

「もうすぐ主人も帰ってくると思うから……
静　お部屋で少しお話でもしてたら？」おばが言った。

部屋にはまだ　壮介も呼んだことがなかったけど

「いいの？」大介が聞いた。

双子だけど全然違うのに　どこかがよく似ている。
静はその顔に見とれていた。

「静ちゃん？」

「あ～～うん……ちらかってるけどどうぞ。」

一番先に入れるのが　恋人の壮介じゃなくて大介だったのを

静は罪悪感で一杯だった。

「うわ…女の子の部屋って感じだ。」
大介は部屋に入ってそうさけんだ。

「そんなことないよ。恥ずかしいわ。」

思わず頬が赤らんだ。

大介も緊張している様子で　その顔があまりに意外だったので
静は少し笑ってしまった。

「この本って面白いよね。」棚から大介が一冊とりだした。

「そうなの。読んだことある?
けっこうマニアックでしょ…?好きなのこういうの。」

壮介と分かち合いたくて一度貸したけど

「俺はちょっとわかんなかった。」壮介はそう言ったのが

静はとても残念だった。

一緒に感想を言い合いたかったのにって・・・。

その本の話で盛り上がった。

話をしていくうちに好きな作家が一緒だったり　感動のつぼが一緒だったり
大介と話しをしているのが　とても楽しく感じた。

「結局さ…言いたいことはここだけど
ここんとこの表現をもっとさ……こうしたら広がるよね。」

「そうなのよ。ここが弱いから今一つ強烈さにかけるのよね。」

エスカレートして二人の声はどんどん大きくなった。

楽しかった。
大介と自分の価値観がとても似てる気がした。
そのうち

「ね〜〜？喧嘩…してる？」

おばの声

「してないよ〜〜〜。」慌ててそう叫んだ。

「そう？よかった声が大きいからビックリしたの。」

「ごめんなさい。ついつい話　もりあがっちゃって…。」

大介と目が合って思わず吹き出した。

「今度さ　俺のもってる本貸すよ。きっと静ちゃんならわかってくれる気がする。」

「読んでみたいわ。」

壮介とはこんな風に同じ考え方とか　なかった気がした。

おじが圭と一緒に帰ってきた。

「そ・・・う・・・あれ・・？」圭も壮介に
似てる大介に一瞬戸惑っていた。

「板垣　大介　くんよ。おねえちゃんのお友達なの。」

「あ　そうなんだ。圭です。」圭はニッコリ笑った。
圭の賢さというか　頭の回転が速というか
臨機応変なところには　いつも感心した。

「圭くん・・・。大介だよ。よろしくな。」

大介は膝を折って　圭の目線に合わせた。

その夜　五人で楽しく食事をした。

静は
あまりに楽しくて　壮介のことを忘れてしまっていた。

「おまえは俺によく似てる。」父親の声に足を止めた。

「は？俺はあなたのような人間を軽蔑してますから。見本にすらならない人です。」

「あははは・・・おまえは手厳しいな。」

父親が壮介の肩を叩いた。

「大学には行け。おまえにそうしてほしいとかあさんも言っていた。だからおまえをここに　預けたんだぞ。」

「大学に夢もありません。俺は社会に出て自立します。あなたの世話にならなくてもいいし…それに……卒業したら結婚を約束してる人がいます。」

大介はその言葉に心臓の鼓動が速くなった。

「結婚か・・・。おまえは結婚をままごとに思ってるな。」

「ままごと・・・。いいじゃないですか。
愛する人と一緒になって　家族をつくる　男は家族を養うためだけに働き
女は　愛する人と力を合わせて　子どもを守る
俺がしてもらえなかったことを一生かけて　やっていきたい。」

「ふ・・・・まだまだお子ちゃまだな。
もっと勉強しろ。家族養うために大学へ行け。この時代稼げない男は家族を幸せにもできない。わかるだろう?おまえなら。
金が全てだ。」

その言葉に壮介が言葉を失っていた。

「いいか。愛する女を手に入れたいなら　一生幸せにしたいなら
金はどれだけあっても足りないんだ。金があればみんな幸せだ。
もっともっと野心家になれ。おまえはその目を持っている。」

「大介がいるじゃないですか。大介ならあなたのいうことを
聞くだろうし　言うとおりになるでしょう。」

「あいつは・・・・ダメだ。」

大介の心臓は音をたてた。

「そう言うヤツだから　もう上には望めない。
言うとおりにしかできない。社長なんかやらせたら　のっとられて
しまう。」

大介はその言葉に　拳を握りしめた。

「俺の全てを譲れるのはおまえだと確信した。あれだけ教育させても
何もしていないおまえに成績でもアイツは勝てない。魅力もない。
幻滅したな・・・・・。」

大介はその言葉を背中に部屋に戻った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2245t/

涙色ティアラ　～王子さまを待っている～

2011年11月10日07時02分発行